福島県文化財調査報告書第449集

国営隈戸川農業水利事業遺跡調査報告Ⅰ

腹田Ａ遺跡
腹田Ｂ遺跡
腹田Ｃ遺跡
金谷林遺跡

２００８年3月

福　島　県　教　育　委　員　会
㈶福島県文化振興事業団
東北農政局隈戸川農業水利事業所

国営隈戸川農業水利事業遺跡調査報告Ⅰ

腹田Ａ遺跡
腹田Ｂ遺跡
腹田Ｃ遺跡
金谷林遺跡

口絵1　朕田遺跡群，金谷林遺跡遠景（1）（西から）

口絵2　朕田遺跡群，金谷林遺跡遠景（2）（東から）

口絵３　腹田遺跡群，金谷林遺跡全景（合成写真）

序　　文

「国営隈戸川農業水利事業」は，２市２町３村（須賀川市・白河市・矢吹町・鏡石町・天栄村・泉崎村・中島村）に至るかんがい事業です。この事業は，羽鳥ダムの取水樋門・隧門を改修して取水量を増量することにより，かんがい用水を確保するとともに，頭首工・揚水機場及び用水路の改修を行い，用水路の安定供給と維持管理の軽減を図ることを目的としています。

このかんがい事業用地内には，先人が残した貴重な文化遺産が所在しており，周知の埋蔵文化財包蔵地を含め，数多くの遺跡などを確認しております。

埋蔵文化財は，それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると同時に，我が国の歴史・文化等の正しい理解と，将来の文化の向上発展の基礎をなすものです。

福島県教育委員会では，かんがい事業予定地内で確認されたこれらの埋蔵文化財の保護・保存について，開発関係機関と協議を重ね，平成18年度に埋蔵文化財包蔵地の範囲や性格を確かめるための試掘調査を行い，その結果をもとに，平成19年度に現状保存が困難な遺跡については記録として保存することとし，発掘調査を実施しました。

本報告書は，平成19年度に行った白河市大信増見地区に所在する腹田Ａ遺跡・腹田Ｂ遺跡・腹田Ｃ遺跡・金谷林遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。この報告書を県民の皆様が，文化財に対する御理解を深め，地域の歴史を解明するための基礎資料として，さらには生涯学習等の資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に，発掘調査から報告書の作成にあたり，御協力いただいた農林水産省東北農政局，財団法人福島県文化振興事業団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し，感謝の意を表するものであります。

平成20年３月

福島県教育委員会

教育長　野　地　陽　一

あ　い　さ　つ

財団法人福島県文化振興事業団では，福島県教育委員会からの委託により，県内の大規模な開発に伴う埋蔵文化財の調査業務を行っております。「国営隈戸川農業水利事業」に関連する埋蔵文化財の発掘調査もそのひとつで，平成19年度には，白河市に所在する４遺跡の発掘調査を実施いたしました。

本書には，白河市大信地区に所在する腹田Ａ遺跡・腹田Ｂ遺跡・腹田Ｃ遺跡・金谷林遺跡の４遺跡の発掘調査成果を収録しております。これら４遺跡は，ともに近接した位置にあって，それぞれが羽鳥湖に源を発する隈戸川の右岸段丘に営まれた遺跡で，縄文時代から平安時代にかけての竪穴住居跡等の遺構が検出されています。

今後，これらの調査成果を考古学や歴史学など研究の基礎資料として，さらに地域社会の理解や生涯学習に幅広く活用していただければ幸いに存じます。

おわりに，この調査に御協力いただきました農林水産省東北農政局，隈戸川農業水利事業所，白河市並びに地域住民の皆様に，深く感謝申し上げますとともに，当事業団の事業の推進につきまして，今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成20年３月

財団法人　福島県文化振興事業団
理事長　富　田　孝　志

緒　　言

1．本書は，平成19年度に実施した国営隈戸川農業水利事業関連の遺跡発掘調査報告書である。

2．本書には以下に記す遺跡調査成果を収録した。

腹田Ａ遺跡	福島県白河市大信増見字腹田	埋蔵文化財番号：46700107
腹田Ｂ遺跡	福島県白河市大信増見字腹田	埋蔵文化財番号：46700108
腹田Ｃ遺跡	福島県白河市大信増見字腹田	埋蔵文化財番号：205200605
金谷林遺跡	福島県白河市大信増見字金谷林	埋蔵文化財番号：46700109

3．本事業は，福島県教育委員会が農林水産省東北農政局の委託を受けて実施した。調査に係る費用のうち，94.7%については東北農政局が負担し，残りの5.3%を国庫補助金を受けて，福島県教育委員会が負担した。

4．福島県教育委員会は，発掘調査を財団法人福島県文化振興事業団に委託して実施した。

5．財団法人福島県文化振興事業団では，遺跡調査部の下記の職員を配して調査にあたった。

文化財副主査　　稲村　圭一

6．本書の執筆及び全体の構成・編集は稲村が担当した。

7．本書に掲載した空中写真撮影・写真合成は，次の機関が行った。

空中写真撮影　　株式会社　日本特殊撮影

写真合成　　株式会社　シン技術コンサル

8．本書に使用した地図は，国土地理院長の承認を得て，同院発行の２．５万分の１地形図を複製したものである。「（承認番号）平19東複第181号」

9．本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は，福島県教育委員会が保管している。

10．発掘調査および報告書作成にあたり，次の諸機関からご協力いただいた。（順不同・敬称略）

白河市教育委員会，大信庁舎産業課・建設課，大信農村改善センター

東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター

用　　例

1．本書における遺構図版の用例は，以下のとおりである。

（1）方　　位　平面座標の国土座標軸を基準とした真北方向を図版の真上とした。それ以外のものは挿図中に真北方向を指す方位を示した。

（2）標　　高　水準点を基にした海抜標高で示した。

（3）縮　　尺　各挿図中に縮尺率を示した。

（4）土　　層　基本土層はアルファベット大文字Ｌとローマ数字を組み合わせ，遺構内の堆積土はアルファベット小文字ℓと算用数字を組み合わせて表記した。

（例）基本層位－ＬⅠ・ＬⅡ…，遺構内堆積土－ℓ１・ℓ２…

なお，挿図の土層注記で使用した土色名は，『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）に基づく。

（5）ケ　　バ　遺構内の傾斜面は「　」で表現したが，相対的に緩傾斜の部分には「　」で表している。また，「　」は後世の撹乱が明らかな場合に使用した。

（6）線の表現　波線は推定範囲，一点鎖線は貼床範囲を示す。

（7）網　か　け　挿図中の網かけの用例は，同図中に表示した。

2．本書における遺物図版の用例は，以下のとおりである。

（1）土器断面　須恵器の断面は黒塗りとした。粘土積み上げ痕を一点鎖線で表記し，胎土中に繊維が混和されたものには▲を付した。

（2）遺物計測値　（　）内の数値は推定値，〔　〕内の数値は遺存値を示す。

（3）縮　　尺　各挿図中に縮尺率を示した。

（4）網　か　け　挿図中の網かけの用例は黒色処理を示し，それ以外は同図中に表示した。

3．本書における本文中の遺物の番号は，挿図番号と対照できるようにして，以下のとおり記した。

（例）図１の１番　→　１図１

また，写真図版の遺物に付けた挿図番号は以下のとおり記した。

（例）図１の１番　→　１図１

4．文章中の遺物点数は，全て破片点数である。

5．本書で使用した略号は，次のとおりである。

白河市…ＳＫ　腹田Ａ遺跡…ＨＤ・Ａ　腹田Ｂ遺跡…ＨＤ・Ｂ　腹田Ｃ遺跡…ＨＤ・Ｃ

金谷林遺跡…ＫＹＢ　遺構外堆積土…Ｌ　遺構内堆積土…ℓ　竪穴住居跡…ＳＩ

土　坑…ＳＫ　溝　跡…ＳＤ　焼土跡…ＳＧ　小穴・ピット…Ｐ　グリッド…Ｇ

6．参考・引用文献は執筆者の敬称を省略し，各編の末にまとめて収めた。

目　　次

序　　章

第１節　事業の概要 …… 1
第２節　調査に至る経緯 …… 2
第３節　自然的環境 …… 4
第４節　周辺の遺跡と歴史的環境 …… 5

第１編　腹田Ａ遺跡

第１章　遺跡の環境と調査経過 …… 13
第１節　遺跡の位置と地形 …… 13
第２節　調査経過 …… 13
第３節　調査方法 …… 15
第２章　遺構と遺物 …… 16
第１節　遺構の分布と基本土層 …… 16
第２節　竪穴住居跡 …… 19
１号住居跡（19）　２号住居跡（28）　３号住居跡（35）
４号住居跡（41）　５号住居跡（43）
第３節　土　　坑 …… 45
１号土坑（45）　２号土坑（45）　３号土坑（46）
第４節　溝　　跡 …… 47
１号溝跡（47）
第５節　その他遺構と遺構外出土遺物 …… 49
小穴群（49）　遺構外出土遺物（50）
第３章　総　　括 …… 52

第２編　腹田Ｂ遺跡

第１章　遺跡の環境と調査経過 …… 59
第１節　遺跡の位置と地形 …… 59
第２節　調査経過 …… 59
第３節　調査方法 …… 61
第２章　遺構と遺物 …… 62
第１節　遺構の分布と基本土層 …… 62

第２節　竪穴住居跡 ……65
１号住居跡（65）　２号住居跡（69）　３Ａ・３Ｂ号住居跡（72）
第３節　土　　坑 ……77
１号土坑（77）　２号土坑（79）　３号土坑（80）
４号土坑（80）　５号土坑（81）　６号土坑（81）
７号土坑（83）　８号土坑（83）　９号土坑（84）
10号土坑（84）　11号土坑（85）　12号土坑（85）
13号土坑（85）　14号土坑（87）　15号土坑（88）
16号土坑（88）　17号土坑（88）　18号土坑（91）
19号土坑（92）
第４節　溝　　跡 ……92
１号溝跡（93）
第５節　焼　土　跡 ……93
１号焼土跡（93）
第６節　その他遺構と遺構外 出土遺物 ……95
小穴群（95）　遺構外出土遺物（95）
第３章　総　　括 ……97

第３編　腹田Ｃ遺跡

第１章　遺跡の環境と調査経過 ……103
第１節　遺跡の位置と地形 ……103
第２節　調査経過 ……103
第３節　調査方法 ……105
第２章　遺構と遺物 ……107
第１節　遺構の分布と基本土層 ……107
第２節　竪穴住居跡 ……108
１号住居跡（108）
第３節　土　　坑 ……112
１号土坑（112）
第４節　溝　　跡 ……112
１号溝跡（112）
第５節　その他遺構と遺構外 出土遺物 ……115
小穴群（115）　遺構外出土遺物（115）
第３章　総　　括 ……116

第４編　金谷林遺跡

第１章　遺跡の環境と調査経過 ……121

第１節　遺跡の位置と地形 ……121

第２節　調査経過 ……123

第３節　調査方法 ……125

第２章　遺構と遺物 ……125

第１節　遺構の分布と基本土層 ……125

第２節　出土遺物 ……127

第３章　総　　括 ……128

挿図・表・写真目次

序　章

［挿　図］

図１　国営隈戸川農業水利事業位置図……１

図２　遺跡位置図（１）……２

図３　遺跡位置図（２）……３

図４　遺跡周辺の地質図……６

図５　腹田遺跡群・金谷林遺跡周辺の遺跡……８

［　表　］

表１　平成19年度国営隈戸川農業水利事業関連遺跡調査一覧 ……４

表２　腹田遺跡群・金谷林遺跡周辺の遺跡一覧 ……９

第１編　腹田Ａ遺跡

［挿　図］

図１　腹田Ａ遺跡調査区位置図……14

図２　遺構配置図……17

図３　基本土層図……18

図４　１号住居跡……20

図５　１号住居跡小穴断面図……21

図６　１号住居跡新カマド，Ｐ１～３……22

図７　１号住居跡旧カマド，炉跡……23

図８　１号住居跡出土遺物（１）……25

図９　１号住居跡出土遺物（２）……26

図10　１号住居跡出土遺物（３）……27

図11　２号住居跡……29

図12　２号住居跡カマド，Ｐ１・２，炭化材出土……30

図13　２号住居跡出土遺物（１）……33

図14　２号住居跡出土遺物（２）……34

図15　２号住居跡出土遺物（３）……35

図16　３号住居跡……37

図17　３号建物跡カマド，Ｐ１，出土遺物（１）……38

図18　3号住居跡出土遺物（2）……40
図19　4号住居跡，P2，出土遺物 ……42
図20　5号住居跡……44
図21　1～3号土坑……46
図22　1号溝跡……47
図23　小穴……48
図24　遺構外出土遺物……50
図25　腹田A遺跡出土土師器杯分類……53

［　表　］

表1　腹田A遺跡小穴一覧 ……49
表2　遺構外出土遺物点数一覧 ……51
表3　土師器杯計測表（最小～最大値） ……53
表4　土師器杯計測表（平均値） ……53

［写　真］

1－1　調査区全景（1）……131
1－2　調査区全景（2）……131
1－3　1号住居跡 ……132
1－4　1号住居跡細部（1）……132
1－5　1号住居跡細部（2）……133
1－6　2号住居跡 ……133
1－7　2号住居跡細部（1）……134
1－8　2号住居跡細部（2）……134
1－9　3号住居跡 ……135
1－10　3号住居跡細部 ……135
1－11　4号住居跡 ……136
1－12　4号住居跡細部 ……136
1－13　5号住居跡 ……137
1－14　5号住居跡細部 ……137
1－15　1号土坑 ……137
1－16　2・3号土坑 ……138
1－17　1号溝跡，作業風景 ……138
1－18　1号住居跡出土遺物（1）……139
1－19　1号住居跡出土遺物（2）……140
1－20　2号住居跡出土遺物（1）……140
1－21　2号住居跡出土遺物（2）……141
1－22　3号住居跡出土遺物 ……141
1－23　4号住居跡出土遺物 ……142
1－24　遺構外出土遺物 ……142

第2編　腹田B遺跡

［挿　図］

図1　腹田B遺跡調査区位置図……60
図2　遺構配置図，基本土層図（1）……64
図3　基本土層図（2）……65
図4　1号住居跡（1）……66
図5　1号住居跡（2），カマド，
　　出土遺物……68
図6　2号住居跡……70
図7　2号住居跡出土遺物……71
図8　3A号住居跡……73
図9　3A号住居跡カマド……74
図10　3A号住居跡出土遺物……75
図11　3B号住居跡……76
図12　1～6号土坑……78
図13　7～12号土坑……82
図14　13～17号土坑……86
図15　18・19号土坑……87
図16　土坑出土遺物（1）……89
図17　土坑出土遺物（2）……90

図18　土坑出土遺物（3）……91
図19　1号溝跡……92
図20　1号焼土跡……93
図21　小穴……94
図22　遺構外出土遺物……95

［　表　］

表1　腹田B遺跡小穴一覧……96
表2　遺構外出土遺物点数一覧……97

［写　真］

2－1　調査区全景……143
2－2　作業状況……143
2－3　1号住居跡……144
2－4　1号住居跡細部……144
2－5　2号住居跡……145
2－6　2号住居跡細部……145
2－7　3A号住居跡……146
2－8　3A号住居跡細部……146
2－9　3B号住居跡細部……147
2－10　1～3号土坑……147
2－11　4～8号土坑……148
2－12　9～16号土坑……149
2－13　17～19号土坑……150
2－14　1号溝跡，1号焼土跡……150
2－15　1～3号住居跡出土遺物……151
2－16　土坑出土遺物（1）……151
2－17　土坑出土遺物（2）……152
2－18　遺構外出土遺物……152

第3編　腹田C遺跡

［挿　図］

図1　腹田C遺跡調査区位置図……104
図2　遺構配置図……106
図3　基本土層図……108
図4　1号住居跡，カマド……110
図5　1号住居跡出土遺物……111
図6　1号土坑……112
図7　1号溝跡……113
図8　小穴……114
図9　遺構外出土遺物……116

［　表　］

表1　腹田C遺跡小穴一覧……115
表2　遺構外出土遺物点数一覧……115

［写　真］

3－1　調査区全景（1）……153
3－2　調査区全景（2）……153
3－3　1号住居跡……154
3－4　1号住居跡細部……154
3－5　1号土坑，1号溝跡……155
3－6　作業風景……155
3－7　1号住居跡出土遺物……156
3－8　遺構外出土遺物……156

第４編　金谷林遺跡

［挿　図］

図１　金谷林遺跡調査区位置図 ……122
図２　遺構配置図，基本土層図 ……124
図３　出土遺物 ……126

［　表　］

表１　遺構外出土遺物点数一覧 ……127

［写　真］

４－１　東側調査区 ……157
４－２　東側調査区作業状況 ……157
４－３　西側調査区 ……158
４－４　西側調査区作業状況 ……158
４－５　遺構外出土遺物 ……159

序　　章

第１節　事業の概要

国営隈戸川農業水利事業は，２市２町３村（須賀川市・白河市・鏡石町・天栄村・泉崎村・中島村・矢吹町）に至るかんがい事業である。この地区は福島県中通り地方の南部に位置し，水田3,600ha，畑400haの県内有数の農業地帯である。

かんがい用水は，国営白河矢吹土地改良事業（昭和16年度～昭和39年度）で造成された羽鳥ダムの他，隈戸川，竜田川，泉川およびため池等に依存しているが，地区内の河川はいずれも自流水に乏しく，ため池も小規模であるため，水路の堰上げや揚水機による反復利用，番水等による水利用を余儀なくされており，また，近年の営農形態の変化により，恒常的な用水不足の状況にある。さらに，国営事業により造成された用水施設の老朽化により，維持管理に多大な労力と経費を要しているとともに，末端用水施設の不備やほ場区画が狭小なため，水田の汎用化や農業生産性の向上が阻害されている。

このため本事業では，阿武隈川水系隈戸川にかんがい用水を確保し，頭首工，揚水機および用水路の改修を行い，用水の安定供給と維持管理の軽減を図ることとしている。併せて，関連事業により，末端用水施設の整備および区画整理を実施することにより営農の合理化を図るとともに，畑地かんがいによる複合経営の促進を図り，もって地域農業の生産性向上と農業経営の安定に資するものとしている。

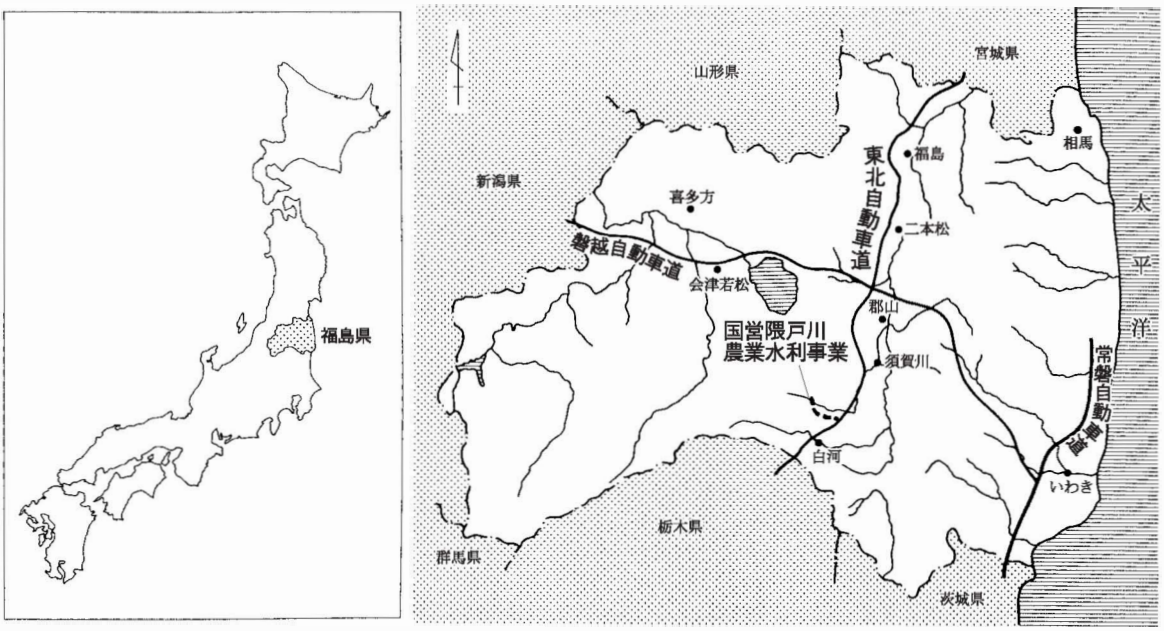


図１　国営隈戸川農業水利事業位置図

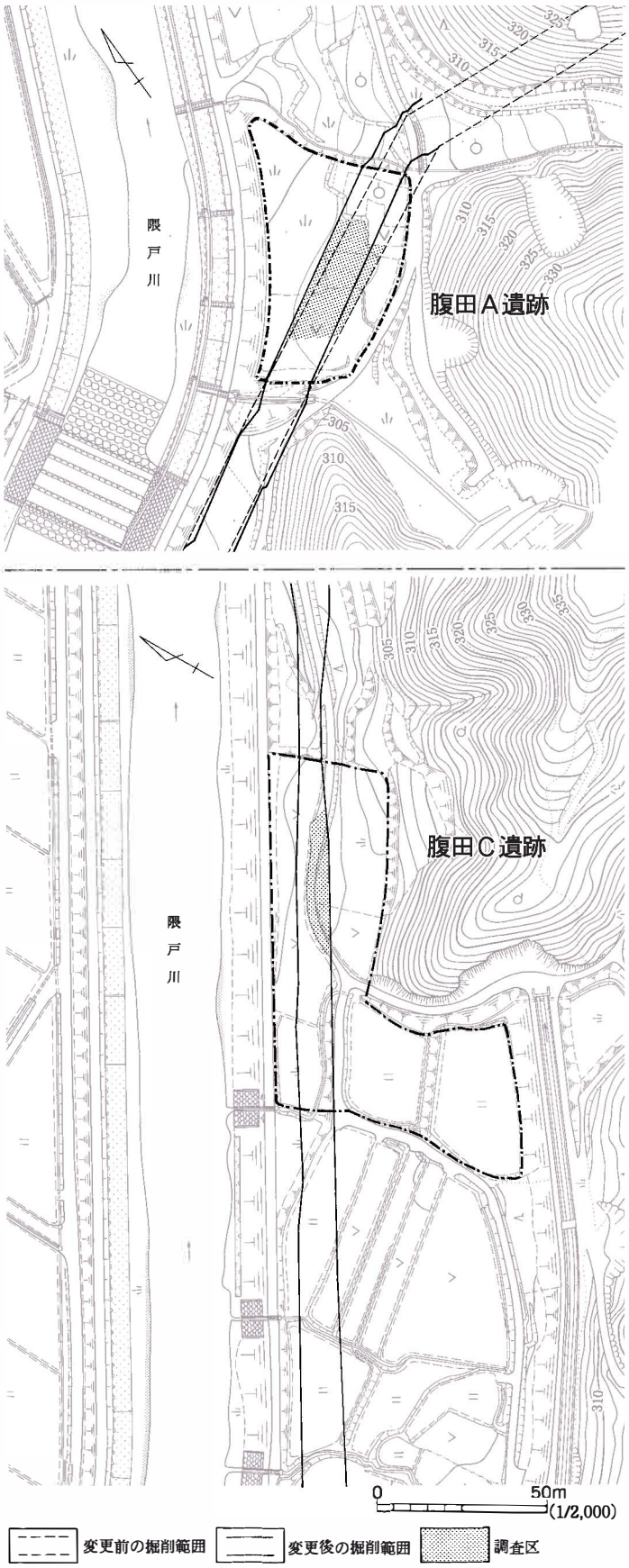


図２　遺跡位置図（１）

第２節　調査に至る経緯

隅戸川農業水利事業関連の埋蔵文化財の調査は，平成10年度から開始された。この年に大信村教育委員会が主体となって，田ノ沢ダム建設計画予定地内の表面調査を実施しており，12箇所の遺跡を確認している。そこで，福島県教育委員会は東北農政局隈戸川農業水利事業所と埋蔵文化財の保護について協議を行い，平成11年度は福島県教育委員会が調査主体となり，（財）福島県文化センター（現：福島県文化振興事業団）に委託して，田ノ沢ダム建設計画予定地内の田ノ沢Ｆ遺跡・遺跡推定地Ｂ５の試掘調査を実施している。また，同年度に旧１市２町４村（須賀川市・鏡石町・矢吹町・泉崎村・中島村・天栄村・旧大信村）にまたがる基幹水路部分160haの表面調査を実施しており，22遺跡を確認している。このうち，白河市大信地域で確認されたのは，周知の７遺跡と新発見の３遺跡である（福島県教育委員会2000）。

平成13年度は，田ノ沢ダム建設計画予定地内の田ノ沢Ｃ遺跡ほか，４箇所111,600㎡の試掘調査を実施している。このうち，田ノ沢Ｃ・Ｇ遺跡，遺跡推定地Ｂ１の３箇所で遺構・遺物を確認した。田ノ沢Ｃ遺跡では，廃滓場などの製鉄関連遺構や縄文時代前期の土坑，弥生土器が確認され，要保存面積20,000㎡が確定した。

田ノ沢G遺跡では縄文時代中期・後期の土坑を検出し，要保存面積2,900㎡が確定した。B１では廃滓場などの製鉄関連遺構が確認され，要保存面積1,600㎡が確定し，田ノ沢H遺跡として登録した（福島県教育委員会2002）。

平成18年度は，幹線用水路建設予定に伴い，白河市大信下小屋地区に所在する２遺跡4,400㎡，大信増見地区に所在する３遺跡2,670㎡を対象に試掘調査を実施している。このうち，大信増見地区の金谷林遺跡，腹田Ａ遺跡，腹田Ｂ遺跡で遺構・遺物を確認した。

金谷林遺跡では，古墳時代や平安時代の土師器・須恵器が確認され，要保存面積900㎡が確定した。また，腹田Ａ遺跡では縄文土器や平安時代の土師器，腹田Ｂ遺跡では縄文土器を確認したが，２遺跡については，一部未調査区があるため，次年度の試掘調査の成果をまって再検討を行う予定とした（福島県教育委員会2007）。

平成19年度は，腹田Ａ・Ｂ・Ｃ遺跡の試掘調査，腹田Ａ・Ｂ・Ｃ遺跡，金谷林遺跡の発掘調査を実施した。なお，腹田Ｃ遺跡は幹線用水路工事用道路建設時に偶然発見された遺跡である。試掘調査については，幹線用水部分に加えて，周辺の耕地整地を工事の一貫として行うため，遺跡範囲内とその周辺について試掘調査を行った。その結果，腹田Ａ遺跡で要保存面積1,260㎡，腹田Ｂ遺跡で要保存面積

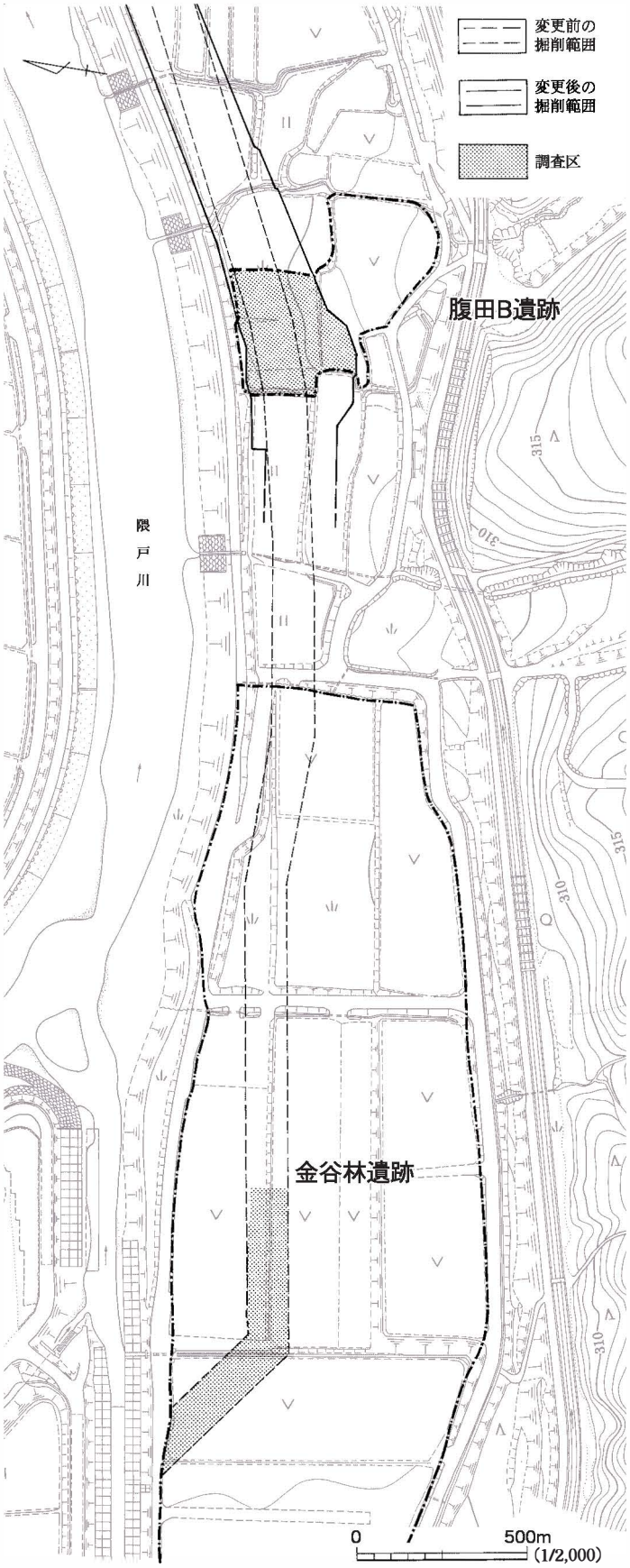


図３　遺跡位置図（２）

表１　平成19年度国営隈戸川農業水利事業関連遺跡調査一覧

市町村	地区名	遺跡名	調査面積(㎡)	調査期間	主要時代	種　別
白河	増見	金谷林	900	4月11日～4月27日・9月13日～9月25日	古代	散布地
白河	増見	腹田A	430	5月29日～6月8日・6月18日～6月28日 7月31日～9月14日	縄文・平安	集落跡
白河	増見	腹田B	850	5月7日～5月31日・7月2日～8月2日	縄文・奈良	集落跡
白河	増見	腹田C	250	6月6日～6月18日	縄文・平安	集落跡

2,000㎡，腹田C遺跡で要保存面積1,150㎡が確定した。しかし，整地部分については掘削深度が遺構検出面まで達しないことから，幹線用水路部分（腹田A：360㎡，腹田B：440㎡，腹田C：250㎡）の本調査を実施した。また，調査期間中には，幹線用水路部分の工事計画の変更により，追加調査面積が生じ（腹田A：70㎡，腹田B：410㎡），その都度，調査中の遺跡を中途で停止し，工事優先度の高い遺跡への発掘調査へ移行することも生じた。

発掘調査は，金谷林遺跡→腹田B遺跡→腹田A遺跡→腹田C遺跡→腹田A遺跡→腹田B遺跡→腹田A遺跡→金谷林遺跡と移行し，同年度中に成果を本書としてまとめた。発掘調査の経過の詳細は第１～４編に譲り，割愛する。

第３節　自然的環境

福島県は，東北地方南部に位置し，県としては岩手県に次いで全国２番目の13,782k㎡の面積を持つ。県土のおよそ８割は山地で占められ，東部には太平洋に沿って阿武隈高地が，中央部には奥羽山脈が連なり，西部には越後山脈が迫っている。これらの山地はほぼ南北に走り，県内は太平洋側より「浜通り地方」「中通り地方」「会津地方」の三つの地方に区分される。中通り地方の中央部を貫流する阿武隈川は，福島県西白河郡西郷村の那須山系を源とする。阿武隈川流域には，河岸段丘を主とした低地が形成され，南から白河・須賀川・郡山・本宮・福島の各盆地が，各々高度を下げながら連続している。白河市はこの中通り地方の南端に位置する。白河市大信地区は，白河市内の北西側に位置し，北は天栄村，南は泉崎村，西は西郷村，東は矢吹町とそれぞれ境界を接している。大信地区は，昭和30年（1955）４月10日に，信夫村と岩瀬郡大屋村が合併して「大信村」が成立した。村名は合併各村の合成地名である。また，平成17年（2005）11月７日には，近隣の表郷村・東村とともに「白河市」に合併され現在に至る。面積80.77k㎡，人口約4,789人（平成17．10．1）を数える。

白河市大信地区の西側には，那須山系権太倉山（標高976.3m）をはじめ1,000m前後の山脈と，この山脈から派生する500～800mの高原・丘陵が発達している。この面を釈迦堂川の支流である隈戸川をはじめとした中小河川が複雑に浸食・開析を繰り返し，現在のような変化に富み，風光明媚な地形が形成された。この地域の地質は，東部を北西から南東に棚倉破砕帯が走り，その西側には中新世グリーンタフ変動による緑色凝灰岩が分布し，一部に古生代から中生代にかけて地層を残し

ているが，大部分は第三紀以降の火山活動による噴出物が堆積している。特に，新第三紀後半から第四紀には石材として著名な白河石が形成される。この白河石は石英安山岩質熔結凝灰岩と呼ばれ，３回の大規模な火山活動によって噴出されたⅢからⅠの３層の火砕流堆積物によって構成される。白河盆地を中心に阿武隈川を北流し，郡山盆地や猪苗代湖周辺まで分布している。さらに第四紀になると，那須火山帯の活動が活発になり，白河ロームと呼ばれる火山灰層が形成され，古い順にⅢローム・Ｃ２ローム・Ｃ１ローム・Ｂローム・Ａロームの５層が確認されている。地形的に見ると，これらの地層を開析して隈戸川が東流・下刻し，現在のような西高東低のゆるやかな丘陵地帯（白河丘陵）を形成している。丘陵の間を奥羽脊梁山脈を水源とする隈戸川が東流し，その支流との流域には，砂や礫や粘土からなる狭長な谷底平野・埋積谷・河岸段丘・洪積台地を形成し，これらの地域に白河市大信地区の各集落が点在する。特に，この地域の東側地区は洪積世の活動によるパーライト質火山噴出物の堆積層やローム層がよく発達し，丘陵裾部には沖積段丘堆積物としての砂・礫が，また黒色腐植土中には沖積世起源の火山灰・火山砂が薄く認められる。

更に白河ローム層の上には，丘陵裾部や段丘面では火山灰を母材とする黒ボク土壌が，丘陵の頂部や斜面では褐色の森林土壌が分布している。土地の利用状況は，谷底平野や中位・低位段丘では水田耕作を主に，畑作も行われている。高位の段丘や丘陵では畑作が行われているが，この部位では未開拓の部分が多く，山林・原野となっている。

今回，隈戸川農業水利事業開発の対象となった増見地区は，白河市大信地区の南東部に位置し，南側で泉崎村と境を接している。この地区は，奥羽脊梁山脈から続く丘陵地帯の東側にあたり，隈戸川支流の外面川が狭長な谷底平野や河岸段丘を形成しているが，開発の対象となった地域は隈戸川と外面川の合流付近で，北側には比較的広い谷底平野が展開する。南側には標高350～400mの低位丘陵が東に向かって樹枝状に延びている。今年度発掘調査を行った遺跡は，増見地区の北部の隈戸川及び外面川の南岸で，北西は国道294号線に，南東は東北新幹線に画された地域に所在する。遺跡の立地は，主に狭長な低位段丘面である。

第４節　周辺の遺跡と歴史的環境

平成16年度発行の大信村史編纂委員会発行の『大信村史第二巻　資料編上巻』によると，白河市大信地区（旧大信村）には，122ヶ所の遺跡（散布地・塚・城館跡・石造物などを含む）が登録・周知されている。また，隈戸川と外面川が合流する増見地区の西部と東部では，山稜の起伏が大きく異なり，遺跡の分布にも少なからず影響を及ぼしている。西部では丘陵の裾部や小規模な河岸段丘に，比較的小規模な縄文時代の遺跡が分布している。これに対して，増見地区以東は町屋遺跡や道目木遺跡，赤坂裏の諸遺跡のように，低丘陵の南向きの緩斜面を中心に，広い面積の複合遺跡の多いことが特徴である。この中で，東北自動車道・東北新幹線・国営総合農地開発事業矢吹地区，最近では田ノ沢ダム水没地帯に関連して試掘調査や発掘調査が実施されている。

腹田A遺跡
腹田C遺跡
腹田B遺跡
金谷林遺跡
西内層（礫・砂）
低位段丘堆積物
（砂・礫・泥）
0
1km
(1/25,000)
小田川層
（礫岩・凝灰岩・
凝灰岩質砂岩）
貫入岩
（花崗岩質岩石）
段丘・扇状地堆積物
（砂・礫・泥）
現河床・氾濫源堆積物
（礫・砂）
白河層（石英安山
岩質凝灰岩）
貫入岩・溶岩
（安山岩質岩石）
圧砕粘板岩・
ホルンフェルス
（圧砕岩）

図4　遺跡周辺の地質図

旧石器時代の遺跡は発見されていないが，隣接する西郷村には，大平遺跡が所在する。この遺跡は，平成２・３年度に発掘調査が実施されており，４～５万年前の石器が出土している。石器は流紋岩・鉄石英・玉髄・頁岩・粘板岩・碧玉・瑪瑙等の石斧・錐形石器・尖頭スクレイパー・剥片などで，福島県内で最初に発見された前期旧石器時代の遺跡である。他には，白河市谷地前Ｃ遺跡や同市一里段Ａ遺跡などが発掘調査され，旧石器時代の資料が集積しつつあり，遺跡数はその後の時代のものに比べ少ないものの，この地域の旧石器時代の様相は次第に解明されてきている。

縄文時代になると，遺跡は比較的多く確認される。桜立Ｄ・赤坂裏Ａ・赤坂裏Ｅ・芹沢Ａ・町屋・桜立Ｃ・沢入・下原遺跡などが発見されている。縄文草創期の遺跡の発見例はまだないが，白河市高山遺跡・石川町達中久保遺跡があり，それぞれ隆線文土器・爪形文土器が出土している。本地区の早期の遺跡には桜立Ｄ遺跡がある。この遺跡からは，落とし穴や条痕文系土器が発見されている。前期から後期前半にかけては，遺跡の数は格段と多くなり，前期は芹沢Ａ遺跡，中期は下原・芹沢Ａ・赤坂裏Ｂ遺跡，後期は町屋・沢入遺跡などが認められる。後期後半から晩期にかけては遺跡数が減少し，僅かに桜立Ｄ遺跡で晩期中葉の半粗製・粗製の深鉢が認められるのみである。また，周辺では天栄村界谷地遺跡があり，晩期中葉の住居跡が検出されている。この中で，町屋遺跡の試掘調査が昭和56年度・平成７～９年度に，村史編纂に伴う発掘調査が平成13年度に実施されている。

町屋遺跡は，大信地区の中心部にあって，その面積は約80,000㎡にも及び，当地区最大規模の遺跡である。縄文時代は早期・前期の遺物も出土するが，中期や後期によく発達した拠点的な集落遺跡である。道路の拡幅等で数回の小規模な発掘調査が行われ，縄文時代中期から後期にかけての竪穴住居跡や焼土遺構・土坑・遺物包含層が確認されているが，全体的な集落構造は明らかにされていない。また，上層では古墳時代後期や平安時代の遺構・遺物が重複し，古代においても中心的集落であったことが窺える。

弥生時代の遺物を出土する遺跡は，周辺では天栄村坂ロＡ・二本松や泉崎村踏瀬大山，白河市天王山の各遺跡が『福島県史』に紹介され著名であるが，本地区では遺跡の数は少なく，北大久保Ｂ・Ｃ遺跡で中期の土器片，赤坂裏Ａ遺跡で後期の壺が出土している。また，桜立Ｄ遺跡では，中期後葉の二ッ釜式土器を伴う土坑が僅かに確認されるだけである。

古墳時代の遺跡も少なく，高塚古墳は現段階で未確認である。しかし，隈戸川下流域の丘陵麓には，凝灰岩層を穿った未調査の横穴墓群が多く分布している。隣接する泉崎村には，国指定史跡である泉崎装飾横穴墓をはじめ，踏瀬地区にも観音山・観音山北横穴墓群などの古墳時代後期の墳墓群が所在し，東北自動車道の建設に伴って発掘調査が実施されている。集落遺跡は，平成５年度に発掘調査が行われた道目木遺跡がある。この遺跡は，町屋遺跡の西約0.5㎞の地点に位置し，古墳時代後期から平安時代前期の集落跡であることが明らかになっている。平安時代の集落と重複しているが，当該時期の竪穴住居跡が６軒確認され，６世紀前葉の土師器が住居跡に伴って多く出土している。古墳時代においては町屋遺跡に先行して集落が営まれており，両遺跡は地形的には連続した段丘面に立地していることから，密接なつながりがあるものと考えられる。また，杉東遺跡では古

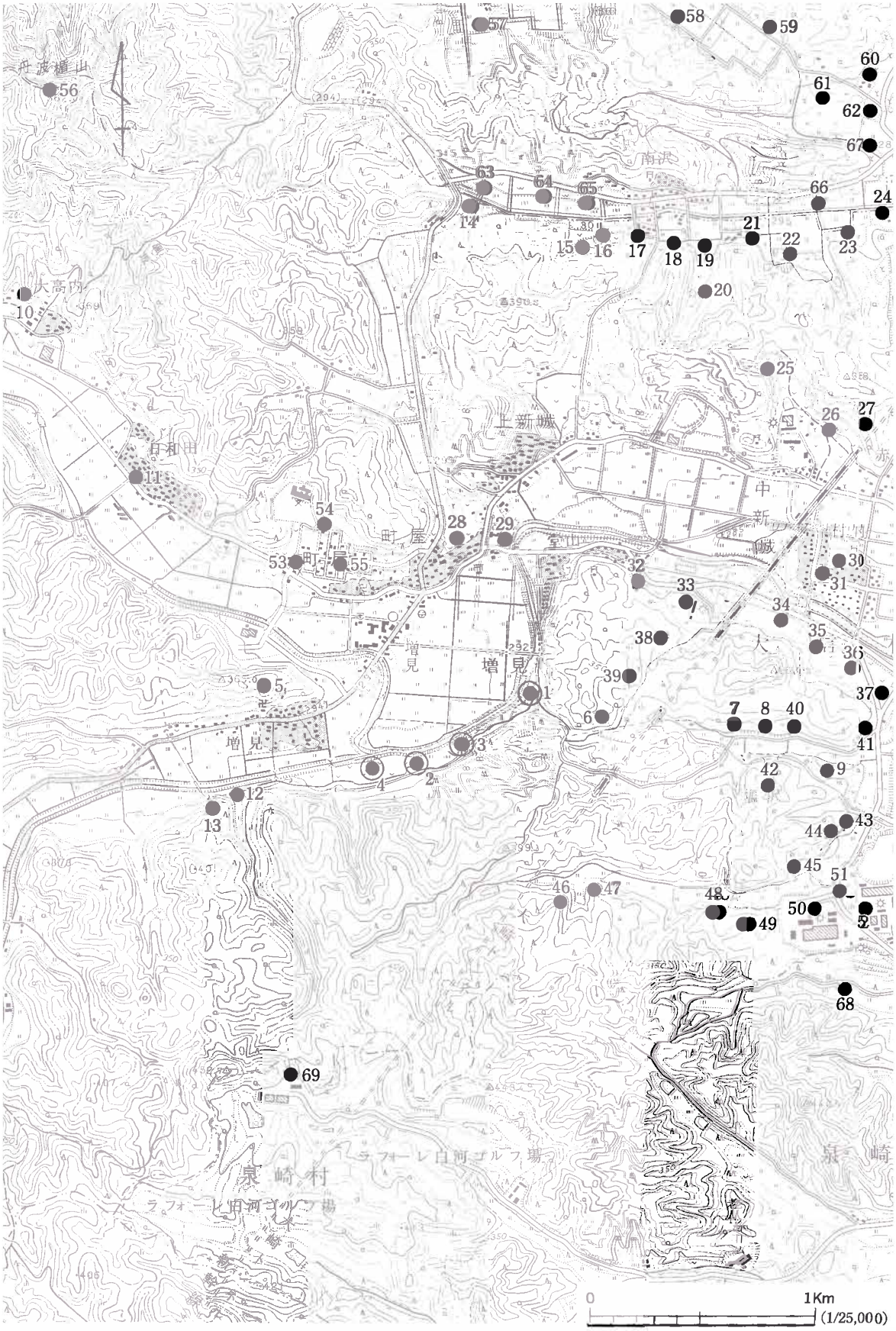


図5　腹田遺跡群・金谷林遺跡　周辺の遺跡

（国土地理院1/25万地形図　承認番号平19東複第181号）

表2　腹田遺跡群・金谷林遺跡周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	文化財番号	所在地	種別	時代	番号	遺跡名	文化財番号	所在地	種別	時代
1	腹田A	46700107	白河市大信増見字腹田	集落跡	縄文・平安	36	杉ノ前C	46700069	白河市大信中新城字杉ノ前	散布地	縄・古代
2	腹田B	46700108	白河市大信増見字腹田	集落跡	縄文・奈良	37	杉　東	46700070	白河市大信中新城字杉東	散布地	古墳～古代
3	腹田C	2052006005	白河市大信増見字腹田	集落跡	縄文・平安	38	三本松D	46700073	白河市大信中新城字三本松	散布地	縄・古代
4	金谷林	46700109	白河市大信増見字金谷林	散布地	古墳～中世	39	三本松C	46700074	白河市大信中新城字三本松	散布地	縄・古代
5	八幡山館跡	46700015	白河市大信増見字八幡山	城館跡	中　世	40	杉ノ前A	46700078	白河市大信中新城字杉ノ前	散布地	弥生～古代
6	山守山B	46700075	白河市大信中新城字山守山	散布地	古墳～古代	41	杉ノ前B	46700079	白河市大信中新城字杉ノ前	散布地	古墳～古代
7	三本松A	46700076	白河市大信中新城字三本松	散布地	古墳～古代	42	山守山	46700081	白河市大信中新城字山守山	散布地	古墳～古代
8	三本松B	46700077	白河市大信中新城字三本松	散布地	古墳～古代	43	中新城供養塔	46700083	白河市大信中新城字塩沢	石造物	中　世
9	入塩沢B	46700082	白河市大信中新城字入塩沢	散布地	古墳～古代	44	入塩沢供養塔	46700084	白河市大信中新城字入塩沢	石造物	中　世
10	下小屋供養塔	46700013	白河市大信下小屋字宮沢	石造物	中　世	45	入塩沢A	46700088	白河市大信中新城字入塩沢	散布地	古　墳
11	日和田五輪塔	46700014	白河市大信下小屋字日和田	石造物	中　世	46	大沢A	46700089	白河市大信中新城字大沢	散布地	縄　文
12	枇杷ケ沢	46700016	白河市大信増見字金谷林	散布地	縄　文	47	大沢B	46700090	白河市大信中新城字大沢	散布地	縄　文
13	上寄居	46700017	白河市大信増見字金谷林	散布地	縄　文	48	金畑A	46700091	白河市大信中新城字金畑	散布地	縄　文
14	桜立A	46700022	白河市大信上新城字桜立	散布地	縄・古代	49	金畑B	46700092	白河市大信中新城字金畑	散布地	縄　文
15	桜立B	46700023	白河市大信上新城字桜立	散布地	古墳～古代	50	楪　平	46700093	白河市大信中新城字塩沢	散布地	縄・古代
16	桜立C	46700024	白河市大信上新城字桜立	散布地	古墳～古代	51	塩沢A	46700094	白河市大信中新城字塩沢	散布地	縄・古代
17	桜立D	46700025	白河市大信上新城字桜立	散布地	古墳～古代	52	塩沢C	46700095	白河市大信中新城字塩沢	散布地	古墳～古代
18	大林A	46700027	白河市大信上新城字大林	散布地	古墳～古代	53	道目木	46700098	白河市大信町屋字道目木	散布地	古　代
19	大林B	46700028	白河市大信上新城字大林	散布地	古　代	54	町屋A	46700099	白河市大信町屋字町屋	散布地	古　代
20	大林C	46700029	白河市大信上新城字大林	散布地	弥生～古代	55	屋敷裏	46700100	白河市大信町屋字屋敷裏	散布地	古　代
21	大林D	46700030	白河市大信上新城字大林	散布地	縄・古代	56	丹羽館跡	34400023	天栄村大里門波岳	城館跡	中　世
22	赤坂裏B	46700031	白河市大信中新城字赤坂裏	散布地	古墳～古代	57	狸　入	34400075	天栄村大里字狸入	散布地	縄・古代
23	赤坂裏C	46700032	白河市大信中新城字赤坂裏	散布地	古墳～古代	58	平　B	34400080	天栄村大里字平	散布地	古　代
24	赤坂裏D	46700033	白河市大信中新城字赤坂裏	散布地	古墳～古代	59	平　C	34400083	天栄村大里字平	散布地	古　代
25	愛宕山	46700049	白河市大信中新城字愛宕山	散布地	古墳～古代	60	毒害清水A	34400094	天栄村小川字毒害清水	散布地	古　代
26	赤坂裏A	46700050	白河市大信中新城字赤坂・赤坂裏	散布地	縄・古代	61	糟　塚	34400096	天栄村小川字糟塚	散布地	古　代
27	赤坂裏製鉄	46700056	白河市大信中新城字赤坂裏	製鉄跡	近　世	62	糟塚古墳	34400097	天栄村小川字糟塚	塚	古　墳
28	町　屋	46700059	白河市大信町屋字町屋	散布地	縄　文	63	一本松	34400098	天栄村大里字一本松	散布地	縄　文
29	古館館跡	46700060	白河市大信町屋字古館	城館跡	中　世	64	竹　柄	34400099	天栄村大里竹柄	散布地	縄・古代
30	新城館跡	46700061	白河市大信中新城字内屋敷	城館跡	中　世	65	南　沢	34400100	天栄村大里南沢	散布地	古　代
31	内屋敷五輪塔	46700062	白河市大信中新城字内屋敷	石造物	中　世	66	山　崎	34400101	天栄村大里山崎	散布地	古　代
32	堂　山	46700065	白河市大信増見字堂山	散布地	古墳～古代	67	細　入	34400102	天栄村大里細入	散布地	古墳～古代
33	弥平田	46700066	白河市大信中新城字弥平田	散布地	古墳～古代	68	石倉山	46400006	泉崎村踏瀬字石倉山	散布地	縄・古代
34	壇の原	46700067	白河市大信中新城字弥平田	散布地	縄・古代	69	宮作田	46400071	泉崎村太田川字宮作田	散布地	
35	杉ノ前D	46700068	白河市大信中新城字杉ノ前	散布地	縄・古代						

墳時代後期前半の土師器が採集されている。

奈良・平安時代には前時代に比べて，発見される遺跡は多い。平成5年度の道目木遺跡や東北新幹線建設に関連して赤坂裏A遺跡が発掘調査を行っている。道目木遺跡は，奈良・平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡・土坑群が検出され，四面庇の掘立柱建物跡は特筆される。また，須恵器の中には会津若松市大戸窯跡群の製品が発見されている。同時に，墨書土器や鉄滓が出土しており，識字階層や高い技術が保持されていたことを裏付けている。赤坂裏A遺跡では，平安時代の集落跡，製鉄跡が発見されている。また，竪穴住居跡と共に製塩と関係の強い筒形土器が出土している。また，入塩沢B遺跡は農免道路建設に伴って発掘調査が行われ，縄文時代中期の土坑の他，奈良時代の竪穴住居跡が発見され，狭小な開析谷に面した小規模集落跡と推測される。また，天栄村境に位置する北大久保E遺跡では，該期の竪穴住居内から蕨手刀が出土し，天栄村笹目平遺跡においても蕨手刀が出土している。両遺跡は互いに近接していることから関連性が指摘される。この他に，時期は不明であるが西郷村に酷似して鉄滓が多く採集され，製鉄遺跡が多く分布している。田ノ沢ダムの建設予定地内には多くの製鉄遺跡が発見されている。

古代には『和名類聚郡郷里驛名考證』で陸奥国白河郡内に「小野・白川・大村・小田・松戸・屋代・丹波・松田・駅屋？・入野・高野・常世・鹿田・石川・長田・藤田・依田」の17郷が記載されている。これは，現在の西白河郡・東白川郡・石川郡に相当する。松田・松戸・小田・屋代は現在の西白河郡と考えられ，この中の丹波郷が白河市大信付近と推定されている。

中世には，常陸国結城一族の支配地となり，南北朝時代の結城宗広の活躍は南朝方としてめざましいものがある。この付近は岩瀬郡と白河郡の郡界で，戦国時代には白河結城氏と須賀川二階堂氏の争奪の地であった。大信地区にはそれぞれの在地支配者の館跡が点在し，隈戸川上流より，天正年間に井上紀伊守の住みしたと伝わる大山館跡，一時結城盛広の拠った東堂山館跡，和知駿河守一慶の拠った八幡山館跡，天正年間に佐藤大隅守の居館であったと伝わる古館館跡，中新城には新城備後守の居館であった新城館跡が認められる。この他に，供養塔等の石造物が点在しており，中新城には建長８年（1256）の銘がある板碑がある。

豊臣秀吉の奥羽仕置以後は，天正18年（1590）から会津蒲生領，慶長３年（1598）から会津上杉領，同６年会津再蒲生領，寛永４年（1627）から白河丹羽氏領，寛永20年（1643）から白河榊原氏領，慶安２年（1649）から白河本多氏領，天和元年（1681）から白河松平氏領と短期間に領主は替わった。江戸時代には，飯土用村・下新城村・中新城村・上新城村・町屋村・増見村・下小屋村・上小屋村・滑里川村が存在した。この中で，町屋・上新城・中新城・下新城村は寛保元年（1741）から越後高田藩領，文政３年（1820）から幕府領となり，明治維新を迎え，現在に至る。

引用・参考文献

大信村史編纂委員会編　2004『大信村史　第２巻　資料編上巻』大信村

2006『大信村史　通史編』大信村

福島県農地林務部農地計画課　1986『長沼』福島県国土調査・土地分類基本調査

1986『須賀川』福島県国土調査・土地分類基本調査

福島県　1964『福島県史第６巻』

福島県教育委員会　1996『福島県遺跡地図　中通り地方』

2000『福島県内遺跡分調査報告６』

2002『福島県内遺跡分調査報告８』

2007『福島県内遺跡分調査報告13』

第１編　腹田（はらだ）Ａ遺跡

遺跡記号　ＳＫ－ＨＤ・Ａ
所　在　地　白河市大信増見字腹田
時代・種類　縄文時代・平安時代－集落
調査期間　平成19年５月29日～６月８日
６月18日～６月28日
７月31日～９月14日
調　査　員　稲村　圭一

第１章　遺跡の環境と調査経過

第１節　遺跡の位置と地形

腹田Ａ遺跡は，白河市大信増見字腹田に所在し，北緯37度12分２秒，東経140度15分18秒に位置する。白河市は中通り地方の南端部に位置し，東は阿武隈山地，西は那須山系，南は八溝山系に挟まれた低平な台地上に位置する。本遺跡のある大信地区は白河市の北西側付近にあり，北は天栄村，南は泉崎村，西は西郷村，東は矢吹町とそれぞれ境界を接している。遺跡はＪＲ東北本線矢吹駅から西方向へ約6.5km，東北自動車道矢吹インターから西方向へ約3.5km付近に位置している。遺跡の約0.6km北西側には，主要地方道矢吹・天栄線が通る。

腹田Ａ遺跡は，大信地区の中央よりやや南寄りの隈戸川が，支流の外面川と合流し大きく蛇行する地点の，標高350m前後の丘陵の北西斜面裾にあたる極めて狭長な低位段丘上に立地する。調査区内の標高は，300.0～301.2mで，隈戸川の川床との標高差は約11mである。遺跡の北西側には，隈戸川と外面川等によって形成された比較的広い谷底平野一帯を望むことができる。本遺跡の範囲は，隈戸川南岸の低位段丘の平坦面を中心とする2,500㎡で，平成19年度の調査は，430㎡の範囲について発掘調査を実施した。現況は畑地で，調査区内は耕地造成に伴う削平を受けており，遺構の遺存状態は良くない。

周辺には，縄文時代後期の集落跡として有名な町屋遺跡や，中世の城館跡である古館館跡等が所在している。第３編で報告する腹田Ｃ遺跡は，本遺跡と同じ隈戸川沿いの段丘上に位置しており，その距離は西南側に約200mである。

第２節　調　査　経　緯

腹田Ａ遺跡は，平成11年度に福島県教育委員会から委託を受けた(財)福島県文化振興事業団が実施した，国営隈戸川農業水利事業の幹線用水路建設に伴う表面調査によって，土師器片の採集から古墳時代～古代の散布地として新たに登録され（遺跡番号46700107），遺跡範囲は2,500㎡と推定された（『福島県内遺跡分布調査報告６』）。その後，平成18年度に，幹線用水路部分の180㎡を対象とした試掘調査を，福島県教育委員会の委託を受け，(財)福島県文化振興事業団が実施した。この結果，縄文土器や平安時代の土師器が確認されたことから，未試掘調査部分（520㎡）の成果をまって保存範囲等の有無の検討を行うとした（『福島県内遺跡分布調査報告13』）。

平成19年度の調査は，隈戸川農業水利事業所と福島県教育委員会，（財）福島県文化振興事業団による現地協議の際に，幹線用水路部分の試掘調査に加えて，周辺の耕地整地を工事の一貫として行うため，当初の工事区内に止まらず，遺跡範囲内について試掘調査を行ってほしいという要望が

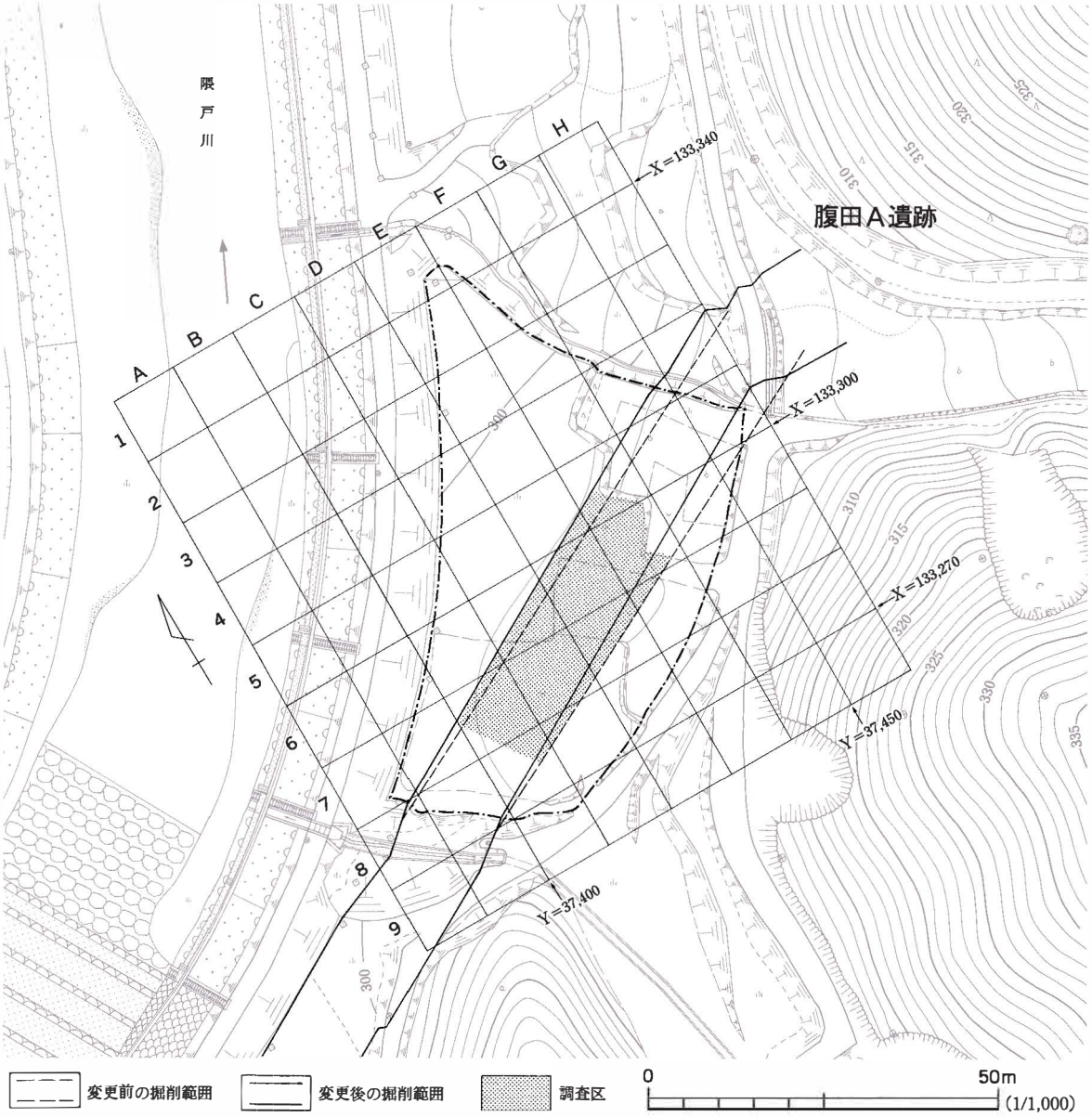


図１　腹田Ａ遺跡調査区位置図

あった。よって，幹線用水路部分とその周辺部分（2,320㎡）の試掘調査を行った後，発掘調査に向けての現地協議を行うこととした。

腹田Ａ遺跡の試掘調査は，４月12日～19日にかけて実施した。調査の結果，土師器・須恵器等の遺物や竪穴住居跡・土坑等の遺構が検出され，1,260㎡の要保存範囲が確定した。その成果を受けて４月25日に現地協議を行い，整地部分については掘削深度が遺構検出面まで達しないことから，幹線用水路部分（360㎡）の本調査が確定した。また，隈戸川農業水利事業所から工事の工程上，腹田Ａ遺跡・腹田Ｂ遺跡の発掘調査を優先させてほしいとの意向から，４月11日から実施していた金谷林遺跡の発掘調査を一旦中断し，腹田Ｂ遺跡→腹田Ａ遺跡へと調査を移行していくことを確認した。

腹田Ａ遺跡の発掘調査は，調査員１名，作業員23名の体制で平成19年５月29日に開始した。以下に調査概要を記す。

５月29日には，重機による表土剥ぎを開始した。６月１日からは作業員を投入し，環境整備・遺構の検出作業を行いながら，測量基準杭の設定と水準点の移動を随時行った。検出作業が進行するにつれて遺構の分布状況が明らかになり，調査区中央～西側にかけての標高の高い平坦面を中心に，平安時代の竪穴住居跡５棟を主体に，土坑２基，溝跡１条，小穴12基が検出され，順次遺構精査へ移行することとなった。検出された竪穴住居跡は，重複している遺構が多く，遺存状況も良好なため，精査作業は時間を要した。また，調査期間中には新遺跡（腹田Ｃ遺跡）の発見や，幹線用水路部分の工事計画の変更により，幹線用水路工事の都合上，優先順位の高い腹田Ｂ遺跡や腹田Ｃ遺跡の発掘調査を優先させたため，本遺跡の発掘調査を一端停止せざる得ない状況もあり，途切れ途切れの調査を実施せざるを得ない経過から，予想以上の期間を要した。また，本遺跡においても幹線用水路部分の工事計画の変更により，70㎡の追加面積が生じている。

また，この区域の遺跡調査の成果を見学するため，６月28日には大信地区の大屋小学校，７月３日には同地区の信夫第一小学校による，発掘体験および見学会が行われた。

８月下旬から９月上旬にかけては，長雨や台風の影響により，調査区内が冠水することが度々あり，排水作業に時間を要し，調査の進捗に遅れを来した。９月14日にラジコンヘリによる高度からの写真撮影を行い，９月18日には，現地において福島県教育委員会・（財）福島県文化振興事業団・隈戸川農業水利事業所の各担当者が集まり，調査経過や成果・状況等を説明し，現地の引き渡しが完了した。

第３節　調　査　方　法

平成19年度に調査を実施した腹田Ａ遺跡の調査は，以下に基づいて行った。

グリッドの設定　調査区の位置を国土座標の中で正確に把握するために，世界測地系を基本とした測量用基準杭（Ｘ－133,290，Ｙ－37,420）を打設した。国土座標値は，世界測地系公共座標第Ⅸ系に一致させ，一辺10m方眼を単位とした。グリッドの座標値は，図１・２中に示した。

個別のグリッドは，東西方向に西から東へアルファベットＡ・Ｂ…，南北方向に北から南へ算用数字で１・２…とし，両者を組み合わせて，Ｄ６グリッド，Ｆ８グリッドなどと呼称している。

基準線の設定　遺構の平面図を作成するに際しては，各グリッドを１mの方眼に分割し，これを基準線とした。基準線の座標上の位置については，各グリッドの北西端部を原点（Ｅ０，Ｓ０）とし，ここから東へ１m行くごとにＥ１～９，南へ１m行くごとにＳ１～９として表した。これにそれぞれのグリッド番号を組み合わせて，調査区域内全ての基準線の座標位置を表示した。例えば，Ｆ10－Ｅ２・Ｓ４とは，Ｆ10グリッドの北西端の杭から，東に２m，南に４m離れた場所を示す。

発掘作業　発掘作業では，表土は重機を用いて除去した。その後，人手により包含層を除去し，遺構・遺物の検出作業を行った。

遺構の掘り込み作業にあたっては，各遺構の形状・大きさ，重複関係に留意して，土層観察用の

ベルトを設定した。土坑など小型の遺構については，長軸方向にベルトを設定した。遺構内から出土した遺物の取り上げに際しては，上記の区画ごとに，層位を確認した上で取り上げた。

層位名を付す際は，基本層位はローマ数字を用いてＬⅠ・ＬⅡと表した。遺構内堆積層は，アラビア数字を用いてℓ１・ℓ２と表した。

記録作成　調査の成果は，実測図と写真で記録した。遺構図の縮尺は，住居跡が１／20，土坑等の小さなものは１／10で作成した。微細な記録が必要と判断したものについては，１／10で随時作成し，調査区内の地形図や遺構配置図は，１／100で作成した。土層観察における色調判断は，『新版標準土色帖』（小山・竹原1997）を基準とした。調査現場での写真撮影は35mm小型一眼レフカメラ，６×4.5判の中型一眼レフカメラ，デジタルカメラを併用した。

遺物・記録の保管　発掘調査で得られたすべての出土遺物と記録類一式は，報告書作成完了後，遺跡ごとに台帳を作成し，福島県文化財センター白河館（まほろん）に収蔵する予定である。

第２章　遺構と遺物

第１節　遺構の分布と基本土層

遺構の分布（図２）

腹田Ａ遺跡から検出された遺構は，竪穴住居跡５軒，土坑３基，溝跡１条，小穴12個である。調査区は東西方向に長く，北側の隈戸川に向かって緩やかに傾斜する地形を呈しており，調査区東部には，隈戸川に注ぐ支沢状の落ち込みが確認できる。検出された遺構は，調査区内の中央付近からやや西寄りにかけての，比較的標高が高い区域に集中している。

住居跡の分布をみると，標高300.4～301.0mの調査区中央付近から西側にかけて集中して検出され，同じ地点で重複する例もみられる。こうした分布状況は，遺跡範囲の東西側は隈戸川に注ぐ支谷が存在し，調査区付近は狭小な平坦地であるため，土地利用が制限された結果と考えられる。

５棟の住居跡は，出土遺物の特徴から全て平安時代（９～10世紀）に属するものである。土坑は，調査区の中央付近やや東寄りから３基検出された。出土遺物の特徴から，全て近接する住居跡と同時期のもので関連性が指摘できるが，用途・機能については不明である。溝跡は，住居跡に重複する形で１条検出された。この溝跡は，試掘調査時にも確認されており，耕作土直下からの掘り込みが認められることを勘案すると，新しい時期の可能性がある。また，調査区内には多数の小穴群も分布しており，掘立柱建物跡などの構築物の存在も考慮できる。

出土遺物は，縄文土器38点，石器５点，土師器1822点，須恵器29点，陶器２点，石製品５点，鉄製品６点である。縄文土器は早期・後期・晩期のものが認められ，共伴する遺構は確認できなかったが，付近に存在する可能性は高い。土師器の大部分は住居跡等の遺構内の出土で，遺構の年代決定資料も少なくない。

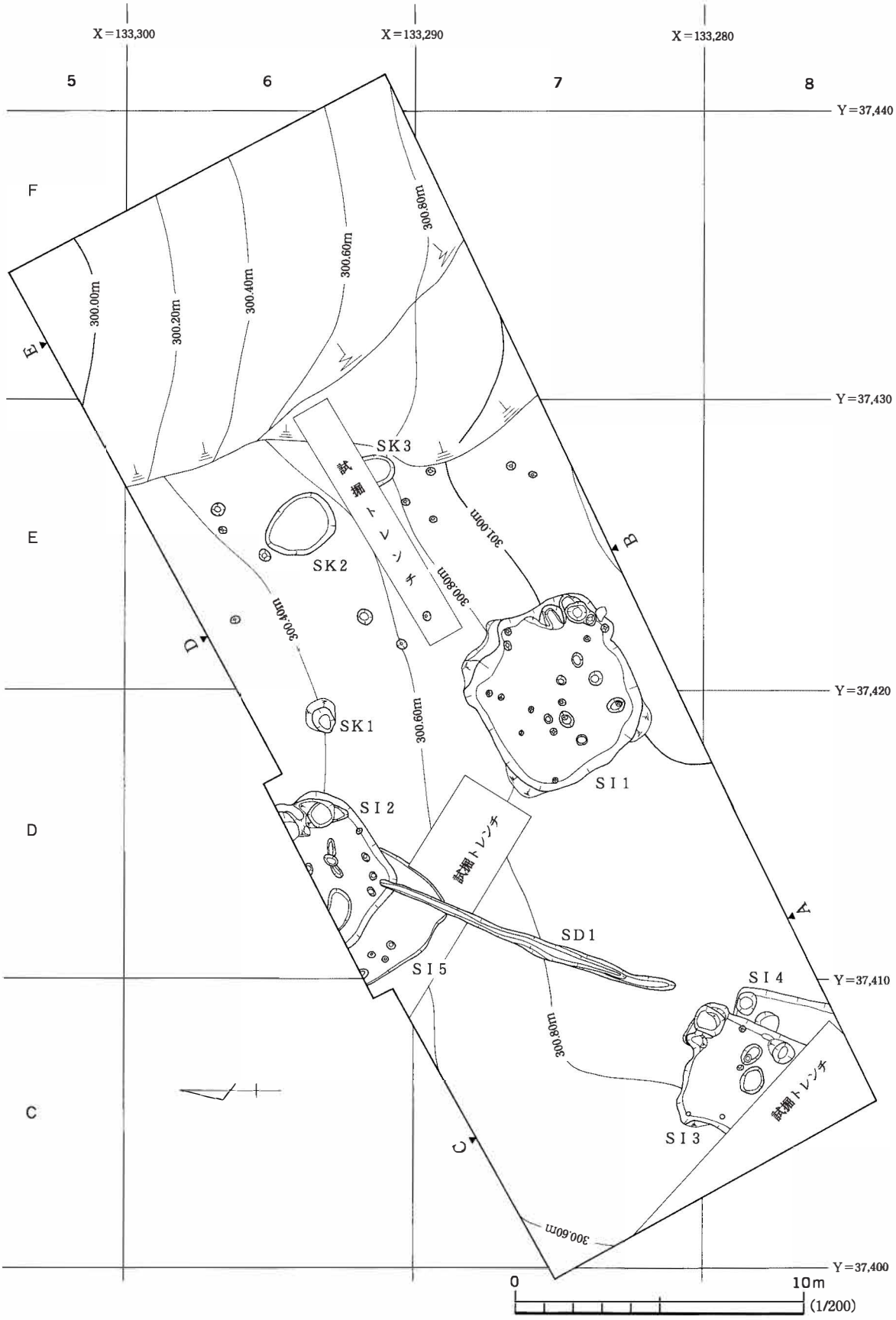

X＝133,300
X＝133,290
X＝133,280
5
6
7
8
Y＝37,440
Y＝37,430
Y＝37,420
Y＝37,410
Y＝37,400
F
E
D
C
300.00m
300.20m
300.40m
300.60m
300.80m
301.00m
SK1
SK2
SK3
SI1
SI2
SI3
SI4
SI5
SD1
試掘トレンチ
A
B
C
D
E
0
10m
(1/200)

図２　遺構配置図

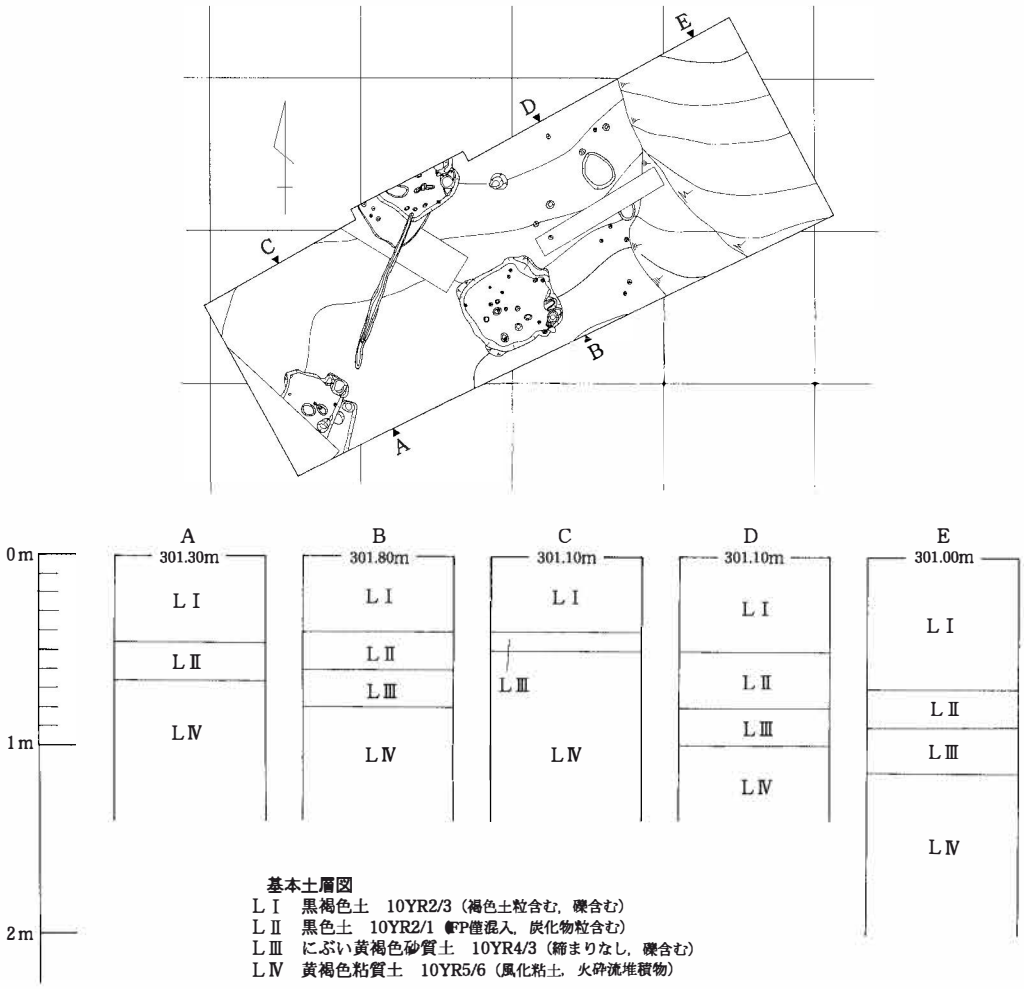


図３　基本土層図

基本土層（図３）

腹田Ａ遺跡は，隈戸川に面する段丘上の北緩斜面に位置する。遺跡の東西側は深い開析谷になり，急斜面となっている。調査区内の標高は約301.2～300.0mである。

本遺跡では，基本土層を大きくⅣ層に区分した。なお，遺跡の立地する場所において欠落する層も認められる。土層観察は調査区境の壁面を利用し，５地点で記録を行っている。

以下，堆積土の特徴と遺構・遺物の関係について概略する。

ＬⅠ　：現在の表土層で，有機質の多い黒褐色を呈している。原地形が南から北にかけて低くなっているため，その低い部分ほど厚く堆積している。層厚35cm～70cmを測る。調査に際しては重機による掘削を行った。層中には縄文時代と古代の遺物が含まれる。

ＬⅡ　：黒色土で旧表土層と判断した。標高の高い調査区西側では，耕畑時に削平されているが，他は普遍的に認められる。粘性が弱く，二次堆積による粉状のパミス（ＥＰ）を少量含んでいる。層厚は10cm～35cmを測り，標高の低い東側へ行くほど厚く堆積している。１・２・５号住居跡は，本層の中面付近からの掘り込みが認められた。層中には縄文時代や古代の遺物が含まれる。なお，本遺跡の多くの遺構内部に堆積している

黒色土は，本層に起因するものである。

ＬⅢ　：ほぼ全域に堆積する漸移層で，にぶい黄褐色をした砂質の軟弱な土層である。今回検出した遺構は，ほぼ本層上面で検出したことから，少なくとも平安期には，当区域で遺跡の基盤層を構成していたと推察される。これより下層は無遺物層である。

ＬⅣ　：礫を含む黄褐色粘土層である。この層は遺跡が位置する丘陵の基盤層で，火砕流堆積物である。風化が進みかなり粘土化している。

第２節　竪穴住居跡

今回の調査では，竪穴住居跡が５軒検出された。標高の高い調査区中央～西側区域にかけて分布し，うち４軒は住居跡同士の重複関係が認められる。これは，狭小な平坦地であるため，土地利用が制限された結果と考えられる。いずれも，カマドを有する方形基調の竪穴住居跡と推測され，出土遺物の特徴から，平安時代前期～中期に属するものと思われる。以下，遺構番号順に説明を行う。

１号住居跡　ＳＩ１

遺　　構（図４～7，写真３～５）

本住居跡は調査区中央付近やや南寄りのＤ７・Ｅ７グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高300.7～301.1m程の北向き緩斜面である。検出面はＬⅡ中面であり，検出時に新カマド付近に焼土や炭化物の集中範囲が認められた。重複する遺構はない。

遺構内堆積土は，色調および混入物から４層に分層できた。ℓ１はＬⅢ粒や褐色土粒および炭化物を少量含む黒褐色土で，その様相から自然堆積土と判断した。ℓ２は，炭化物や焼土粒を含むにぶい黒褐色土であり，人為堆積土の可能性が高い。ℓ３はＬⅢに相当するにぶい黄褐色土で壁際からの流入土である。ℓ４は，その様相から貼床構築土と判断した。

遺構の平面形は，不整形であるが隅丸の方形基調を呈し，軸長は北－南長5.35m，東－西長5.85mを測り，カマドの向きを基準とした主軸方位は，真北から58°東を指す。検出面からの深さは最大46cmを測り，北側へ向かうにつれて浅くなる。床面は，西半部でＬⅢを床面とする他は，貼床を施しほぼ平坦につくられている。周壁はともに緩やかに立ち上がるが，北東隅付近では段状に立ち上がる部分があり，本住居内への出入口に関連する可能性が推定される。

本住居内の内部施設として，カマド・小穴を確認した。カマドは２基検出されており，東壁のカマドが新しく（図６），南壁のカマドが古い（図７）。新カマドは南東隅から約135cm離れた東壁に付設されていた。煙道部は消失しており，燃焼部が遺存している。また，袖部は崩れているものの，両袖とも残存する。堆積土は６層に分層できた。ℓ１・２は廃絶土，ℓ３は燃焼部天井崩落土，ℓ４・５は燃焼部にまとまって堆積した焼土塊を主体とする層，ℓ６はカマド構築土と判断した。新カマドの遺存規模は，燃焼部の奥行き88cm，最大幅80cmを測り，その底面は煙道部に向かって緩や

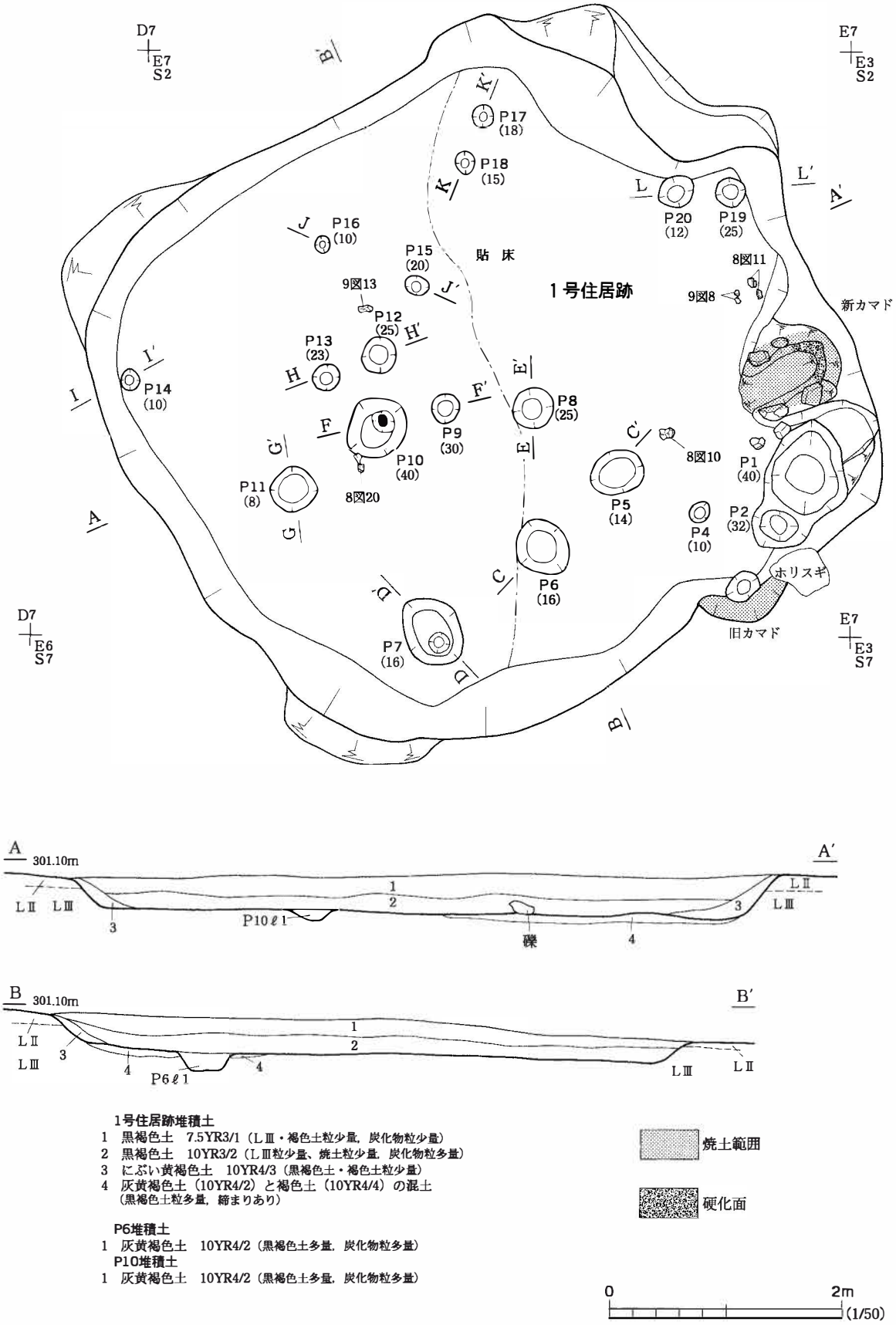

D7
E7
S2
E7
E3
S2
D7
E6
S7
E7
E3
S7
1号住居跡
貼床
新カマド
旧カマド
ホリスギ
P1 (40)
P2 (32)
P4 (10)
P5 (14)
P6 (16)
P7 (16)
P8 (25)
P9 (30)
P10 (40)
P11 (8)
P12 (25)
P13 (23)
P14 (10)
P15 (20)
P16 (10)
P17 (18)
P18 (15)
P19 (25)
P20 (12)
8図10
8図11
8図20
9図8
9図13
301.10m
LⅡ
LⅢ
P10ℓ1
礫
P6ℓ1
1号住居跡堆積土
1　黒褐色土　7.5YR3/1（LⅢ・褐色土粒少量，炭化物粒少量）
2　黒褐色土　10YR3/2（LⅢ粒少量、焼土粒少量，炭化物粒多量）
3　にぶい黄褐色土　10YR4/3（黒褐色土・褐色土粒少量）
4　灰黄褐色土（10YR4/2）と褐色土（10YR4/4）の混土
（黒褐色土粒多量，締まりあり）
P6堆積土
1　灰黄褐色土　10YR4/2（黒褐色土多量，炭化物粒多量）
P10堆積土
1　灰黄褐色土　10YR4/2（黒褐色土多量，炭化物粒多量）
焼土範囲
硬化面
0
2m
(1/50)

図４　１号住居跡

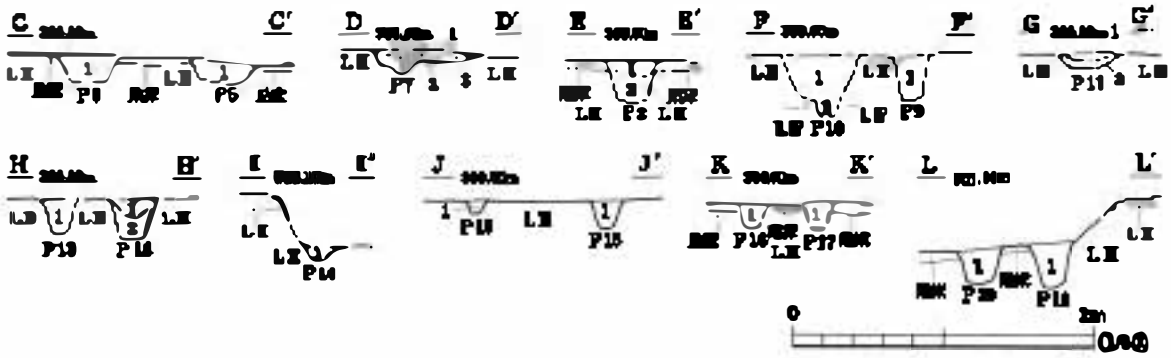


図5　1号住居跡小穴断面図

かに立ち上がり，奥壁付近は特に強く被熱を受けている。遺存状態は良好で，燃焼部の中央付近には，方柱状の棒を材とした支脚（10図4）が直立した状態で遺存し，上面および床土層からは土師器杯が多く出土している。袖部の内側は被熱によって，厚さ2～5cmの酸化壁を形成している。加えて，燃焼部前部の底面にかけて熱を受け酸化していることから，頻度の高い使用が想定される。

旧カマドは，南壁に付設されたものと思われる。しかし，現状では燃焼部の奥壁付近が僅かに痕跡を留める程度で，大部分は新カマドの構築によって壊されている。

検出した小穴は20基を数える。全て半截し，内部の堆積状況と断面の状況を確認した。P 1は東壁に付設された新カマドの南脇に隣接して検出された。平面形は径84×70cm程の楕円形状を呈し，深さは床面から40cmを測る。P 1内からは多量の炭化物や焼土粒に混じって，多くの土師器・須恵器片が出土し，新カマドに接するような位置や，規模が他の小穴と比べて大きいことから，貯蔵穴の用途が想定される。P 3は新カマドの下層で検出され，南側はP 1に掘り込まれ消失している。遺存する形状から，長径95cm程の楕円形状を呈したものと思われる。堆積土は1層で，人為的な埋土である。これは，新カマドの構築時にP 3を埋め，整地した結果であると思われる。底面には完形に近い土師器杯（8図6）が確認され，本小穴の年代を示す重要な指標となる。旧カマドと近接する位置や規模等から，旧カマド時の貯蔵穴の用途が想定される。

P 2およびP 4～20は，平面形が円形・楕円形を呈する小穴群である。規模は，直径や長径が16～65cm，深さ8～40cmを計測した。これらの小穴の埋没状況には相違が認められることから，いく

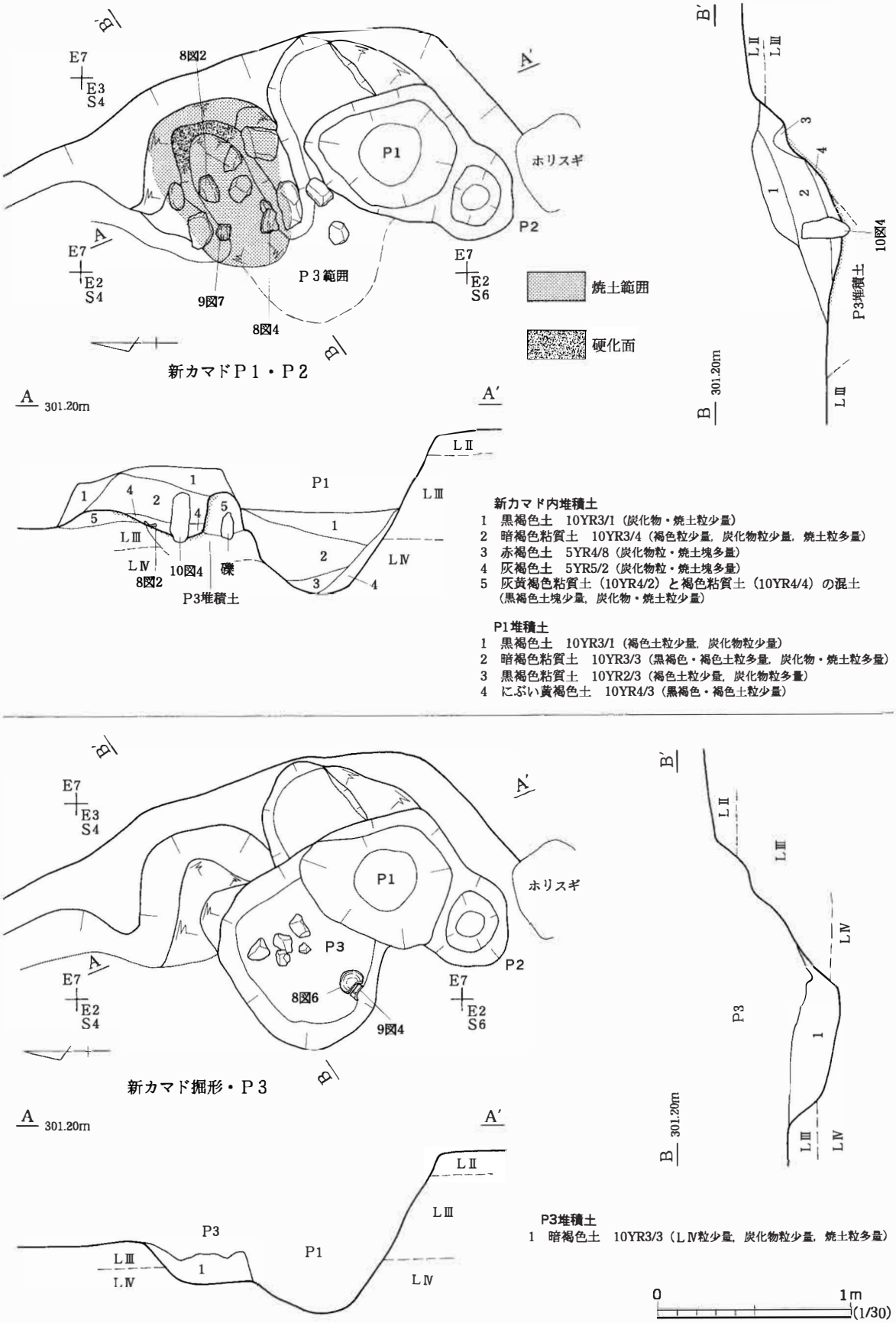


図６　１号住居跡新カマド，Ｐ１～３

つかの変遷や用途が想定される。形状・規模から考えて柱穴と想定されるが，配置はきわめて不規則である。

また，本住居内には，礫の集石範囲と被熱を受けたと思われる焼土や炭化材の集中範囲が確認された。その分布状況は図７に示した。これらの焼土跡や炭化物の検出により，焼失住居の可能性も考えられたが，家屋の部材と認識できる柱状や板状の炭化材の出土が全くなく，床面での部分的な検出であったため，炉跡として機能していた可能性が高い。特に，焼土①では，径63×55cmの割石を囲んだ範囲内で被熱を受け，その中央付近には柱状の自然石が，カマド支脚に似た直立した状態で検出している（10図５）。焼土②は径72×64cm，焼土③は径98×92cm，焼土④は径52×45cm の範囲で被熱を受け，厚２～４cmで焼土化しており，上面は焼き締まっている。

床面上に散在する集石群は，そのほとんどが破砕されており，被熱を受けているものが多い。これらの礫は，非常に微弱な敲打痕や摩耗面等の使用痕跡が認められるのもあるため，なんらかの作業に伴う道具の可能性が高い。しかし，その用途に

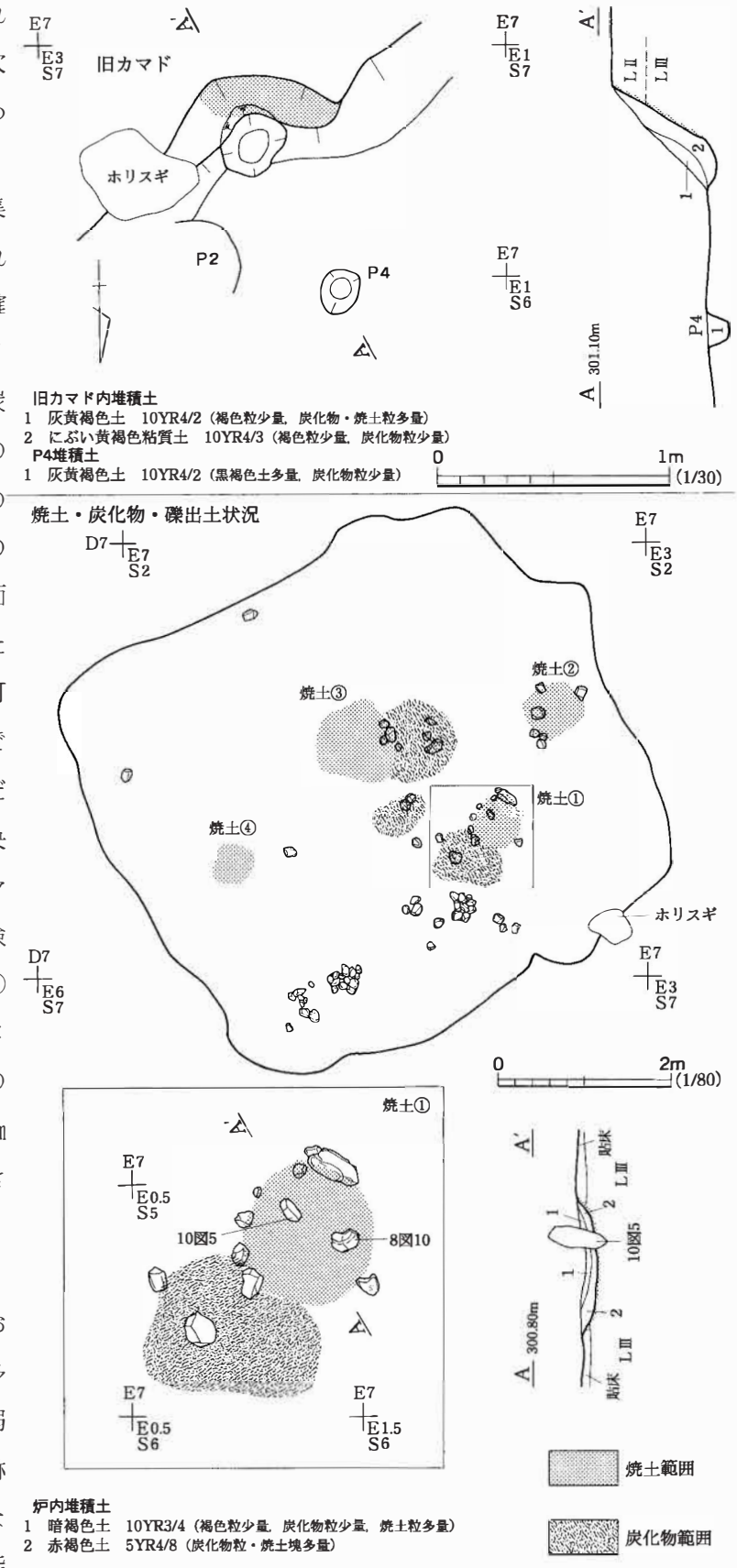


図７　１号住居跡旧カマド，炉跡

ついては不明である。ただ，その位置関係からみれば，焼土（炉跡）に一連の関連をもつものであり，本住居の住人作業の痕跡であることは明確である。

遺　　物（図8～10，写真18・19）

本住居跡からは，縄文土器6点，土師器片675点，須恵器片5点，石器1点，石製品5点，鉄製品3点が出土している。土師器片は大半が甕である。また，筒型土器も多く出土しており，その大部分はカマド付近やP1内からの出土が特出しているが，ほとんどが細片で摩滅が激しいものである。このうち縄文土器4点，石器1点，土師器28点（筒型土器2点含む），須恵器4点，石製品3点，鉄製品3点を図示した。土師器甕は，今回図示した遺物と同一個体とみられる破片が大半である。

また，小片のため割愛した土師器杯は，いずれもロクロ成形で，ほとんどは内面に黒色処理とヘラミガキを施している。また，筒形土器は胎土・色調の違いから，図示できなかったものが相当数存在しているものと思われる。これらの遺物の層位別出土点数は，住居内堆積土ℓ1（256点），同ℓ2（231点），同ℓ3（14点），同ℓ4（22点），床面（29点），カマドℓ2（21点），カマドℓ3（8点），P1ℓ2（42点），P1ℓ3（24点），P3ℓ1（27点）である。このように，覆土中からの出土量が最も多いが，床面や住居内施設からの出土遺物も多く，良好な情報を得ることができた。

以下，順次遺物の特徴について概説する。

8図1～19はロクロ成形の土師器杯である。いずれも内面にはヘラミガキの後，黒色処理が施されているが，3・5・10・14・17は二次加熱を受けて器面が赤褐色になった部分が見られ，二次的な比熱のため，黒色処理が失われている。底部内面のヘラミガキは，1・2・4・6・9・11・13・15では放射状に施されている。7・8・12についても，単位は不明瞭だが，放射状に施された可能性がある。13・14の底部外面には，回転糸切り痕が明瞭に観察され，4・6では僅かに回転糸切り痕が認められる。また，底部の切り離し後に手持ちヘラケズリを施すものが殆どで，ヘラケズリが施される範囲は，1～3・5・8～11は体部下端～底部全体，4は底部全体，6は体部下端～底部周縁である。7・15は底部を欠損しているため体部下端のみの観察である。13・14は切り離し後の再調整は認められない。12は底部周縁に剥離痕が認められるため，高台付杯の杯部の可能性がある。また，6と19の体部には墨書が観察できるが，欠損しているため判読不明である。

8図20～9図6は土師器甕である。8図20は非ロクロ整形の広口の甕でほぼ完形品である。口縁部は「く」の字状に外反するのみで端部はつまみ上げられていない。口縁部の内外面には丁寧なナデが施され，胴部外面にはヘラケズリ，内面には横位の強いヘラナデの痕跡が観察でき，消され切らずに残った粘土紐の積み上げ痕が認められる。9図1は非ロクロ整形の中型の甕で，胴部がやや膨らみ，口縁部は「く」の字状に外反する。口縁部の内外面には丁寧なナデが施され，胴部は内外面ともに平行タタキ目状の工具で整形した後，ヘラナデが施されている。胎土には粗砂を含み脆い。2は，ロクロ整形の中型甕で口縁部～胴部の資料である。外反した後に口縁端部を上につまみ上げている。ロクロ整形の後に，胴部外面にはヘラケズリ，内面には強いヘラナデの痕跡が観察できる。また，内面にはロクロナデに消され切らずに残った粘土紐の積み上げ痕が観察される。3・

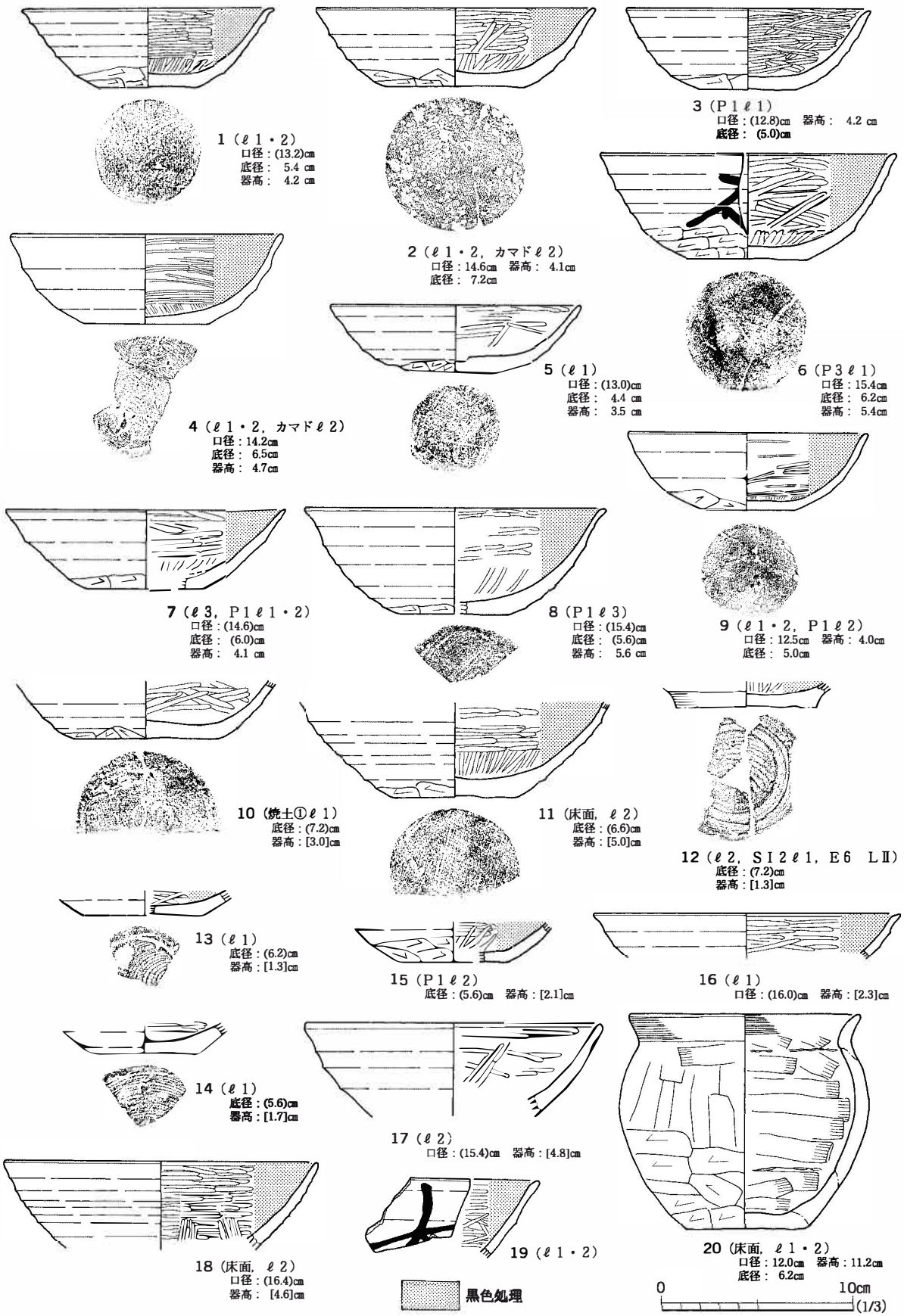


図８　１号住居跡出土遺物（１）

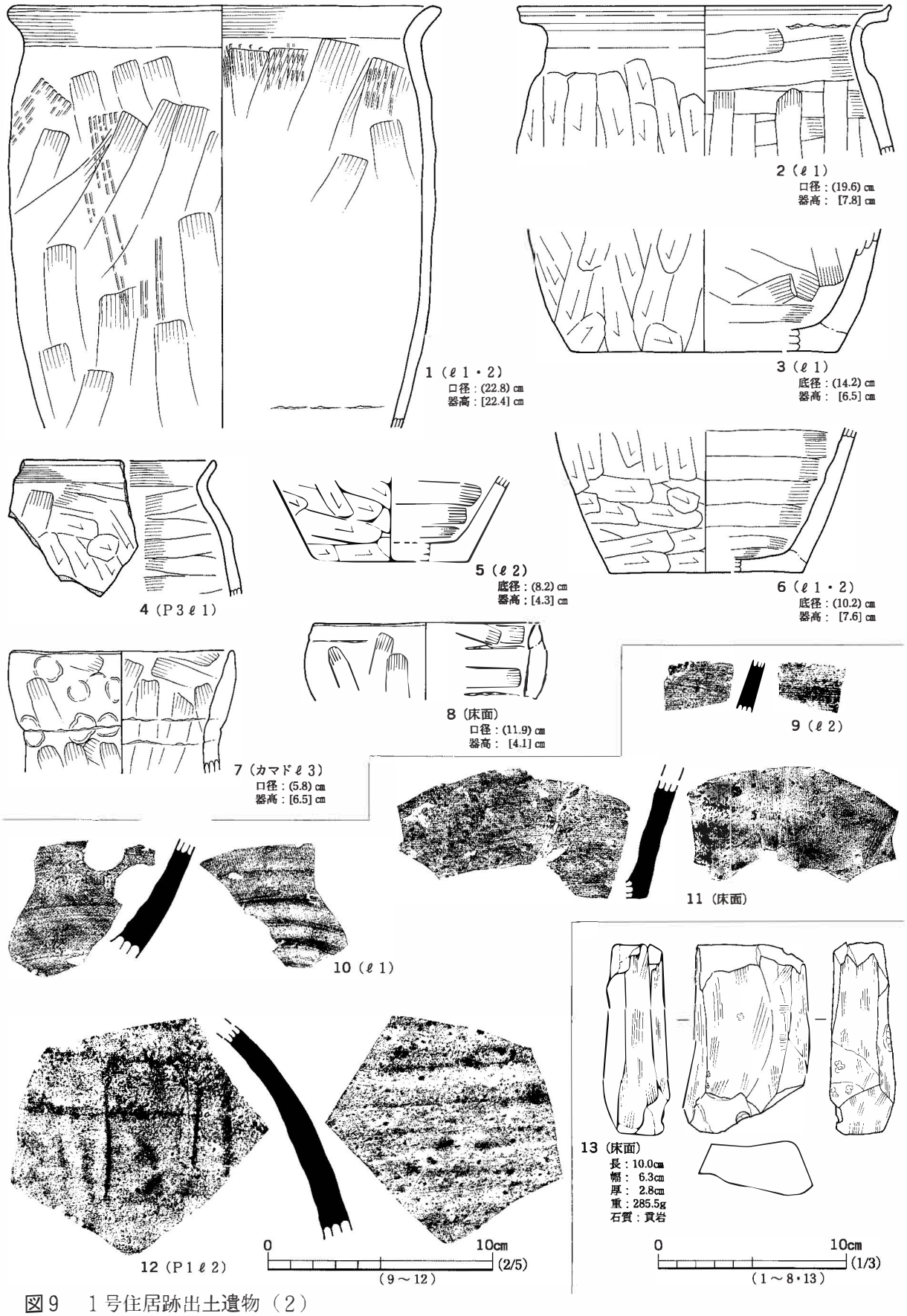


図９　１号住居跡出土遺物（２）

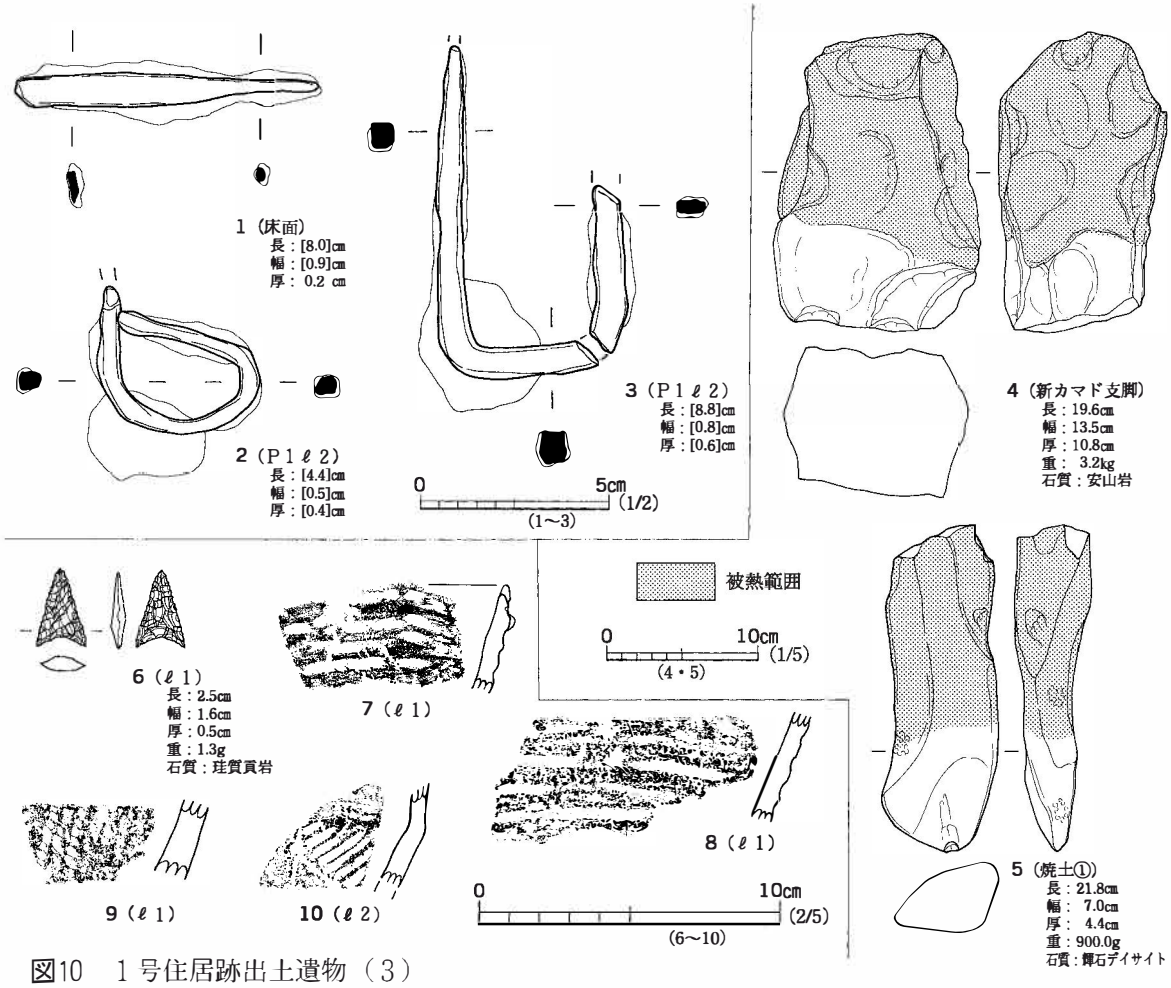


図10　１号住居跡出土遺物（３）

５・６は底部付近の資料である。いずれも整形方向は判別できなかった。ともに胴部外面にはヘラケズリ，内面には横位の強いヘラナデの痕跡が観察できる。４は口縁部付近の破片資料として掲載した。非ロクロ整形で，口縁部は「く」の字状に外反するのみで端部はつまみ上げられていない。口縁部の内外面には丁寧なナデが施され，胴部外面にはヘラケズリ・ナデ，内面には横位の強いヘラナデの痕跡が観察できる。

９図７・８は筒形土器である。全体の分かる資料はないが，いずれも小型のものである。いずれも整形の際の粘土紐積み上げ痕を残し，オサエやナデで調整をしているが，調整は雑で粗末な作りである。ともに厚手で，胎土には粗砂・細砂を含む。

９図９～12は須恵器の破片資料である。いずれも長頸瓶の胴部と思われ，内外面ともにロクロナデ痕が明瞭に観察できる。また，12の外面には自然釉が付着している。

９図13は砥石である。貢岩製で三面に砥面を有する。正面部には幅１㎜前後の擦痕があり，刃物の研ぎ直しの痕跡と考えられる。

10図１～３は鉄製品である。１は刀子で切先部を欠損する。関と茎の部分は，錆膨れが著しく形状は明確ではない。２・３は断面が方形を呈する棒状の鉄製品である。本資料の明確な用途は不明である。

10図４はカマド支脚である。カマド燃焼部の中央付近で直立した状態で出土した。いびつな方形柱状で，表面が焼けて劣化しており，頻度の高い使用が窺える。10図５は炉跡の中央部から直立した状態で出土した。不成形な三角柱状で４と同様，表面が焼けて劣化している。使用目的は不明であるが，頻度の高い使用が窺える。

10図６～10は本住居内に流入していた縄文時代の遺物である。６は凹基式石鏃である。両面は精密な並行剥離で調整されている。７・８は色調・胎土の特徴から同一個体と推測され，横方向に太い沈線が多条にめぐる。口縁部は波状口縁である。摩滅が著しいため年代特定は困難であるが，早期中葉の貝殻沈線文系土器の可能性がある。９は単節縄文が施されている。10は磨消縄文手法で文様を描き出しており後期前葉頃の土器であろうか。

ま　と　め

本住居跡は，今回確認された住居跡の中で唯一，全体形が把握できた。カマドの作り替えが確認され，少なくとも２時期の変遷が考えられる。床面には，炉跡と考えられる焼土跡が４箇所認められ，周辺には加熱され破砕した角礫が多量に出土している。これらの礫は，非常に微弱な敲打痕や摩耗面等の使用痕跡が認められるため，なんらかの作業に伴う道具の可能性が高く，“火”を伴う作業と何らかの関連があるものと推測できる。堆積土中および住居内施設からは多くの遺物が出土し，良好な情報が得られた。所属時期は，出土した土器類の年代観から９世紀後葉頃と推定される。

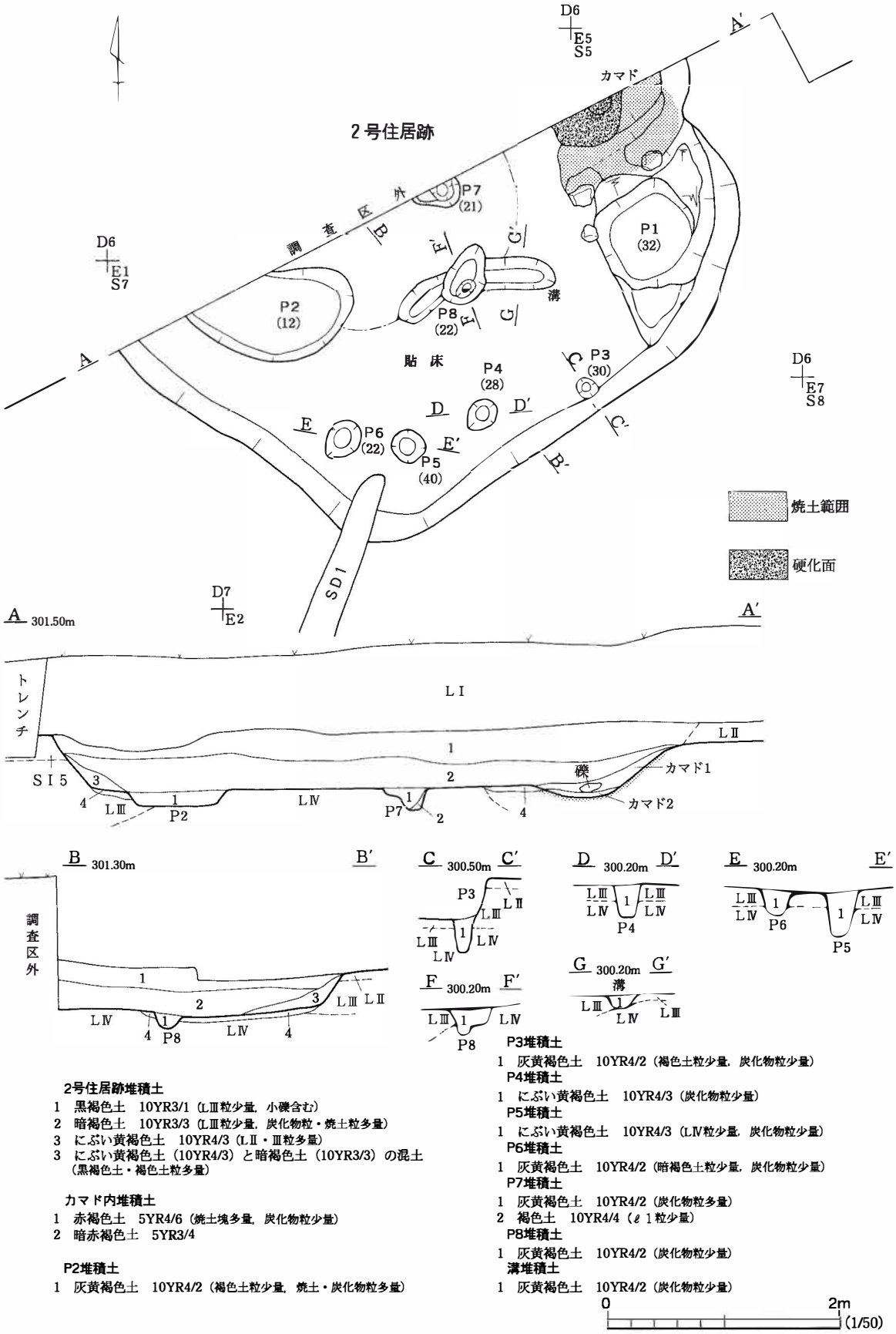
２号住居跡　ＳＩ２

遺　　構（図11・12，写真６～８）

本住居跡は調査区中央付近北側の▶６グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高300.4m程の北向き緩斜面である。検出面はＬⅢ上面であるが，調査区際の土層観察から，ＬⅡ上面からの掘り込みが認められる。遺構西側でＳＩ５およびＳ▶１と重複しており，検出状況からＳＩ５よりは新しく，Ｓ▶１よりは古い。また，本遺構は床面を中心に炭化材や焼土塊が確認できたことから，火災を受けた可能性が高い。その炭化材の分布状況は図12に示した。焼土・炭化材は遺構の東西側で比較的多く確認できた。柱状のものや板状のものが認められるが，上屋構造の詳細な部位までは復元できない。これら炭化材の出土状況は，床面より浮いた状態であるものが多い。また，床面が被熱酸化した範囲も確認されている。

遺構内堆積土は，色調および混入物から４層に分層できた。ℓ１はＬⅢ粒を少量含む黒褐色土で，その様相から自然堆積土と判断した。ℓ２は，炭化物や焼土粒を含む暗褐色土であり，人為堆積土と判断した。焼失時に堆積したものと推測される。ℓ３はＬⅡおよびＬⅢ粒を含むにぶい黄褐色砂質土で壁際からの流入土である。ℓ４は，その様相から貼床構築土と判断した。

遺構の平面形は，北半部が調査区外へ延びるため全体形は不明であるが，検出した部分から判断すると方形基調を呈し，南壁は4.5mを測り，東壁1.75m，西壁2.9mを確認している。検出面から床面までの深さは，最大で36cmを測る。床面は，中央部でＬⅣを床面とする他は，貼床を施しほぼ



2号住居跡堆積土

1　黒褐色土　10YR3/1（LⅢ粒少量，小礫含む）
2　暗褐色土　10YR3/3（LⅢ粒少量，炭化物粒・焼土粒多量）
3　にぶい黄褐色土　10YR4/3（LⅡ・Ⅲ粒多量）
3　にぶい黄褐色土（10YR4/3）と暗褐色土（10YR3/3）の混土（黒褐色土・褐色土粒多量）

カマド内堆積土

1　赤褐色土　5YR4/6（焼土塊多量，炭化物粒少量）
2　暗赤褐色土　5YR3/4

P2堆積土

1　灰黄褐色土　10YR4/2（褐色土粒少量，焼土・炭化物粒多量）

P3堆積土

1　灰黄褐色土　10YR4/2（褐色土粒少量，炭化物粒少量）

P4堆積土

1　にぶい黄褐色土　10YR4/3（炭化物粒少量）

P5堆積土

1　にぶい黄褐色土　10YR4/3（LⅣ粒少量，炭化物粒少量）

P6堆積土

1　灰黄褐色土　10YR4/2（暗褐色土粒少量，炭化物粒少量）

P7堆積土

1　灰黄褐色土　10YR4/2（炭化物粒多量）
2　褐色土　10YR4/4（ℓ１粒少量）

P8堆積土

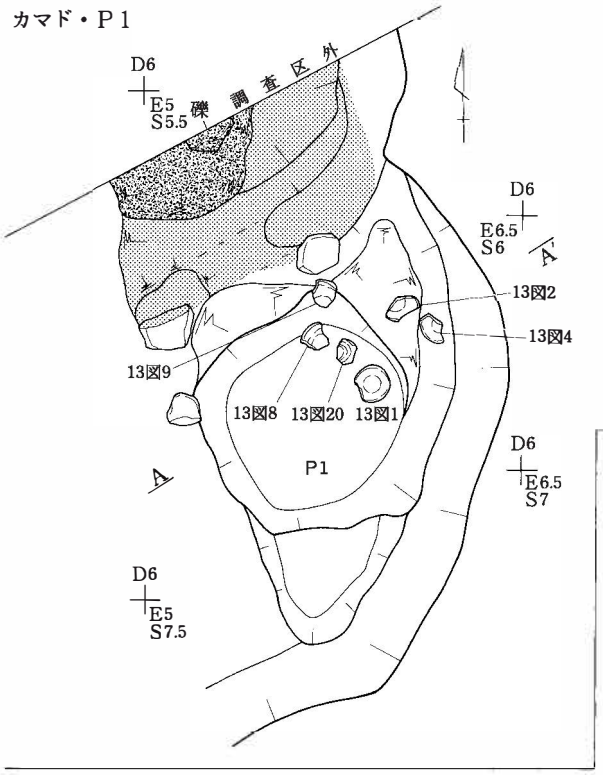
1　灰黄褐色土　10YR4/2（炭化物粒少量）

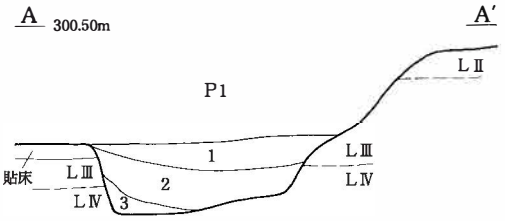
溝堆積土

1　灰黄褐色土　10YR4/2（炭化物粒少量）

図11　２号住居跡

カマド・Ｐ１



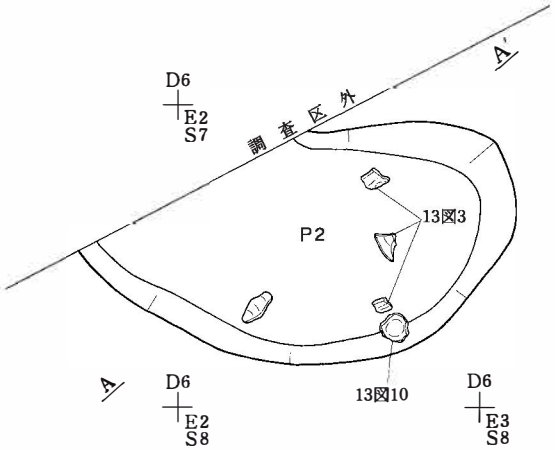


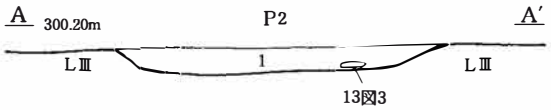
P1堆積土

1　黒褐色土　10YR3/2（褐色土粒多量，焼土・炭化物粒多量）
2　暗褐色土　10YR3/3（黒褐色土・褐色土粒多量，焼土・炭化物粒多量）
3　にぶい黄褐色土　10YR4/3（LⅢ粒多量）

0　1m　(1/30)

Ｐ２遺物出土状況





P2堆積土

1　灰黄褐色土　10YR4/2（褐色土粒少量，焼土・炭化物粒多量）

0　2m　(2/5)

炭化材出土状況

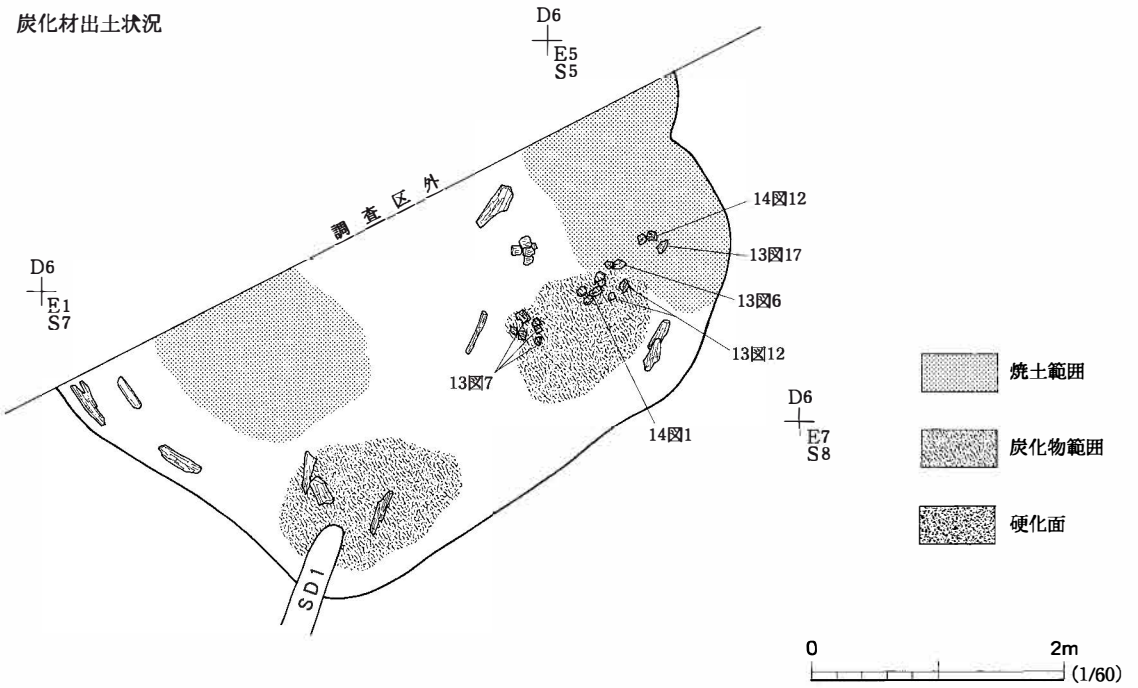


図12　２号住居跡カマド，Ｐ１・２，炭化材出土

平坦につくられており，全体的に硬く踏み締められている。周壁は，比較的急峻に立ち上がる。

本住居内の内部施設として，カマド・小穴を確認した。カマドは，南東隅から約125cm離れた東壁に付設されていた。カマドの北半部分は調査区外へ延びるため，全体の規模は不明であるが，燃焼部の一部と右袖部を確認した。堆積土は２層に分層できた。ℓ１は燃焼部天井崩落土，ℓ２は燃焼部にまとまって堆積した焼土塊を主体とする層と判断した。確認できたカマドの規模は，燃焼部の奥行き123cmを測り，その底面は煙道部に向かって緩やかに立ち上がり，底面付近は特に強く被熱を受けている。遺存状態は良好で，燃焼部の上面および焼土層からは土師器杯や甕の破片が出土している。袖部の内側は被熱によって，厚さ２～５cmの酸化壁を形成している。加えて，燃焼部前部の底面にかけて熱を受け酸化していることから，頻度の高い使用が想定される。

小穴は８基検出した。Ｐ１は東壁に付設されたカマドの南脇に隣接して検出された。平面形は径115×105cm程の隅丸方形状を呈し，深さは床面から32cmを測る。Ｐ１内からは多量の炭化物や焼土粒に混じって，多くの土師器杯や筒形土器片が出土し，カマドに接するような位置や，規模が他の小穴と比べて大きいことから，貯蔵穴の用途が想定される。Ｐ２は住居内西側付近で検出された。形状は不整形な楕円形状を呈し，検出した規模は径140×78cm，深さ14cmを測る。この小穴は用途・機能不明であるが，形態が浅い皿状を呈することから，土器などを置くスペースと考えておきたい。

Ｐ３～Ｐ８は，平面形が円形・楕円形を呈し，断面形がＵ字状になる小型の小穴である。規模は，直径や長径が18～52cm，深さ22～40cmを計測した。これらの小穴は，形状・規模から考えて，柱穴であると思われる。

この他，住居の中央付近では全長約128cmの溝が確認された。基本的に南壁に平行するように掘り込まれているが，東端は南壁側へ屈曲するような形状である。床面から底面までの深さは，約15cmである。堆積土は１層で，炭化物が多く含まれる人為堆積土である。住居の貼床（ℓ４）を掘り込んでつくられているが，埋められた後に一部をＰ８に掘り込まれている。このため，途中で計画を変更した可能性もある。なお，この溝がつくられた要因は不明である。

遺　　物（図13・14，写真20・21）

本住居跡からは，縄文土器２点，土師器片617点，須恵器片14点，鉄製品１点が出土している。土師器片は大半が甕で，杯は少ない。また，筒型土器が多く出土しており，その大部分はカマド付近やＰ１内からの出土が特出しているが，ほとんどが細片で摩滅が激しいものである。このうち土師器34点（筒型土器３点含む），須恵器10点，鉄製品１点を図示した。土師器甕は，今回図示した遺物と同一個体とみられる破片が大半である。また，小片のため割愛した土師器杯は，いずれもロクロ成形で，ほとんどは内面に黒色処理とヘラミガキを施している。また，筒形土器は胎土・色調の違いから，図示できなかったものが相当数存在しているものと思われる。

これらの遺物の層位別出土点数は，住居内堆積土ℓ１（177点），・ℓ２（150点），床面（52点），カマドℓ１（27点），Ｐ１ℓ１（139点），Ｐ１ℓ２（52点），Ｐ２ℓ１（17点）である。このように，

覆土中からの出土量が最も多いが，床面や住居内施設からの出土遺物も多く，良好な情報を得ることができた。以下，順次遺物の特徴について概説する。

13図１～18はロクロ成形の土師器杯である。ほぼ完形に近い１～７は，いずれも内面にはヘラミガキの後，黒色処理が施されているが，３は二次的な被熱のためか，黒色処理が失われている。底部内面のヘラミガキは，２・５では放射状に施されている。７についても，単位は不明瞭だが，放射状に施された可能性がある。底部外面には１・４・５・７では回転糸切り痕が認められる。また，底部の切り離し後に手持ちヘラケズリを施しているのは，2～７である。ヘラケズリが施される範囲は，２・６は体部下端～底部全体，４・５・７は体部下端～底部周縁である。また，５には体部に墨書が観察できるが，判読不能である。８は内外面とも丁寧なヘラミガキの後に黒色処理を施している。この調整技法や形状から，金属器を模した可能性がある。９は赤褐色硬質の土器である。内外面はロクロナデ調整され，立ち上がりが直線的である。底部切り離しは回転糸切りである。10・11は底部資料である。いずれも内面にはヘラミガキの後，黒色処理が施されている。特に10のヘラミガキは，その単位の内部にはナデのような筋が認められる。このため，木の小口部分を使用した工具の可能性も考えられる。いずれも体部下端には手持ちヘラケズリ再調整が施され，底部外面には，10には回転糸切り痕が認められるが，11は体部下端から連続する手持ちヘラケズリが施され，切り離し技法は不明である。12～18は口縁部から体部にかけての資料である。そのほとんどは緩やかに内湾しながら立ち上がるが，16は立ち上がりが直線的である。いずれも内面にはヘラミガキの後，黒色処理が施されている。

13図19・20はロクロ整形の土師器高台付杯である。いずれも内面にはヘラミガキの後，黒色処理が施されている。内外面ともに丁寧なロクロナデが認められる。

13図21～14図10は土師器甕である。13図21・14図１は，ともにロクロ整形の中型甕で口縁部～胴部片の資料である。いずれも外反した後に口縁端部を上につまみ上げている。13図21は内外面ともにロクロナデ調整が施されるが，14図１はロクロ整形の後に，胴部外面にはヘラケズリ・ナデ，内面には横位の強いヘラナデの痕跡が観察できる。２～６・９は口縁部付近の破片資料として掲載した。２～４はロクロ整形で，口縁部は外反した後に端部を上につまみ上げている。５もロクロ整形であるが，口縁部は「く」の字状に外反するのみで端部はつまみ上げられていない。内面にはヘラミガキと黒色処理が観察される。６・９は非ロクロ整形で口縁部は「く」の字状に外反する。ともに器厚は肥大である。７・８・10は底部付近の資料である。７・８は中型甕と推測されるが，整形方向は判別できなかった。いずれも外面にはヘラケズリ，内面には横位の強いヘラナデの痕跡が観察できる。10は小型鉢の可能性もあり，ロクロ整形の後に胴部下部にヘラケズリ，内面には横位の強いヘラナデの痕跡が観察できる。

14図11～13は筒形土器である。全体の分かる資料はないが，いずれも小型のものである。３点とも整形の際の粘土紐積み上げ痕を残し，オサエやナデで調整をしているが，調整は雑で粗末な作りである。ともに厚手で，胎土には粗砂・細砂を含む。14図14～22は須恵器の資料である。14～16は

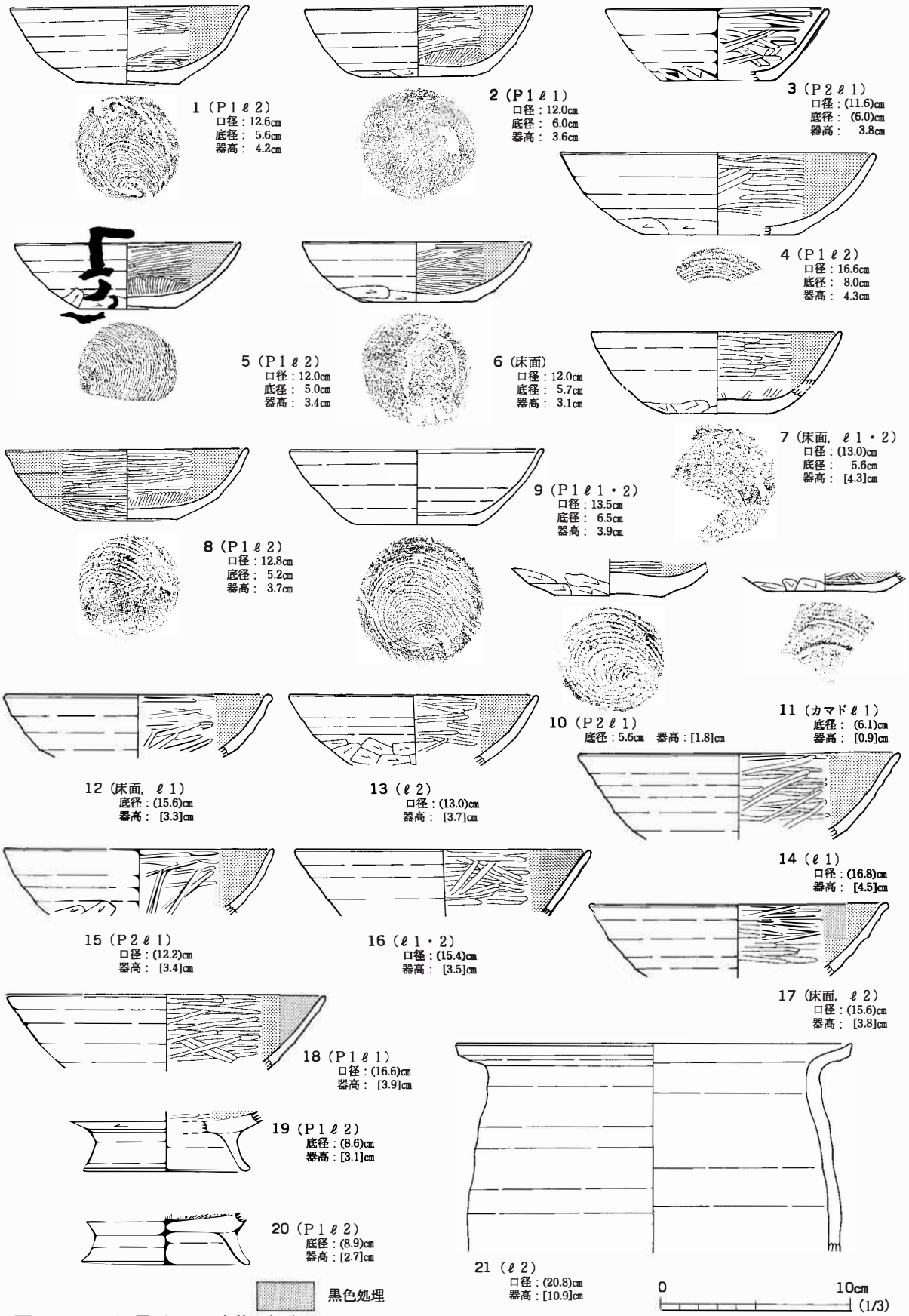


図13　２号住居跡出土遺物（１）

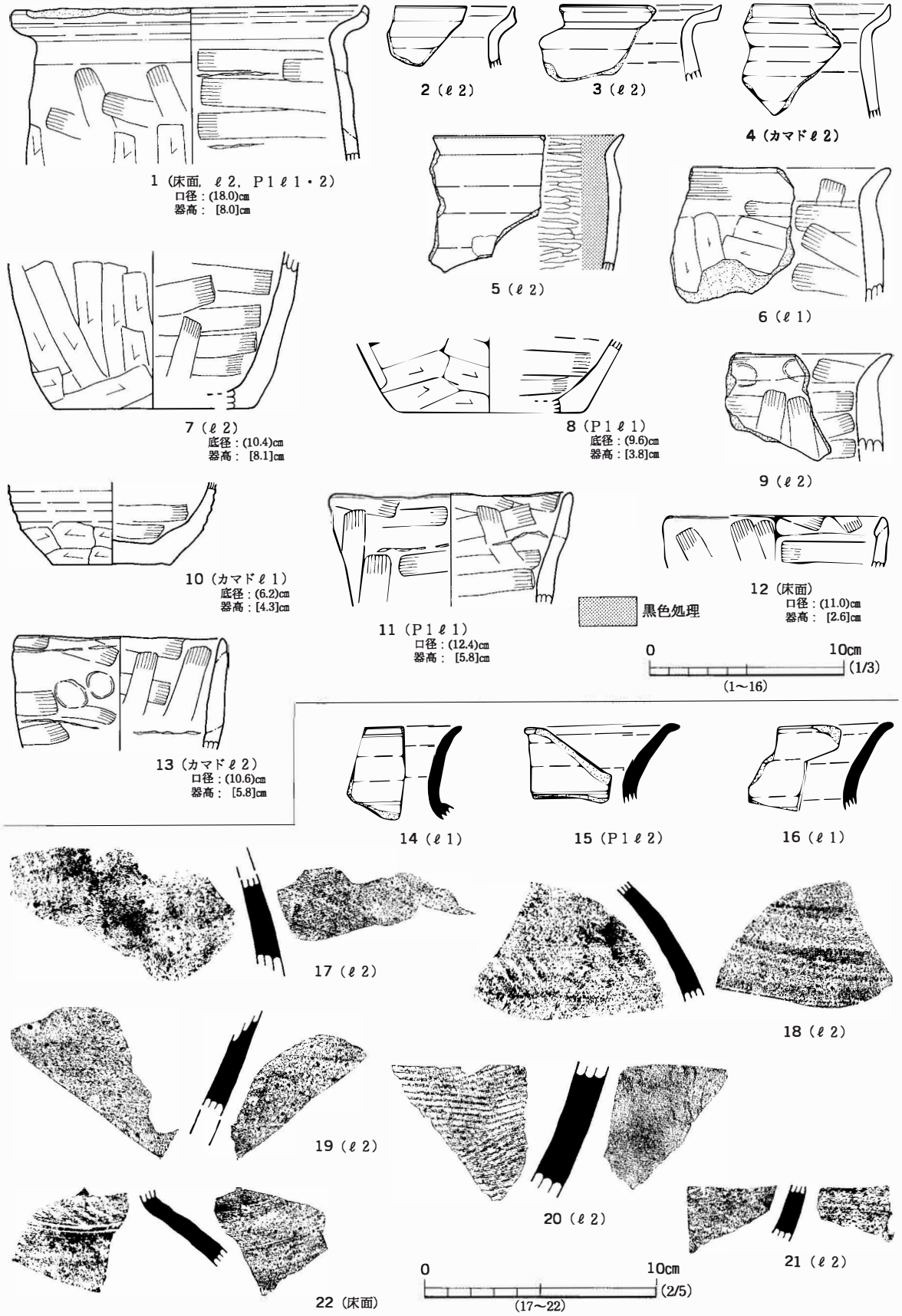


図14　２号住居跡出土遺物（２）

甕の口縁部で内外面ともにロクロナデ調整が施されている。17～22は胴部資料である。17～19・21・22は長頸瓶の胴部と思われ，内外面ともにロクロナデ痕が明瞭に観察できる。22は他より器厚があり，外面に平行タタキ目が施されることから，甕の胴部と考えられる。15図１は曲刃の鉄鎌である。緩やかに屈曲する形態で，基部付近は折曲する部分が認められる。

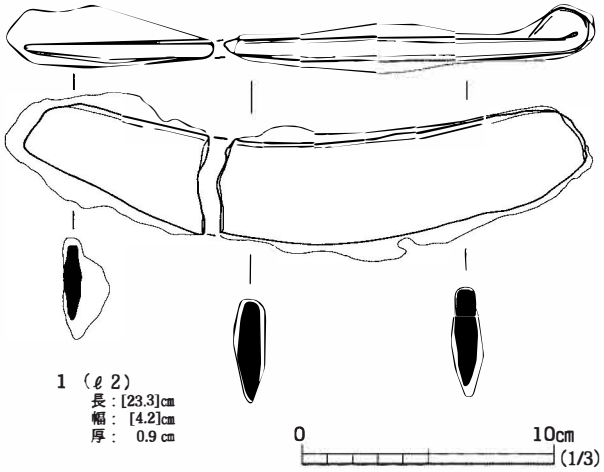


図15　２号住居跡出土遺物（３）

ま　と　め

本住居跡は，北側が調査区外へ延びるため全体形は把握できなかったが，方形基調の住居跡であると思われる。炭化材が床面から出土しており，火災に遭っている。堆積土中および住居内施設からは多くの遺物が出土し，良好な情報が得られた。所属時期は，出土した土器類の年代観から９世紀後葉～10世紀初頭頃と推定される。

３号住居跡　ＳＩ３

遺　　構（図16・17，写真９・10）

本住居跡は調査区西側のＣ７・Ｄ７グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高300.8ｍ程の北向き緩斜面である。検出面はＬⅢ上面であるが，周囲は削平を受けてＬⅡが欠層しているため，本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。遺構南側でＳＩ４と重複しており，検出状況から本遺構の方が新しい。また，遺構西側は試掘トレンチにより削平されている。本遺構は，床面を中心に炭化材や焼土塊が確認できたことから，火災を受けた可能性が高い。その炭化材の分布状況は図17に示した。炭化材は遺構の中央付近で比較的多く確認できた。柱状のものや板状のものが認められるが，上屋構造の詳細な部位までは復元できない。これら炭化材の出土状況は，床面より浮いた状態であるものが多い。また，床面が被熱酸化した範囲も数カ所確認されている。

遺構内堆積土は，色調および混入物から４層に分層できた。ℓ１は炭化物を少量含む黒褐色土で，その様相から自然堆積土と判断した。ℓ２は，炭化物や焼土粒を多量に含むにぶい黄褐色砂質土であり，人為堆積土と判断した。焼失時に堆積したものと推測される。ℓ３はＬⅢに相当する褐色砂質土で壁際からの流入土である。ℓ４は，その様相から貼床構築土と判断した。

遺構の平面形は，西側が削平されているため全体形は不明であるが，遺存する部分から判断すると方形基調を呈し，東壁は4.10ｍを測り，北壁1.65ｍ，南壁3.85ｍが残存している。カマドの向きを基準とした主軸方位は，真北から12°東を指す。検出面から床面までの深さは，南壁で12㎝，北壁で８㎝を測る。床面は，北部でＬⅢを床面とする他は，貼床を施しほぼ平坦につくられており，全体的に硬く踏み締められている。周壁は緩やかに立ち上がる。

本住居内の内部施設として，カマド・小穴を確認した。カマドは，北東隅から約125cm離れた北壁に付設されていた。煙道部は消失しており，燃焼部が遺存している。また，袖部は崩れているものの両袖とも残存する。堆積土は6層に分層できた。ℓ1・2は廃絶土，ℓ3は燃焼部天井崩落土，ℓ4・5は燃焼部にまとまって堆積した焼土塊を主体とする層，ℓ6はカマド構築土と判断した。

カマドの遺存規模は，燃焼部の奥行き85cm，最大幅62cmを測り，その底面は煙道部に向かって緩やかに立ち上がり，奥壁付近は特に強く被熱を受けている。遺存状態は良好で，燃焼部中央部には，円柱状の礫を材とした支脚（18図17）が直立した状態で遺存し，上面および焼土層からは土師器杯や甕の破片が出土している。袖部の内側は被熱によって，厚さ2～5cmの酸化壁を形成している。加えて，燃焼部前部の底面にかけて熱を受け酸化していることから，頻度の高い使用が想定される。

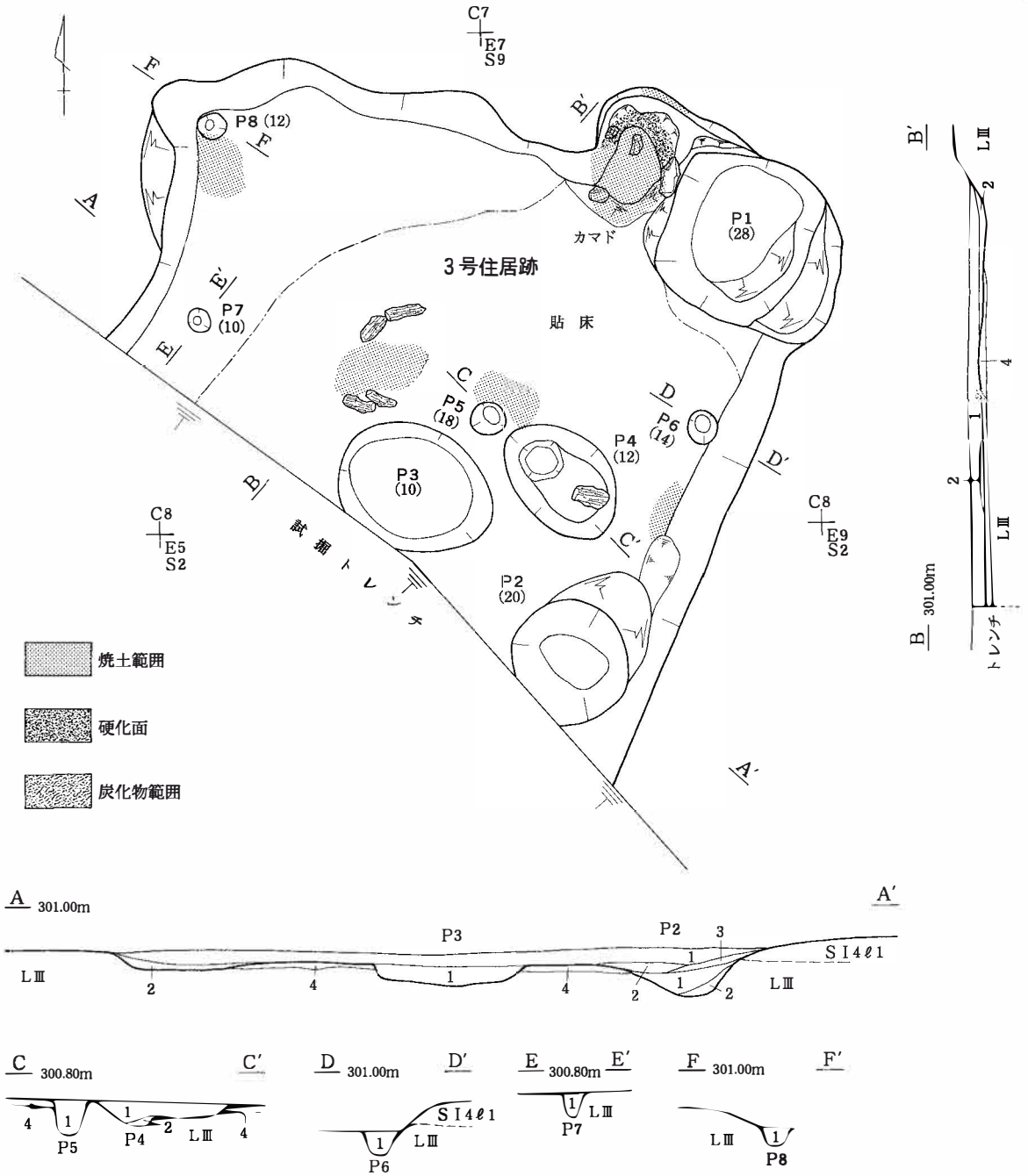
小穴は8基検出した。P1は東壁に付設されたカマドの南脇に隣接して検出された。平面形は径100×85cm程の隅丸方形状を呈し，深さは床面から28cmを測る。P1内からは多量の土師器・須恵器が出土し，カマドに接するような位置や，規模が他の小穴と比べて大きいことから，貯蔵穴の用途が想定される。P2～P4は住居内南西付近に，近接する形で検出された。いずれも形状は楕円形状を呈し，P2は径94×74cm，深さ16cm，P3は径98×74cm，深さ14cm，P4は径82×56cm，深さ14cmを測る。これらの小穴は用途・機能不明であるが，形態が浅い皿状を呈することから，土器などを置くスペースと考えておきたい。

P5～P8は，平面形が円形・楕円形を呈し，断面形がU字状になる小型のピットである。規模は，直径や長径が16～22cm，深さ10～18cmを計測した。これらの小穴は，形状・規模から考えて，柱穴であると思われる。

遺　　物（図17・18，写真22）

本住居跡からは，土師器片238点，須恵器片5点，石製品1点が出土している。土師器片は大半が甕で，杯は非常に少ない。また，筒型土器が59点出土しており，その大半はカマド付近やP1内から出土している。このうち土師器23点（筒型土器2点含む），須恵器4点，石製品1点を図示した。土師器甕と筒形土器は，今回図示した遺物と同一個体とみられる破片が大半である。また，本住居内からは赤褐色硬質の土器片も出土している。従来「赤焼土器・須恵系土器」等の名称が用いられているものであるが，細片では種別が困難であるため，土師器片として計上している。これらの遺物の層位別出土点数は，住居内堆積土ℓ1（161点），床面（16点），カマドℓ1（16点），カマド底面（1点），P1ℓ1（19点），P1ℓ2（2点），P1ℓ3（8点），P2ℓ1（19点）である。このように，覆土中からの出土量が最も多いが，床面や住居内施設からの出土遺物も多く，良好な情報を得ることができた。以下，順次遺物の特徴について概説する。

17図1～11はロクロ成形の土師器杯である。1・2・4は高台付杯で，1は赤褐色硬質の土器で，杯部は内湾しながら立ち上がる椀形を呈し，口縁部に至り若干外反する。内外面はロクロナデ調整が施される。2は土師器で1と同様，杯部は内湾しながら立ち上がる椀形を呈し，口縁部が若干外



3号住居跡堆積土

1　黒褐色土　10YR3/2（炭化物粒少量）
2　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3（黒褐色土粒少量，炭化物粒・焼土粒多量）
3　褐色砂質土　10YR4/4（にぶい黄褐色土少量）
4　にぶい黄褐色土　10YR4/3（黒褐色土・褐色土塊多量）

P2堆積土

1　灰黄褐色土　10YR4/2（黒色土粒多量，炭化物粒少量）
2　褐色土　10YR4/4（黒色土・灰黄褐色土粒多量）

P3堆積土

1　褐色砂質土　7.5YR4/3（黒褐色土多量，炭化物粒多量）

P4堆積土

1　灰黄褐色土　10YR4/2（黒色土粒多量，焼土粒少量，炭化物粒多量）
2　褐色土　10YR4/4（黒褐色土粒多量，炭化物粒多量）

P5堆積土

1　灰黄褐色土　10YR4/2（黒褐色土粒多量）

P6堆積土

1　褐色砂質土　10YR4/4（黒褐色土多量，炭化物粒多量）

P7堆積土

1　灰黄褐色土　10YR4/2（黒色土粒多量，焼土粒少量，炭化物粒多量）

P8堆積土

1　灰黄褐色土　10YR4/2（黒褐色土多量，焼土・炭化物粒少量）

0　2m
(1/40)

図16　３号住居跡

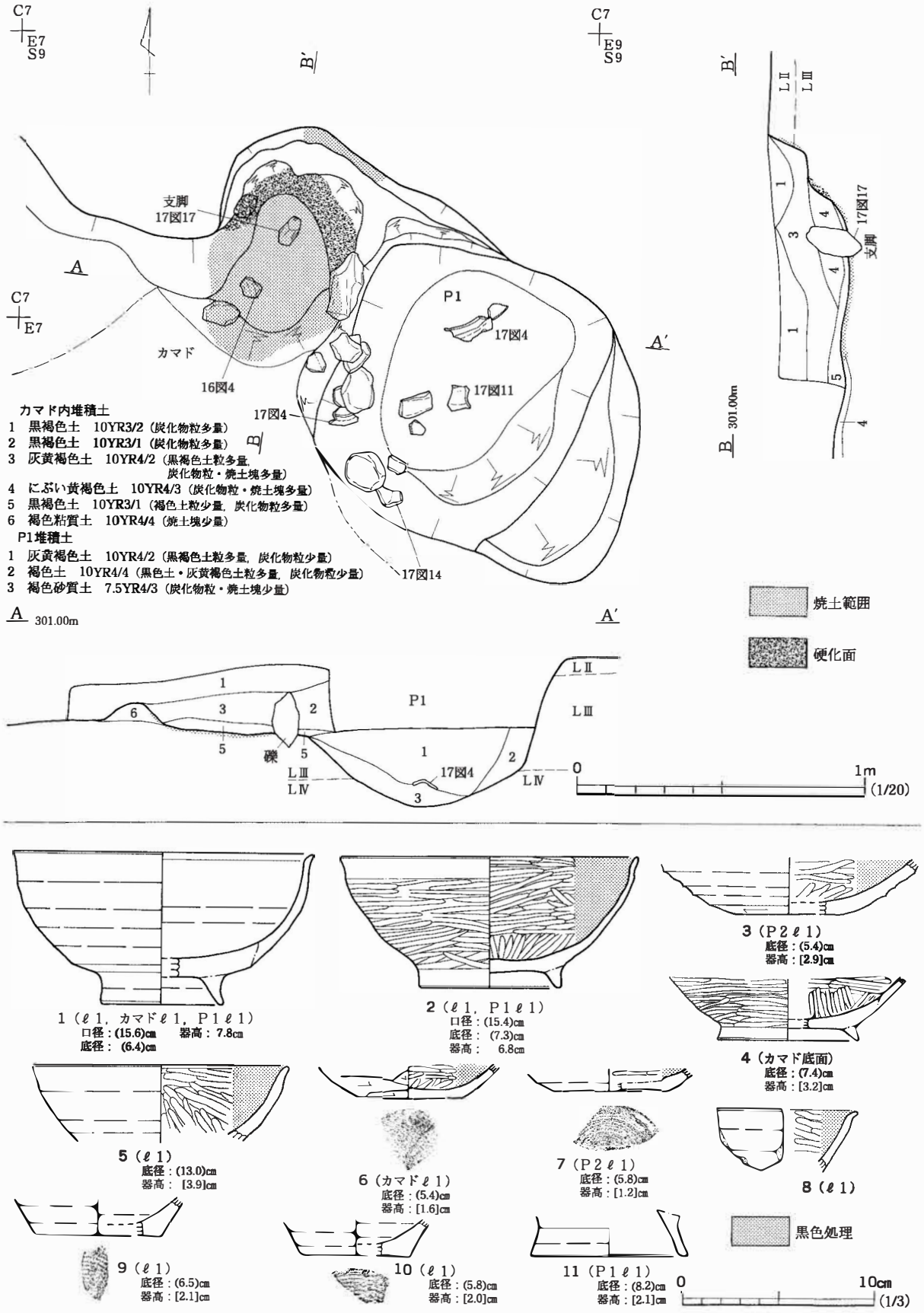


図17　３号住居跡カマド，Ｐ１，出土遺物（１）

反する。外面はロクロナデ調整の後，口縁部直下からミガキを施している。内面にはヘラミガキの後黒色処理が施され，底部内面のヘラミガキは放射状に施されている。４は高台付杯の底部資料である。外面はロクロナデ調整の後，ミガキを施してあり，内面にはヘラミガキの後，黒色処理が施された痕跡が観察できるが，二次的な被熱のため，黒色処理が失われている。３・６・７は底部資料である。いずれも内面にはヘラミガキの後，黒色処理が施されている。３では体部下端に回転ヘラケズリを施している。また，底部外面の一部にも回転ヘラケズリが施されている可能性もあるが，摩滅のため断定できない。６は体部下端～底部にかけて手持ちヘラケズリが施されているため，切り離し技法は不明である。７の底部外面には，回転糸切り痕が認められる。５・８は口縁部付近の資料である。ともに口縁部に至り外反する器形である。いずれも内面にはヘラミガキの後，黒色処理が施されている。９・10は底部の破片である。赤褐色硬質の杯片と思われ，内外面ともロクロ調整を施している。底部切り離しは回転糸切りであり，10の底部周縁には切り離し時の粘土ムラが認められる。11は高台付杯の高台で，内外面ともに丁寧なロクロナデが認められ，焼成は極めて良好である。

18図１～10は土師器甕で，１～４は口縁部から胴部下半にかけての資料である。１～３は非ロクロ整形のもので，いずれも口縁部が「く」の字形に外反する。１は胴部上半が若干膨らむ器形で，口縁部はナデ，胴部外面はヘラナデが施され，口縁と胴部の境にはオサエ痕が認められる。２は小型の甕で口縁部はナデ，胴部外面はヘラケズリが施される。３も小型の甕で，外面にはナデやオサエ痕が認められる。いずれも内面には横位の強いヘラナデの痕跡が観察できる。また，胎土には粗砂を含み全体的に脆い。４はＰ１内で破片が散在していたが，底部付近を除いてほぼ接合できた。ロクロ整形で，口縁端部は上につまみ上げられ，胴部下半の外面に縦方向のヘラケズリ，内面に横方向のナデが施されている。また，内外面にはロクロナデに消され切らずに残った粘土紐の積み上げ痕が観察される。５～７は底部付近の資料である。５は非ロクロ整形であり，底部外面にはオサエ痕が明瞭に観察できる。６・７は整形方向は判別できなかった。いずれも外面にはヘラケズリ，内面には横位の強いヘラナデの痕跡が観察できる。８～10は口縁部資料として掲載した。８・９はロクロ整形で，口縁部は外反した後に端部を上につまみ上げている。８の口縁端部の内面には，つまみ上げた際に生じた稜線が明瞭に残る。10は非ロクロ整形で，口縁部が「く」の字形に外反する。

18図11・12は筒形土器である。いずれもほぼ直立する器形であるが，12は口縁部に至り若干外反する。内外面には粘土紐積み上げ痕を残し，オサエ痕も観察できるが，内外面ともにヘラナデで仕上げられている。厚手で，胎土には細砂を含む。焼成は比較的良い。

18図13～16は須恵器の資料である。13は甕の底部と判断した。外面の胴部下端～底部にかけて回転ヘラケズリが，内面には縦方向主体の丁寧なナデが施されている。14は長頸瓶の底部であろうか。高台部の断面形は，比較的整った台形を呈する。15・16は長頸瓶の胴部と思われ，内外面ともにロクロナデ痕が明瞭に観察できる。

18図17はカマド支脚である。燃焼部の中央で直立した状態で出土した。いびつな円柱状で，表面

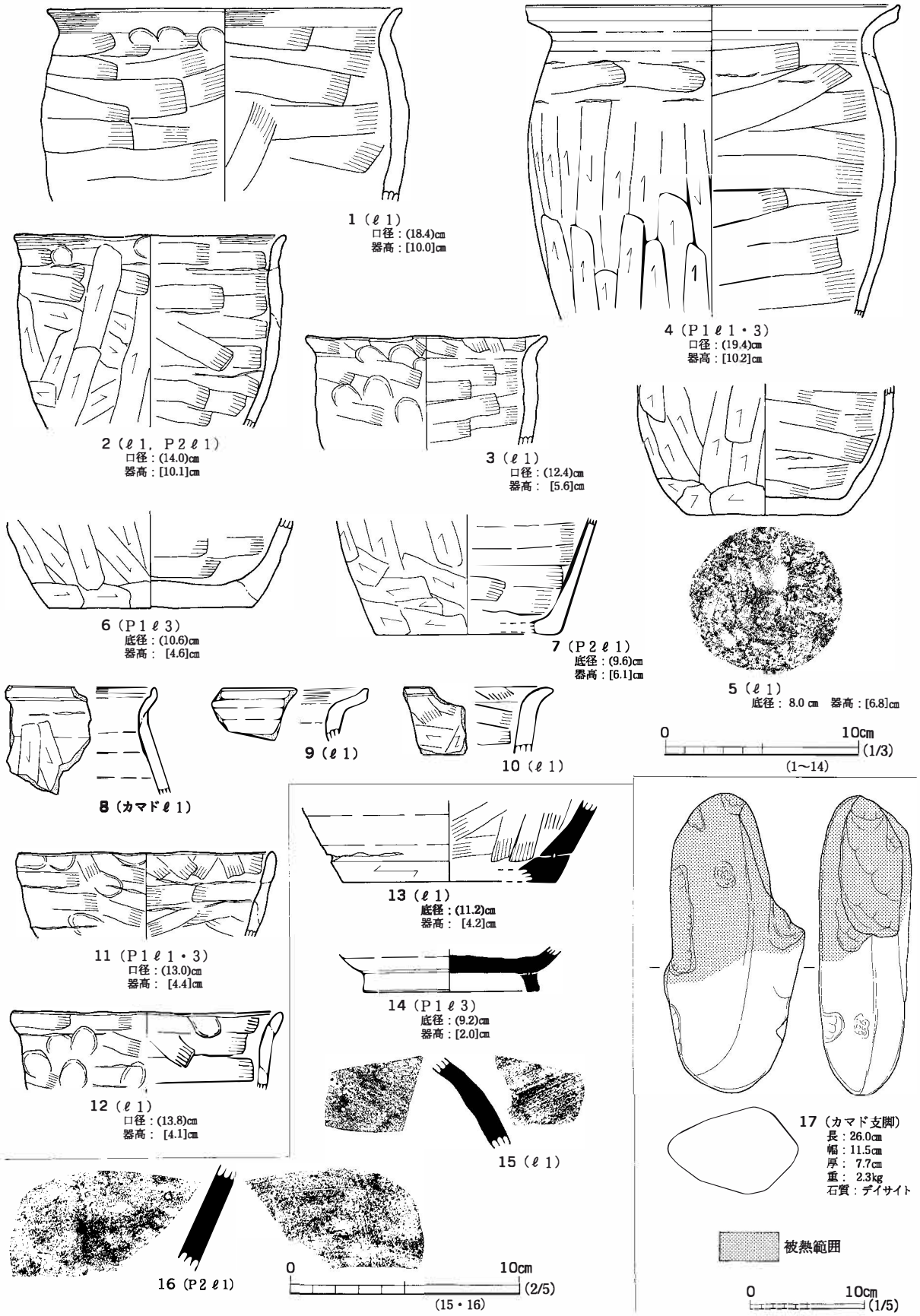


図18　３号住居跡出土遺物（２）

が焼けて劣化しており，頻度の高い使用が窺える。

ま　と　め

本遺構は，本遺跡内で最も標高の高い場所に位置し，一辺４m前後となる方形基調の中型の住居跡と思われる。炭化材が床面から出土しており，火災住居である可能性が高い。堆積土中および住居内施設からは多くの遺物が出土し，良好な情報が得られた。所属時期は，出土した土器類の年代観から９世紀末葉～10世紀前葉と推定され，今回検出した住居跡のなかで最も新しい年代を示している。

４号住居跡　ＳＩ４

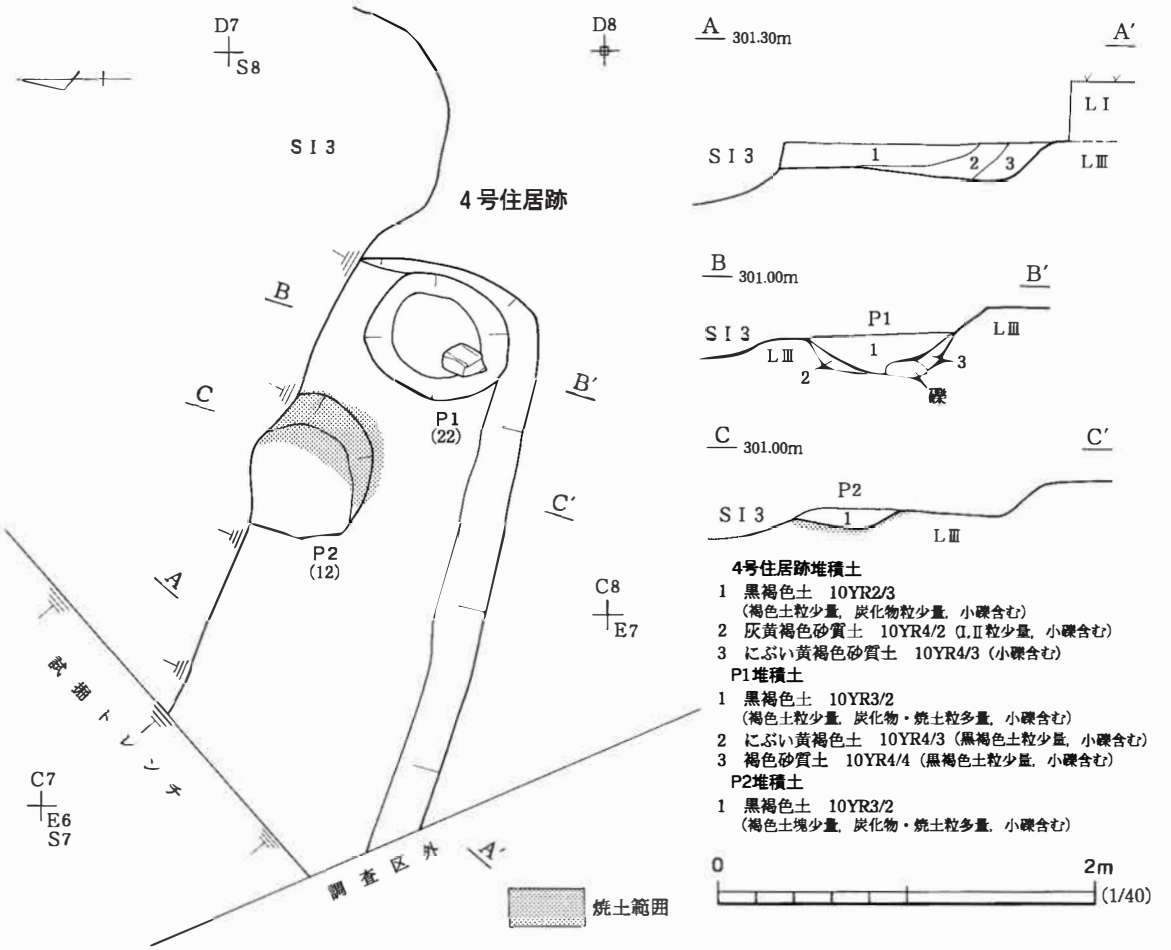
遺　　構（図19，写真11・12）

本住居跡は調査区西側のＥ６グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高300.9m程の北向き緩斜面である。検出面はＬⅢ上面であるが，周囲は削平を受けてＬⅡが欠層しているため，本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。遺構北側でＳＩ３と重複しており，検出状況から本遺構の方が古く，遺構北半は削平されている。また，遺構西側は試掘トレンチにより削平されている。

遺構内堆積土は，色調および混入物から３層に分層できた。ℓ１は褐色土粒と炭化物を少量含む締まりのない黒褐色土で，その様相から人為堆積と判断した。ℓ２はＬⅡに相当する黒色土粒を含む灰黄褐色砂質土である。ℓ３はにぶい黄褐色砂質土の均質層で，その様相から，ℓ２・３はともに自然堆積であると判断した。

遺構の平面形は，西側が削平され，北半部分は３号住居跡に掘り込まれているため全体形は不明であるが，遺存する部分から判断すると方形基調を呈し，東壁は1.05m，南壁は2.88mが残存している。床面はＬⅢを掘り込んで構築され，ほぼ平坦であり，踏み締まりは認められなかった。検出面からの深さは最大20cmを測り，北へ向かうにつれて浅くなる。周壁は，南壁と東壁の一部が残り，遺存状態の比較的良好な南壁は，緩やかに立ち上がる。

本住居内の内部施設として，２基の小穴を確認した。Ｐ１は，住居内の南東隅で検出された。平面形は，径76×62cm程の楕円形状を呈し，深さは床面から22cmを測る。堆積土のℓ１には，多量の炭化物や焼土粒に混じって，土師器片が相当数出土しており，人為堆積の様相を呈す。住居内の隅に位置し，規模が比較的大きいことから，貯蔵穴等の用途が想定される。Ｐ２は住居内の中央付近で検出された。北側が削平されているため全体形は不明であるが，円形基調を呈していたと推測され，径76×64cm程が残存する。深さは床面から最大10cmを測るが，西側では床面との高低差はほとんど認められない。また，東側では被熱の痕跡が認められ，堆積土ℓ１からは，焼土に混じって土師器片が相当数出土している。Ｐ１と比べても深さがほとんどなく，被熱の痕跡があるため貯蔵穴とは考えにくく，その用途・機能については不明である。



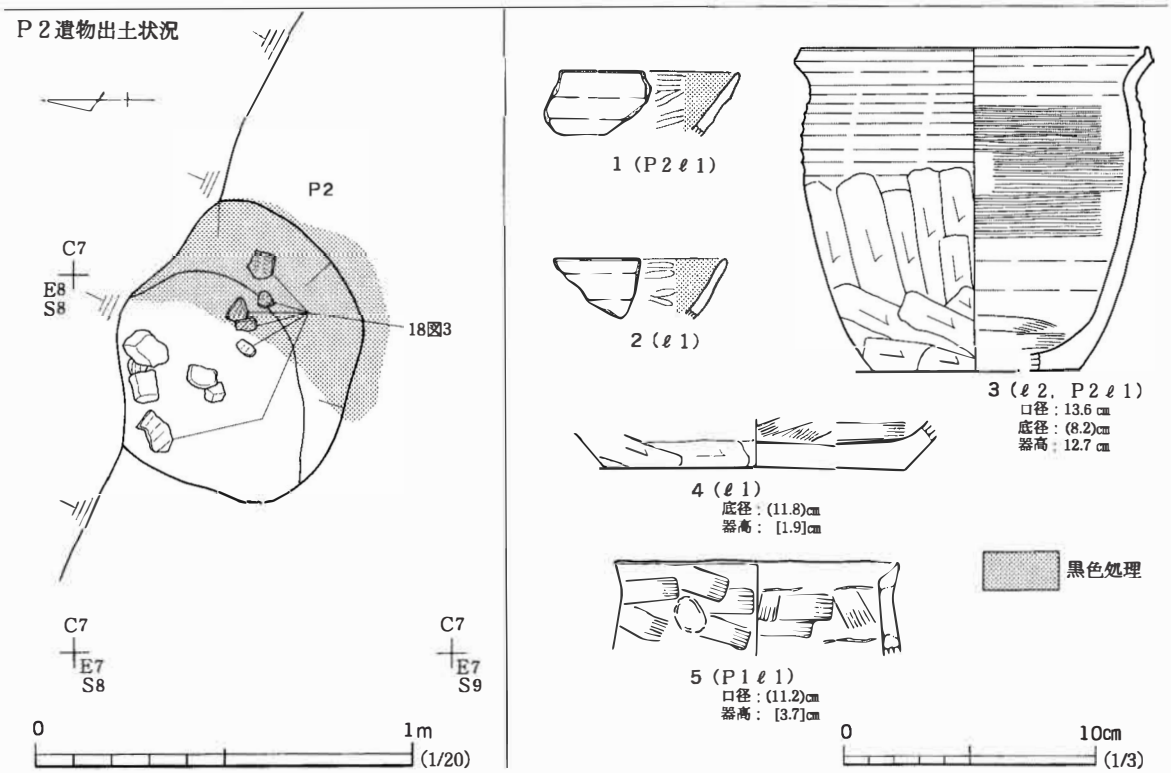


図19　４号住居跡，Ｐ２，出土遺物

遺　　物（図19，写真23）

本住居跡からは，土師器片48点が出土している。須恵器片は出土しなかった。土師器片は大半が甕で，杯は少ない。また，筒型土器が７点出土しており，その全てはＰ１内から出土している。このうち５点を図示した。土師器甕と筒形土器は，今回図示した遺物と同一個体とみられる破片が大半である。これらの遺物の層位別出土点数は，住居内堆積土ℓ１（15点），同ℓ２（４点），Ｐ１ℓ１（18点），Ｐ２ℓ１（11点）である。このように，覆土中よりも住居内施設からの出土遺物が多く，比較的良好な情報を得ることができた。以下，順次遺物の特徴について概説する。

19図１・２はロクロ成形の土師器杯である。いずれも口縁部資料で，内面にはヘラミガキの後，黒色処理が施されている。同図３はロクロ整形の土師器甕である。口縁部は，外反した後，端部が上につまみ上げられている。体部下半にはヘラケズリが施されている。ヘラケズリは器面に残る砂粒の痕跡から，底部側に向かって施されているのがわかる。また，体部内面には横位のカキメが施されている。同図４は土師器甕の底部資料である。体部外面にはヘラケズリ，内面にはヘラナデの痕跡が観察できる。

同図５は筒型土器である。ほぼ直立する器形で，内面には粘土紐積み上げ痕を残し，内外面ともにヘラナデで仕上げられている。厚手で，胎土には細砂を含む。焼成は比較的良い。

ま　と　め

遺存状態の悪い住居跡である。残存部分の形状から，方形基調を呈していたと推測される。カマド等の住居内施設は，重複するＳＩ３によって削平され得られた情報は少ないが，出土遺物の特徴から９世紀中葉～後葉の所産と推測される。

５号住居跡　ＳＩ５

遺　　構（図20，写真13・14）

本住居跡は調査区中央付近北側の▶６・７グリッドに位置し，試掘調査時に確認していた遺構である。遺構が確認された周辺は，標高300.4～300.6m程の北向き緩斜面である。検出面はＬⅢ上面であるが，試掘トレンチにより上部が消失しているため，本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。遺構北側で，遺構南側でＳ▶１と重複しており，検出状況からともに本遺構の方が古く，遺構北東側はＳＩ２の掘り込みによって削平されている。

遺構内堆積土は暗褐色土の１層で，基本土層のＬⅢに相当するにぶい黄褐色土が少量含んでいる。しかし，堆積土が薄いため，人為堆積か自然堆積かは判断できなかった。

遺構の平面形は，北半が削平され西側が調査区外へ延びているため全体形は不明であるが，試掘調査時に検出した形状や，遺存する部分から判断すると方形基調を呈し，南東壁は3.20m，南西壁は3.80mが残存している。床面は，ＬⅢを掘り込んで構築され，ほぼ平坦であり，踏み締まりは認められなかった。周壁の状況は，検出面がほとんど床面直上で残存しないため不明である。

本住居内の内部施設として，４基の小穴を確認した。Ｐ１～Ｐ４は，平面形が円形・楕円形を呈

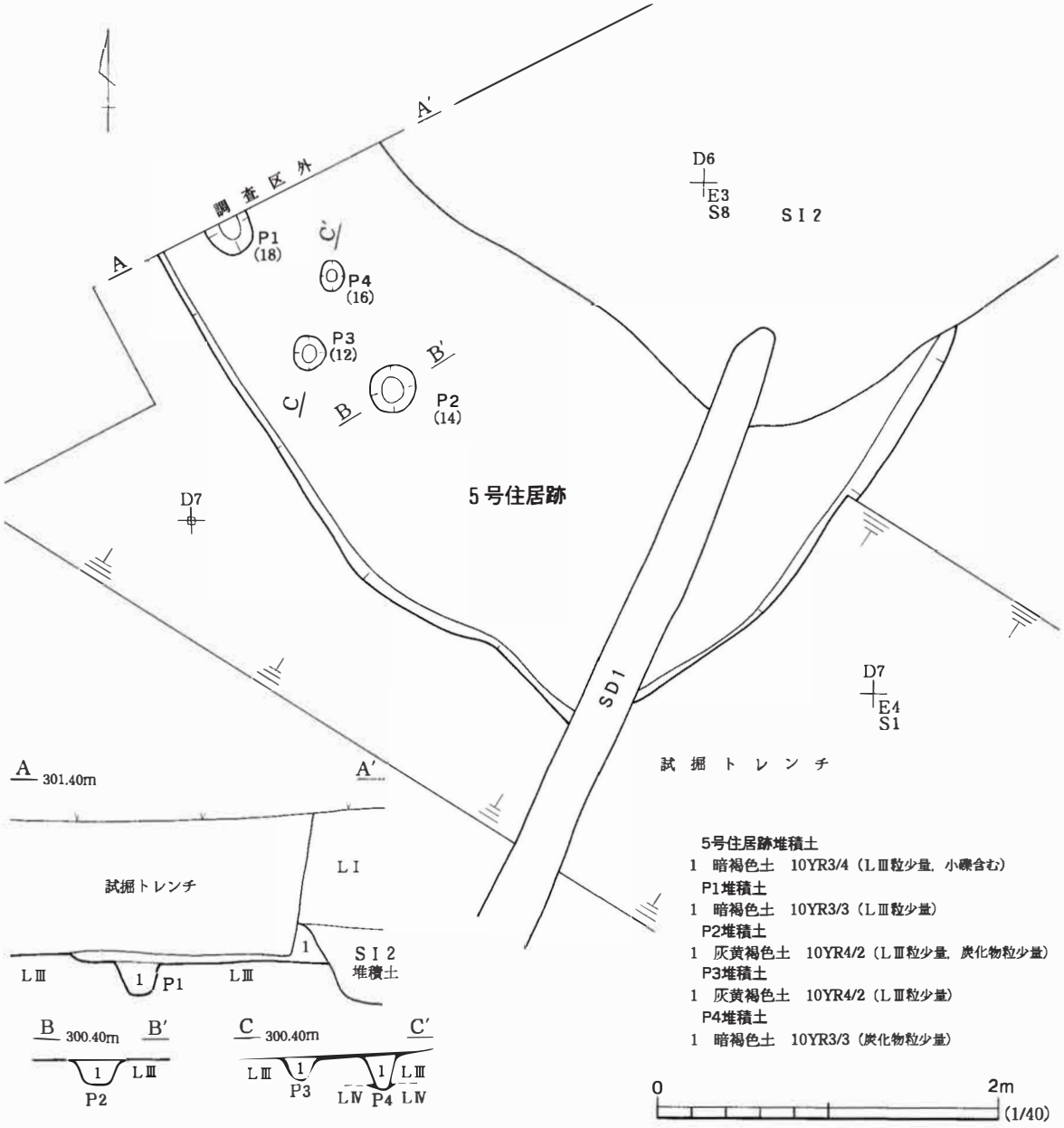


図20　５号住居跡

し，断面形がＵ字状になる小型のピットである。規模は，直径や長径が16～28㎝，深さ12～18㎝を計測した。これらのピットは，形状・規模から考えて，柱穴であると思われる。

ま　と　め

本住居跡は，試掘調査時で既に確認されていた。残存部分の形状から，方形基調を呈していたと推測されるが，遺存状態は悪い。重複する２号住居跡とは軸を共有しないことから互いの関連性は見いだせない。出土遺物も認められないため所属時期は不明であるが，周辺遺構の様相や重複関係から，概ね古代に属する可能性が高い。

第３節　土　　坑

今回の調査で検出された土坑は３基である。これらの土坑は，調査区中央のやや東寄り付近に集中して認められた。重複するものは殆どなかったが，今回の調査区で検出できた土坑は，竪穴住居跡に比較的近接していることから，生活域を構成する一連の遺構群と考えられる。出土遺物の特徴から古代の所産であるが，性格等については不明なものが多い。

１号土坑　ＳＫ１（図21，写真15）

本遺構は調査区中央やや北寄りの▶６グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高300.4ｍ程の北向き緩斜面である。検出面はＬⅡ中面である。重複する遺構はないが，近接してＳＩ２やＳＫ２等が存在する。遺構内堆積土は，色調および混入物から２層に分層できた。ともに礫を多く含み，ℓ１は暗褐色土で，ＬⅡに相当する黒色土粒を少量含んでいるが，自然堆積と判断した。ℓ２は壁際からの流入土である。

遺構の平面形は，楕円形状を呈し，その規模は長軸1.25ｍ，短軸1.05ｍを測る。周壁は，南西側は比較的急な立ち上がりとなるが，他は底面から段状に緩やかな立ち上りとなる。底面は中央付近が若干窪み，検出面から最深部までの深さは25㎝を測る。

遺物は，堆積土中から縄文土器１点，土師器20点が出土している。すべて細片であるため図示できなかったが，縄文土器片は多条沈線が認められ，周辺出土遺物との関連から綱取Ⅱ式の可能性がある。また，土師器片は判別できるものとして，杯７点，甕３点が確認できる。土師器杯は，いずれもロクロ成形で，ほとんどは内面に黒色処理とヘラミガキを施しているものである。

本遺構は，出土した遺物の特徴から平安時代に帰属するものと判断される。しかしながら，その用途・機能については不明である。

２号土坑　ＳＫ２（図21，写真16）

本遺構は調査区中央やや東寄りのＥ６グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高300.5ｍ程の北向き緩斜面である。検出面はＬⅡ中面である。重複する遺構はないが，近接してＳＫ１やＳＫ３等が存在する。遺構内堆積土は，炭化物粒を少量含む黒褐色土１層であるが，人為堆積か自然堆積かは判断できなかった。

遺構の平面形は，楕円形状を呈し，その規模は長軸2.56ｍ，短軸1.94ｍを測る。周壁は，全体的に緩やかな立ち上りとなる。底面はほぼ平坦であり，検出面から最深部までの深さは17㎝を測る。

遺物は，縄文土器４点，土師器７点が出土している。すべて細片であるため図示できなかったが，土師器片は杯２点，甕４点が判別できる。杯はいずれもロクロ成形で，ほとんどは内面に黒色処理とヘラミガキを施しているものである。甕はすべて体部資料であり，外面にはヘラケズリ調整を施

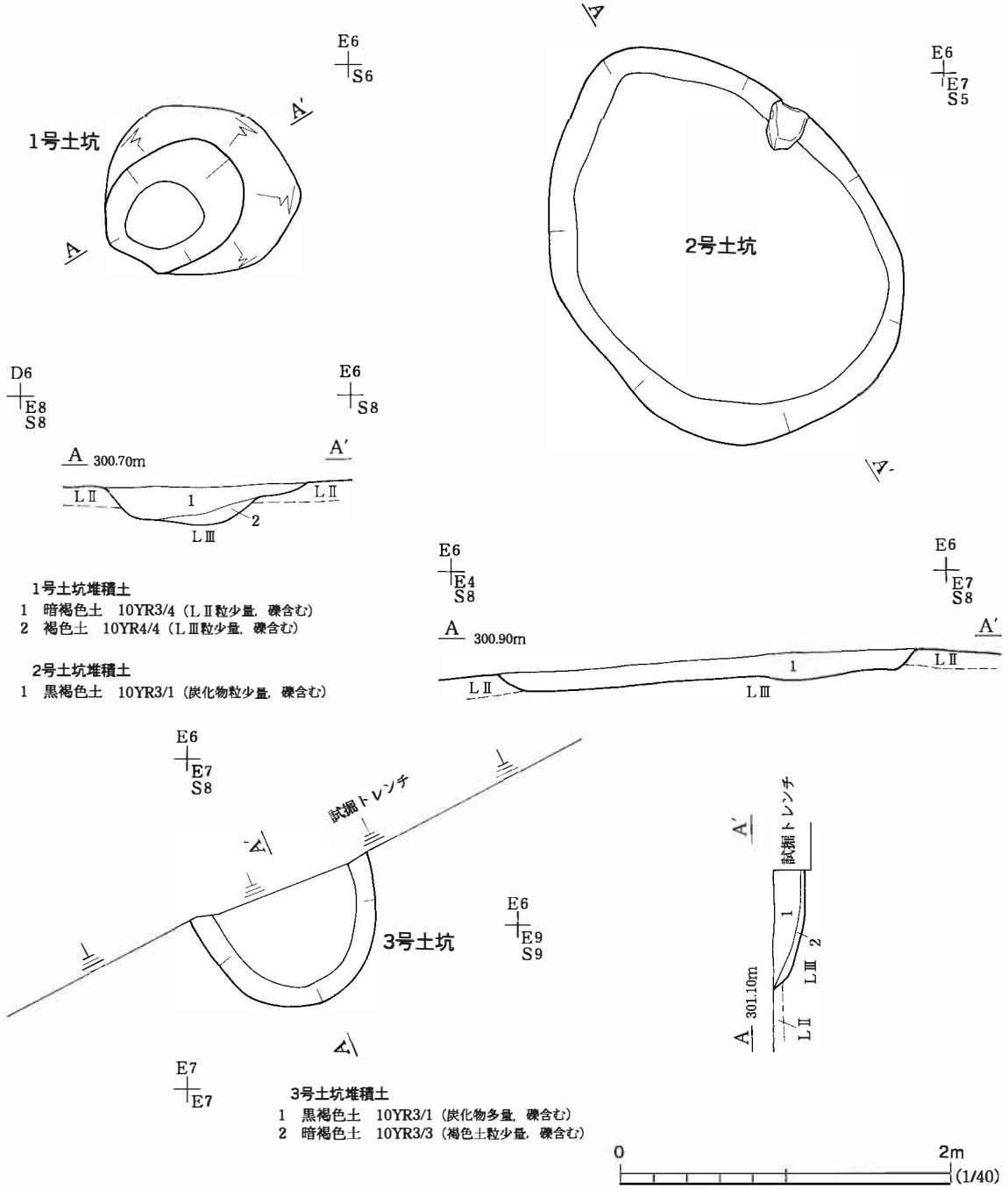


図21　１～３号土坑

すものも認められる。

本遺構は，出土した遺物の特徴から平安時代に帰属するものと判断される。しかしながら，その用途・機能については不明である。

３号土坑　ＳＫ３（図21，写真16）

本遺構は調査区中央やや東寄りのＥ６グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高300.8m程の北向き緩斜面である。検出面はＬⅡ中面である。重複する遺構はないが，近接してＳＩ1や

ＳＫ２等が存在する。

遺構内堆積土は，色調および混入物から２層に分層できた。ともに礫を多く含み，ℓ１は黒褐色土で，炭化物を多量含んでおり，人為堆積の様相を示す。ℓ２は壁際からの流入土である。

遺構の平面形は円形状を呈するが，北半は試掘トレンチに削平されているため不明である。遺存している形状は，開口部径1.12mを測る。周壁は，全体的に緩やかな立ち上がりとなる。底面はほぼ平坦で，検出面から最深部までの深さは20cmを測る。

遺物は，土師器７点が出土している。すべて細片であるため図示できなかったが，杯１点，甕５点が判別できる。杯はロクロ成形で，内面に黒色処理とヘラミガキを施しているものである。甕は体部片４点，底部片１点であり，体部外面にはヘラケズリ調整を施すもの（２点），ロクロ痕を残すもの（２点）が認められる。

本遺構は，出土した遺物の特徴から平安時代に帰属するものと判断される。しかしながら，その用途・機能については不明である。

第４節　溝　　跡

今回の調査で検出された溝跡は１条である。調査区中央付近に位置し，ＬⅢ上面で検出された。時期は出土遺物がなく，明確な所属時期及び性格等は特定できない。

１号溝跡　ＳＤ１（図22，写真17）

本遺構は，調査区中央付近やや北寄りのＤ６・７グリッドに位置し，試掘調査時に既に確認していた遺構である。遺構が確認された周辺は，標高300.9～300.5m程の北向き緩斜面である。検出面はＬⅢ上面であるが，試掘トレンチの壁面からＬⅠ直下での掘り込みが認められた。

Ｄ６グリッドで２号住居跡および５号住

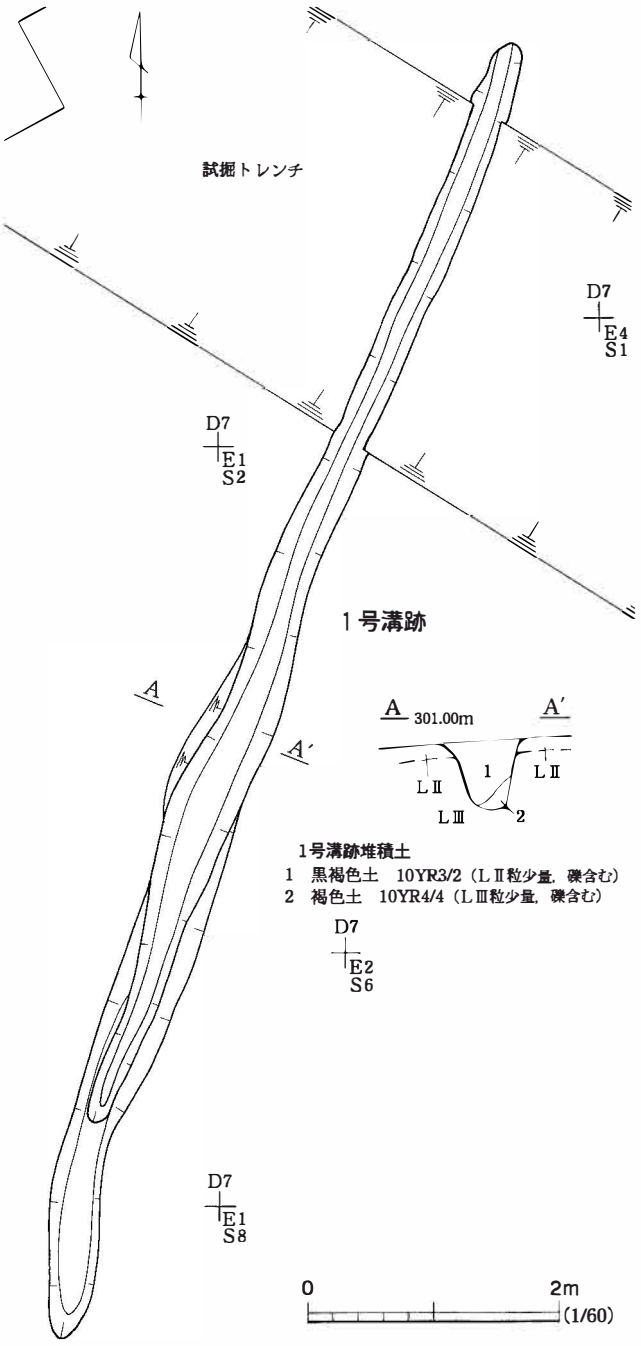


図22　１号溝跡

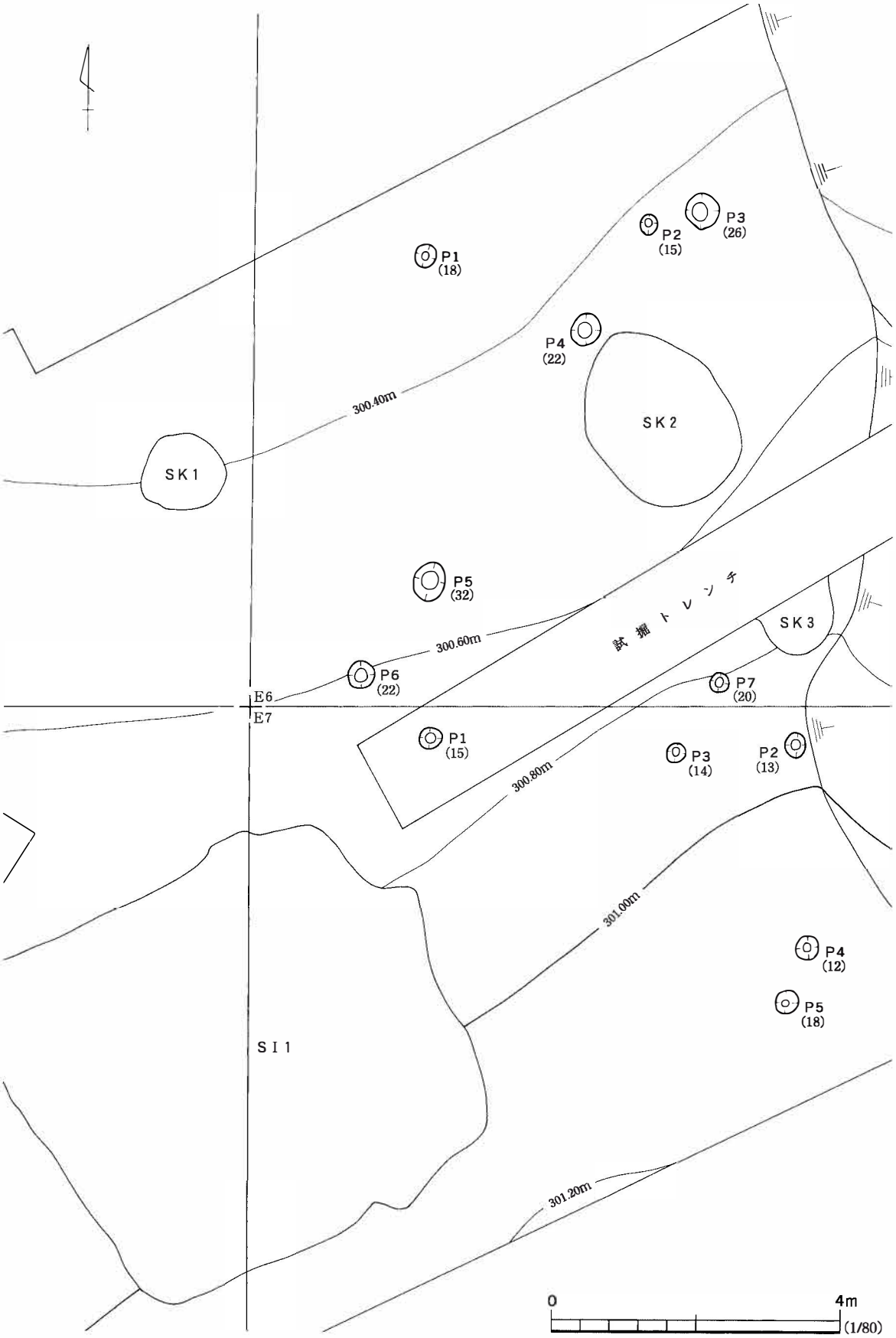

P1
(18)
P2
(15)
P3
(26)
P4
(22)
SK2
300.40m
SK1
P5
(32)
試掘トレンチ
SK3
300.60m
P6
(22)
P7
(20)
E6
E7
P1
(15)
P3
(14)
P2
(13)
300.80m
301.00m
P4
(12)
P5
(18)
SI1
301.20m
0
4m
(1/80)

図23　小穴

居跡と重複関係にあり，検出状況から本遺構の方が新しい。

遺構内堆積土は２層に分層できた。ℓ１は砂礫を含む黒褐色土の単一層で，自然堆積の様相を呈する。ℓ２は壁際からの流入土である。検出した規模は，南北約10.85m，溝幅0.28～0.58mを測り，等高線に直交する形で南北方向にほぼ直線的に延びる。

周壁は急峻に立ち上がり，断面形は中央がやや窪む形状となる。検出面からの深さは15～55cmを測り，底面標高は北側へ向かうほど低くなる。南北端での高底差は25cm前後である。溝跡底面および周辺からはピット等は検出されなかった。

遺物は，土師器片が８点出土した。ともにℓ１からの出土で周囲から流入したものと考えられる。小破片で摩耗が著しいため，器種・部位については判断できなかった。

本溝跡は，全長10.85mの東西方向に延びる溝跡である。周辺には，平安時代の竪穴住居跡を主体とした遺構が存在する。所属時期・性格については，本遺構と明確に伴出する遺物がなく判断し得ないが，排水的な機能が推察され，検出面や重複関係から平安時代以降の所産であるが，詳細な時期は不明である。

第５節　その他遺構と遺構外出土遺物

小穴群　ＧＰ（図23）

本調査区では，小穴が12基確認された。これらの小穴は，その形態的な特徴から，柱穴である可能性が高い。しかし，これらの小穴の配置にはとくに規則性が認められないため，建物を構成するのかについては，調査時には判断できなかった。そこでこれらの柱穴を小穴群と称し，説明を加えることにする。なお，小穴の表記については，グリッドごとに通し番号を付した。グリッドはＧ，小穴はＰと略記している。

これらの小穴の検出面は，全てＬⅢ上面である。分布状況をみると，調査区中央付近やや東寄りのＥ６・７グリッド付近に集中している。この位置は北に面した緩斜面で標高は300.3～301.1m付近である。この小穴群の分布する範囲には，平安時代に属する１～３号土坑が位置する。これらの小穴の平面形は，いずれも円形または楕円形を基調とする。各小穴の規模や深さに関しては，表１に示した。堆積土は黒褐・黒色土１層のものが大半を占める。いずれの小穴からも遺物の出土はな

表１　小穴一覧

グリッド	番号	平面形	長軸	短軸	深さ	層数	柱痕	備　考
Ｅ６	Ｐ１	円形	32	32	18	1	無	
	Ｐ２	楕円形	28	22	15	1	無	
	Ｐ３	円形	42	42	26	2	無	
	Ｐ４	円形	44	44	22	2	無	
	Ｐ５	楕円形	50	46	32	2	無	
	Ｐ６	円形	38	38	22	1	無	
	Ｐ７	楕円形	28	23	20	1	無	
Ｅ７	Ｐ１	円形	30	30	15	1	無	
	Ｐ２	楕円形	30	24	18	1	無	
Ｅ７	Ｐ３	楕円形	32	25	14	1	無	
	Ｐ４	円形	32	32	12	1	無	
	Ｐ５	円形	33	33	18	1	無	

凡　例

長軸・短軸・深さ…単位はcm。

遺構の重複・撹乱等により計測が不可能な部分については記載しなかった。

備考…重複遺構の新旧関係等について記した。

＞は小穴よりも重複する遺構が古く，＜は重複する遺構が新しい。

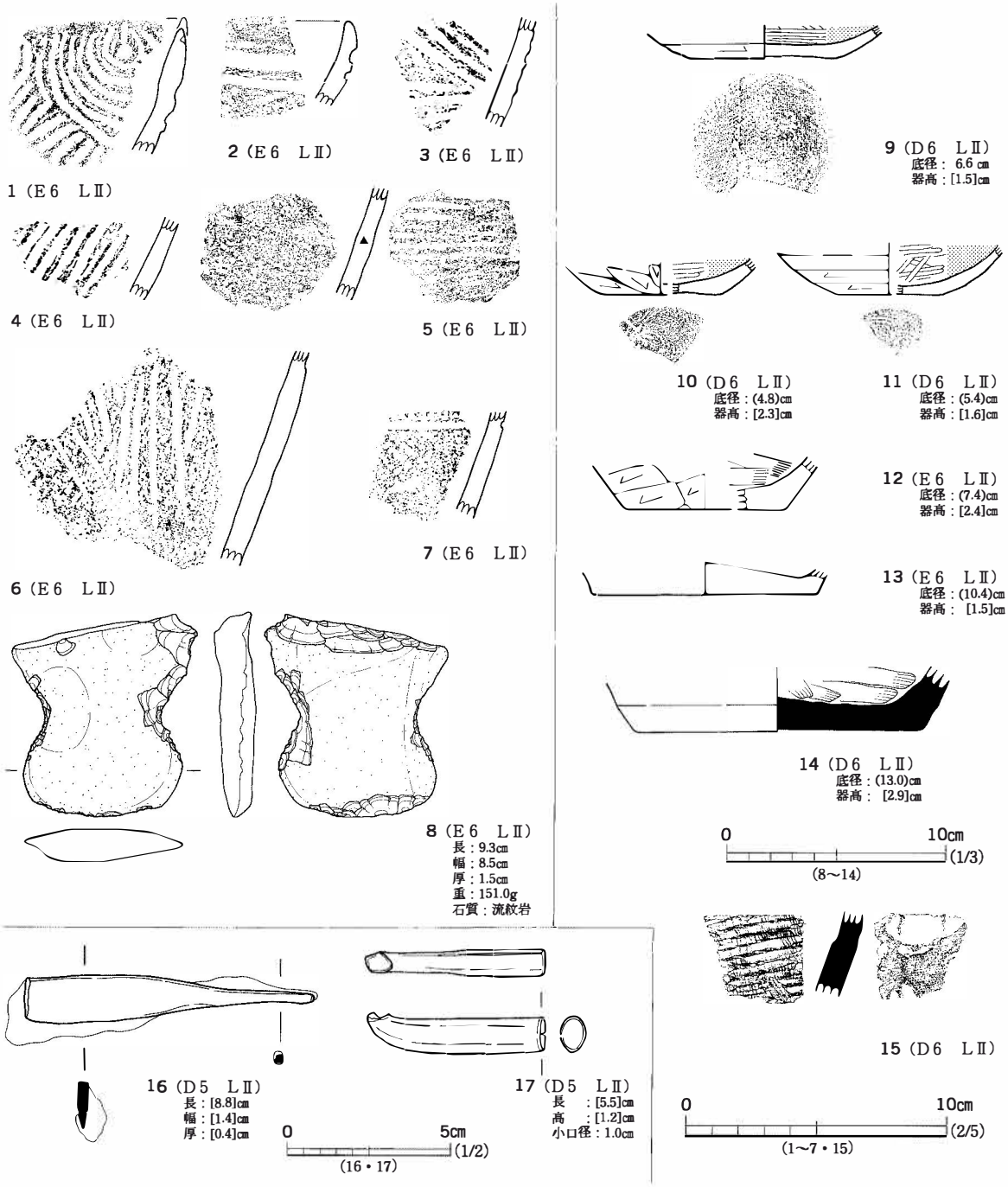


図24　遺構外出土遺物

く，時期は不明である。

遺構外出土遺物　（図24，写真24）

今回の調査では，遺構外から総数237点の遺物が出土した。その内訳は表2に示した。土師器が202点と最も多く，他は縄文土器25点，石器片4点，須恵器片5点，陶磁器1点，鉄製品2点が出土している。これらの遺物の内，比較的遺存状態の良いものを図23に図示した。遺物は相対的にみると，調査区中央付近からは多く出土する傾向が認められる。これは遺構の分布を見ても分かるように，調査区中央付近では平安時代の住居跡等の遺構の分布が窺え，遺構内出土遺物と同様な傾向

表２　遺構外出土遺物点数一覧

出土位置	出土層位	縄文土器	石器	土師器	須恵器	陶磁器	備　考	出土位置	出土層位	縄文土器	石器	土師器	須恵器	陶磁器	備　考
Ｃ７	ＬⅡ			1				Ｅ６	ＬⅡ	23	3	147	1		刀子1
Ｄ６	ＬⅡ		1	53	4	1	煙管1	Ｅ７	ＬⅡ	2		1			

を示している。以下，順次遺物の特徴について概説する。

縄文土器　24図１～６が該当する。１・３・４・６は色調・胎土の特徴から同一個体と推測され，口縁部と体部に多条沈線がめぐる。その特徴から後期の綱取Ⅱ式期の土器と推測される。２は内湾気味に立ち上がる口縁直下に２条の平行沈線を巡らしており，縄文晩期頃と推測される。５は胎土中に繊維が混入し，内外面に条痕が施される。その特徴から，縄文時代早期末葉のものと思われる。７は一条の沈線下に縄を横方向に施文しており，５と同様の時期であると思われる。

石　　器　24図８が該当する。分銅形を呈する打製石斧であり，上半部を欠損する。偏平な自然石を素材とし，刃部と基部の剥離によって形状を整いている。剥離痕は使用のためか，風化のためか不明であるが摩滅が著しい。

土 師 器　24図９～13が該当する。すべて底部資料であり，９～11はロクロ成形の土師器杯，12・13は土師器甕である。９～11は，いずれも内面にはヘラミガキの後，黒色処理が施されている。底部外面には９は回転ヘラ切り痕，10・11は回転糸切り痕が認められる。また，11は底部の切り離し後に手持ちヘラケズリ再調整を施している。12は整形方法は不明であるが，外面にはヘラケズリ，内面には横位の強いヘラナデの痕跡が観察できる。

須 恵 器　24図14・15が該当する。14は甕の底部であり，外面にはロクロナデ，内面には強いヘラナデの痕跡が観察できる。15は甕の胴部破片である。外面には平行タタキ目，内面には同心円状の当具痕の痕跡が認められる。

鉄 製 品　24図16・17が該当する。16は刀子で切先部を欠損する。関と茎の部分は，錆膨れが著しく形状は明確ではない。17は煙管で雁首を欠損している。

第３章　総　　括

今回の調査で検出された遺構は，竪穴住居跡５軒，土坑３基，溝跡１条，小穴12基である。時代を特定できたものは竪穴住居跡で，平安時代前半期である。次に調査の成果をまとめておく。

１．土師器の分類

遺物は，縄文土器・土師器・須恵器がある。土師器・須恵器は平安時代前半期に所属する。平安時代以外の遺物は希少であるため，ここでは取り上げない。また，須恵器については破片資料が多く，全体形を把握できるものが殆ど認められないため，ここでは土師器との一括資料ではあるが，割愛することにする。

出土した土師器のうち，１・２号住居跡内出土点数の多い土師器杯に着目し，まず製作方法から観察すると，いずれもロクロを用いて製作した類（A類）であり，表杉ノ入式に相当する。

また，ロクロ成形後，内面にヘラミガキと黒色処理が行われたもの（Ａ１類），それらが全く施されないもの（Ａ２類）に二分される。さらに，口縁部の特徴によっても，口縁部が底部から直線的に外傾しているもの（a）と，緩く内湾しながら立ち上がるもの（b），口縁端部付近で緩く外反する（c）ものとに二分される。

内面にヘラミガキ・黒色処理が施されているＡ１類を観察すると，その底径対口径の比率は36.3以上50.0以内，器高対口径の比率は25.8以上36.4以内に収まり，それらの大きさは比較的近似することが分かる。さらにこの類の調整は，杯外面の体部下端から底部周縁または底部全体にかけて二次的なヘラケズリ調整が施され，内面のミガキは底部付近に放射状に施された後，口縁部に斜位または横位にミガキを施されるものが多い。Ａ１類の口縁部の形状は，底部から直線的に外傾，または内湾する点（Ａ１ａ・ｂ類）が混在している。この２つのタイプの杯は，第３編で述べる腹田Ｃ遺跡１号住居跡でも認められる。Ａ１類の中には，口縁部形状が端部付近で外反するＡ１ｃ類も少ないが認められる。８図８，13図１は内湾気味に立ち上がり，さらに口縁部付近で緩く外反する。

福島県内のロクロ土師器杯は，底部切り離し後の調整が，回転ヘラケズリ再調整から手持ちヘラケズリ再調整の移行，また，再調整のあるものから回転糸切り痕を残すものへの変化，器高は口径に対する底径の比が大きいものから小さいものへの変化，外傾や内湾の度合が強くなる等として把握されている。この他，内面の調整に関しては，放射状に施されるヘラミガキが，新しい要素であることが指摘されている。また，Ａ１ａ類の器形および技法の特徴を備えた土器は，９世紀代を前半と後半の二分で考えたとき，主として後半代に見られる技法的要素として捉えられる。

次に，ロクロ成形後に，内面のロクロ痕をナデ消しているＡ２類の杯をみてみる。本類の杯は，２号住居跡で１点，３号住居跡でも数点認められる。この類の土器については，従来は土師器の概念から逸脱したものとされ「須恵系土器」「赤焼土器」「内外面赤褐色土師器」などと呼ばれ，その呼称は定まらなかった。しかし，近年では土師器と同窯で焼成されることなどから土師器の一形態

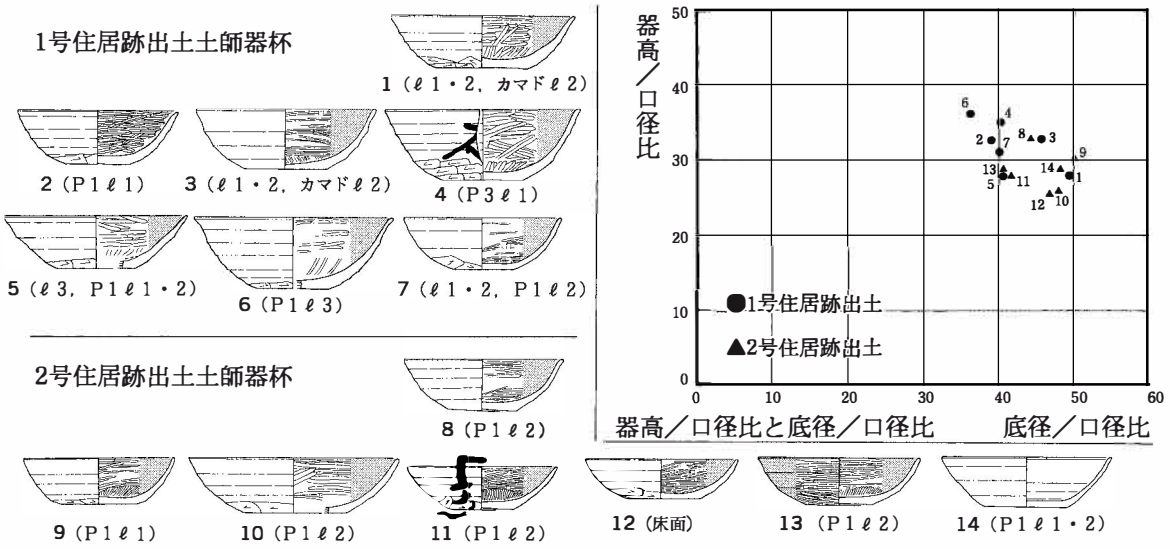


図25　腹田A遺跡出土土師器杯分類

として捉える指摘も増えてきている。ここでは，この類の土器を内面のロクロ痕を二次的にナデ消した土師器の一種として認識するに止める。2号住居跡で出土したタイプの杯（13図9）は，郡山市正直A遺跡15号住居跡と類似例が認められ，10世紀以降の年代が与えられている。

この外に，1～4号住居跡からは多くの土師器甕が出土している。土師器甕は非ロクロ使用からロクロ使用への変化が指摘されているが，本遺跡では非ロクロとロクロ使用のものが共伴して認められる。ロクロ整形の甕は口縁端部に面を持つものが多く，丸くなるものも若干認められる。器面調整をみると，ロクロ整形のものは，外面は口縁部から胴上半部がロクロナデで調整され，胴下半部は主にヘラケズリが施されている。胴部下端付近までロクロナデで施されているものでも，胴部下端はヘラケズリで調整されている。底部の破片資料でも，ロクロナデが認められるものはない。

内面は，ロクロナデとヘラナデが施されるが，口縁部はすべてロクロナデが施される。非ロクロ整形のものは，器面調整はロクロ作りのものより規則性がなく，外面はヘラナデ・ヘラケズリ・オサエで調整し，内面はヘラナデが施される。

また，今回の調査時には，1～4号住居跡内の堆積土・カマド周辺・貯蔵穴内より他の土師器に混じって筒形土器の小片が出土している。特に，カマドに隣接する貯蔵穴状ピットからの出土が多いことが特徴的である。器形・器面の特色は以下である。器面は赤変し非常に脆く，煮こぼれ状の痕跡のるものも認められる。整形段階は粘土紐積み上げで，調整はヨコナデ・ヘラナデ，指頭によるナデ・オサエである。胎土は微砂を含み粗で，一部の小片には「白色針状物質」を含むものや，砂粒の混入度合から数種に分類するこ

表3　土師器杯計測表（最小～最大値）

出土位置	資料数	底径／口径比	器高／口径比	外傾度	湾曲指数
1号住居跡	7	36.36～49.32	28.08～36.36	40～45	7.5～13.89
2号住居跡	7	40.63～50.0	25.83～33.33	38～46	5.77～13.46

表4　土師器杯計測表（平均値）

出土位置	資料数	口径	底径	器高	底径／口径比	器高／口径比	外傾度	湾曲指数
1号住居跡	7	14.21	5.93	4.59	41.69	32.21	42.57	11.29
2号住居跡	7	13.07	6.0	3.74	45.80	28.74	43.29	10.55

とが可能である。この筒形土器は，焼き塩関係の遺品と推定され，県内でも各地で発見されており，今後は胎土の分析と比較が課題となろう。

2．竪穴住居跡について

5軒の竪穴住居跡は，標高の高い調査区中央～西側区域にかけて分布し，うち4軒は住居跡同士の重複関係が認められる。これは，狭小な平坦地であるため，土地利用が制限された結果と考えられる。5号住居跡→2号住居跡，4号住居跡→3号住居跡の変遷が推定される。1号住居跡は全体形を検出することができたが，他は調査区外へ延びるものや削平され，カマド・貯蔵穴状ピット・一部の床面の検出に止まっている。

住居内施設はカマド・貯蔵穴状ピット・小穴がある。カマドは1号～3号住居跡で確認された。1号住居跡は，構築当初は南壁にカマドが付設されていたが，のちに東壁に移設され，住居内での作り替えが認められる。2・3号住居跡は，いずれも東壁に付設されている。また，煙道部は消失していたが，袖部・燃焼部が残存し，花崗岩が多数配置され，補強材・支脚として利用されている。

厨房施設であるカマドと貯蔵穴状ピットとの関係は，すべてカマドの南側に隣接するような形で位置している。4号住居跡で確認されたP1も貯蔵穴状ピットの可能性が高く，上記の住居跡と同形態であれば東壁に沿ってカマドが存在していたものと推察される。そうなると今回確認した1～4号住居跡の貯蔵穴は，いずれも住居内南東隅に位置し，構造上の共通性がみられる。床面はカマド付近を中心に踏み固められており，住居内出土遺物も多く，比較的長時期にわたって使用された住居と推定される。

この他，1号住居跡からは加熱され破砕した角礫が多量に出土している。これらの礫は，非常に微弱な敲打痕や摩耗面等の使用痕跡が認められるため，なんらかの作業に伴う道具の可能性が高い。

被熱変化は，“火”を伴う作業と何らかの関連があるものと推測できる。ただ，微弱な使用痕跡と被熱変化が相関関係にあるのか，それとも別々の行為の結果，形成されたものであるかは識別できなかった。なお，須賀川市関林G遺跡の2・5号住居跡においても同様の特徴を持った礫が出土している。これによると，鍛冶工房跡から出土する礫との相違から，直接鍛冶作業に伴うものではないとしているが，何に関連できるものかは不明としている。したがって，現在までのところ，これらの礫に対して，明確な使用用途は不明といわざるを得ない。これら工房的色彩の濃い遺構から出土した礫の特徴を指摘し，今後の類例を待ちたい。

3．大信地区の平安時代集落について

平安時代になると，新農地の開発による生産力の向上と，人口の増加が顕著に見られる。集落遺跡の発見例も多くなり，大河の流域に止まらず，山間地でも多くの遺跡が発見されている。また，一度集落が廃絶した場所でも平安期に再利用された例も認められる。

大信地区の平安時代集落にはいくつかの形態が認められる。町屋遺跡や下原遺跡，道目木遺跡のように古墳時代以来継続して営まれた集落が一つの形態である。これらの集落は，隈戸川の河岸段丘に立地し，沖積地や支流との合流点に，長期にわたって一定の収量を得られる耕地を維持してい

たと思われる。とくに町屋遺跡と道目木遺跡は連続した段丘面に立地する遺跡で，両遺跡の距離は１㎞に満たない。加えて両遺跡のあいだには町屋Ａ遺跡と屋敷裏遺跡という奈良・平安時代の遺物が採集されている遺跡がある。町屋Ａ遺跡と屋敷裏遺跡の細かい内容はわからないが，もし当該時期の集落跡であるなら，これらは東西１㎞を越える大きな集落跡になる可能性があり，道目木遺跡で発見された四面庇建物跡の存在とあいまって，当地域の中心的集落と考えることができる。

もう一つの形態は，一度集落が断絶したが，耕地として有効な土地が近くにあったため再開発された集落で，北大久保ＢＣ遺跡がこれに当たる。北大久保ＢＣ遺跡は，隈戸川支流の小規模な河岸段丘に立地し，古墳時代終末期に集落が営まれた後，奈良時代には断絶し，平安時代に再び集落が営まれている。近隣の天栄村山崎遺跡も奈良時代の遺構が欠落している。

さらにもう一つの形態は，平安時代に新たに開発された集落である。北大久保Ｅ遺跡がこれに該当する。北大久保Ｅ遺跡は北大久保ＢＣ遺跡と同じ隈戸川支流の滑川が形成した河岸段丘に営まれた集落跡である。検出された竪穴住居が11棟で，掘立柱建物跡は確認されていない。また，北大久保Ｅ遺跡の対岸は，矢吹町になるが笹目平遺跡が位置している。北大久保Ｅ遺跡と同様，平安時代に新たに開発された集落であり，河岸段丘から背後の丘陵斜面にまで遺跡が及ぶことから，北大久保Ｅ遺跡より大きな集落と思われる。この二つの遺跡は，竪穴住居跡の構造が類似しており，ともに小型の蕨手刀が出土している。このような遺構や遺物の共通点から，両遺跡は付近の谷田で水田稲作を行う地縁・血縁的集落である可能性が高い。

腹田Ａ遺跡は，古墳・奈良時代の遺構や遺物が認められないため，北大久保Ｅ遺跡と同形態の集落跡といえる。検出された遺構も竪穴住居跡を主体として，掘立柱建物跡が認められない点も類似している。おそらく，平安期になって町屋遺跡・道目木遺跡の対岸の狭小な河岸段丘上に分け入って，小規模な新田開発を行いつつ発展していったと推測される。

しかし，10世紀になるとこれらの集落のほとんどが消滅してしまう。この地域における平安時代の中葉から後葉の集落への移行の過程は，今後の調査の課題である。

引用・参考文献

大信村史編纂委員会編　2004『大信村史　第２巻　資料編上巻』大信村

2006『大信村史　通史編』大信村

福島県教育委員会　2007『福島県内遺跡分調査報告13』

福島県教育委員会・福島県文化振興事業団（福島県文化センター）

1979『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅲ　佐平林遺跡（Ⅵ区）』

1980『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅳ　源平Ａ遺跡』

1987『矢吹地区遺跡発掘調査報告１　北大久保Ｂ・Ｃ遺跡』

1988『矢吹地区遺跡発掘調査報告２　北大久保Ｂ・Ｃ遺跡』

福島県教育委員会・福島県文化振興事業団（福島県文化センター）

1989 『矢吹地区遺跡発掘調査報告３　坂口Ｂ遺跡』

1989 『矢吹地区遺跡発掘調査報告４　滝原前山Ｃ遺跡』

1990 『矢吹地区遺跡発掘調査報告５　山崎遺跡』

1992 『矢吹地区遺跡発掘調査報告10　笹目平遺跡』

1992 『矢吹地区遺跡発掘調査報告９　北大久保Ｅ遺跡』

1994 『母畑地区遺跡発掘調査報告34　正直Ａ遺跡』

1998 『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告１　上宮崎Ａ遺跡』

1999 『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告６　白山Ｄ遺跡』

1999 『福島空港公園遺跡発掘調査報告Ⅰ　関林Ｇ遺跡』

1999 『福島空港公園遺跡発掘調査報告Ⅱ　関林Ｋ遺跡』

2001 『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告10　赤沢Ａ遺跡』

2002 『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告12　江平遺跡』

2007 『原町火力発電所関連遺跡調査報告Ｘ　割田Ａ～Ｈ遺跡』

矢吹町　1980 『矢吹町史　第１巻通史編』

小井川和夫　1984 「いわゆる赤焼土器について」『東北歴史資料館研究紀要10』

太本元治　1990 「福島県内の黒色土器（平安時代）」『東国土器研究３』

村田晃一　1995 「宮城県における10世紀前後の土器」『福島考古36』

柳沼賢二　1996 「福島県の10世紀の土器」『土器辞典』

第２編　腹田（はらだ）Ｂ遺跡

遺跡記号　ＳＫ－ＨＤ・Ｂ
所在地　白河市大信増見字腹田
時代・種類　縄文時代・平安時代－集落
調査期間　平成19年５月７日～５月31日
　　７月２日～８月２日
調査員　稲村　圭一

第１章　遺跡の環境と調査経過

第１節　遺跡の位置と地形

腹田Ｂ遺跡は，白河市大信増見字腹田に所在し，北緯37度11分54秒，東経140度15分１秒に位置する。白河市は中通り地方の南端部に位置し，東は阿武隈山地，西は那須山系，南は八溝山系に挟まれた低平な台地上に位置する。本遺跡のある大信地区は白河市の北西側付近にあり，北は天栄村，南は泉崎村，西は西郷村，東は矢吹町とそれぞれ境界を接している。遺跡はＪＲ東北本線矢吹駅から西方向へ約6.7㎞，東北自動車道矢吹インターから西方向へ約3.7㎞付近に位置している。遺跡の約0.5㎞北西側を国道294線が通る。

腹田Ｂ遺跡は，大信地区の中央よりやや南寄りの隈戸川が，支流の外面川と合流し大きく蛇行する地点の，標高400m前後の丘陵の北斜面裾にあたる比較的狭長な低位段丘上に立地する。調査区内の標高は，298.9～298.0mで，隈戸川の川床との標高差は約6.5mである。遺跡の北側には，隈戸川と外面川によって形成された比較的広い谷底平野一帯を望むことができる。遺跡の範囲は，隈戸川南岸の低位段丘の平坦面を中心とする2,000㎡で，平成19年度の調査は，幹線工区内850㎡の範囲について発掘調査を実施した。現況は畑地・荒地で，調査区内は耕地造成に伴う削平を受けており，遺構の遺存状態は良くない。周辺には，縄文時代後期の集落跡として有名な町屋遺跡や，中世の城館跡である八幡山館跡等が所在している。第３編で報告する腹田Ｃ遺跡は，同一段丘上の北東側に位置しており，その距離は約180mである。また，第４編で報告する金谷林遺跡は，本遺跡と同一段丘上の西側に位置しており，その距離は約230mである。

第２節　調査経緯

腹田Ｂ遺跡は，平成11年度に福島県教育委員会から委託を受けた（財）福島県文化振興事業団が実施した，国営隈戸川農業水利事業の幹線用水路建設に伴う表面調査によって，遺物の採集から縄文時代の散布地として新たに登録され（遺跡番号467001008），遺跡範囲は1,125㎡と推定された（『福島県内遺跡分布調査報告６』）。その後，平成18年度に，幹線用水路部分の90㎡を対象とした試掘調査を，福島県教育委員会の委託を受け，（財）福島県文化振興事業団が実施した。この結果，縄文時代の遺物が確認されたことから，未試掘調査部分（160㎡）の成果をまって保存範囲等の有無の検討を行うとした（『福島県内遺跡分布調査報告13』）。

平成19年度の調査は，隈戸川農業水利事業所と福島県教育委員会，（財）福島県文化振興事業団による現地協議の際に，幹線用水路部分の試掘調査に加えて，周辺の耕地整地を工事の一貫として行うため，当初の工事区内に止まらず，遺跡範囲内とその周辺について試掘調査を行ってほしいとい

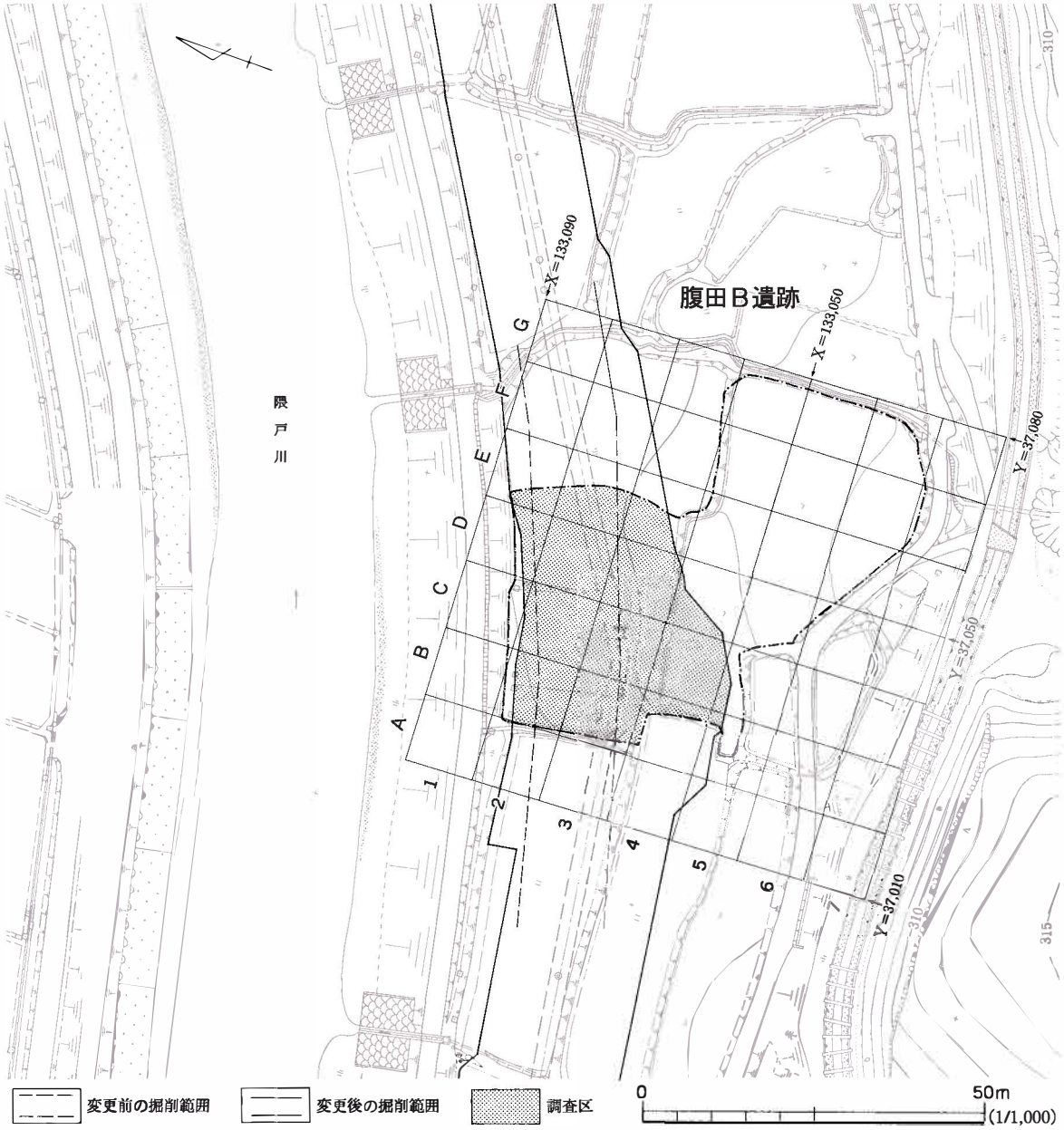


図１　腹田Ｂ遺跡調査区位置図

う要望があった。よって，幹線用水路部分とその周辺部分（3,400㎡）の試掘調査を行った後，発掘調査に向けての現地協議を行うこととした。

腹田Ｂ遺跡の第２次試掘調査は，4月17日～24日にかけて実施した。調査の結果，縄文土器・土師器等の遺物や竪穴住居跡・土坑等の遺構が検出され，2,000㎡の要保存範囲が確定した。その成果を受けて４月25日に現地協議を行い，整地部分については掘削深度が遺構検出面まで達しないことから，幹線用水路部分（440㎡）の本調査が確定した。また，隈戸川農業水利事業所から工事の工程上，腹田Ａ遺跡・腹田Ｂ遺跡の発掘調査を優先させてほしいとの意向から，４月16日から実施していた金谷林遺跡の発掘調査を一旦中断し，腹田Ｂ遺跡→腹田Ａ遺跡へと調査を移行していくことを確認した。腹田Ｂ遺跡の発掘調査は，調査員１名，作業員23名の体制で平成19年５月７日に開始し，中

断期間も含み，８月２日にかけての延べ31日間にわたって行った。以下に調査概要を記す。

５月７日には，重機による表土剥ぎを開始した。５月９日からは作業員を投入し，環境整備・遺構の検出作業を行いながら，測量基準杭の設定と水準点の移動を随時行った。遺構の検出作業時には，検出面としたＬⅢ（基底面）には礫を非常に多く含むことから，遺構の発見には困難を来たし，時間を要した。しかし，進行するにつれて遺構の有無が明らかになり，調査区中央付近の平坦面を中心に，奈良時代の竪穴住居跡や，縄文時代晩期に属する竪穴住居跡をはじめとした遺構群が検出され，遺構精査へ移行することとなった。

５月中旬から下旬にかけては，天候に恵まれたこともあり，精査作業が順調に進んだ。遺物は比較的希薄であったが，当地域では希少な例である縄文時代晩期の集落跡を主体とした奈良時代との複合遺跡であることが明らかとなった。また，この区域の遺跡調査の成果を公表するため，福島県教育委員会が実施する「遺跡の案内人」による遺跡の公開を５月26日に盛大に行われた。５月下旬には遺構の調査・地形測量を終えて５月30日に腹田Ｂ遺跡の調査を一旦終了した。

その後，幹線用水路部分の工事計画の変更により，410㎡の追加面積が生じたため，6月19日には，本調査に向けた現地協議を実施し，それまで行っていた腹田Ａ遺跡の発掘調査を一旦中断し，優先順の高い腹田Ｂ遺跡の発掘調査を実施することとなった。

６月下旬から７月上旬にかけては梅雨時期ということもあり雨天時が続き，重機による表土剥ぎ作業は予定より遅れて７月２日に開始することとなった。７月５日からは作業員を投入し，環境整備・遺構の検出作業を行った。既存調査範囲に連続して礫を非常に多く含むことから，遺構の発見には困難を来たし，時間を要したが，既存調査範囲に連続した縄文時代や奈良時代を中心とした遺構群が確認され，次第に精査作業に移行することとなった。遺構精査中は，雨の影響により調査区内が冠水することが度々あり，周囲から雨水が流れ込むこともあり，排水作業に時間を要し，調査の進歩に遅れを来した。７月27日にラジコンヘリによる高度からの写真撮影を行い，８月２日には，現地において福島県教育委員会・（財）福島県文化振興事業団・隈戸川農業水利事業所の各担当者が集まり，調査経過や成果・状況等を説明し，現地の引き渡しが完了した。

第３節　調　査　方　法

平成19年度に調査を実施した腹田Ｂ遺跡の調査は，以下に基づいて行った。

グリッドの設定　調査区の位置を国土座標の中で正確に把握するために，世界測地系を基本とした測量用基準杭（Ｘ－133,060　，Ｙ－37,030）を打設した。国土座標値は，世界測地系公共座標第Ⅸ系に一致させ，一辺10m方眼を単位とした。グリッドの座標値は，図２中に示した。

個別のグリッドは，東西方向に西から東へアルファベットＡ・Ｂ…，南北方向に北から南へ算用数字で１・２…とし，両者を組み合わせて，Ｄ６グリッド，Ｆ８グリッドなどと呼称している。

基準線の設定　遺構の平面図を作成するに際しては，各グリッドを１ｍの方眼に分割し，これを

基準線とした。基準線の座標上の位置については，各グリッドの北西端部を原点（E0，S0）とし，ここから東へ１m行くごとにＥ１～９，南へ１m行くごとにＳ１～９として表した。これにそれぞれのグリッド番号を組み合わせて，調査区域内全ての基準線の座標位置を表示した。例えば，Ｆ10－Ｅ２・Ｓ４とは，Ｆ10グリッドの北西端の杭から，東に２m，南に４m離れた場所を示す。

発掘作業　発掘作業では，表土は重機を用いて除去した。その後，人手により包含層を除去し，遺構・遺物の検出作業を行った。

遺構の掘り込み作業にあたっては，各遺構の形状・大きさ，重複関係に留意して，土層観察用のベルトを設定した。土坑など小型の遺構については，長軸方向にベルトを設定した。遺構内から出土した遺物の取り上げに際しては，上記の区画ごとに，層位を確認した上で取り上げた。

層位名を付す際は，基本層位はローマ数字を用いてＬⅠ・ＬⅡと表した。遺構内堆積層は，アラビア数字を用いてℓ１・ℓ２と表した。

記録作成　調査の成果は，実測図と写真で記録した。遺構図の縮尺は，住居跡が１／20，土坑等の小さなものは１／10で作成した。微細な記録が必要と判断したものについては，1／10で随時作成し，調査区内の地形図や遺構配置図は，1／100で作成した。土層観察における色調判断は，『新版標準土色帖』（小山・竹原1997）を基準とした。調査現場での写真撮影は35mm小型一眼レフカメラ，６×4.5判の中型一眼レフカメラ，デジタルカメラを併用した。

遺物・記録の保管　発掘調査で得られたすべての出土遺物と記録類一式は，報告書作成完了後，遺跡ごとに台帳を作成し，福島県文化財センター白河館（まほろん）に収蔵する予定である。

第２章　遺構と遺物

第１節　遺構の分布と基本土層

遺構の分布（図2，写真１）

腹田Ｂ遺跡から検出された遺構は，竪穴住居跡３軒，土坑19基，溝跡１条，焼土遺構１基，小穴75基である。調査区は東西方向に長く，北側の隈戸川に向かって緩やかに傾斜する地形を呈しており，調査区東部には隈戸川に注ぐ支沢状の落ち込みが確認できる。遺構は調査区内の中央付近からやや西寄りにかけての，比較的標高が高い区域に集中している。

今回検出された遺構は，主に縄文時代と奈良時代に大別される。奈良時代の遺構は調査区中央に位置する１・３号住居跡が認められる。１号住居跡は一辺5.5m程の住居跡であり，隣接するように一辺3.0m程の３号住居跡が存在する。出土遺物の特徴や，ともに北壁にカマドを付設することから，１・３号住居跡は，ほぼ同時に存在していたと推察される。

縄文時代の遺構は，標高が最も高い調査区中央のやや西寄りの範囲に集中している。２号住居跡は地床炉を伴い，出土遺物の特徴から縄文時代晩期中葉に属する。また，周囲には該期に属すると

思われる土坑群（１～12・14・16～19号土坑）が認められる。その中でも円形を基調とする土坑（１・４・５号土坑）は，底面などの特徴から，構築当時は貯蔵穴として機能していたと思われるが，廃絶時には礫や多数の土器片の遺棄が行われたと思われる。また，土坑群域には多数の小穴群も分布しており，柱痕の認められるものもあることから，掘立柱建物跡などの構築物の存在も考慮できる。このことから，これらの生活域を勘案すると，河川沿いに営まれた小集落と推測されよう。

出土遺物は，縄文土器366点（晩期を主体とする），石器10点，土師器47点（奈良時代を主体とする）で，遺物の大半は各遺構と，遺構が集中するＢ２・３，Ｃ２・３グリッドから出土した。遺物の年代は縄文時代晩期，および奈良時代である。そのなかで主体を占めるのは，晩期前葉から中葉にかけてのものである。

基本土層（図２・３）

本遺跡では，基本土層を大きくⅢ層に区分した。土層観察は調査区境の壁面を利用し，５地点で記録を行っている。また，調査区東側には，旧沢地の存在が試掘調査により明らかであり，その堆積土が本調査区内でも一部認められた。本来の堆積土が水流による浸食，後世の撹乱を受けたものと考え，これとは別に沢Ⅰ層（Ｓ－ＬＩ）とした。また，ＬＩについては，土質や色調の違いにより更に細分され，アルファベット小文字のａ・ｂを付けて表記した。以下，堆積土の特徴と遺構・遺物の関係について概略する。

ＬＩａ　：昭和時代に行われた圃場整備に伴う盛土である。調査区東半部に100～150㎝の厚さで分布する。調査に際しては重機による掘削を行った。層中には遺物は含まない。

ＬＩｂ　：現耕作土である。調査区東半部では盛土（ＬＩａ）時に削平されているが，部分的に免れ残存している状況が認められる。層厚は約10～40㎝程度である。調査に際しては重機による掘削を行った。層中には縄文時代と古代の遺物が含まれる。

ＬⅡ　：耕地改修前の旧表土で黒色土と判断した。そのほとんどは，耕地改修時に削平されているが，調査区北側周辺では，部分的に免れ残存している状況が認められる。層厚は約10㎝程度である。層中には縄文時代や古代の遺物が僅かに含まれる。

ＬⅢ　：褐色砂質土で，本遺跡の基底層である。本層上面が遺構検出面となっている。層中には小～大礫や砂利が多量に混在し，遺構検出作業時には困難を要した。これより下層は無遺物層である。

Ｓ－ＬＩ：褐灰色粘質土で砂礫を多量に含む。調査区東端部付近にのみ存在し，近～現代の陶磁器片が少量ながらも出土していることから，古くとも近代より後に堆積したと考えられる。よって，後世の浸食によって形成されたものと判断できる。

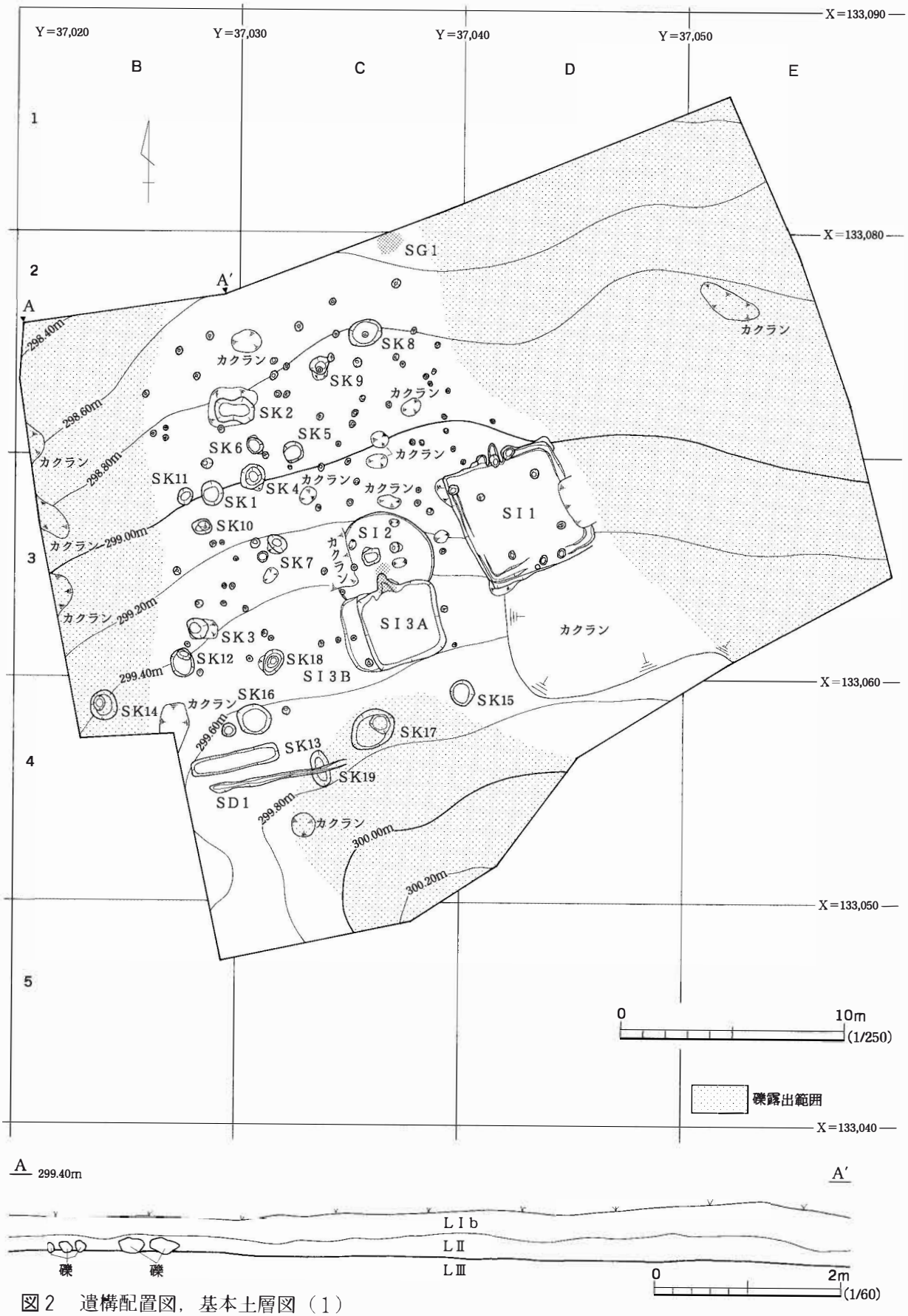


図2　遺構配置図，基本土層図（1）

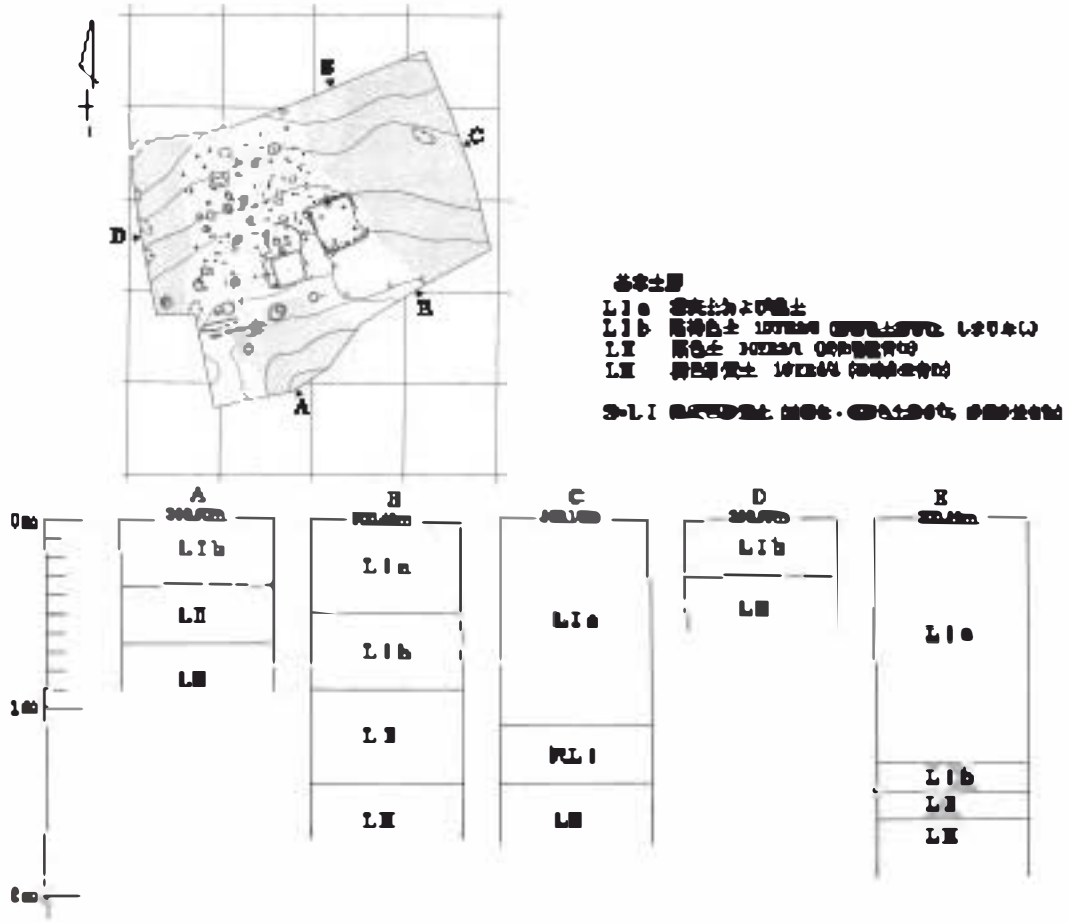


図3　基本土層図（2）

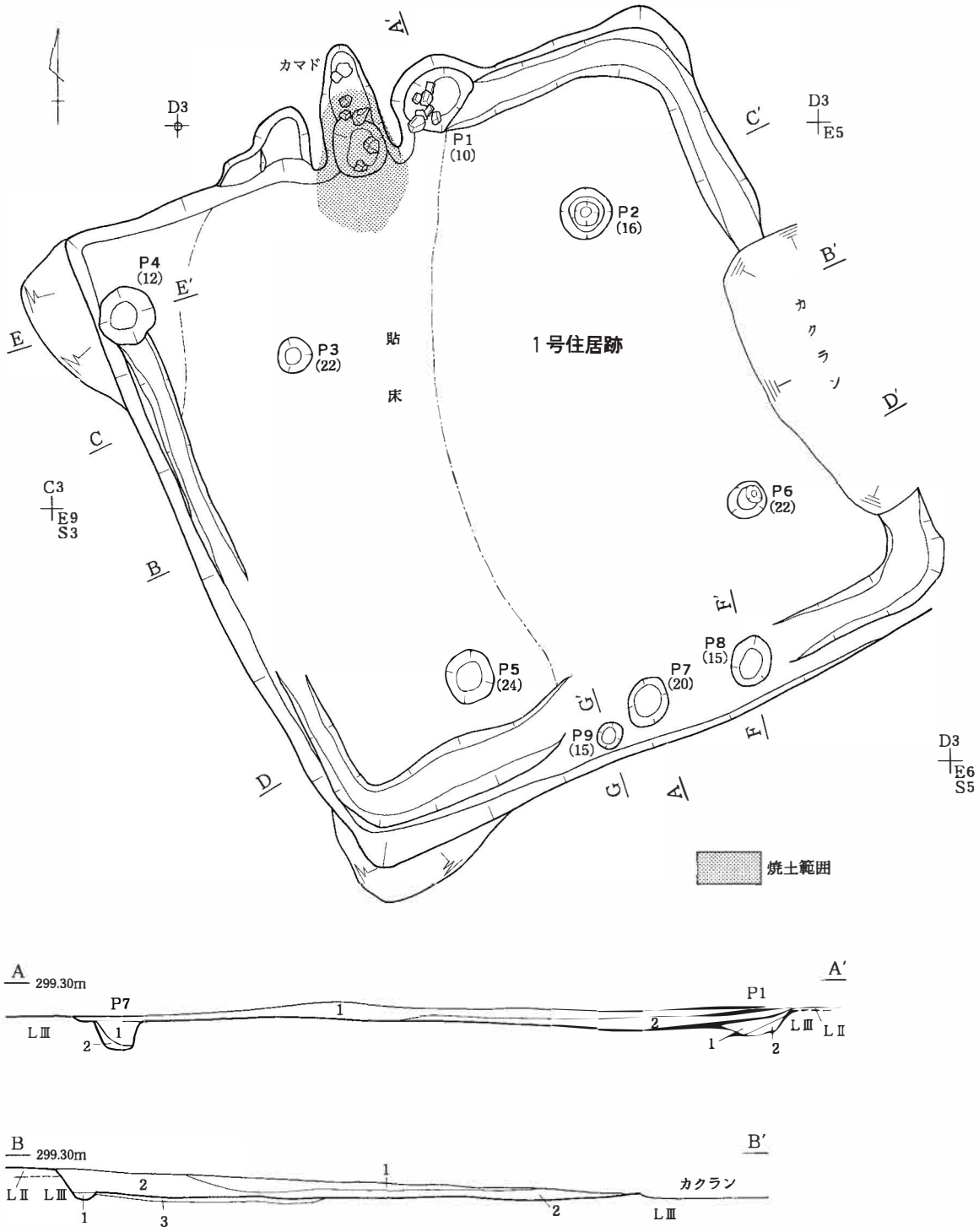
第2節　竪穴住居跡

今回の調査では，竪穴住居跡が3軒検出された。ともに調査区中央付近に分布し，1号住居跡はカマドを有する方形基調を呈し，出土遺物から奈良時代に帰属するものと推測される。また，2号住居跡は炉を有する円形基調を呈し，出土遺物から縄文時代晩期に帰属するものと推測される。3号住居跡は，建て替えが認められる。1号住居跡と並行し，出土遺物の特徴から，1号住居跡とは並存していた可能性が高い。

1号住居跡　S I 1

遺　　構（図4・5，写真3・4）

本住居跡は，調査区中央付近のC3，D2・3グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高293.6～293.8m程の北向き緩斜面である。検出面はLⅢ上面であるが，この付近ではLⅢ自体が削平を受けているため，本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。検出時にカマド付近に焼土や炭化物の集中範囲が認められた。他遺構との重複関係はなく，遺構の東側は部分的に削



１号住居跡堆積土

1　黒色粘質土　10YR2/1（黒褐色土粒少量，礫含む）
2　灰黄褐色砂質土　10YR4/2
（黒褐色土粒・ＬⅢ粒少量，炭化物粒少量，礫含む）
3　にぶい黄褐色土　10YR4/3（黒褐色土・褐色土粒多量，締まりあり）

壁溝堆積土

1　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3（小礫含む）

Ｐ１堆積土

1　にぶい黄褐色土　10YR4/3（黒褐色土粒多量，礫含む）
2　褐色砂質土　10YR4/4（礫含む）

Ｐ７堆積土

1　黒褐色砂質土　10YR3/2（炭化物粒少量，礫含む）
2　褐色砂質土　10YR4/4（礫含む）

0　2m
(1/50)

図４　１号住居跡（１）

平を受け消失しており，遺存状況はあまり良好ではない。

遺構内堆積土は，色調および混入物から３層に分層できた。ℓ１は基本土層のＬⅡに類似した黒色粘質土で，ＬⅠに類似した黒褐色土を粒状に少量含むことから自然流入土と考えられる。ℓ２は，灰黄褐色砂質土で，炭化物粒を含み，黒褐色土とＬⅢに類似する褐色土の混土が認められることから人為堆積土と判断した。ℓ３は貼床の構築土である。

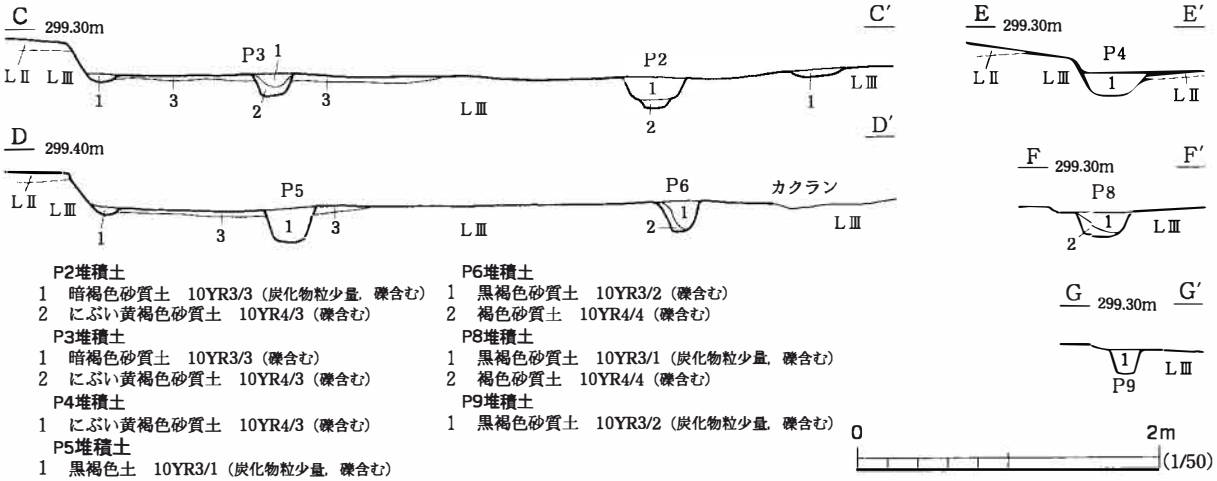
遺構の平面形は，東側の一部が削平されているため全体形は不明であるが，遺存する形状から正方形基調で，軸長は北－南長5.2m，東－西長5.4mを測り，カマドの向きを基準とした主軸方位は，真北から12°西を指す。検出面からの深さは最大22cmを測り，東側へ向かうにつれて浅くなる。周壁は，西壁と北壁・南壁の一部が残り，遺存状態の良好な西壁は比較的緩く立ち上がる。床面はＬⅢを掘り込んで構築され，西半部は踏み締まりが確認でき，貼床構築土で平坦に整えている。貼床の厚さは２～５cmを測る。また，東半部は礫の露出が著しく，起伏がある。

遺構内施設として，カマド・小穴・壁溝を検出した。カマドは北壁中央部に付設され，カマド両袖と燃焼部，煙道部からなり，煙道部が住居外の北方向に延びている。燃焼部底面の被熱範囲の南端から計測した全長は1.45cmを測る。両袖はともに住居内に直線的に張り出していたと思われ，両袖の幅が72cmを測る。北壁のＬⅢに褐灰色粘質土を客土して構築され，下端の幅22cm，高さ約10cm前後で遺存し，被熱により硬化している。底面は緩く南側へ向かって下降しており，燃焼部中央付近に５cm程の窪みがある以外は，ほぼ水平である。燃焼部内には硬化していない暗赤褐色の被熱範囲が確認され，その範囲は長軸115cm，短軸85cmの不整円形を呈している。カマド内堆積土は２層に分層できた。ℓ１は廃絶土，ℓ２は燃焼部天井崩落土と判断した。検出時には，礫が多量に分布していたことから，住居廃絶時にカマドは破壊されたと思われる。

小穴は９基検出した。Ｐ１は北壁に付設されたカマドの東脇に隣接して検出された。平面形は径55×45cm程の楕円形状を呈し，深さは床面から10cmを測る，カマドに接するような位置や，規模が他の小穴と比べて大きいことから，貯蔵穴等の用途が想定される。

Ｐ２・Ｐ３およびＰ５・Ｐ６は，その位置から主柱穴と考えている。平面形は，いずれも円形基調で，断面形はＵ字状を呈し，床面に対して垂直に掘られている。Ｐ２は径40×36cm，深さ35cm，Ｐ３は径30×28cm，深さ40cm，Ｐ５は径40×38cm，深さ25cm，Ｐ６は径33×28cm，深さ22cmを測る。Ｐ４は西壁に隣接するように検出され，平面形は径45cmの円形を呈する。深さは床面から15cmを測るが，その性格は不明である。Ｐ７・Ｐ８はともに楕円形状を呈し，規模は，Ｐ７は径40×32cm，深さ20cm，Ｐ８は径40×30cm，深さ15cmを測る。ともに周溝が途切れた南壁の中央付近に位置し，ほぼ類似した規模であることから，出入口部に関連する柱穴である可能性が高い。Ｐ９はＰ７に近接しており，径24×18cm，深さ15cmを測る。その位置から壁柱穴の一部であろうか。

壁溝は，カマド東側の北壁から東壁に沿って，および南壁から東壁に沿って部分的に検出された。礫の多いＬⅢを掘り込んで構築されている。壁溝の規模は，幅が18～47cm，床面からの深さが約５cm程度である。



P2堆積土
1　暗褐色砂質土　10YR3/3（炭化物粒少量，礫含む）
2　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3（礫含む）

P3堆積土
1　暗褐色砂質土　10YR3/3（礫含む）
2　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3（礫含む）

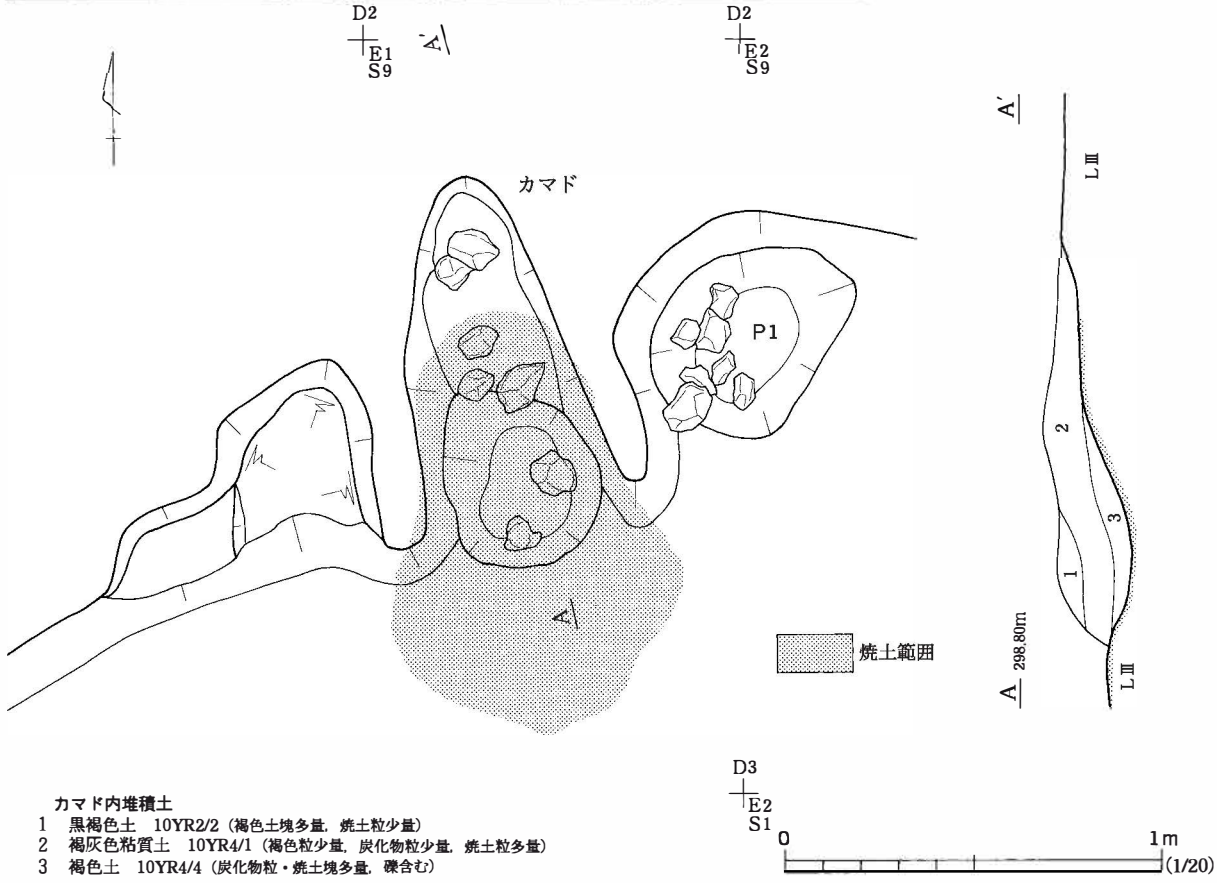
P4堆積土
1　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3（礫含む）

P5堆積土
1　黒褐色土　10YR3/1（炭化物粒少量，礫含む）

P6堆積土
1　黒褐色砂質土　10YR3/2（礫含む）
2　褐色砂質土　10YR4/4（礫含む）

P8堆積土
1　黒褐色砂質土　10YR3/1（炭化物粒少量，礫含む）
2　褐色砂質土　10YR4/4（礫含む）

P9堆積土
1　黒褐色砂質土　10YR3/2（炭化物粒少量，礫含む）



カマド内堆積土
1　黒褐色土　10YR2/2（褐色土塊多量，焼土粒少量）
2　褐灰色粘質土　10YR4/1（褐色粒少量，炭化物粒少量，焼土粒多量）
3　褐色土　10YR4/4（炭化物粒・焼土塊多量，礫含む）

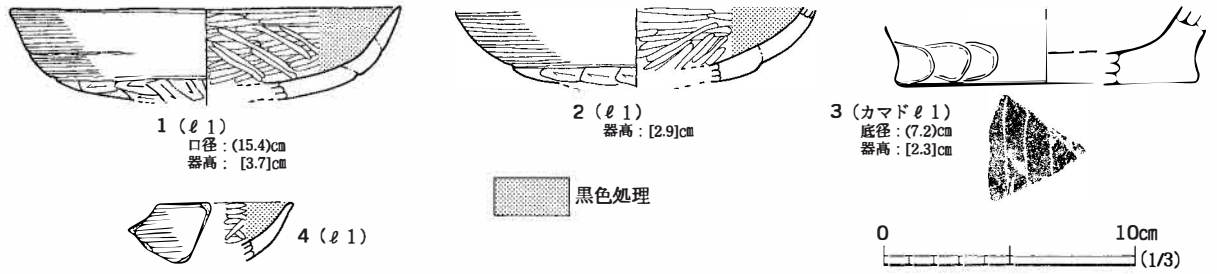


図5　1号住居跡（2），カマド，出土遺物

遺　　物（図５，写真15）

本住居跡からは，土師器片９点が出土している。須恵器片は出土しなかった。土師器片は大半が杯で，甕は３点である。このうち４点を図示した。小片のため割愛した土師器杯は，いずれも内面に黒色処理とヘラミガキを施しており，今回図示した遺物と同一個体とみられる破片である。これらの遺物の層位別出土点数は，住居内堆積土ℓ１（７点），カマドℓ１（２点）である。床面からの出土が全くなく，出土した破片も細片であるものが多い。これは，カマドの破損状況から，住居廃絶時に住居内での使用品は全て持ち出し，廃絶物を遺棄した結果だと思われる。以下，順次遺物の特徴について概説する。

５図１・２・４はいずれも非ロクロ成形の有段丸底の土師器杯である。１・２はほぼ同じ器形であり，底部から緩やかに内湾して立ち上がり，口縁部下に段差を有する。外面の調整は口縁部が横ナデ，体部下半がヘラケズリである。内面はいずれもヘラミガキ調整後に黒色処理が施されている。

同図３は非ロクロ整形の土師器甕の底部資料である。底部外縁にユビオサエが観察でき，底部には木葉痕が残る。

ま　と　め

本住居跡は北壁中央にカマドが位置し，４個の主柱穴で構成される。平面プランは正方形を呈し，一辺5.2～5.4mとなる中型の住居跡である。遺物は，堆積土中に少量の土器片を含んでいたが，これは住居廃絶時に遺棄されたものと推測され，出土した遺物は全て非ロクロ成形の土師器であり，その特徴から奈良時代８世紀前半に機能していたと考えられる。周辺遺構との関係をみると，軸線が一致し，遺物の様相もほぼ共通する３Ａ住居跡は，同時期もしくは近接した時期の遺構であろう。この区域に該期の小規模な集落が構成されていたと推定される。

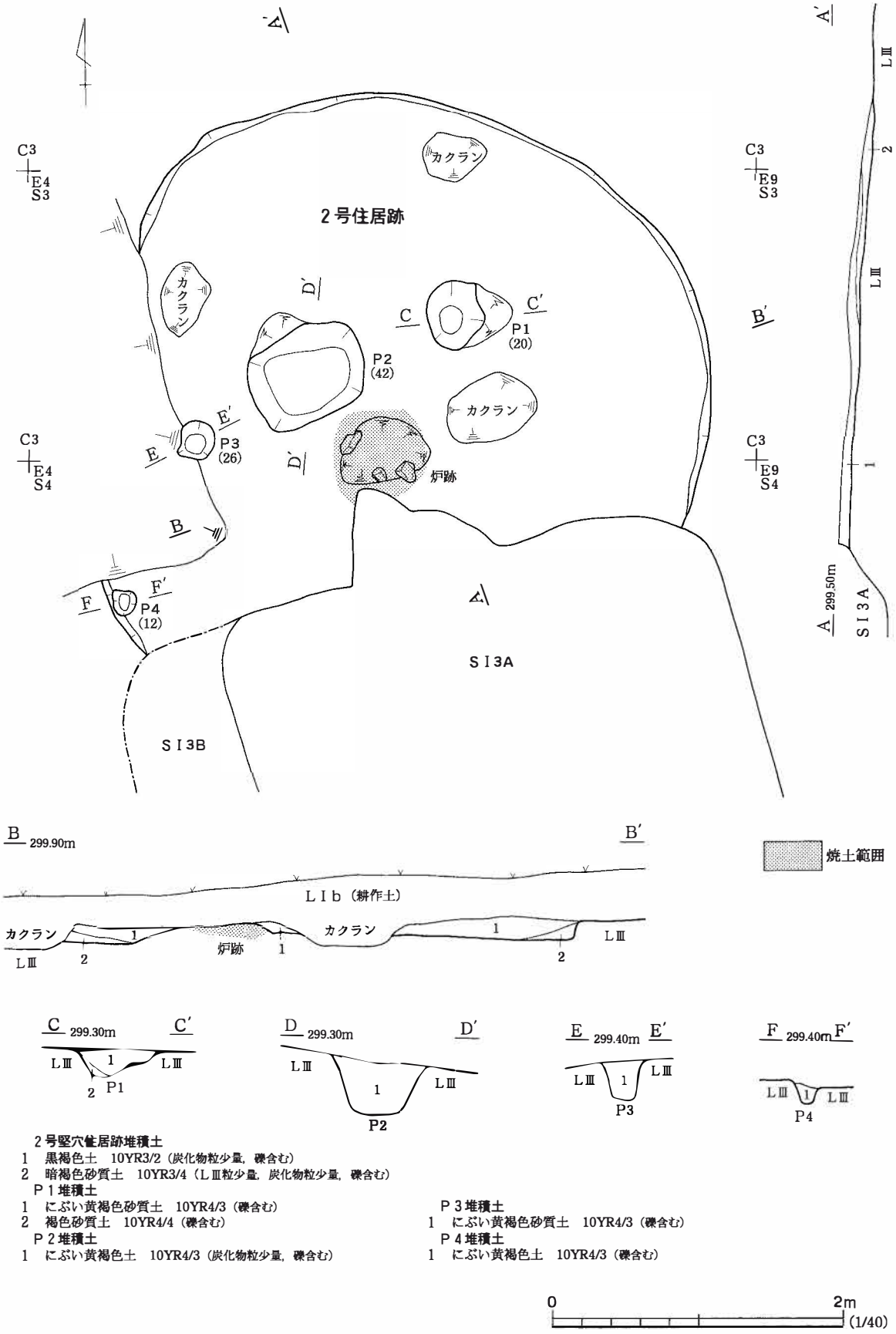
２号住居跡　ＳＩ２

遺　　構（図6，写真５・６）

本住居跡は，調査区中央付近のＣ３グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高298.8～298.9m程の北向き緩斜面である。検出面はＬⅢ上面であるが，検出の段階で床面や炉跡の一部が露出していた。遺構南側で３号住居跡と重複し，本遺構のほうが古い。西側は削平を受けて部分的に消失しており，遺存状況はあまり良好ではない。

遺構内堆積土は，色調および混入物から２層に分層できた。ℓ１は基本土層のＬⅢに類似した黒褐色土で，炭化物を粒状に少量含む。ℓ２は，炭化物粒を含む暗褐色土である。本遺構の上面が削平を受けて堆積土が薄いため，ともに人為堆積か自然堆積かの断定はできなかった。

遺構の平面形は，西側が削平され，南側が３号住居跡により削平されているため全体形は不明であるが，遺存する部分から判断すると，おおよそ直径4.5m程の円形を呈していたと思われる。床面はＬⅢを掘り込んで構築されほぼ平坦であるが，若干北方向に傾斜している。また，礫の露出が著しく，踏み締まりは認められなかった。周壁の状況は，検出面が床面直上でほとんど残存しない



２号竪穴住居跡堆積土

1　黒褐色土　10YR3/2（炭化物粒少量，礫含む）

2　暗褐色砂質土　10YR3/4（LⅢ粒少量，炭化物粒少量，礫含む）

Ｐ１堆積土

1　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3（礫含む）

2　褐色砂質土　10YR4/4（礫含む）

Ｐ２堆積土

1　にぶい黄褐色土　10YR4/3（炭化物粒少量，礫含む）

Ｐ３堆積土

1　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3（礫含む）

Ｐ４堆積土

1　にぶい黄褐色土　10YR4/3（礫含む）

図６　２号住居跡

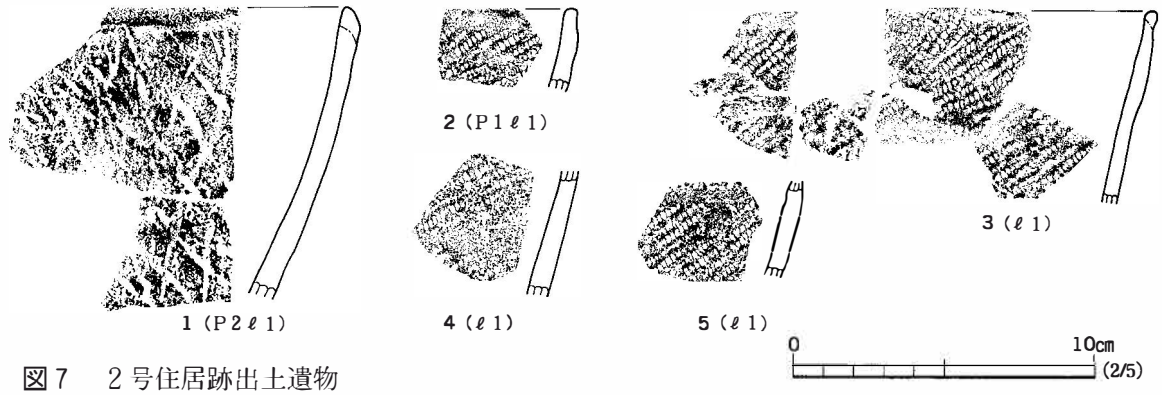


図７　２号住居跡出土遺物

ため不明である。

本住居内の内部施設として，炉跡と柱穴を含む４基の小穴を確認した。炉跡は，不整方形状の焼土範囲をもって確認した。床面を燃焼面とする地床炉であり，その位置から判断すると，住居内のほぼ中央付近に位置すると思われる。色調は全体的に均一だが，炉跡中央部に比べ縁辺部は焼け方が弱く，その差は焼土の厚さに表れる。炉跡中央部は，厚さ12cm 程を測るのに対し，縁辺での焼土の厚さは３cm程度である。

小穴は住居内中央付近と壁際で合わせて４基検出した。そのうち主柱穴と考えられるのはＰ１とＰ３で，上端の径は30～48cm，床面からの深さは20～28cmである。Ｐ１－Ｐ３間を柱穴の中央で測ると2.0mになり，これらは規模や位置から主柱穴と考えているが，これらに対応する小穴は確認できなかった。また，Ｐ２は長軸84cm，短軸65cm程の不整方形状を呈し，床面からの深さは最大で45cmを測る。他の小穴と比べて比較的大きいことから，貯蔵穴等の用途が推測される。Ｐ４は壁際に位置し，径18×15cm，深さ12cmを測る。その位置から壁柱穴の一部であると推察される。

遺　　物（図7，写真15）

本住居跡からは，縄文土器片12点が出土している。石器は出土しなかった。このうち５点を図示した。これらの遺物の層位別出土点数は，住居内堆積土ℓ１（６点），Ｐ１ℓ１（４点），Ｐ２ℓ１（２点）である。以下，順次遺物の特徴について概説する。

７図１は粗製深鉢の口縁部資料である。口縁部に向かって僅かに内湾する。口縁直下から縦位の網目状撚糸文が施され，外面には煤の付着が著しい。同図２～５は色調や縄文の特徴から，同一個体のものである可能性が高い粗製深鉢である。２・３は口縁部資料，４・５は体部資料である。外面にはともに斜位の単節縄文が施される。

ま　と　め

本遺構は，直径4.5m程の円形で中央に地床炉を有する竪穴住居跡である。確認された主柱穴は２本で，それに対応する柱穴は重複する３Ａ号住居跡の構築により削平されたものと推測される。

遺構の時期は，出土遺物の特徴から縄文時代晩期中葉に属するものと考えている。周辺遺構との関係をみると，本遺構の周囲に位置する土坑群は，出土遺物の特徴から同時期もしくは近接した時期の遺構であろう。この区域に該期の小規模な集落が構成されていたと推定される。

３Ａ・３Ｂ号住居跡　ＳＩ３Ａ・３Ｂ

遺　　構（図８・９・11，写真７～９）

本住居跡は，調査区中央付近のＣ３グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高299.4～299.6m程の北向き緩斜面である。検出面はＬⅡ上面であり，検出時にカマド付近に焼土や炭化物の集中範囲が認められた。遺構北側で２号住居跡と重複し，本遺構のほうが新しい。

本遺構の検出の際に，本遺構西壁が２面あることを確認し，２時期に分かれることを判断した。新しい住居跡を３Ａ号住居跡，古い住居跡を３Ｂ号住居跡とした。以下，３Ａ号住居跡（図８・９），３Ｂ号住居跡（図11）の順に説明する。

３Ａ号住居跡　３Ａ号住居跡は，図８中に１点鎖線で示した３Ｂ号住居跡の西壁の80～100cm程東側に並行した形で，さらに掘り込んで構築されている。本遺構は，床面を中心に炭化材や焼土塊が多量に確認できたことから，火災を受けた遺構と判断した。その炭化材の分布状況は図８に示した。炭化材は遺構の中央付近で比較的多く確認できた。柱状のものや板状のものが認められるが，上屋構造の詳細な部位までは復元できない。これら炭化材の出土状況は，床面より浮いた状態であるものが多い。焼土塊はその炭化材の下部で確認でき，特に中央付近において顕著に認められた。

遺構内堆積土は，色調および混入物から４層に分層できた。ℓ１は黒褐色土の均質層で，自然流入土と考えられる。ℓ２は，にぶい黄褐色土で，焼土粒・炭化物粒を含み，黒褐色土とＬⅢに類似する褐色土の混土が認められることから人為堆積土と判断した。ℓ３は黒褐色粘質土で炭化物粒を多く含み，その様相から人為堆積と思われる。ℓ４は，その様相から貼床構築土と判断した。

遺構の平面形は正方形で，軸長は北－南・東－西ともに3.4m，カマドの向きを基準とした主軸方位は，真北から21°西を指す。検出面からの深さは最大52cmを測り，北へ向かうにつれて浅くなる。

周壁は，いずれも比較的急峻である。床面はＬⅢを掘り込んで構築され，全体的に踏み締まりが確認でき，貼床構築土で平坦に整えている。貼床の厚さは２～10cmを測る。柱穴や壁溝などは検出できなかった。

遺構内施設として，カマドを検出した。カマドは北壁中央部に付設され，天井部は遺存していない。袖部は崩れているものの，両袖とも遺存する。カマドは貼床を施した後，褐色粘質土（ℓ７）を用いて袖部を形成し，暗褐色土（ℓ５）およびにぶい黄褐色土（ℓ６）を用いて燃焼部底面を整えている。煙道部の一部を含むカマドの遺存規模は，全長が1.15m，最大幅0.9mを測る。カマド内堆積土は７層に分層できた。ℓ１は薄い堆積であることから，その用途は不明であるが，ℓ２は廃絶土，ℓ３は燃焼部天井崩落土，ℓ４は焼土硬化面，ℓ５～７はカマド構築土と判断した。

燃焼部の奥行きは50cm，最大幅は60cmで，その底面は煙道部に向かって緩やかに立ち上がり，強く被熱している。遺存状態は良好で，燃焼部上面および焼土層からは土師器甕の破片が出土している。袖部の内側は被熱によって，厚さ２～５cmの酸化壁を形成している。加えて，煙道部から燃焼部前部の床面にかけて熱を受け酸化していることから，頻度の高い使用が想定される。

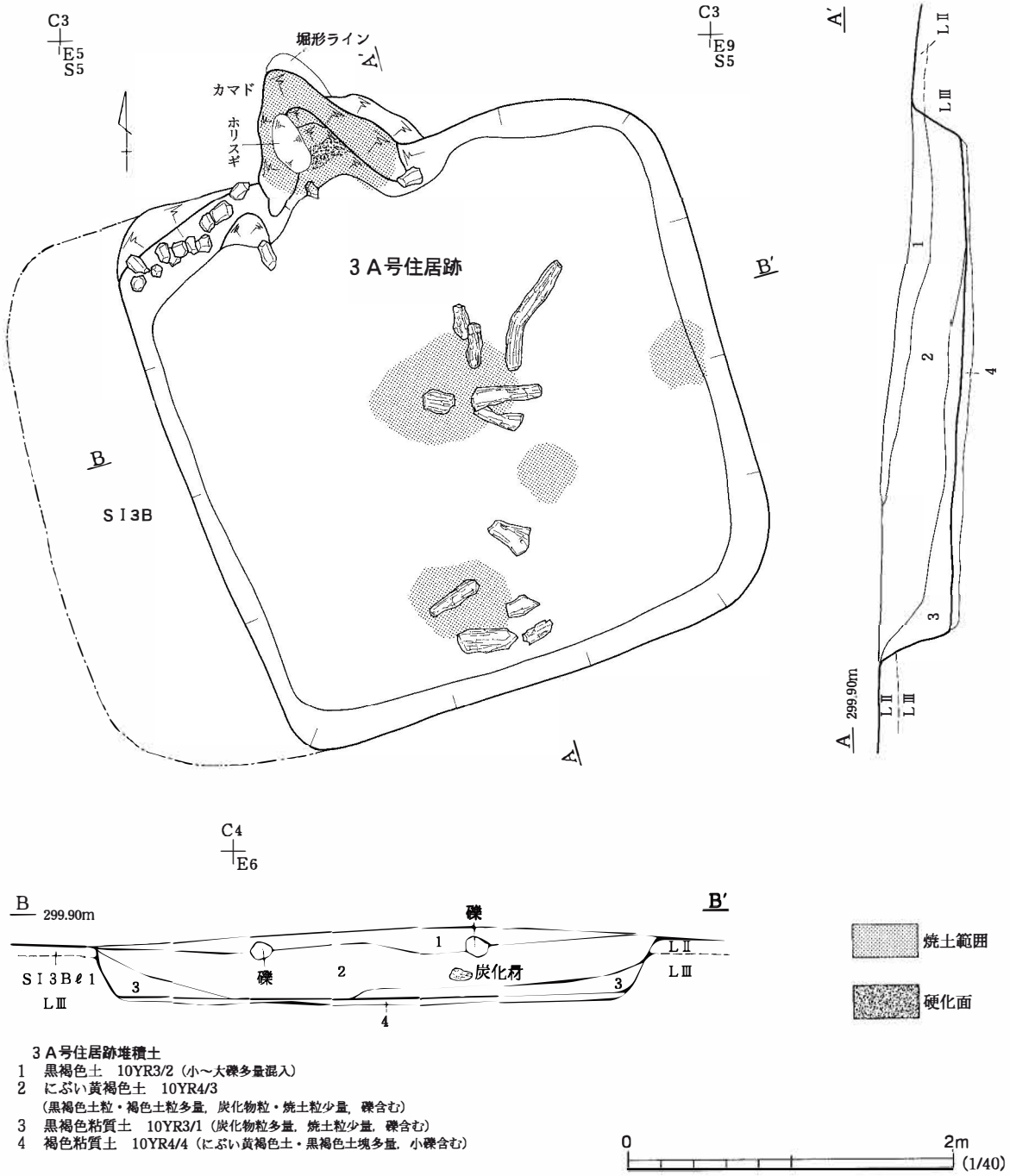
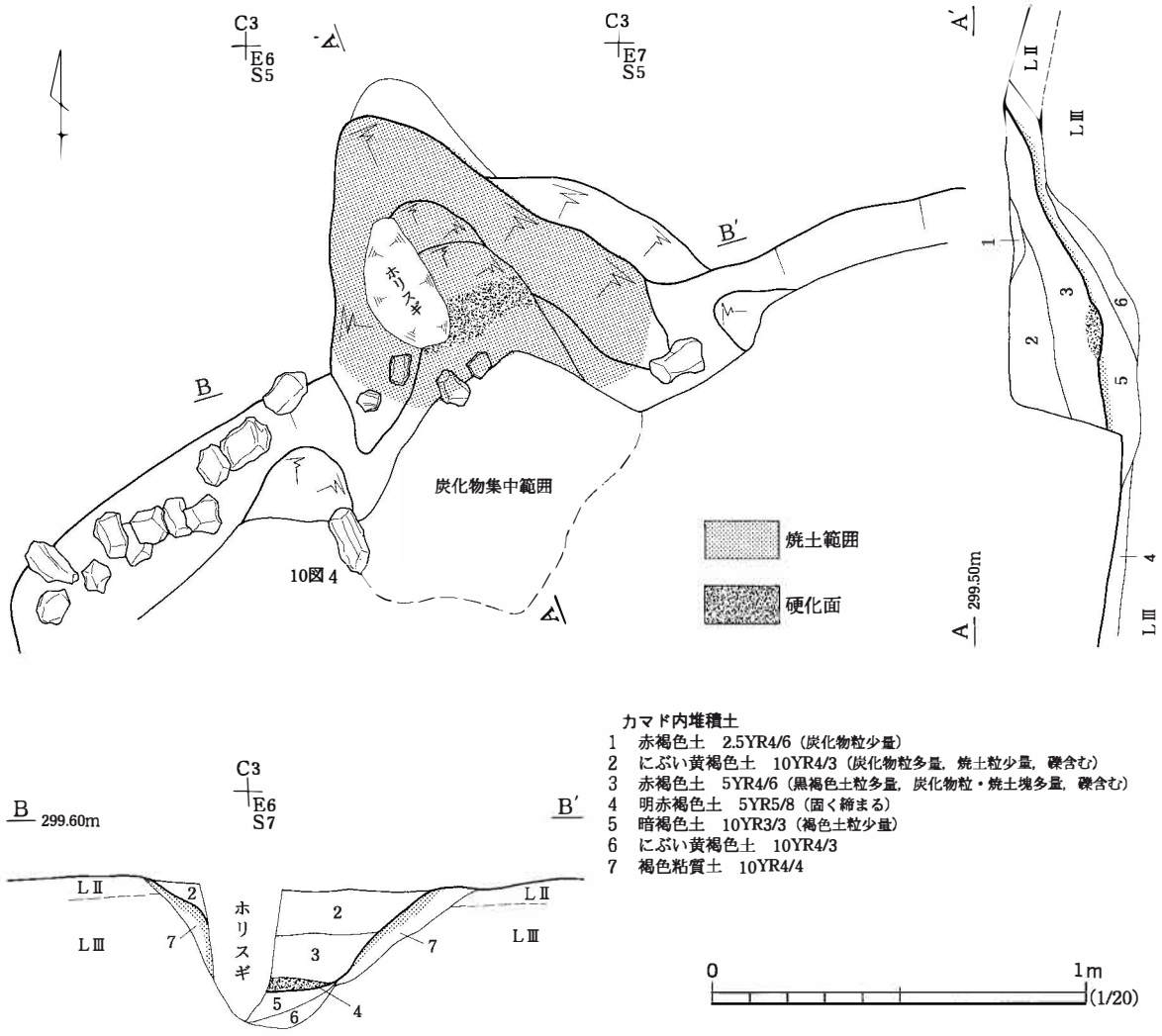


図８　３Ａ号住居跡

３Ｂ号住居跡　３Ｂ号住居跡は，３Ａ号住居跡の西隣に位置する。当初は３Ａ号住居跡と同一遺構として長方形状のプランで検出されたが，掘り込み段階で新旧関係が明らかになり，３Ａ号住居跡は，本住居跡をさらに掘り込む形で改築しているため，遺構の大半は，消失している。

堆積土は薄く明確ではないが，堆積状況や土質から人為堆積であると判断している。

西壁は3.3mを測り，北壁は0.8m，南壁は0.9mが遺存していた。遺構東半部分は，３Ａ号住居跡に掘り込まれているため，全体の平面プランは不明である。検出面からの深さは，南壁が12cm前後，北側は３～５cm程である。床面はＬⅢを掘り込んで構築されほぼ平坦であるが，若干北方向に



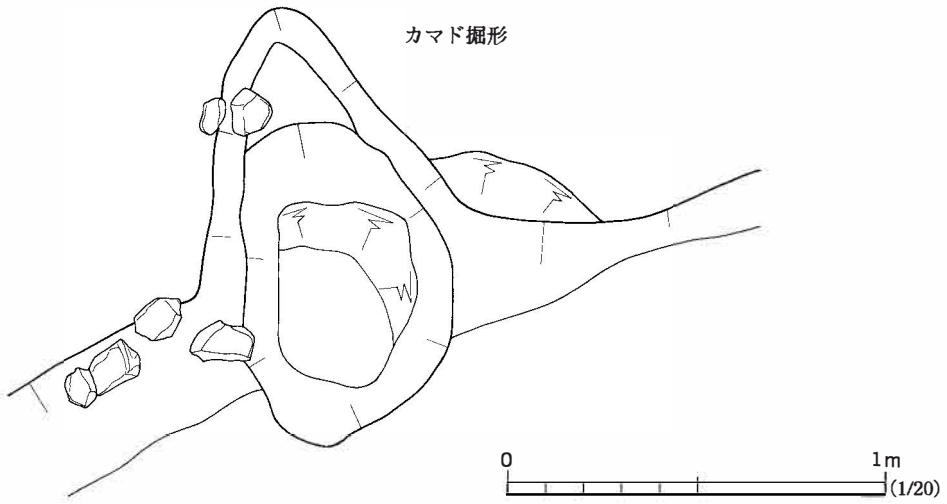


図９　３Ａ号住居跡カマド

傾斜している。また，礫の露出が著しく，踏み締まりは認められなかった。

遺構内施設として，小穴を２基検出した。Ｐ１は径20×18㎝，深さ18㎝，Ｐ２は26×24㎝，深さ９㎝を測る。ともに壁際に位置することから側柱穴の可能性がある。

遺　　物（図10，写真15）

本住居跡から出土した遺物は，土師器片29点，カマド支脚１点である。これらは全て３Ａ住居跡に伴うものである。土師器片は大半が杯で，甕は11点である。このうち４点を図示した。小片のため割愛した土師器杯は，ほとんどが内面に黒色処理とヘラミガキを施しており，黒色処理を施さない破片も５点出土している。これは器面が赤褐色であるため，二次的な比熱のため黒色処理が失われたためである。また，細片であるが口縁部下に段差を有するものも見受けられる。

これらの遺物の層位別出土点数は，住居内堆積土ℓ１（１点），同ℓ２（８点），カマドℓ１（６点），カマドℓ２（５点），カマドℓ３（９点）である。床面からの出土が全くなく，カマド内からの出土が大半を占める。これは，火災の状況から住居廃絶時に住居内での使用品は全て持ち出し，廃棄物を遺棄した結果だと思われる。

以下，順次遺物の特徴について概説する。

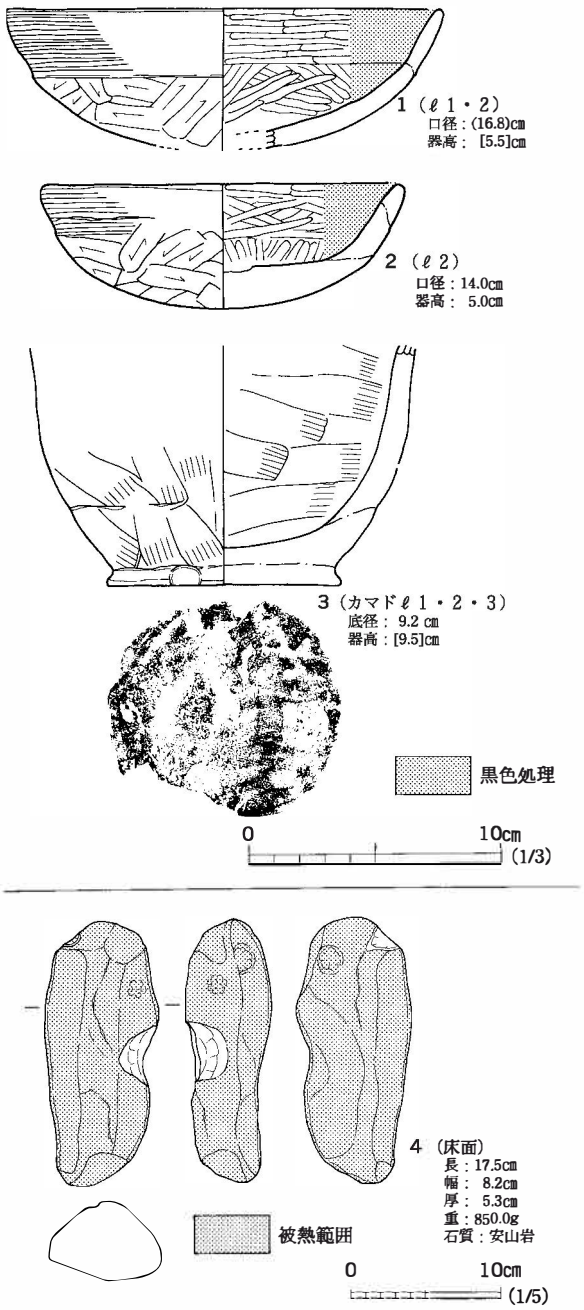


図10　３Ａ号住居跡出土遺物

10図１・２はいずれも非ロクロ成形の丸底の土師器杯である。１は底部から緩やかに内湾して立ち上がり，口縁部下にゆるい段差を有する。外面の調整は口縁部が横ナデ，体部下半がヘラケズリである。内面はヘラミガキ調整後に黒色処理が施されている。２はほぼ完形の土器で，焼土や炭化材と混じってℓ２から出土した。器厚が厚く底部から内湾気味に立ち上がり，口縁部直下での段差は認められない。外面の調整は口縁部が横ナデ，体部下半がヘラケズリである。内面はヘラミガキ調整後に黒色処理が施されている。

同図３はカマドから出土した非ロクロ整形の土師器甕で，底部から体部下半にかけて遺存する。外面底部は平底で，体部はゆるく内湾しながら立ち上がる。器面調整は，体部下端は縦・斜方向の

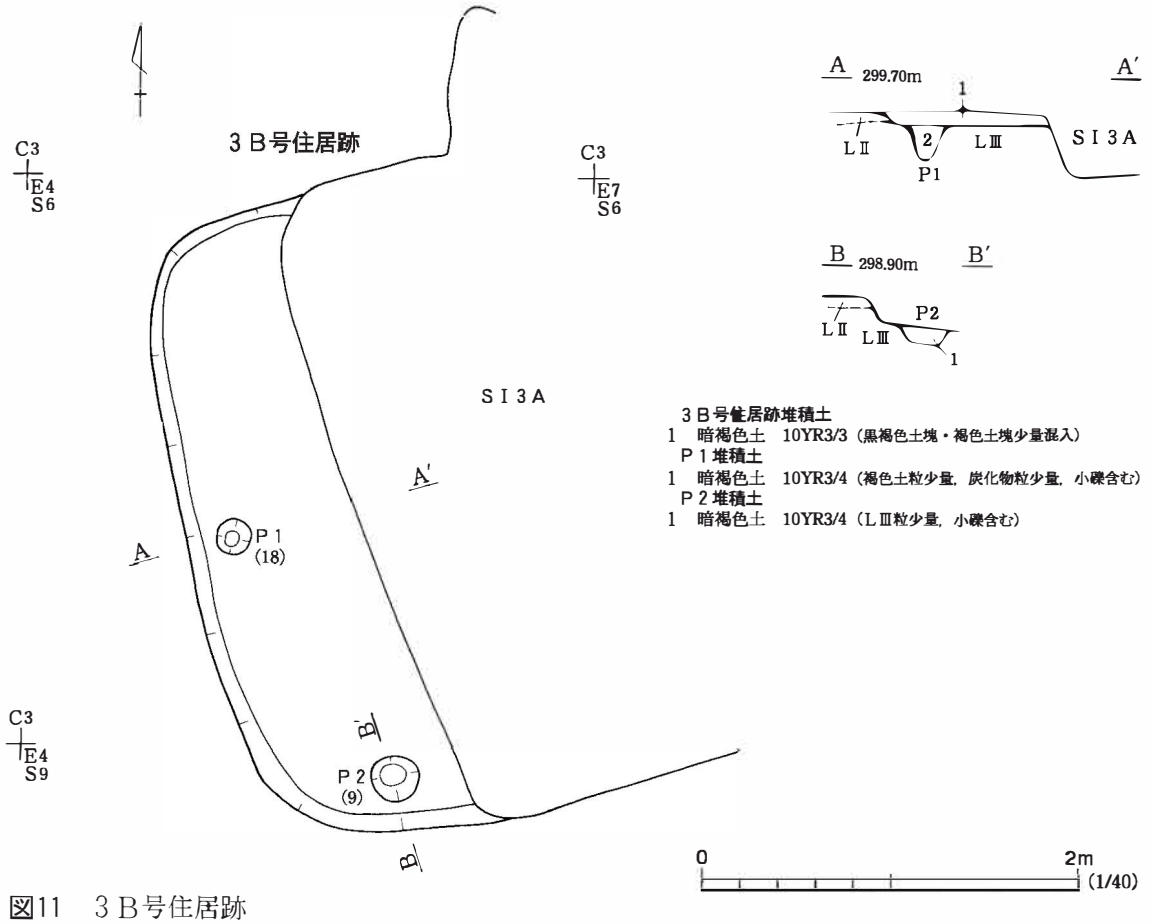


図11　３Ｂ号住居跡

ナデ，内面は横方向のナデが施されている。

同図４はカマド燃焼部の焼土範囲から倒れた状態で出土した。いびつな円柱状で，表面が焼けて劣化しており，カマドの支脚として使われたものと考える。

ま と め

本住居跡は，本来は２軒の竪穴住居跡であるが，調査の段階で，古い住居を利用して新しい住居を構築した痕跡が確認されたため，同一番号を付した。古い方が３Ｂ号住居跡であり，新しい方が３Ａ号住居跡である。３Ｂ号住居跡は，壁柱穴を有し，床面はＬⅢを若干掘り込んだだけの住居跡であったが，３Ａ号住居跡になると，床面をさらに掘り込んで全体に貼床を施しているが，上部構造の様相を示す柱穴等の遺構の存在は認められないため，不明な部分が多い。また，３Ａ住居跡は確認できた炭化材から，火災をうけて廃絶したと判断しているが，出土遺物が少ないことから，廃絶に伴い故意に火をかけたものと判断した。本住居跡の所属時期は，３Ａ号住居跡から出土した遺物の特徴から，1号住居跡とほぼ同時期の奈良時代８世紀前半と推定され，３Ｂ号住居跡もほぼ同時期であろうと思われる。

第３節　土　　坑

今回の調査で検出された土坑は19基である。これらの土坑群は，調査区中央付近に比較的集中して認められた。重複するものは殆どなかったが，今回の調査区で検出できた土坑群は，竪穴住居跡に比較的近接していることから，生活域を構成する一連の遺構群と考えられる。時期・性格等については，出土遺物が僅かで不明なものが多いが，１号・２号土坑の様に，多数の土器片が遺棄されたものも認められることから，縄文時代晩期中葉頃に帰属するものと判断している。

１号土坑　ＳＫ１（図12・16，写真10・16）

本遺構は，調査区中央やや西寄りのＢ３グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高299.0m程の北向き緩斜面である。検出面はＬⅢ上面であるが，この付近ではＬⅢ自体が削平を受けているため，本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。重複する遺構はないが，近接してＳＫ４やＳＫ11等が存在する。

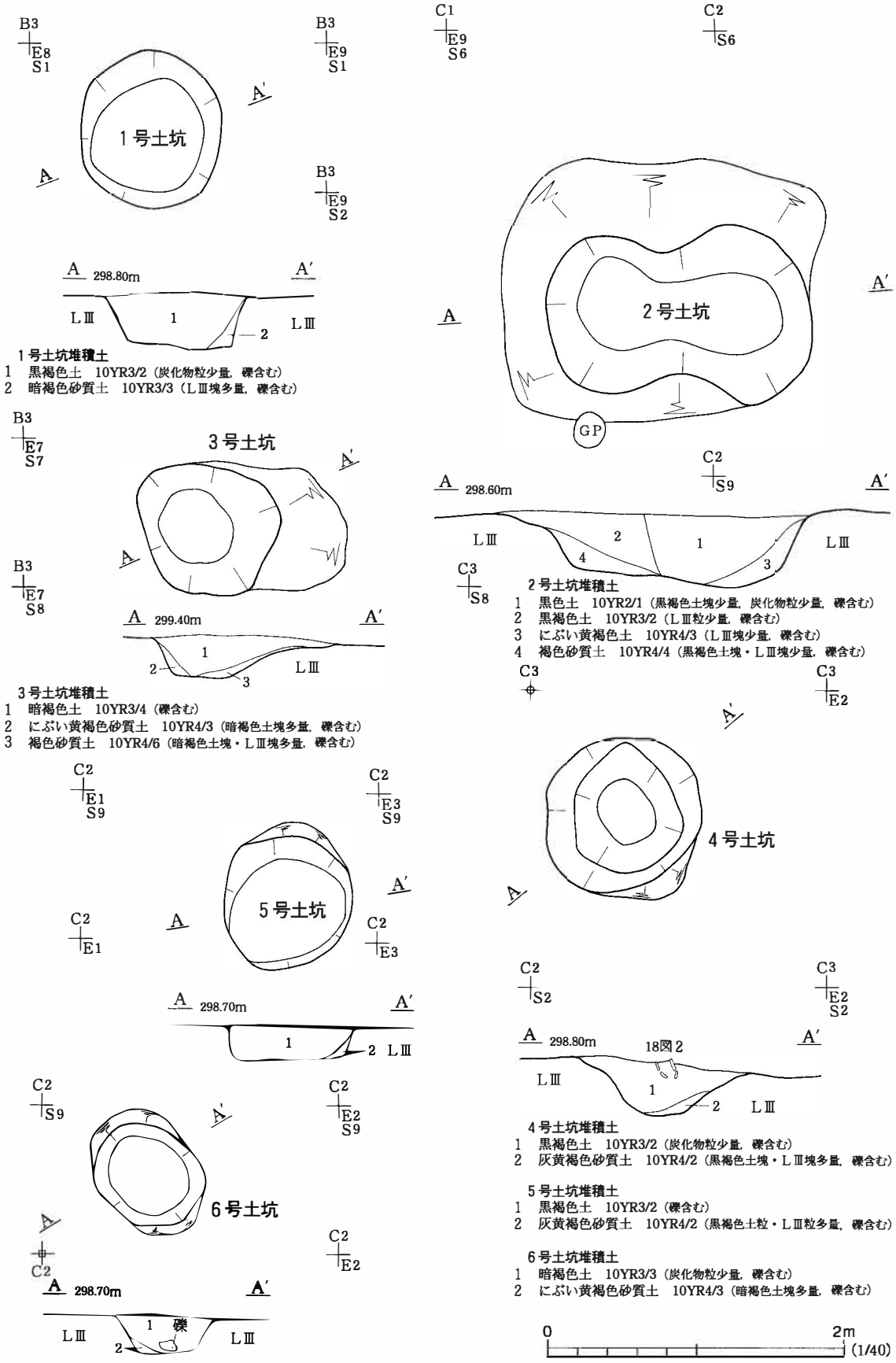
遺構内堆積土は，色調および混入物から２層に分層できた。ともに礫を多く含み，ℓ１は黒褐色土で，炭化物粒や多量の縄文土器を含んでおり，人為堆積の様相を呈する。ℓ２は壁際からの流入が認められるため，自然堆積と考えられる。

遺構の平面形は，円形基調を呈し，その規模は直径1.10mを測る。周壁は，底面から急峻な立ち上りとなり，底面はほぼ平坦である。検出面から最深部までの深さは40cmを測る。

遺物は，堆積土中より縄文土器・石器片が88点出土している。そのうち縄文土器24点（16図１～24），石製品１点（17図１）を図示した。１は口縁部が直立または部分的に内湾して体部上半が僅かに膨らみ，底部にむかってすぼまっていく器形の粗製の深鉢である。口縁部は無文であるが，口縁直下の体部全面に縦位を主体とした粗い撚糸文が施される。２は粗製深鉢で複合口縁を呈し，口縁は無文，胴部は撚糸文が施される。３も粗製深鉢で口縁部が薄くつまみ上げられ僅かに外反し，体部には撚糸文が施される。４・５・８もまた粗製深鉢の口縁資料で口縁直下から４は網目状撚糸文，５・８は撚糸文が施される。６は半精製の鉢であろうか。口縁部が波状を呈し，外面には１条の沈線が巡るもので沈線下には単節縄文が施される。７は無文の浅鉢・鉢である。

９～22は体部破片である。９・10は間隔の狭い撚糸文，11・13～18は粗い撚糸文，12・19は網目状撚糸文，20・21は条痕文が施されている。22は鉢・壺の体部であろうか。羽状縄文が施される。23・24は粗製深鉢の底部と推測される。17図１は石皿である。偏平礫の平滑面を使用しており，摩耗範囲が認められる。

本遺構は出土した縄文土器の特徴から，縄文時代晩期中葉の年代観と考えている。周囲には該期の土坑群が集中することから，隣接する遺構群との関連性が窺える。また，円形基調を呈し，底面がほぼ平坦であることから，構築当初は「貯蔵穴」として機能していたが，廃絶後に「ゴミ穴」等



1号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2（炭化物粒少量，礫含む）
2　暗褐色砂質土　10YR3/3（LⅢ塊多量，礫含む）

2号土坑堆積土
1　黒色土　10YR2/1（黒褐色土塊少量，炭化物粒少量，礫含む）
2　黒褐色土　10YR3/2（LⅢ粒少量，礫含む）
3　にぶい黄褐色土　10YR4/3（LⅢ塊少量，礫含む）
4　褐色砂質土　10YR4/4（黒褐色土塊・LⅢ塊少量，礫含む）

3号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4（礫含む）
2　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3（暗褐色土塊多量，礫含む）
3　褐色砂質土　10YR4/6（暗褐色土塊・LⅢ塊多量，礫含む）

4号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2（炭化物粒少量，礫含む）
2　灰黄褐色砂質土　10YR4/2（黒褐色土塊・LⅢ塊多量，礫含む）

5号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2（礫含む）
2　灰黄褐色砂質土　10YR4/2（黒褐色土粒・LⅢ粒多量，礫含む）

6号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3（炭化物粒少量，礫含む）
2　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3（暗褐色土塊多量，礫含む）

図12　1～6号土坑

に利用された可能性が高いと考えている。

２号土坑　ＳＫ２（図12・17，写真10・16・17）

本遺構は，調査区中央やや西寄りのＢ２・Ｃ２グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高298.8m程の北向き緩斜面である。検出面はＬⅢ上面であるが，この付近ではＬⅢ自体が削平を受けているため，本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。ＧＰと重複するが，検出状況から本遺構の方が古い。また，近接してＳＫ６が存在する。

遺構内堆積土は，色調および混入物から４層に分層できた。ともに礫を多く含み，ℓ１は黒色土で，黒褐色土塊や多量の縄文土器を含んでおり，人為堆積の様相を呈する。ℓ２は黒褐色土でＬⅢに相当する褐色粒を含み，人為堆積の様相を呈する。ℓ３・４は壁際からの流入が認められるため，自然堆積と考えられる。

遺構の平面形は，長軸2.15m，短軸1.72m程の不整方形を呈するが，急峻な落ち込み面では瓢箪形の形状を呈する。ℓ１とℓ２の違いから，円形状の土坑の重複も考えられるが，遺構内の傾斜部分では重複が認められなかったため一括して扱うこととした。底面はほぼ平坦であるが，東半部では中央付近が若干窪む。検出面から最深部までの深さは50cmを測る。

遺物は，堆積土中より縄文土器・石器片が88点出土している。そのうち16点を図示した（17図２～17）。17図２はその形状から注口土器と思われる。注口部を欠損するが，口頸部と体部の２段で構成された形態で，口頸部は直線的に内傾し，算盤玉形の形制を呈する。肩部は張り出し隆帯状になり，上下交互につまみ上げられた波状の突起列が巡る。口縁端部は外に張り出し，その外側は波状の突起列が配される。頸部は上端に２条，下端に１条の沈線が巡り，その間には横方向回転の縄文が施され，その後沈線によりＪ字形とＣ字形の文様の組み合わせで施文される。体下半部は丁寧なケズリが観察される。３は精製土器で鉢・壺の口縁部である。突起が付き，沈線下には刺突文が配される。４～14はいずれも粗製土器の破片である。４～６は深鉢の口縁部資料である。４は口縁部が薄くつまみ上げられ，体部には撚糸文が施される。５は４と同様，口縁部は無文であるが，体部には櫛歯状条痕文が施されている。６は複合口縁を呈し口縁は無文，胴部は撚糸文が施される。７～17は体部破片である。施文方法を観察すると，７・８・11・13は粗い撚糸文，９は網目状撚糸文，10・12は間隔の狭い撚糸文，14は条痕文と撚糸文が観察される。15・16は鉢・壺の体部であろうか。羽状縄文が施される。17は粗製深鉢の底部と推測される。

本遺構は出土した縄文土器の特徴から，縄文時代晩期中葉，大洞Ｃ１式期の年代観と考えている。周囲には該期の土坑群が集中することから，隣接する遺構群との関連性が窺える。ℓ１からは多数の土器片が認められたことから，性格としては「ゴミ穴」等に利用された可能性が高いと考えている。

３号土坑　ＳＫ３（図12・17，写真10・17）

本遺構は，調査区中央やや西寄りのＢ３グリッドに位置する。遺構が構築された周辺は，標高299.4m程の北向き緩斜面である。重複する遺構はない。検出面はＬⅢ上面であるが，この付近ではＬⅢ自体が削平を受けているため，本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。

遺構内堆積土は，色調および混入物から３層に分層できた。ともに礫を多く含み，上層のℓ１は，暗褐色土の均質層で自然堆積と考えられる。ℓ２・３はいずれも壁際からの流れ込みが認められることから，同様に自然堆積と考えられる。

遺構の平面形は，楕円形状を呈し，その規模は長軸1.35m，短軸0.90mを測る。周壁は，東側は緩やかな立ち上がりとなるが，他は底面から急峻な立ち上りとなる。底面は中央付近が若干窪み，検出面から最深部までの深さは28cmを測る。検出面から最深部までの深さは28cmを測る。

遺物は，堆積土中より縄文土器が12点出土した。そのうち２点を図示した（17図18・19）。18は粗製土器の破片で，目の細かい撚糸文が施される。19は粗製土器の口縁部付近の資料で，口縁部直下には刻み目が施され，体部には撚糸文が施される。図示できなかった他の資料は細片であるが，18と同一個体のものや網目状撚糸文を施すものが認められる。

本遺構は出土した縄文土器の特徴から，縄文時代晩期中葉の年代観と考えている。周囲には該期の土坑群が集中することから，隣接する遺構群との関連性が窺える。しかし，明確な性格等は不明である。

４号土坑　ＳＫ４（図12・18，写真11・17）

本遺構は，調査区中央やや西寄りのＣ３グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高299.0m程の北向き緩斜面である。検出面はＬⅢ上面であるが，この付近ではＬⅢ自体が削平を受けているため，本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。重複する遺構はないが，近接してＳＫ１やＳＫ６等が存在する。

遺構内堆積土は，色調および混入物から２層に分層できた。ともに礫を多く含み，ℓ１は黒褐色土で，炭化物粒や多量の縄文土器を含み，人為堆積の様相を呈する。ℓ２は壁際からの流入が認められるため，自然堆積と考えられる。

遺構の平面形は，円形基調を呈し，その規模は直径1.10mを測る。周壁は，底面から下半部は急峻な立ち上りとなるが，上半部は緩やかに立ち上がる。底面は平坦ではなく，中央部分が窪んでおり，鍋底状である。検出面から最深部までの深さは38cmを測る。

遺物は，堆積土中より縄文土器が31点出土している。そのうち３点を図示した（18図１～３）。１は口縁部が外反して体部上半が僅かに膨らみ，底部にむかってすぼまっていく器形の粗製の深鉢である。口縁部が波状口縁で無文であるが，口縁直下の体部全面に縦位の撚糸文が施される。２は長胴壺で，体部は肩を持たず，最大径は体部の中程にある形態である。大突起が付された口縁部上

端に刻み目が加えられ小波状を呈する。口縁部には２条の沈線を巡らし，その２線間に刺突文を加えている。また，体部下半にも２条の沈線を巡らし，それを境にして，上では単節縄文を地文として綾絡文が施され，下では丁寧なケズリ調整が施されている。３は粗製深鉢で複合口縁となるものである。口縁部と体部に網目状撚糸文が施される。

本遺構は出土した縄文土器の特徴から，縄文時代晩期中葉の年代観と考えている。周囲には該期の土坑群が集中することから，隣接する遺構群との関連性が窺える。ℓ１からは多数の土器片が認められたことから，性格としては「ゴミ穴」等に利用された可能性が高いと考えている。

５号土坑　ＳＫ５（図12・18，写真11・17）

本遺構は，調査区中央やや西寄りのＣ２・３グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高298.9m程の北向き緩斜面である。検出面はＬⅢ上面であるが，この付近ではＬⅢ自体が削平を受けているため，本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。重複する遺構はないが，近接してＳＫ４やＳＫ６等が存在する。

遺構内堆積土は，色調および混入物から２層に分層できた。ともに礫を多く含み，ℓ１は黒褐色土で，炭化物粒を含んでおり，人為堆積の様相を呈する。ℓ２は壁際からの流入が認められるため，自然堆積と考えられる。

遺構の平面形は，円形基調を呈し，その規模は直径0.90mを測る。周壁は，底面から急峻な立ち上りとなるが，南東部分ではオーバーハングしている。本来的には壁面はオーバーハングないしは垂直気味になるものと推察される。底面は平坦であり，検出面から最深部までの深さは25cmを測る。

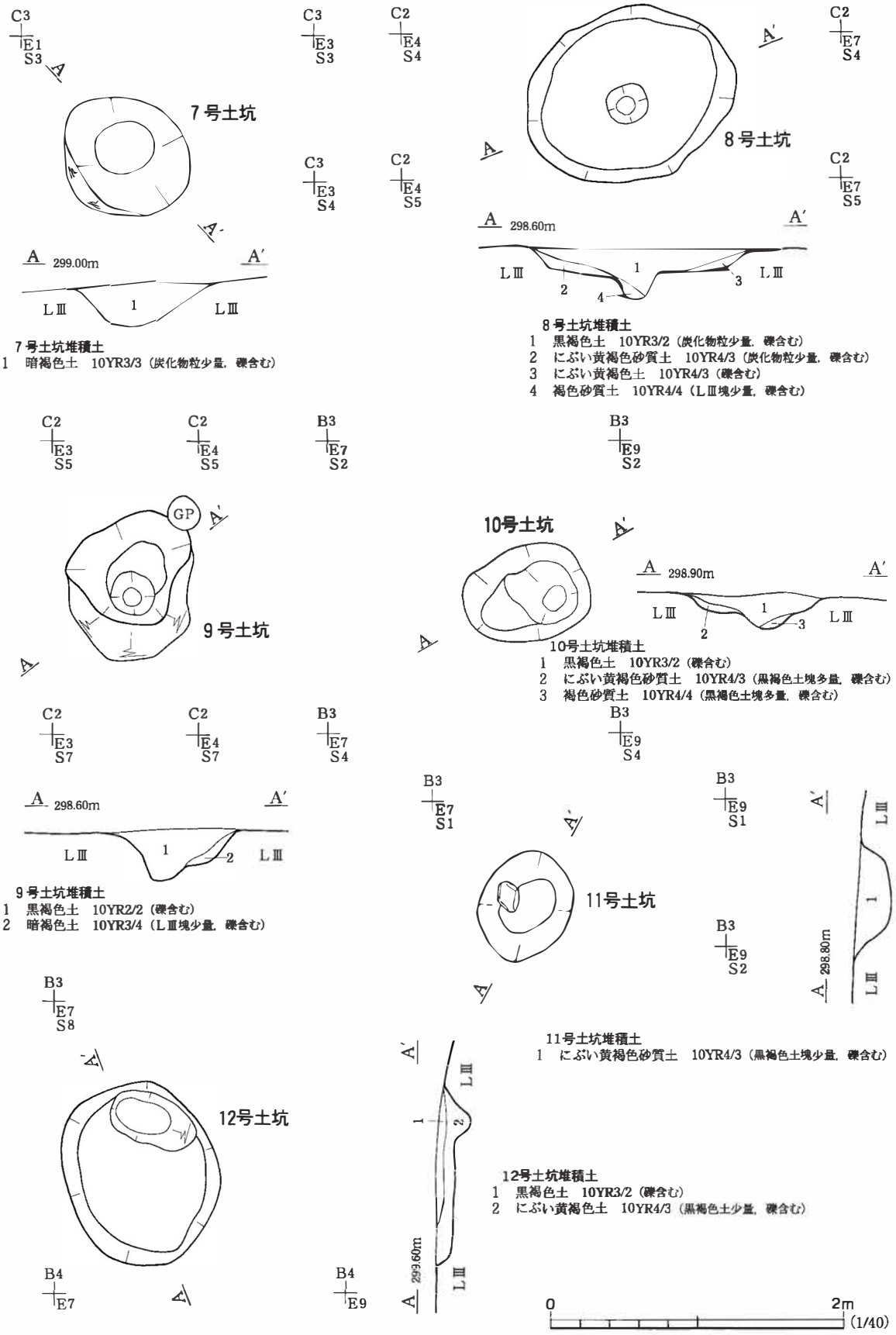
遺物は，堆積土中より縄文土器が13点出土している。そのうち３点を図示した。18図４は粗製土器で複合口縁となるものである。口縁部に２条の沈線を一巡させ，体部に粗い撚糸文が施される。５・６はともに粗製土器の破片で縦位の撚糸文が施される。他の10点については細片であるが，撚糸文が施したものや，深鉢の底部破片が認められる。

本遺構は出土した縄文土器の特徴から，縄文時代晩期中葉の年代観と考えている。周囲には該期の土坑群が集中することから，隣接する遺構群との関連性が窺える。また，円形基調を呈し，底面がほぼ平坦であることから，構築当初は「貯蔵穴」であった可能性が高いと考えている。

６号土坑　ＳＫ６（図12・18，写真11・17）

本遺構は，調査区中央やや西寄りのＣ２グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高298.9m程の北向き緩斜面である。検出面はＬⅢ上面であるが，この付近ではＬⅢ自体が削平を受けているため，本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。重複する遺構はないが，近接してＳＫ２やＳＫ４等が存在する。

遺構内堆積土は，色調および混入物から２層に分層できた。ともに礫を多く含み，ℓ１は暗褐色土で，炭化物粒を含んでおり，人為堆積の様相を呈する。ℓ２は壁際からの流入が認められるため，



7号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3（炭化物粒少量，礫含む）

8号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2（炭化物粒少量，礫含む）
2　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3（炭化物粒少量，礫含む）
3　にぶい黄褐色土　10YR4/3（礫含む）
4　褐色砂質土　10YR4/4（LⅢ塊少量，礫含む）

9号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR2/2（礫含む）
2　暗褐色土　10YR3/4（LⅢ塊少量，礫含む）

10号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2（礫含む）
2　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3（黒褐色土塊多量，礫含む）
3　褐色砂質土　10YR4/4（黒褐色土塊多量，礫含む）

11号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3（黒褐色土塊少量，礫含む）

12号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2（礫含む）
2　にぶい黄褐色土　10YR4/3（黒褐色土少量，礫含む）

図13　７～12号土坑

自然堆積と考えられる。

遺構の平面形は，楕円形状を呈し，その規模は長軸0.92m，短軸0.66mを測る。周壁は，底面から急峻な立ち上りとなる。底面は平坦であり，検出面から最深部までの深さは28cmを測る。

遺物は，堆積土中より縄文土器が９点出土している。そのうち１点を図示した。18図７は鉢・壺の体部破片であろうか。単節縄文を羽状に施し結節部の圧痕が認められる。他の８点については細片であるが，撚糸文や網目状撚糸文を施したものが認められる。

本遺構は出土した縄文土器の特徴から，縄文時代晩期中葉の年代観と考えている。周囲には該期の土坑群が集中することから，隣接する遺構群との関連性が窺える。しかし，明確な性格等は不明である。

７号土坑　ＳＫ７（図13，写真11）

本遺構は，調査区中央やや西寄りのＣ３グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高299.2m程の北向き緩斜面である。検出面はＬⅢ上面であるが，この付近ではＬⅢ自体が削平を受けているため，本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。重複する遺構はないが，近接してＳＩ２等が存在する。

遺構内堆積土は，暗褐色土の単一層で，その様相から自然堆積と判断した。

遺構の平面形は，楕円形状を呈し，その規模は長軸0.96m，短軸0.84mを測る。周壁は，底面から比較的緩やかな立ち上りとなる。底面は平坦ではなく，中央部分が窪んでおり，鍋底状である。検出面から最深部までの深さは32cmを測る。

本遺構内からは出土遺物がなく，明確な所属時期は不明である。しかし，近接する遺構群との関連から，縄文時代晩期中葉頃の年代観と考えている。

８号土坑　ＳＫ８（図13・18，写真11・17）

本遺構は，調査区中央やや西寄りのＣ２グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高298.8m程の北向き緩斜面である。検出面はＬⅢ上面であるが，この付近ではＬⅢ自体が削平を受けているため，本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。重複する遺構はないが，近接してＳＫ９が存在する。

遺構内堆積土は，色調および混入物から４層に分層できた。全て礫を多く含み，ℓ１は黒褐色土で，炭化物粒を含んでおり，その状況から自然堆積の様相を呈する。ℓ２～４は壁際からの流入が認められるため，自然堆積と考えられる。

遺構の平面形は，楕円形状を呈し，その規模は長軸1.45m，短軸1.15mを測る。周壁は，底面から比較的緩やかな立ち上りとなる。底面はほぼ平坦であり，検出面から最深部までの深さは20cmを測る。また，底面の中央付近に直径25cmの窪みが認められた。当初は重複関係かと推測したが，堆積土ℓ１が窪みに入り込んであるため，遺構内施設としたが，用途は不明である。

遺物は，堆積土中より縄文土器が３点出土している。そのうち１点を図示した。18図８は粗製土器の破片で縦位の間隔の狭い撚糸文が施される。他の２点については細片であるが，撚糸文を施したものが認められる。

本遺構は出土した縄文土器の特徴から，縄文時代晩期中葉の年代観と考えている。周囲には該期の土坑群が集中することから，隣接する遺構群との関連性が窺える。しかし，明確な性格等は不明である。

９号土坑　ＳＫ９（図13・18，写真12・17）

本遺構は，調査区中央やや西寄りのＣ２グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高298.8m程の北向き緩斜面である。検出面はＬⅢ上面であるが，この付近ではＬⅢ自体が削平を受けているため，本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。ＧＰと重複するが，検出状況から本遺構の方が古い。また，近接してＳＫ８が存在する。

遺構内堆積土は，色調および混入物から２層に分層できた。共に自然堆積と考えられる。

遺構の平面形は，不整な楕円形を呈し，その規模は長軸1.05m，短軸0.84mを測る。周壁は，底面から急峻な立ち上りとなる。底面は，直径28cmの窪みが認められるため凹凸であり，検出面から最深部までの深さは32cmを測る。

本遺構内からは出土遺物がなく，明確な所属時期は不明である。しかし，近接する遺構群との関連から，縄文時代晩期中葉頃の年代観と考えている。

10号土坑　ＳＫ10（図13・18，写真12・17）

本遺構は，調査区中央やや西寄りのＢ３グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高299.1m程の北向き緩斜面である。検出面はＬⅢ上面であるが，この付近ではＬⅢ自体が削平を受けているため，本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。重複する遺構はないが，近接してＳＫ１やＳＫ11等が存在する。

遺構内堆積土は，色調および混入物から３層に分層できた。共に自然堆積と考えられる。

遺構の平面形は，楕円形状を呈し，その規模は長軸0.88m，短軸0.64mを測る。周壁は，底面から比較的緩やかな立ち上りとなる。底面は段状となるため凹凸であり，検出面から最深部までの深さは28cmを測る。

遺物は，堆積土中より縄文土器が７点出土している。いずれも細片であるため図示できなかったが，撚糸文を施したものが認められる。

本遺構は出土した縄文土器の特徴から，縄文時代晩期前葉から中葉にかけての年代観と考えている。周囲には該期の土坑群が集中することから，隣接する遺構群との関連性が窺える。しかし，明確な性格等は不明である。

11号土坑　ＳＫ11（図13・18，写真12・17）

本遺構は，調査区中央やや西寄りのＢ３グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高299.0m程の北向き緩斜面である。検出面はＬⅢ上面であるが，この付近ではＬⅢ自体が削平を受けているため，本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。重複する遺構はないが，近接してＳＫ１やＳＫ10等が存在する。

遺構内堆積土は，にぶい黄褐色土の単一層で，その様相から自然堆積と考えられる。遺構の平面形は，楕円形状を呈し，その規模は長軸0.78m，短軸0.60mを測る。周壁は，底面から比較的緩やかな立ち上りとなる。底面はほぼ平坦であり，検出面から最深部までの深さは24cmを測る。

遺物は，堆積土中より縄文土器が５点出土している。そのうち１点を図示した。18図９は粗製土器の破片であり，粗い撚糸文が施される。他の４点については細片であるが，撚糸文・網目状撚糸文を施したものが認められる。

本遺構は出土した縄文土器の特徴から，縄文時代晩期前葉から中葉にかけての年代観と考えている。周囲には該期の土坑群が集中することから，隣接する遺構群との関連性が窺える。しかし，明確な性格等は不明である。

12号土坑　ＳＫ12（図13・18，写真12・17）

本遺構は，調査区西寄りのＢ３グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高299.4m程の北向き緩斜面である。検出面はＬⅢ上面であるが，この付近ではＬⅢ自体が削平を受けているため，本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。重複する遺構はない。

遺構内堆積土は，色調および混入物から２層に分層できた。共に自然堆積と考えられる。

遺構の平面形は，楕円形状を呈し，その規模は長軸1.25m，短軸1.03mを測る。周壁は，底面から比較的緩やかな立ち上りとなる。底面はほぼ平坦であるが，北壁付近に径62×35cm，床面からの深さ12cm程の窪みが認められる。検出面から最深部までの深さは12cmを測る。

遺物は，堆積土中より縄文土器が１点出土した（18図10）。粗製土器の破片で，目の細かい撚り糸文が施される。

本遺構は出土した縄文土器の特徴から，縄文時代晩期中葉の年代観と考えている。周囲には該期の土坑群が集中することから，隣接する遺構群との関連性が窺える。しかし，明確な性格等は不明である。

13号土坑　ＳＫ13（図14，写真12）

本遺構は，調査区南西寄りのＢ４・Ｃ４グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高299.7m程の北西向き緩斜面である。検出面はＬⅡ上面である。重複する遺構はないが，斜面上位には本遺構の長軸と並行するように，１号溝跡が位置する。

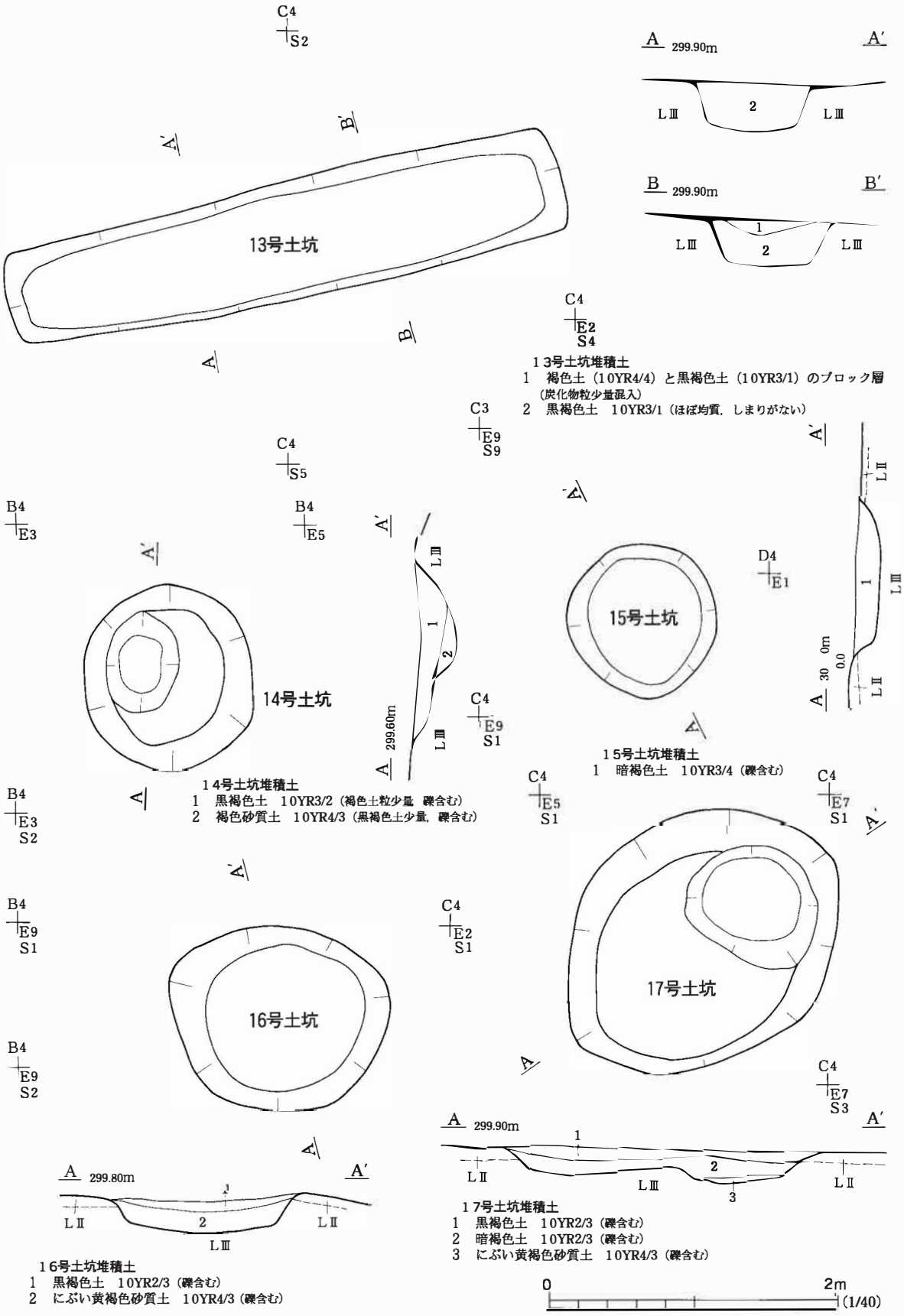

13号土坑
A 299.90m A′
B 299.90m B′
１３号土坑堆積土
1　褐色土（10YR4/4）と黒褐色土（10YR3/1）のブロック層（炭化物粒少量混入）
2　黒褐色土　10YR3/1（ほぼ均質，しまりがない）
14号土坑
１４号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2（褐色土粒少量，礫含む）
2　褐色砂質土　10YR4/3（黒褐色土少量，礫含む）
15号土坑
１５号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4（礫含む）
16号土坑
１６号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR2/3（礫含む）
2　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3（礫含む）
17号土坑
１７号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR2/3（礫含む）
2　暗褐色土　10YR2/3（礫含む）
3　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3（礫含む）
0　2m
(1/40)

図14　13～17号土坑

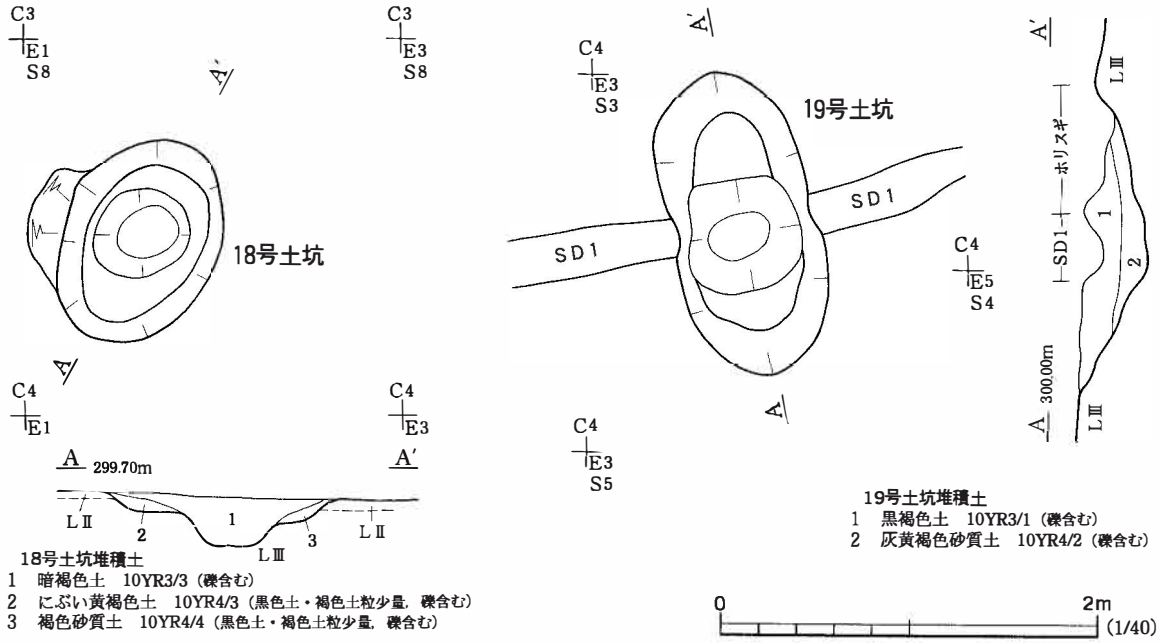


図15　18・19号土坑

遺構内堆積土は，色調および混入物から２層に分層できた。ℓ１は混土であることから人為堆積と判断した。ℓ２は黒褐色土の均質層であり，締まりがなく，その様相から自然堆積と考えられる。

遺構の平面形は，長方形状を呈し，その規模は長軸3.94m，短軸0.85mを測る。周壁は，底面から急峻な立ち上りとなる。底面はほぼ平坦であり，検出面から最深部までの深さは35cmを測る。

本遺構内からは出土遺物がなく，明確な所属時期は不明である。しかし，検出面や他遺構との堆積土の相違から考慮すれば，やや後続した時期の所産と推測され，近接する１号溝跡とは密接な関連性があると思われる。

14号土坑　ＳＫ14（図14，写真12）

本遺構は，調査区西側のＢ４グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高299.4m程の北向き緩斜面である。検出面はＬⅢ上面であるが，この付近ではＬⅢ自体が削平を受けているため，本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。重複する遺構はない。

遺構内堆積土は，色調および混入物から２層に分層できた。全て礫を多く含み，ℓ１は黒褐色土で，褐色土粒を多く含んでおり，その状況から人為堆積の様相を呈する。ℓ２は流入土と判断した。

遺構の平面形は楕円形状を呈し，その規模は長軸1.38m，短軸1.15mを測る。周壁は，底面から比較的緩やかな立ち上りとなる。底面は段状となるため凹凸であり，検出面から最深部までの深さは25cmを測る。遺物は，堆積土中より縄文土器片が３点出土した。小片であるため図示できなかったが，粗製土器の破片で撚り糸文が施されたものが認められる。

本遺構は，以上の特徴から，縄文時代晩期中葉頃の年代観と考えている。周囲には該期の土坑群が集中することから，隣接する遺構群との関連性が窺える。しかし，明確な性格等は不明である。

15号土坑　ＳＫ15（図14，写真12）

本遺構は，調査区中央付近やや南寄りのＣ・Ⅰの３・４グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高299.7m程の北向き緩斜面である。検出面はＬⅡ上面である。重複する遺構はない。

遺構内堆積土は，礫を含む暗褐色土の単一層で，その様相から自然堆積と判断した。

遺構の平面形は，円形基調を呈し，その規模は直径1.05mを測る。周壁は，底面から緩やかな立ち上りとなり，底面はほぼ平坦である。検出面から最深部までの深さは18cmを測る。

本遺構内からは出土遺物がなく，明確な所属時期は不明である。

16号土坑　ＳＫ16（図14，写真12）

本遺構は，調査区南西側のＣ４グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高299.6m程の北向き緩斜面である。検出面はＬⅡ中面である。重複する遺構はないが，近接してＳＫ13やＳＫ18等が存在する。

遺構内堆積土は，色調および混入物から２層に分層できた。全て礫を多く含み，ℓ１は黒褐色土の均質層である。ℓ２はにぶい黄褐色の砂質土であり不純物等を含まない。ともに自然堆積と判断した。遺構の平面形は楕円形状を呈し，その規模は長軸1.53m，短軸1.33mを測る。周壁は，底面から比較的緩やかな立ち上りとなる。底面はほぼ平坦であり，検出面から最深部までの深さは23cmを測る。

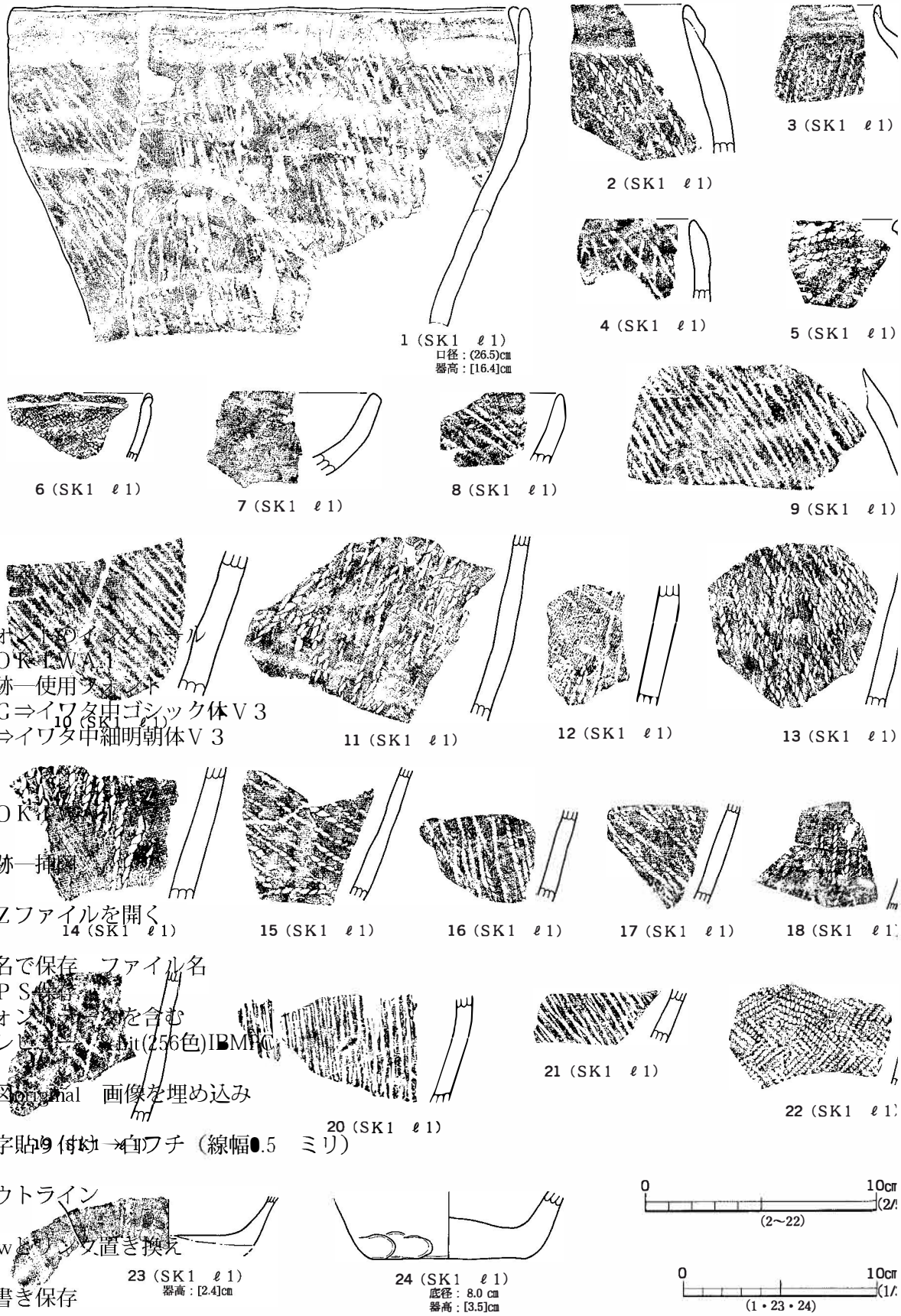
本遺構内からは出土遺物がなく，明確な所属時期は不明である。しかし，近接する遺構群との関連から，縄文時代晩期中葉頃の年代観と考えている。

17号土坑　ＳＫ17（図14，写真13）

本遺構は，調査区中央付近やや南寄りのＣ４グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高299.7m程の北向き緩斜面である。検出面はＬⅡ中面である。重複する遺構はないが，近接してＳＫ19等が存在する。

遺構内堆積土は，色調および混入物から２層に分層できた。全て礫を多く含み，ℓ１は黒褐色土の均質層である。ℓ２はにぶい黄褐色の砂質土であり不純物等を含まない。ともに自然堆積と判断した。遺構の平面形は楕円形状を呈し，その規模は長軸1.53m，短軸1.33mを測る。周壁は，底面から比較的緩やかな立ち上りとなる。底面はほぼ平坦であり，検出面から最深部までの深さは23cmを測る。

本遺構内からは出土遺物がなく，明確な所属時期は不明である。しかし，近接する遺構群との関連から，縄文時代晩期中葉頃の年代観と考えている。



フォントワイ　ストール
ＴＯＫＩＷＡ１
遺跡―使用フォント
　Ｇ⇒イワタ中ゴシック体Ｖ３
Ｍ⇒イワタ中細明朝体Ｖ３
↓
ＴＯＫＩＷＡ１
↓
遺跡―挿図
↓
ＳＺファイルを開く
↓
別名で保存　ファイル名
ＥＰＳ等
フォント　を含む
プレ　　it(256色)BMP
↓
挿図original　画像を埋め込み
↓
文字貼り付け→白フチ（線幅0.5　ミリ）
↓
アウトライン
↓
view　ツ　文置き換え
↓
上書き保存

図16　土坑出土遺物（１）

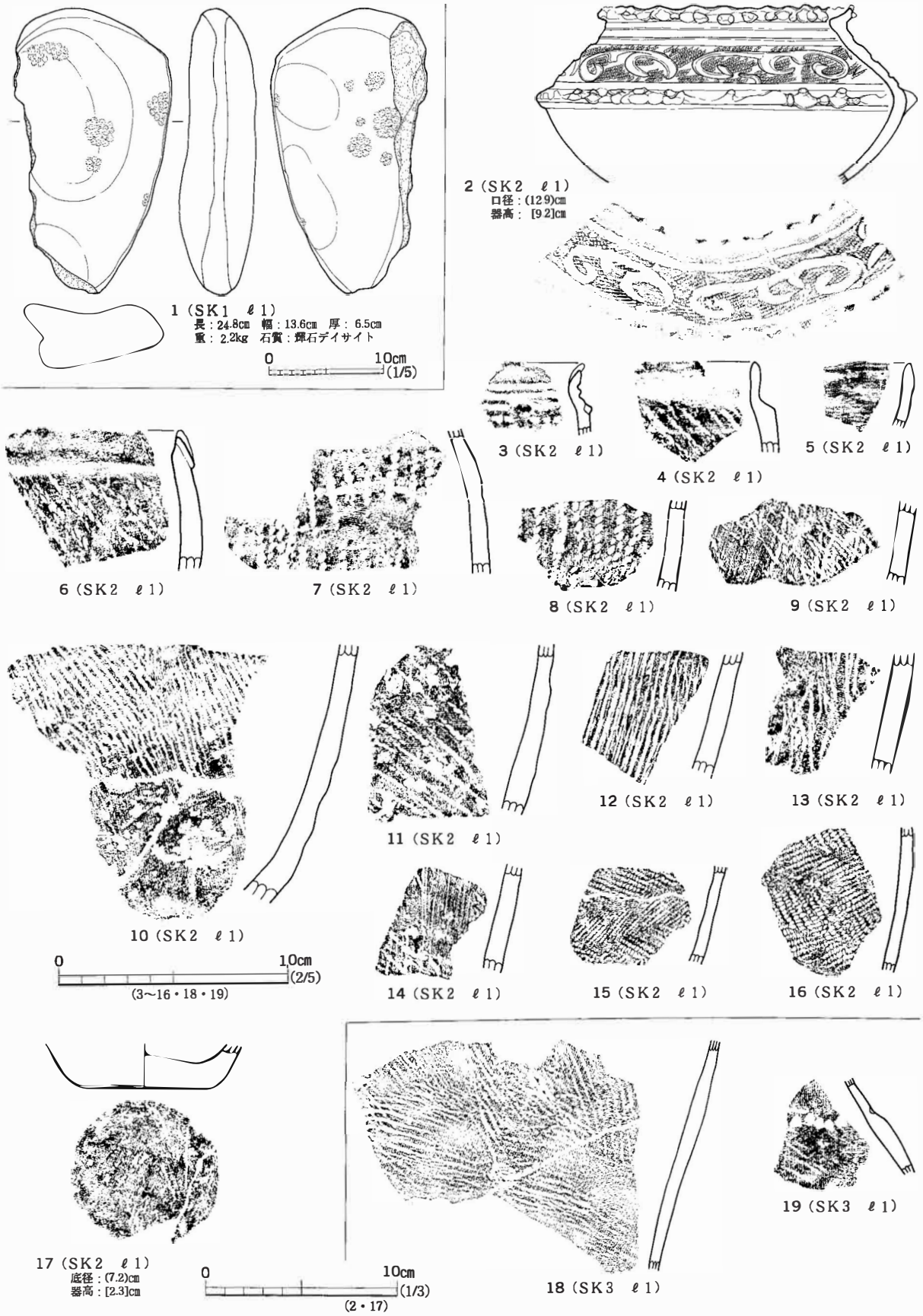

1（SK1　ℓ1）
長：24.8cm　幅：13.6cm　厚：6.5cm
重：2.2kg　石質：輝石デイサイト
0　10cm
(1/5)
2（SK2　ℓ1）
口径：(12.9)cm
器高：[9.2]cm
3（SK2　ℓ1）
4（SK2　ℓ1）
5（SK2　ℓ1）
6（SK2　ℓ1）
7（SK2　ℓ1）
8（SK2　ℓ1）
9（SK2　ℓ1）
10（SK2　ℓ1）
0　10cm
(2/5)
(3～16・18・19)
11（SK2　ℓ1）
12（SK2　ℓ1）
13（SK2　ℓ1）
14（SK2　ℓ1）
15（SK2　ℓ1）
16（SK2　ℓ1）
17（SK2　ℓ1）
底径：(7.2)cm
器高：[2.3]cm
0　10cm
(1/3)
(2・17)
18（SK3　ℓ1）
19（SK3　ℓ1）

図17　土坑出土遺物（２）

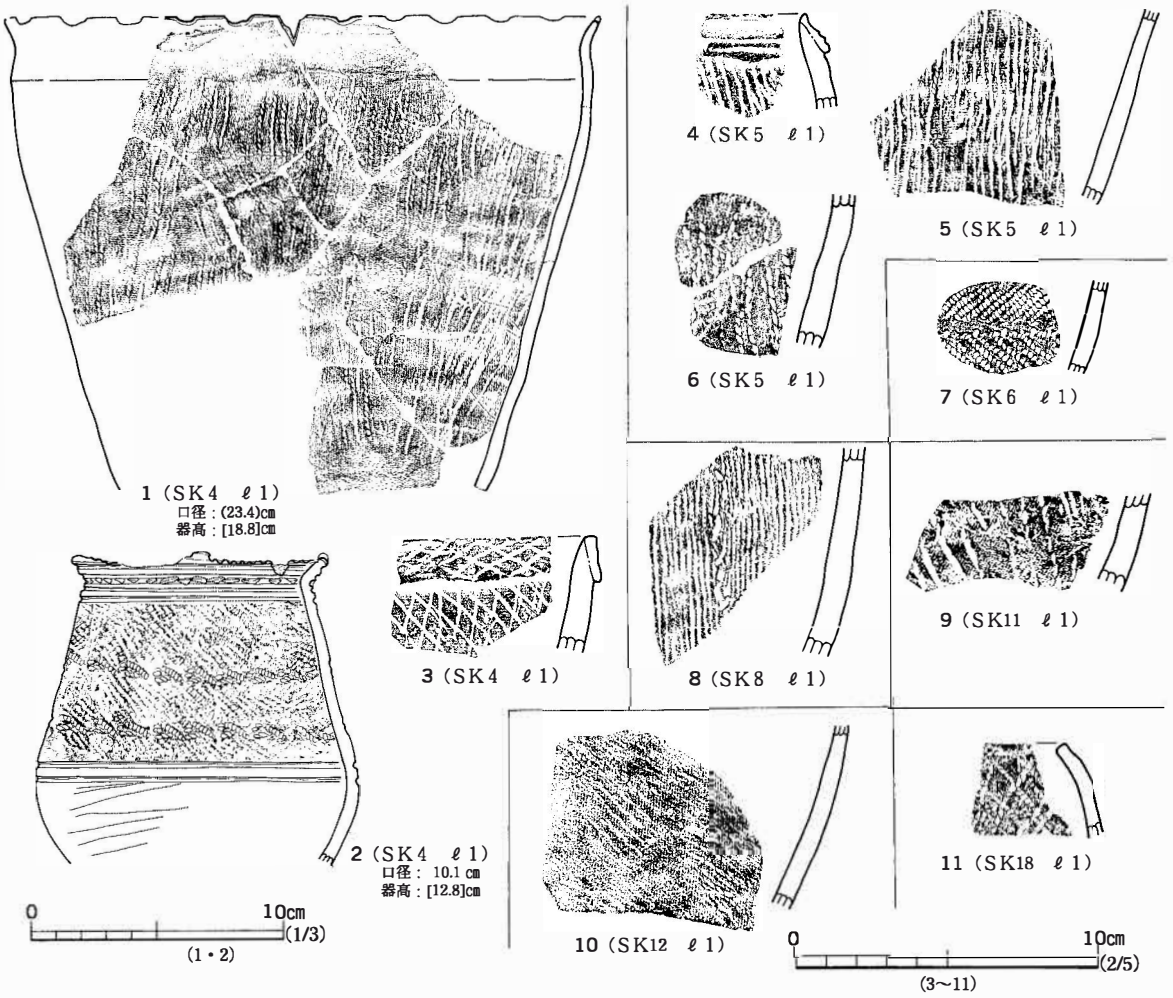


図18　土坑出土遺物（３）

18号土坑　ＳＫ18（図15・18，写真13・17）

本遺構は，調査区中央付近やや南西寄りのＣ３グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高299.5m程の北向き緩斜面である。検出面はＬⅡ中面である。重複する遺構はないが，近接してＳＫ３やＳＫ16等が存在する。

遺構内堆積土は，色調および混入物から３層に分層できた。全て礫を多く含み，ℓ１は暗褐色土で不純物等を含まない。その様相から自然堆積と判断した。ℓ２・３は壁際からの流入が認められるため，自然堆積と考えられる。

遺構の平面形は楕円形状を呈し，その規模は長軸1.13m，短軸0.85mを測る。周壁は，底面から比較的緩やかな立ち上りとなる。底面は段状となるため凹凸であり，検出面から最深部までの深さは28cmを測る。

遺物は，堆積土中より縄文土器が３点出土している。そのうち１点を図示した。18図11は粗製深鉢の口縁部である。口縁部に向かって内湾する形態で，口縁直下から縦位の網目状撚糸文が施される。他の２点については細片であるが，細かい撚糸文を施したものが認められる。

本遺構は出土した縄文土器の特徴から，縄文時代晩期中葉の年代観と考えている。周囲には該期の土坑群が集中することから，隣接する遺構群との関連性が窺える。しかし，明確な性格等は不明である。

19号土坑　ＳＫ19（図15，写真13）

本遺構は，調査区南西寄りのＣ４グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高299.8m程の北向き緩斜面である。検出面はＬⅡ中面である。本遺構中心付近で１号溝跡と重複し，検出状況から，本遺構のほうが古い。また，近接してＳＫ13やＳＫ17等が存在する。

遺構内堆積土は，色調および混入物から２層に分層できた。全て礫を多く含み，ℓ１は黒褐色土で不純物等を含まない。ℓ２は灰黄褐色の均質な砂質土であり，ともにその様相から自然堆積と判断した。遺構の平面形は楕円形状を呈し，その規模は長軸1.64m，短軸0.82mを測る。周壁は，底面から比較的緩やかな立ち上りとなる。底面は段状となるため凹凸であり，検出面から最深部までの深さは32cmを測る。

本遺構内からは出土遺物がなく，明確な所属時期は不明である。しかし，近接する遺構群との関連から，縄文時代晩期中葉頃の年代観と考えている。

第４節　溝　　跡

今回の調査で検出された溝跡は１基である。調査区南西側に位置し，ＬⅡ中面で検出された。時期は出土遺物がなく，明確な所属時期および性格等は特定できない。

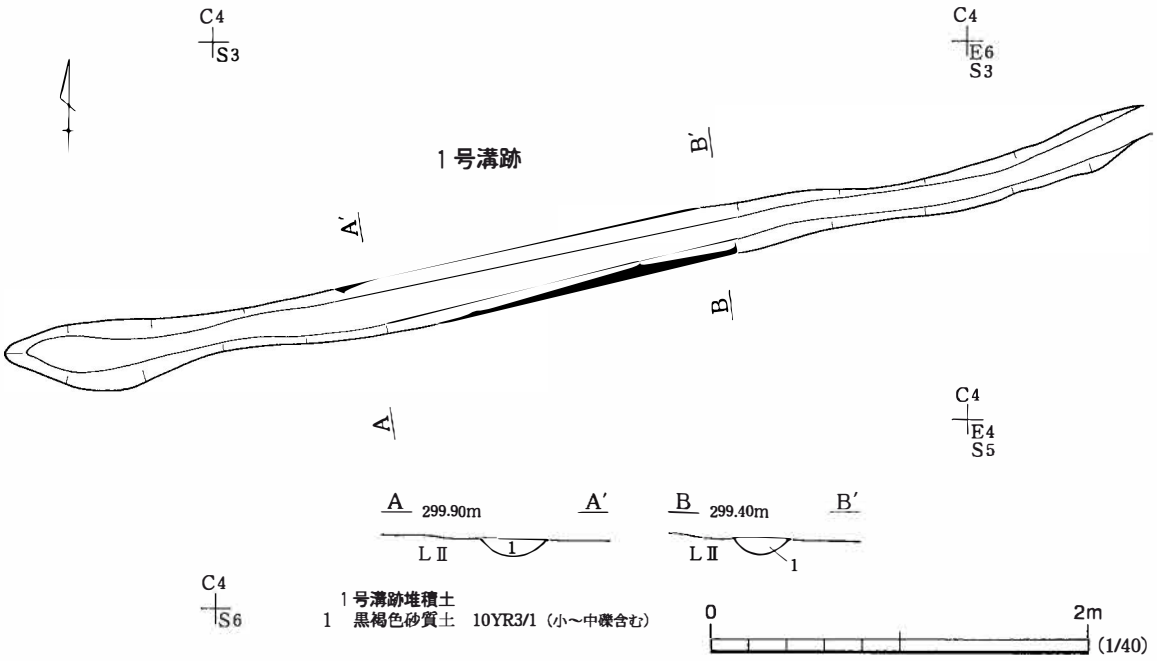


図19　１号溝跡

１号溝跡　ＳＤ１（図19，写真14）

本遺構は，調査区南西側のＢ４・Ｃ４グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高299．７m程の北向き緩斜面である。検出面はＬⅡ中面である。Ｃ４グリッドでＳＫ19と重複関係にあり，検出状況から本遺構の方が新しい。また，斜面下位には本遺構と並行するように，ＳＫ13号が位置する。

遺構内堆積土は，砂礫を含む黒褐色土の単一層で，自然堆積の様相を呈する。

検出できた規模は東西約6．3m，溝幅0．18～0．38mを測り，等高線に沿って東西方向にほぼ直線的に延びる。周壁は緩やかに立ち上がり，断面形は中央がやや窪む形状となる。底面は部分的に中央付近が窪んでいるが，東西での標高差は殆どなく，検出面からの深さは４～14cm程を測る。溝跡底面および周辺からは小穴等は検出されなかった。

本遺構からは出土遺物はなく，明確な所属時期および性格等は不明である。しかし，近接する13号土坑との関連性が推測されることから，縄文時代晩期に後続する時期の可能性が高い。

第５節　焼　土　跡

今回の調査で検出された焼土跡は１基である。調査区中央の北側に位置し，ＬⅢ上面で検出された。時期は出土遺物がなく特定できないが，周囲との遺構群を勘案すると，縄文時代晩期頃の可能性が高い。

１号焼土跡　ＳＧ１（図20，写真14）

本遺構は，調査区中央やや北寄りのＣ２グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高298．5m程の北向き緩斜面である。検出面はＬⅢ上面である。重複する遺構はない。

平面形は北半部が調査区外へ延びるため不明であるが，検出部分の状況から長軸1．18m程の楕円形を呈すると思われ，焼土面の中央に向かい緩やかに窪まる。また，焼土面は検出面から６～15cm程焼土化している。遺物は出土しなかった。

本遺構の所属時期については，出土遺物がないため正確な時期を特定することはできないが，検出層位や周囲の遺構群などから判断して，縄文時代晩期頃の所産と考えている。

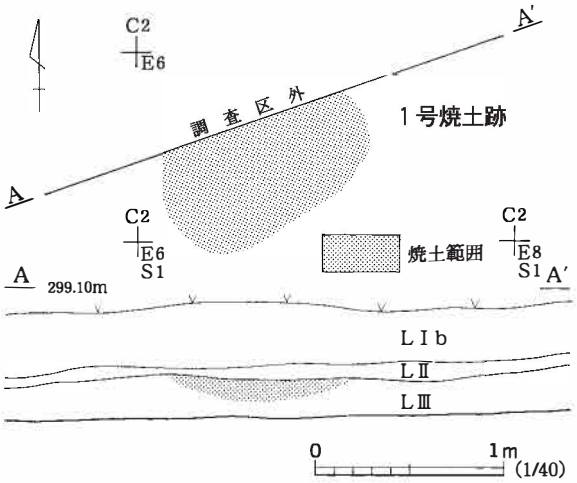


図20　１号焼土跡

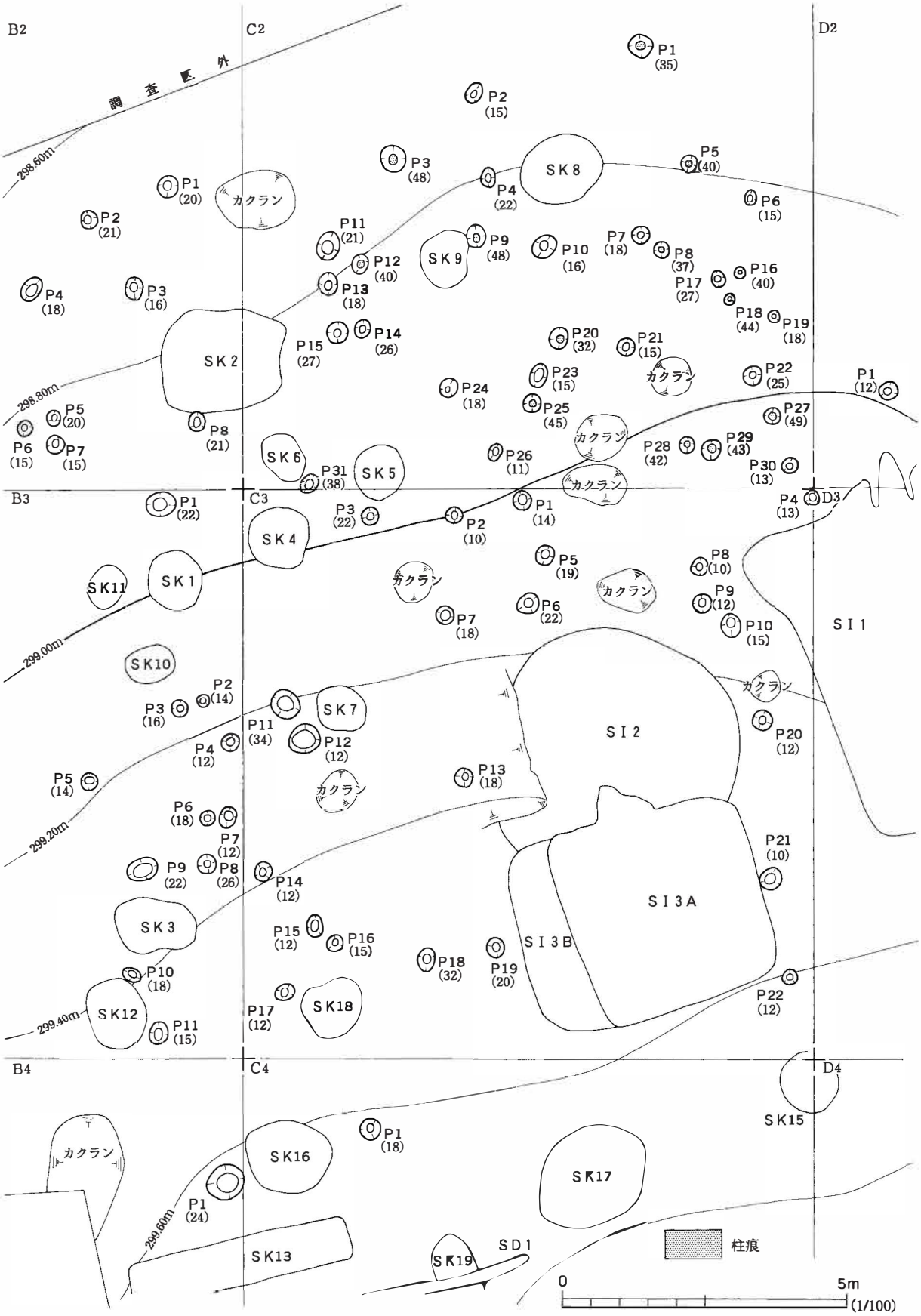

B2
C2
D2
調査区外
298.60m
298.80m
299.00m
299.20m
299.40m
299.60m
B3
C3
D3
B4
C4
D4
SK1
SK2
SK3
SK4
SK5
SK6
SK7
SK8
SK9
SK10
SK11
SK12
SK13
SK15
SK16
SK17
SK18
SK19
SI1
SI2
SI3A
SI3B
SD1
カクラン
柱痕
0
5m
(1/100)

図21　小穴

第6節　その他遺構と遺構外出土遺物

小穴群　GP（図21）

本調査区では，小穴が多数確認された。これらの小穴は，その形態的な特徴から，柱穴である可能性が高い。しかし，これらの小穴は配置に規則性が認められないため，建物を構成するのかについては，調査時には判断できなかった。そこでこれらの柱穴を小穴群と称し，説明を加えることにする。なお，小穴の表記については，グリッドごとに通し番号を付した。グリッドはG，小穴はPと略記している。

これらの小穴の検出面は，全てⅢ上面である。分布状況をみると，調査区中央付近やや西寄りのB2・3，C2・3グリッド付近に集中している。この位置は北に面した緩斜面で標高は299.7～299.6m付近である。いずれも縄文時代晩期に属する2号住居跡や土坑群域に分布することから，これらの遺構群に関連するものと推測される。小穴の平面形は，いずれも円形または楕円形を基調とする。各小穴の規模や深さに関しては，表1に示した。また，C2グリッド付近には柱痕の認められる小穴も少数確認されている。堆積土は黒褐・黒色土1層のものが大半を占める。時期は出土遺物がほとんどなく特定できないが，土坑群と同じ範囲内に分布することから，建物を構成していた柱穴の可能性が高く，縄文時代晩期中葉である可能性が高い。

遺構外出土遺物（図22，写真18）

今回の調査では，遺構外から総数39点の遺物が出土した。その内訳は表2に示した。縄文土器が27点と最も多く，他は土師器9点，石器片3点，陶器1点が出土している。これらの遺物の内，比較的遺存状態の良いものを図22に図示した。遺物は相対的にみると，調査区東側からは僅かで，調査区中央付近からは多く出土する傾向が認められる。これは遺構の分布を見ても分かるように，調査区東側は傾斜が露出し削平が著しいのに対して，調査区中央付近では縄文・奈良時代の住居跡，縄文期の土坑群・小穴群等の遺構の分布が顕え，遺構内出土遺物と同様な傾向を示している。以下，順次遺物の特徴について概説する。

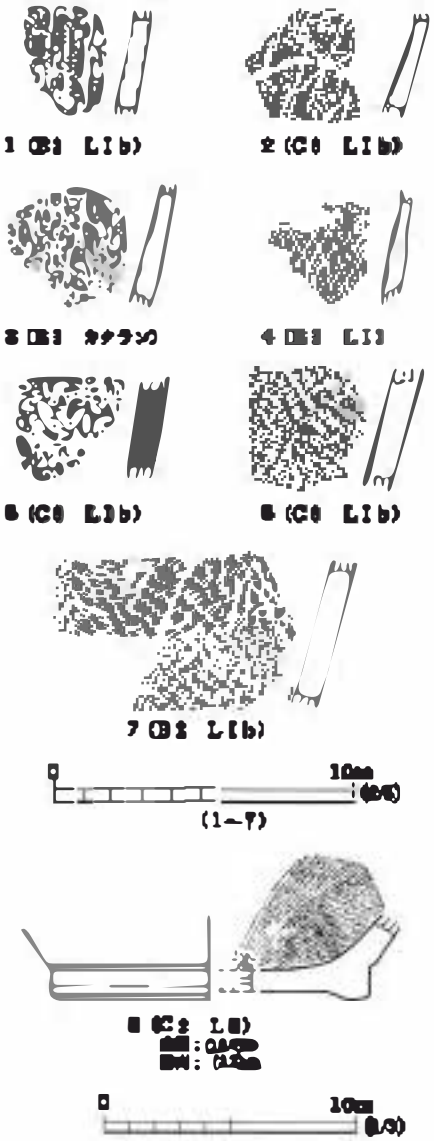


図22　遺構外出土遺物

表1　小穴一覧

グリッド	番号	平面形	長軸	短軸	深さ	層数	柱痕	備考
B2	P1	円形	42	42	20	1	無	
	P2	円形	38	38	21	1	無	
	P3	楕円形	36	28	16	1	無	
	P4	楕円形	40	32	18	1	無	
	P5	円形	38	38	20	1	無	
	P6	円形	28	28	15	1	無	
	P7	円形	35	35	15	1	無	
	P8	楕円形	38	25	21	1	無	＞SK2
B3	P1	楕円形	50	38	22	2	無	
	P2	円形	20	20	14	1	無	
	P3	円形	27	27	16	1	無	
	P4	円形	30	30	12	1	無	
	P5	円形	28	28	14	1	無	
	P6	円形	32	32	18	1	無	
	P7	楕円形	33	25	12	1	無	
	P8	楕円形	28	20	26	2	無	
	P9	楕円形	48	39	22	2	無	
	P10	楕円形	29	25	18	1	無	
	P11	楕円形	38	35	15	1	無	
B4	P1	円形	60	60	24	2	無	
C2	P1	円形	30	30	35	3	有	
	P2	楕円形	34	26	15	1	無	
	P3	円形	34	34	48	2	有	
	P4	楕円形	30	22	22	1	無	
	P5	円形	28	28	40	2	有	
	P6	楕円形	22	15	15	1	無	
	P7	円形	33	33	18	1	無	
	P8	円形	24	24	37	2	有	
	P9	円形	35	35	48	3	有	＞SK9
	P10	楕円形	42	35	16	1	無	
	P11	楕円形	42	32	21	1	無	
	P12	円形	26	26	40	2	有	
	P13	楕円形	37	28	18	1	無	
	P14	円形	36	36	26	2	無	
	P15	円形	34	34	27	1	無	
	P16	円形	18	18	40	2	有	
	P17	円形	27	27	27	1	無	
	P18	円形	20	20	44	2	有	
	P19	円形	18	18	18	1	無	
	P20	円形	33	33	32	2	有	
	P21	円形	26	26	15	1	無	
	P22	円形	30	30	25	1	無	
	P23	楕円形	38	30	15	1	無	
C2	P24	円形	33	33	18	1	無	
	P25	円形	30	30	45	2	有	
	P26	楕円形	24	18	11	1	無	
	P27	円形	28	28	49	2	有	
	P28	円形	30	30	42	2	有	
	P29	円形	40	40	43	2	有	
	P30	円形	26	26	13	1	有	
	P31	楕円形	28	18	38	2	無	
C3	P1	円形	30	30	14	1	無	
	P2	円形	26	26	10	1	無	
	P3	円形	30	30	22	1	無	
	P4	円形	30	30	13	1	無	
	P5	円形	32	32	19	1	無	
	P6	楕円形	36	27	22	1	無	
	P7	円形	30	30	18	1	無	
	P8	楕円形	32	28	10	1	無	
	P9	円形	30	30	12	1	無	
	P10	楕円形	40	28	15	1	無	
	P11	楕円形	50	40	34	2	無	
	P12	楕円形	55	42	12	1	無	
	P13	円形	30	30	18	1	無	
	P14	円形	30	30	12	1	無	
	P15	楕円形	35	32	12	1	無	
	P16	円形	28	28	15	1	無	
	P17	楕円形	30	25	12	1	無	
	P18	楕円形	40	30	32	2	無	
	P19	円形	30	30	20	2	無	
	P20	円形	37	37	12	1	無	
	P21	円形	42	42	10	1	無	
	P22	円形	26	26	12	1	無	
C4	P1	円形	30	30	18	1	無	
D2	P1	楕円形	33	28	12	1	無	

凡　例

長軸・短軸・深さ…単位はcm。

遺構の重複・撹乱等により計測が不可能な部分については記載しなかった。

備考…重複遺構の新旧関係等について記した。

＞は小穴よりも重複する遺構が古く，＜は重複する遺構が新しい。

縄文土器　22図1～7が該当し，すべて体部資料である。1・2は縦方向の撚糸文，3・4は縦方向の網目状撚糸文，5～7は側面環付状の縄文が施される。これらは，すべて周辺遺構との関連から，縄文時代晩期中葉に属するものと考えられる。

土 師 器　すべて細片であるため割愛したが，内訳では甕8点，杯1点である。甕の中には刷毛目状の調整痕があるものが1点認められる。杯は内面に黒色処理とヘラミガキを施しており，外面にはロクロ痕は認められず，ヘラケズリ調整が施されていることから，非ロクロ成形の有段丸底杯である可能性が高い。

石　　器　出土した石器片3点はすべて剥片であるため，割愛した。

表2　遺構外出土遺物点数一覧

出土位置	出土層位	縄文土器	石器	土師器	陶磁器	その他	備 考	出土位置	出土層位	縄文土器	石器	土師器	陶磁器	その他	備 考
B2	LⅠ	8						C3	LⅡ	1	1	3			石器は剥片
B3	カクラン	6	1				石器は剥片	E1	LⅠ			1			
C3	LⅠ	12	1	5			石器は剥片								

陶 磁 器　22図8の陶器製擂鉢が該当する。底部と体部下端の境には横位の沈線を施し，内面には，細かい卸目が体部上部まで入るものと思われる。近世～近代に属するものと思われる。

第3章　総　　括

1．出土遺物について

平成19年度の調査で出土した遺物は，縄文土器・石製品・土師器・陶器である。ここでは遺物の主体を占める縄文時代晩期の土器と土師器についてまとめておく。

縄文土器　出土した縄文土器は，ほとんどが破片で，接合できて半完形以上となるものはほんの僅かである。時期区分を判別できる精製・半精製土器は僅かに出土しているのみで，大半を占めるのは粗製土器の破片である。器種は，深鉢を主体として注口土器・鉢・壺（長頸壺）が認められる。

注口土器（17図2）は，口頸部と体部の2段で構成された形態で，口頸部は直線的に内傾し，算盤玉形の形制を呈する。頸部は上端に2条，下端に1条の沈線が巡り，その間には陽彫的な表現で雲形文が施文される。体下半部は丁寧なケズリが観察される。

長頸壺（18図2）は，肩部と口縁部の境には羊歯状文が構成され，胴部中段には平行沈線帯が巡り，間には横回転の結節縄文が施される。また，胴部下段には無文帯が形成される。

粗製土器は撚糸文が大半を占め，他に条痕文と縄文が僅かに認められるほどである。この粗製土器は深鉢が主体的器種であると思われ，他の特徴を示す破片は見いだせない。この深鉢については口縁部の形態，すなわち複合口縁であるものとないもの，大きく2つの形態が認められる。また，器形によりいくつかの形態に分類が可能であるが，復元できた土器の希少さからここでは割愛する。

破片資料を観察すると，施文によって●～●に分類できる。●粗い撚糸文が施されるもの，●撚糸文の間隔が狭いもの，●縦位の網目状撚糸文が施されるもの，●条痕文が施されるもの，●縄文を施されるものに大別される。●・●については更に細分が可能であり，並行撚糸文か否かに細分類が可能である。

腹田B遺跡から出土した土器は，縄文時代晩期の編年区分のなかでどの位置に含まれるのであろうか。ここでは須賀川市一斗内遺跡から出土した縄文時代晩期の土器分類を参考にしてみると，精製土器で唯一，文様の展開が把握できる2号土坑出土の注口土器（17図2）はⅡ－3段階に含まれ，4号土坑出土の長胴壺（18図2）はⅡ－2段階に含まれる。大洞式の対応関係は，Ⅱ期の2段階が大洞BC式，Ⅱ期の3段階が大洞C1式，Ⅱ期の4～6段階が大洞C2式期に併行する時期に位置

付けられている。

また，粗製土器については須賀川市一斗内遺跡の調査から，撚糸文を施した粗製深鉢形土器がⅡ－２段階から現れる可能性が強く，３段階には確実に伴うものであることが明らかとなっている。

また，Ⅱ－５・６段階には複合口縁を有する例が多いことが指摘されている。

このことから，腹田Ｂ遺跡で出土した縄文時代晩期の土器は，概ね大洞ＢＣ式期～大洞Ｃ２式期に併行することが想定される。

土 師 器　奈良時代（８世紀）は，縄文晩期に次いで本遺跡が盛行した時期である。基本的には土師器杯・甕で構成されるが，遺構の規模に比して出土遺物は極めて薄少である。これは住居の廃絶し他場所へ移動の際に，あらかじめ家財道具類を整理し意図的に放棄したためと推測される。土師器杯は非ロクロ成形の有段丸底杯で，内面にヘラミガキと黒色処理・外面に横ナデとヘラケズリが施されている。

この有段丸底杯は，形態を観察すると，口縁部下に明瞭な段差を持つものや，口縁部下に不明瞭な段差を持つものがある。これまでの研究で，この有段丸底杯は，比較的新しい時期になると器高が低くなり，口縁部下の段差が次第に不明瞭になる傾向が指摘されている。また，奈良時代の土師器杯は一般に，有段丸底から丸底風，ロクロ未使用の平底杯への変化が指摘されており，8世紀は前半期と後半期に細分されることが可能である。また，土師器甕では，器面の調整はヨコナデ・ヘラナデが施され，胴部の断面には明瞭な粘土紐の積み上げ痕が観察される。これは，奈良時代前半期の甕に多く観察される製作上の特色である。

本類のような土師器は県南地方には多数の類例が認められる。大信地区の北大久保Ｂ・Ｃ遺跡をはじめ，石川郡玉川村江平遺跡，西白河郡泉崎村上礼堂遺跡などに認められ，いずれも８世紀前半代に比定されるものである。

２．遺構について

今回の調査で確認された遺構は，竪穴住居跡３軒，土坑19基，溝跡１条，焼土跡１基，小穴75個である。竪穴住居跡は，縄文時代晩期と奈良時代の所産であり，それに付随する遺構群も当該期に属するものと推測される。以下，各遺構について概観する。

縄文時代　今回確認した２号住居跡は，出土遺物の特徴から縄文時代晩期中葉に属するものである。遺存状況は悪いが，おおよそ円形基調のプランを呈し，貯蔵穴と地床炉を有する住居跡である。

県南方面で縄文晩期の住居跡が検出されている遺跡は，天栄村界谷地遺跡，石川町杉内Ｃ・鳥内遺跡，小野町反田Ｂ・西田Ｈ遺跡などが挙げられる。住居跡は円形または楕円形を呈し，炉は杉内Ｃ例を除いては石囲炉である。本遺構の２号住居跡は，おおよそ円形プランの地床炉をもつ住居跡で，炉の形態は他の住居跡とは異なっている。また，こうした晩期の住居跡の中で，飯舘村岩下Ｂ遺跡１号住居跡は大洞Ｃ１式期の焼失家屋であり，土器および石器の出土状況より住居跡北側に土器を置く空間と，作業場および厨房空間の存在が推定されている。本遺跡２号住居跡では，貯蔵穴状ピットは認められるが，作業場等の存在を推定することができなかった。

また，土坑は17基が検出されている（1～12・14・16～19号土坑）。住居跡との位置関係より同様の時期に属する可能性が高い。また，その平面プランの形態には，円形・楕円形・不整円形のものがある。特に，円形を呈する1・4・5号土坑はその形態から，構築当初は貯蔵穴として機能していたと推測される。しかし，廃絶時に生活残滓を投棄した痕跡が認められ，堆積土中には多くの土器が混入していた。また，土坑群の分布範囲に重なるように多くの柱穴も存在し，掘立柱建物跡などの存在も推測される。また，遺構の分布状況からいくつかの変遷が予測され，小規模な生活域を形成していた様相が垣間見える。

奈良時代　竪穴住居跡2軒（SI1・3A・3B）が検出されている。1号住居跡は一辺5mを超えるもので，対角線上に柱穴を配置している。また，3A号住居跡は比較的小型で，柱穴が住居跡内に検出されていない。これは，住居外縁に側柱が巡る柱構造であると考えなければならないだろう。カマドは煙道が取り付く構造であると思われ，いずれも北壁中央付近に位置している。また，いずれも貼床が確認された。

該期に属する住居跡は，互いに重複することなく，間隔3～5m程度で点在している。従って短絡的に考えれば，集落は一時的に営まれた可能性が高いとも想定されるが，住居の存続期間が互いに重複した結果の場合も推定されることや，遺物出土状況から住居を突然放棄せざるを得ない状況になった場合や，あらかじめ家財道具類を整理し意図的に放棄した状況など各々推定できることからすると，出土遺物では区分できないものの，今後の周辺の調査の成果によっては該期の住居跡の先後関係が捉えられるのではないかと思われる。

3．ま　と　め

本遺跡で最初に確認できる人間活動の痕跡は，縄文時代晩期のものである。2号住居跡が相当するもので，地床炉を持ち貯蔵穴を有する円形基調の住居跡である。住居跡の周囲には生活残滓を投棄した土坑群が認められ，小規模な生活域を形成していたと推測される。

大信地区では，縄文時代晩期の遺構・遺物の確認できる遺跡は極めて薄少である。天栄村との境界になっている滑川の小河岸段丘に立地する桜立B遺跡では，平成二年の範囲確認調査時に晩期中葉の大洞C2式に属する深鉢土器を伴う土坑が検出されている。しかし，のちに発掘調査が行われたが，どのような種類の遺跡であるか把握できていない。隣接する桜立C遺跡からも，晩期後葉頃に属する網目状撚糸文の土器が出土しているが，遺構は確認されていない。また，本遺跡の対岸の河岸段丘に立地する町屋遺跡では，平成十三年の発掘調査時に，晩期中葉頃の粗製深鉢や鎖状刻目隆帯が施された土器片が出土しているが，それに伴う遺構は確認されていない。隣接する天栄村では，昭和六十三年に界谷地遺跡の発掘調査が実施され，大洞C2式期の竪穴住居跡が二軒検出されている。この遺跡は山地性丘陵から北に延びる尾根状の小規模な丘陵の北側緩斜面に立地しており，小規模な集落跡であったと推測される。また，近年須賀川市で発掘調査が実施された福島空港発掘調査の成果によると，丘陵末端の斜面部や開析谷の末端部に当該期の遺跡が散在することから，縄文時代晩期の人々が小規模な集落跡や捨て場を谷部などに形成し，点々と移動して生活していた可

能性が指摘されている。本遺跡も，福島空港公園周辺と近似する様相であった可能性が高いものと思われる。

奈良時代の大信地区は，泉崎村の白河郡家の下に支配されていたと考えられる。同地区では町屋遺跡や下原遺跡，道目木遺跡のように古墳時代から継続して営まれている集落と，入塩沢Ｂ遺跡のように奈良時代に開発された集落が認められる。前者は，隈戸川を挟み本遺跡の対岸側の河岸段丘に経営された集落で，耕地は隈戸川沿岸に有した広大な氾濫原であったことから，まとまった収量を上げていたと推測される。道目木遺跡で検出された四面庇の建物跡は，富裕農民層の集落や，郡衙の出先機関に指摘される集落に認められる建物跡である。このことから，町屋遺跡から道目木遺跡の付近に古代大信地区の中心地があったものと思われる。

後者の入塩沢Ｂ遺跡は，本遺跡と同じく隈戸川の南岸域に位置し，縄文時代には何らかの活動が行われていたが，集落として認識できるようになるのは奈良時代からである。隈戸川支流の小谷を耕地として開拓した小規模の集落跡と考えられる。

本遺跡は，確認できた該期の遺構の希少さから，入塩沢Ｂ遺跡のように隈戸川南岸の狭長な段丘を耕地として開拓した小規模な集落跡であったと推測される。近くには同時期に属する金谷林遺跡が位置し，お互い関連しながら農耕社会を形成し，狭長な段丘上に点在していた集落の１つであったと思われる。

引用・参考文献

泉崎村教育委員会　1994『上礼堂遺跡』

大信村史編纂委員会編　2004『大信村史　第２巻　資料編上巻』大信村

2006『大信村史　通史編』大信村

福島県教育委員会　2007『福島県内遺跡分調査報告13』

福島県教育委員会・福島県文化振興事業団（福島県文化センター）

1984『母畑地区遺跡発掘調査報告16　一斗内遺跡』

1987『矢吹地区遺跡発掘調査報告１　北大久保Ｂ・Ｃ遺跡』

1988『矢吹地区遺跡発掘調査報告２　北大久保Ｂ・Ｃ遺跡』

1988『母畑地区遺跡発掘調査報告25　浜井場Ｂ遺跡』

1989『矢吹地区遺跡発掘調査報告３　界谷地遺跡』

1992『矢吹地区遺跡発掘調査報告10　笹目平遺跡』

1999『福島空港公園遺跡発掘調査報告Ⅱ　関林Ｎ遺跡』

2001『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告10　赤沢Ａ遺跡』

2002『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告16　反田Ｂ遺跡』

2002『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告12　江平遺跡』

2005『こまちダム発掘調査報告３　西田Ｈ遺跡』

2006『こまちダム発掘調査報告４　沢目木Ｂ遺跡』

第３編　腹田（はらだ）Ｃ遺跡

遺跡記号　ＳＫ－ＨＤ・Ｃ
所在地　白河市大信増見字腹田
時代・種類　平安時代－集落
調査期間　平成19年６月11日～６月18日
調査員　稲村　圭一

第１章　遺跡の環境と調査経過

第１節　遺跡の位置と地形

腹田Ｃ遺跡は，白河市大信増見字腹田に所在し，北緯37度12分１秒，東経140度15分15秒に位置する。白河市は中通り地方の南端部に位置し，東は阿武隈山地，西は那須山系，南は八溝山系に挟まれた低平な台地上に位置する。本遺跡のある大信地区は白河市の北西側付近にあり，北は天栄村，南は泉崎村，西は西郷村，東は矢吹町とそれぞれ境界を接している。遺跡はＪＲ東北本線矢吹駅から西方向へ約6.7㎞，東北自動車道矢吹インターから西方向へ約4.0㎞付近に位置している。遺跡の約0.5㎞北西側には主要地方道矢吹・天栄線が通る。

腹田Ｃ遺跡は，大信地区の中央よりやや南寄りの隈戸川が，支流の外面川と合流し大きく蛇行する地点の，標高340m前後の丘陵の北西斜面裾にあたる極めて狭長な低位段丘上に立地する。調査区内の標高は，296.0～297.5mで，隈戸川の川床との標高差は約4.5mである。遺跡の北側には，隈戸川と外面川等によって形成された比較的広い谷底平野一帯を望むことができる。本遺跡の範囲は，隈戸川南岸の低位段丘の平坦面を中心とする4,800㎡で，平成19年度の調査は，幹線用水部分の250㎡の範囲について発掘調査を実施した。現況は畑地である。

周辺には，縄文時代後期の集落跡として有名な町屋遺跡や，中世の城館跡である古館館跡等が所在している。第３編で報告した腹田Ｂ遺跡は，本遺跡と同一段丘上の西側に位置しており，その距離は約180mである。

第２節　調　査　経　緯

腹田Ｃ遺跡は，平成19年５月に，隈戸川農業水利事業の幹線用水建設に先立つ工事用道路の建設時に，偶然発見された遺跡である（遺跡番号2052006005）。その日，隈戸川農業水利事業所と福島県教育委員会，（財）福島県文化振興事業団による緊急現地協議の際に，新発見遺跡の範囲を確認するため，建設工事の前に試掘調査を行うことを確認し，幹線用水路部分について要保存面積が生じた場合は，発掘調査に向けての現地協議を行うこととした。

新発見遺跡の試掘調査は，５月29日～６月１日にかけて実施した。調査の結果，土師器等の遺物や土坑や小穴等の遺構が検出され，1,150㎡の要保存範囲が確定した。その成果を受けて６月１日に現地協議を行い，幹線用水路部分（250㎡）の本調査が確定した。また，隈戸川農業水利事業所から工事の工程上，新発見遺跡の発掘調査を優先させてほしいとの意向から，５月29日から実施していた腹田Ａ遺跡の発掘調査を一旦中断し，新遺跡→腹田Ａ遺跡へと調査を移行していくことを確認した。なお，この新発見遺跡は，本地点の小字名から「腹田Ｃ遺跡」として登録された。

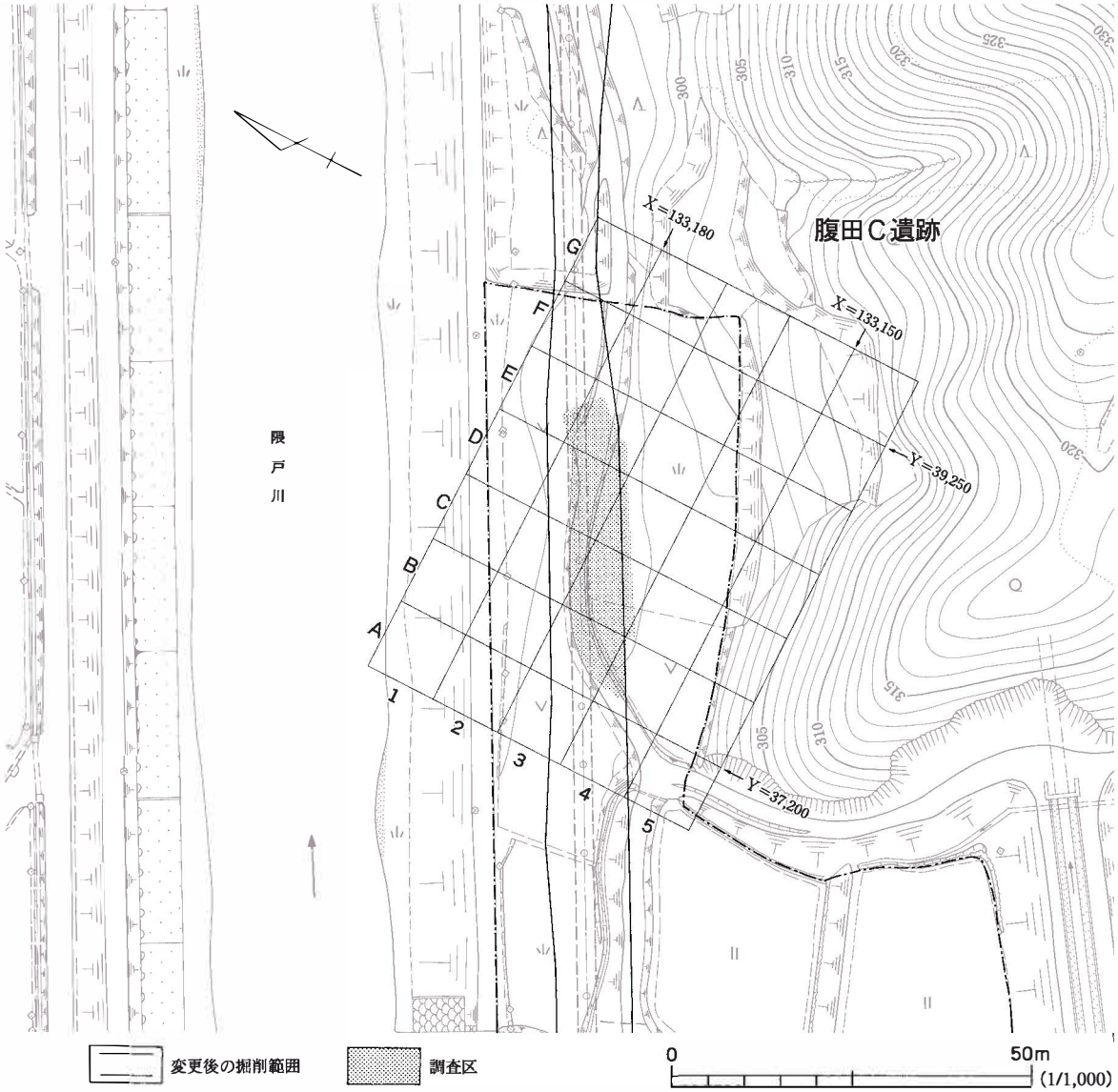


図１　腹田Ｃ遺跡調査区位置図

腹田Ｃ遺跡の発掘調査は，調査員１名，作業員23名の体制で平成19年６月６日に開始し，18日までの延べ８日間にわたって行った。以下に調査概要を記す。

６月６日には，重機による表土剥ぎを開始した。11日からは作業員を投入し，環境整備・遺構の検出・精査作業を行いながら，測量基準杭の設定と水準点の移動を随時行った。検出作業が進行するにつれて遺構の状況が明らかになり，調査区南側付近の標高の高い緩斜面を中心に，平安時代の竪穴住居跡１棟，土坑１基，溝跡１条，小穴10基が検出され，遺構精査へ移行することとなった。

６月11日から15日にかけては，天候に恵まれたこともあり，精査作業は順調に進んだ。遺物は比較的希薄であったが，竪穴住居跡からはカマド付近を中心に良好な一括資料が得られた。15日には遺構の調査・地形測量を終えて調査を終了した。６月18日には，現地において福島県教育委員会・(財) 福島県文化振興事業団・隈戸川農業水利事業所の各担当者が集まり，調査経過や成果・状況等を説明し，現地の引き渡しが完了した。

第3節　調　査　方　法

平成19年度に調査を実施した腹田Ｃ遺跡の調査は，以下に基づいて行った。

グリッドの設定　調査区の位置を国土座標の中で正確に把握するために，世界測地系を基本とした測量用基準杭（Ｘ－133,160，Ｙ－37,200）を打設した。国土座標値は，世界測地系公共座標第Ⅸ系に一致させ，一辺10m方眼を単位とした。グリッドの座標値は，図２中に示した。

個別のグリッドは，東西方向に西から東へアルファベットＡ・Ｂ…，南北方向に北から南へ算用数字で１・２…とし，両者を組み合わせて，Ｄ６グリッド，Ｆ８グリッドなどと呼称している。

基準線の設定　遺構の平面図を作成するに際しては，各グリッドを１mの方眼に分割し，これを基準線とした。基準線の座標上の位置については，各グリッドの北西端部を原点（Ｅ０，Ｓ０）とし，ここから東へ１m行くごとにＥ１～９，南へ１m行くごとにＳ１～９として表した。これにそれぞれのグリッド番号を組み合わせて，調査区域内全ての基準線の座標位置を表示した。例えば，Ｆ10－Ｅ２・Ｓ４とは，Ｆ10グリッドの北西端の杭から，東に２m，南に４m離れた場所を示す。

発掘作業　発掘作業では，表土は重機を用いて除去した。その後，人手により包含層を除去し，遺構・遺物の検出作業を行った。

遺構の掘り込み作業にあたっては，各遺構の形状・大きさ，重複関係に留意して，土層観察用のベルトを設定した。土坑など小型の遺構については，長軸方向にベルトを設定した。遺構内から出土した遺物の取り上げに際しては，上記の区画ごとに，層位を確認した上で取り上げた。

層位名を付す際は，基本層位はローマ数字を用いてＬⅠ・ＬⅡと表した。遺構内堆積層は，アラビア数字を用いてℓ１・ℓ２と表した。

記録作成　調査の成果は，実測図と写真で記録した。遺構図の縮尺は，住居跡が１／20，土坑等の小さなものは１／10で作成した。微細な記録が必要と判断したものについては，１／10で随時作成し，調査区内の地形図や遺構配置図は，1／100で作成した。土層観察における色調判断は，『新版標準土色帖』（小山・竹原1997）を基準とした。調査現場での写真撮影は35mm小型一眼レフカメラ，６×4.5判の中型一眼レフカメラ，デジタルカメラを併用した。

遺物・記録の保管　発掘調査で得られたすべての出土遺物と記録類一式は，報告書作成完了後，遺跡ごとに台帳を作成し，福島県文化財センター白河館（まほろん）に収蔵する予定である。

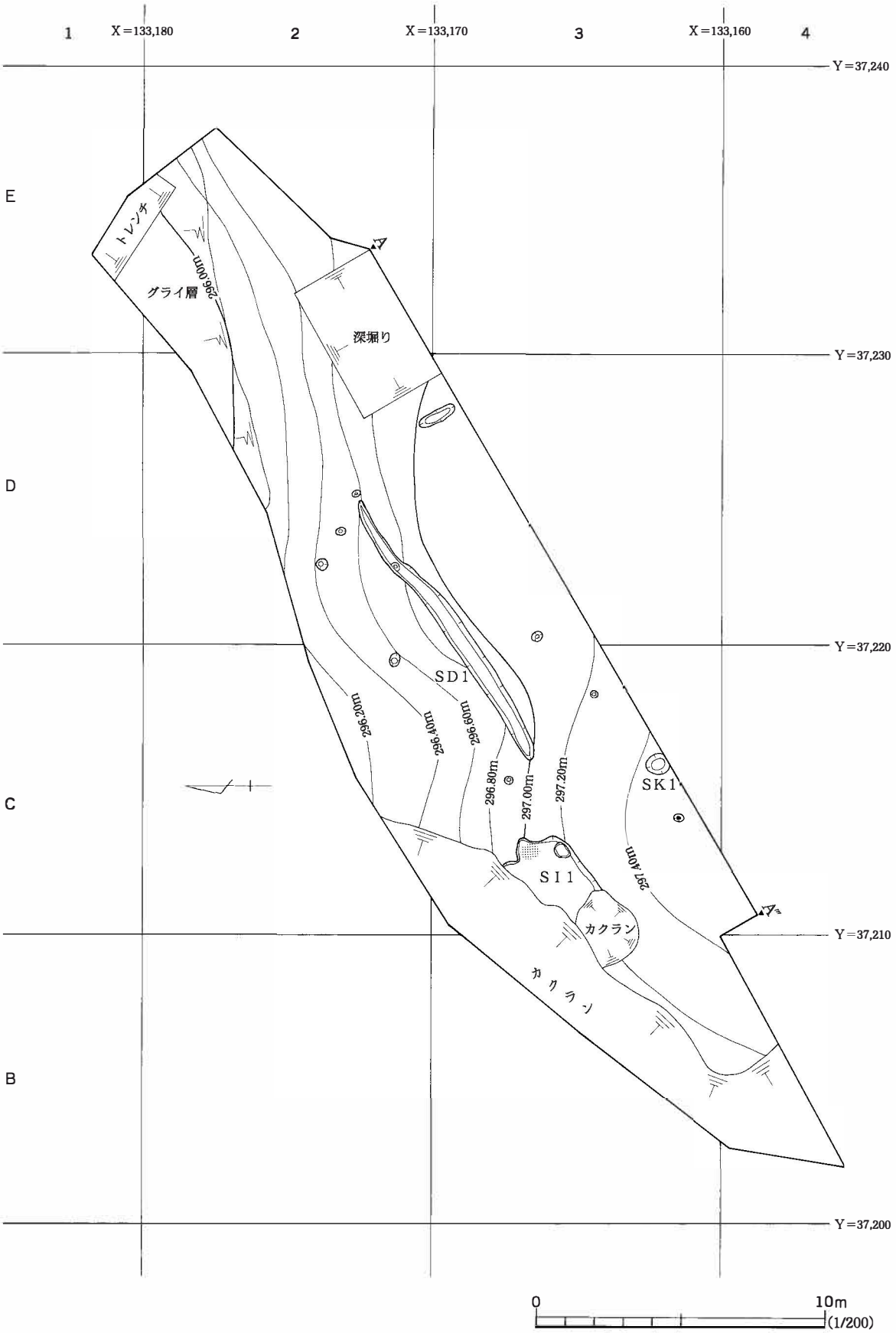

1
X=133,180
2
X=133,170
3
X=133,160
4
Y=37,240
Y=37,230
Y=37,220
Y=37,210
Y=37,200
E
D
C
B
トレンチ
グライ層
296.00m
深堀り
SD1
296.20m
296.40m
296.60m
296.80m
297.00m
297.20m
297.40m
SK1
SI1
カクラン
カクラン
0
10m
(1/200)

図２　遺構配置図

第２章　遺構と遺物

第１節　遺構の分布と基本土層

遺構の分布（図２，写真１・２）

腹田Ｃ遺跡から検出された遺構は，竪穴住居跡１軒，土坑１基，溝跡１条，小穴10基である。

調査区は東西方向に長く，北側の隈戸川に向かって緩やかに傾斜する地形を呈しており，調査区北東部には河川の氾濫等によって形成されたグライ化層が厚く堆積している。遺構は調査区内の中央付近からやや西寄りにかけての，比較的標高が高い区域に集中している。

出土遺物は，縄文土器４点，土師器127点（奈良～平安時代）で，遺物の大半は各遺構と，遺構が集中するＣ２・３グリッドから出土した。遺物の年代は，縄文時代，平安時代のものがあり，その中でも１号住居跡からは多量の土師器片が出土している。今回の調査で検出された遺構・遺物の年代は，縄文時代～平安時代まで及ぶが，その主体は平安時代である。

基 本 土 層（図３）

本遺跡では，基本土層を大きく６層に区分した。土層観察は調査区境の南側壁面を利用し，記録を行っている。また，調査区北東側には，河川の氾濫等によって形成されたグライ化した砂礫層が厚く堆積しており，その堆積土が本調査区内でも一部認められた。本来の堆積土が水流による浸食，後世の撹乱を受けたものと考え，これとは別に河川Ｉ層（Ｋ－ＬＩ）とした。以下，堆積土の特徴と遺構・遺物の関係について概略する。

ＬＩ　：現表土・畑地耕作土の黒褐色土である。調査区全域に30～60cmの厚さで分布する。層中には縄文時代と古代の遺物が僅かに含まれるが，全て耕作時に混入したものである。

ＬⅡ　：耕地改修前の旧表土で黒褐色土である。層厚は約５～15cmであり，北側へ下るほど厚く堆積している。調査に際しては基本的に本層まで重機による掘削を行った。層中には縄文時代や古代の遺物が僅かに含まれる。

ＬⅢ　：にぶい黄褐色砂質土で，ＬⅣへの漸移層である。部分的ではあるが，遺跡のほぼ全域で確認できる。調査区際の１号土坑は，本層上面からの掘込みが認められることから，本来は本層上面が遺構検出面となる。層中には遺物は含まないが，部分的に炭化物粒が認められる。これより下層は無遺物層である。

ＬⅣ　：褐色を基調とするローム層である。調査区のほぼ全面にて確認されている。基本的に，本層上面が腹田Ｃ遺跡における遺構検出面である。層厚は約20～45cm を測る。

ＬＶ　：褐灰色を呈する粘質土である。層厚は約８～20cm であり，土層中に細砂質土を多く含む。本層中からは自然木と思われる木質物が少数であるが見つかっている。枝片が中心で，明確な加工痕も見られなかったことから自然木とした。

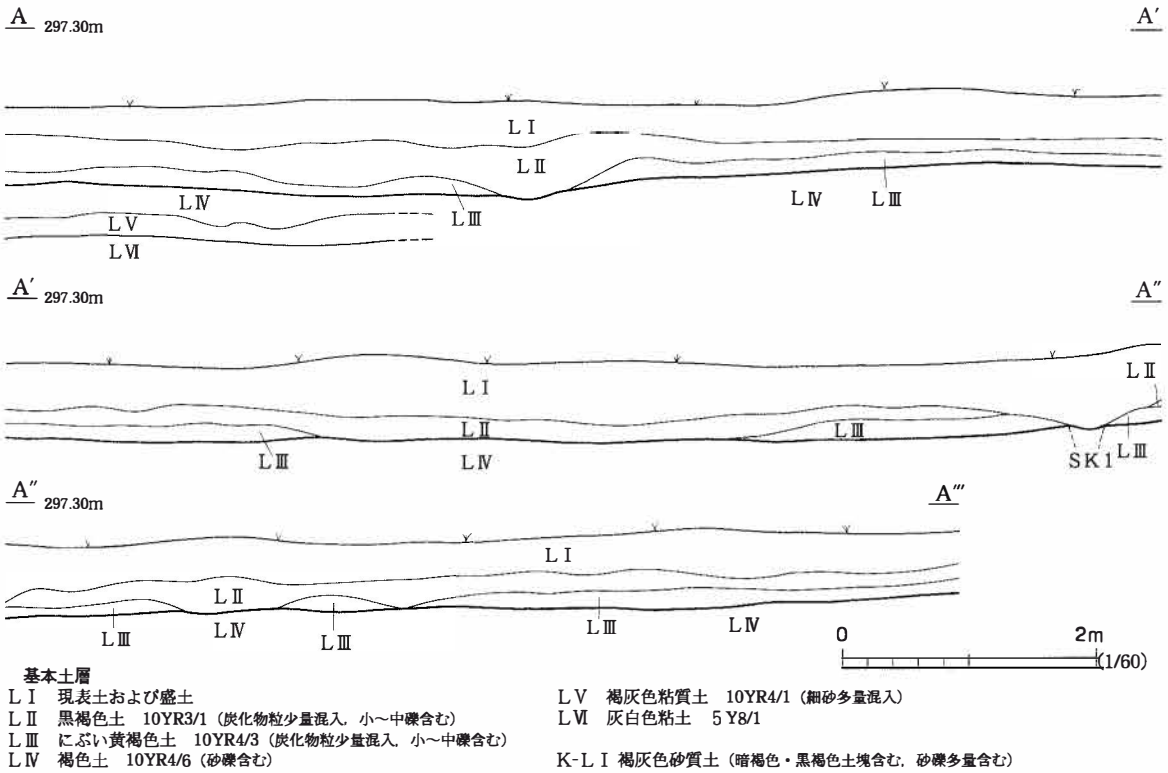


図３　基本土層図

ＬⅥ　　：灰白色を呈する粘土層であり，腹田Ｃ遺跡における基盤層である。

Ｋ－ＬⅠ：グライ化した褐灰色粘質土で砂礫を多量に含む。調査区北東部付近にのみ存在し，近～現代の陶磁器片が少量ながらも出土していることから，古くとも近代より後に堆積したと考えられる。よって，後世の浸食によって形成されたものと判断できる。

第２節　竪穴住居跡

今回の調査では，竪穴住居跡が１軒検出された。調査区中央付近のやや西寄りに位置し，遺構の大半は消失しているため全体形は不明であるが，カマドを有する方形基調を呈し，出土遺物から平安時代に帰属するものと推測される。

１号住居跡　ＳＩ１

遺　　構（図４，写真３・４）

本住居跡は，調査区中央付近やや西寄りのＣ３グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高296.8～297.2m程の北向き緩斜面である。検出面はＬⅣ上面であり，検出時にカマド付近に焼土や炭化物の集中範囲が認められた。他遺構との重複関係はないが，斜面下位にあたる遺構の北半部は流出しており，また，遺構の西側は削平を受け消失している。

遺構内堆積土は，色調および混入物から４層に分層できた。ℓ１・２はＬⅣを少量含むことから，

斜面上位からの自然流入土と考えられる。ℓ３は褐色土で，黒褐色土塊が認められることから人為的埋土と判断した。ℓ４は粘質土であり，その様相から貼床構築土と思われる。

遺構の平面形は，流失・削平を受けているため全体形は不明であるが，遺存している形状から，方形基調であったと推測される。残存する規模は，南辺2.5m，東辺2.1mを測る。検出面からの深さは最大28cmを測り，北へ向かうにつれて，削平のため浅くなる。周壁は，南壁と東壁の一部が残り，遺存状態の良好な南壁は比較的緩く立ち上がる。床面はⅠⅣを掘り込んで構築され，ほぼ平坦であるが，西半部は礫が露出し起伏があるのに対し，東半部は張り床が敷設され，比較的堅く踏み締まっている。

遺構内施設として，カマド・小穴を検出した。カマドは東壁に付設され，袖の一部と燃焼部が遺存しているのみで，遺存状況は悪い。燃焼部は60×65cmの範囲が酸化しており，さらに35×40cm，厚さ４cmの範囲が比熱により硬化している。底面は緩く西側へ下降しており，燃焼部中央付近に３cm程の窪みがある以外は，ほぼ水平である。また，燃焼部中央には土師器甕片（５図10）が残されていた。甕は被熱を受け，体部に粘土が巡ることから，カマドに掛けられ，固定されていた可能性がある。カマド内堆積土は２層に分層できた。その様相から，ℓ１は廃絶土，ℓ２は燃焼部天井崩落土と判断した。

小穴は１基検出した。Ｐ１は住居跡南東隅付近に付設され，位置関係から貯蔵穴の可能性が高い。長軸62cm，短軸46cmの楕円形を呈し，深さは床面から10cmを測る。

遺　　物（図５，写真７）

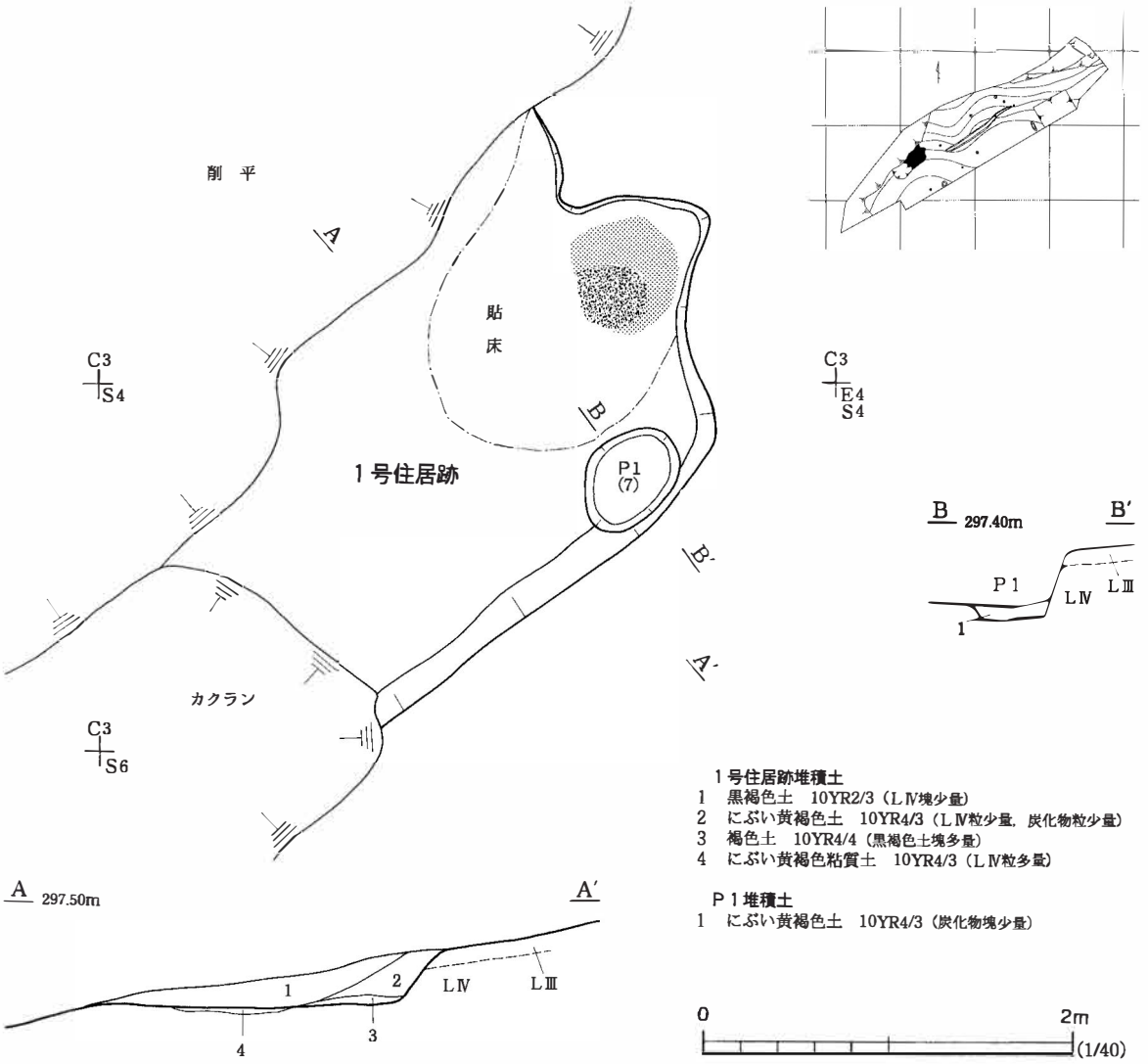
本住居跡からは，土師器片97点が出土している。須恵器片は出土しなかった。土師器片は大半が甕で，杯は20点である。このうち11点を図示した。小片のため割愛した土師器杯は，いずれもロクロ成形で，ほとんどは内面に黒色処理とヘラミガキを施しているが，黒色処理を施さない破片も２点ほど出土している。土師器甕は今回図示した遺物と同一個体とみられる破片が大半である。

これらの遺物の層位別出土点数は，住居内堆積土ℓ１（39点），同ℓ２（42点），カマドℓ２（16点）である。このように，覆土中からの出土量が最も多いが，カマドからの出土遺物も多く，良好な情報を得ることができた。以下，順次遺物の特徴について概説する。

５図１～８はロクロ成形の土師器杯である。いずれも内面にはヘラミガキの後，黒色処理が施されている。なお，１・４は二次加熱を受けて器面が赤褐色になった部分が見られ，二次的な被熱のため，黒色処理が失われている。底部内面のヘラミガキは，１・２・５では放射状に施されている。

また，体部下端～底部周縁にかけて手持ちヘラケズリが施され，底部中央付近には回転糸切り痕が僅かに残る。また，７・８は高台付杯の高台で，内外面ともに丁寧なロクロナデが認められ，焼成は極めて良好である。

同図９～11は土師器甕である。９はロクロ整形で，口縁部は外反した後に端部が若干上に軽くつまみ上げられている。10は大型の長胴甕で，胴下部を欠損している。口縁部は頸部と連続して外側にやや強く屈曲し，内外面ともにロクロ整形痕が残る。また，胴部外面には粘土が軽いナデにより


削　平
貼
床
カクラン
１号住居跡
P1
(7)
C3
S4
C3
E4
S4
C3
S6
A
A'
B
B'
B　297.40m　B'
P1
LⅣ
LⅢ
1
A　297.50m　A'
1
2
3
4
LⅣ
LⅢ
１号住居跡堆積土
1　黒褐色土　10YR2/3（LⅣ塊少量）
2　にぶい黄褐色土　10YR4/3（LⅣ粒少量，炭化物粒少量）
3　褐色土　10YR4/4（黒褐色土塊多量）
4　にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3（LⅣ粒多量）
P１堆積土
1　にぶい黄褐色土　10YR4/3（炭化物塊少量）
0
2m
(1/40)

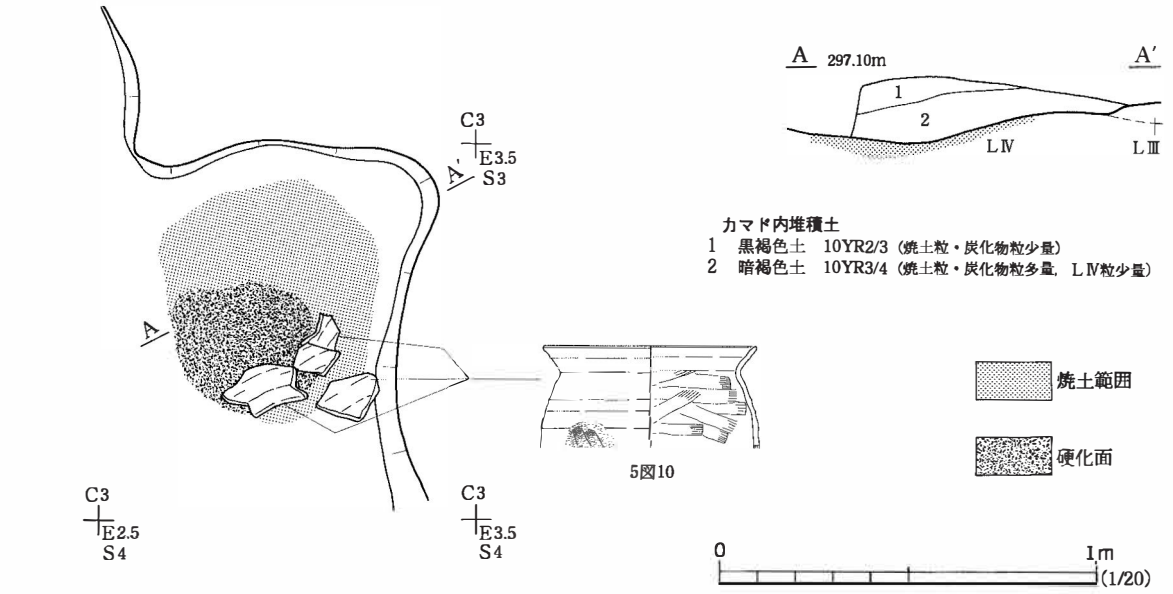

C3
E3.5
S3
A'
A
C3
E2.5
S4
C3
E3.5
S4
5図10
A　297.10m　A'
1
2
LⅣ
LⅢ
カマド内堆積土
1　黒褐色土　10YR2/3（焼土粒・炭化物粒少量）
2　暗褐色土　10YR3/4（焼土粒・炭化物粒多量，LⅣ粒少量）
焼土範囲
硬化面
0
1m
(1/20)

図４　１号住居跡，カマド

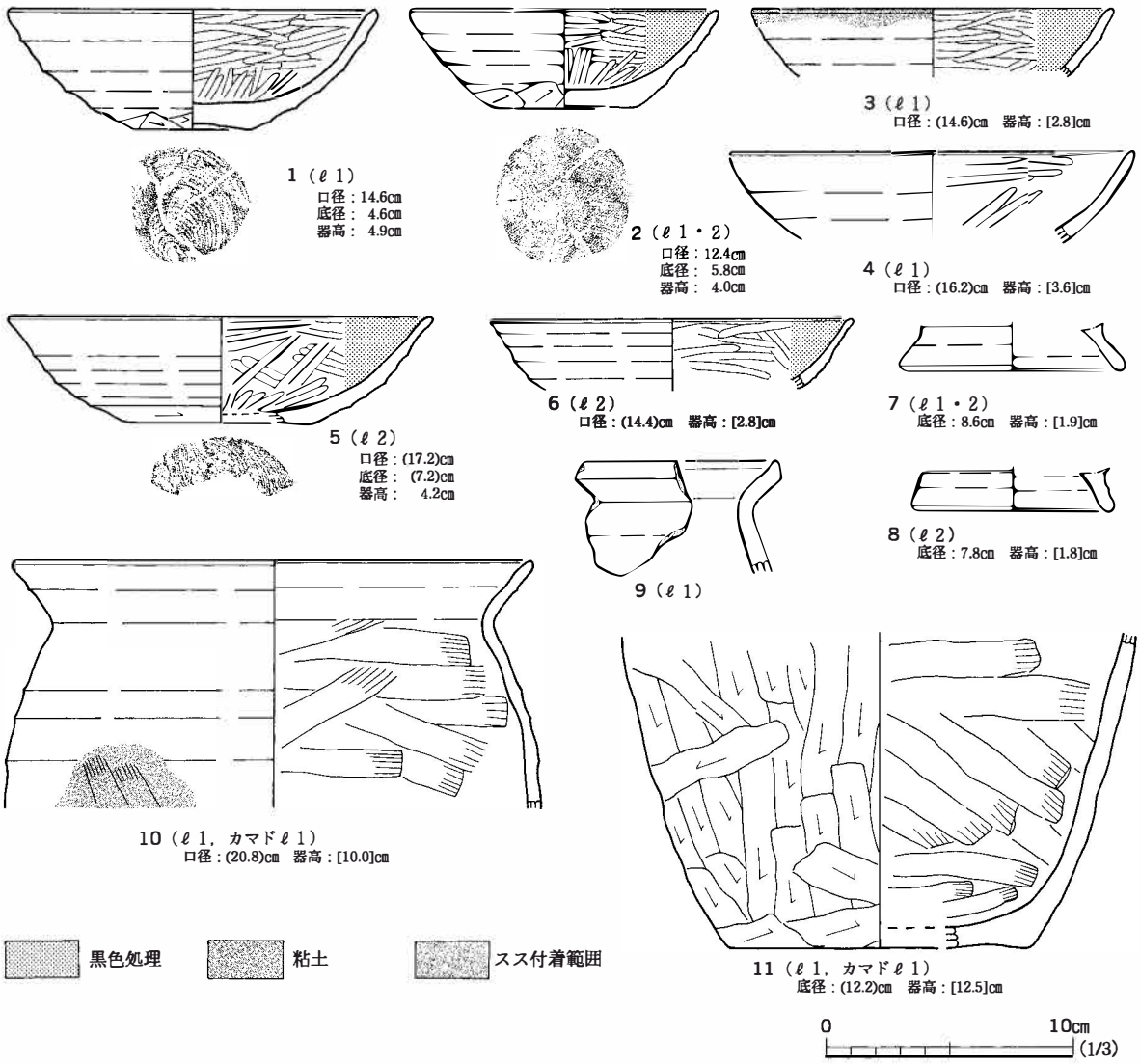


図５　１号住居跡出土遺物

塗布されている。内面は横・斜方向のナデで仕上げられている。11は大型の甕の下半部である。胴下部の外面は縦・斜方向のヘラケズリ，内面は横・斜方向のナデで仕上げられている。

ま　と　め

本住居跡は，丘陵裾部の緩斜面に構築された小型の竪穴住居跡である。残存部分の形状から方形基調を呈していた東壁にカマドを有し，床面には貼床が認められたが，柱穴は確認できなかった。

本遺構の所属時期については，出土遺物の特徴から９世紀中葉～後葉頃と考えられる。

第３節　土　　坑

今回の調査で検出された土坑は１基である。調査区内で最も標高の高い場所に位置している。出土遺物がないため時期・性格等については不明である。

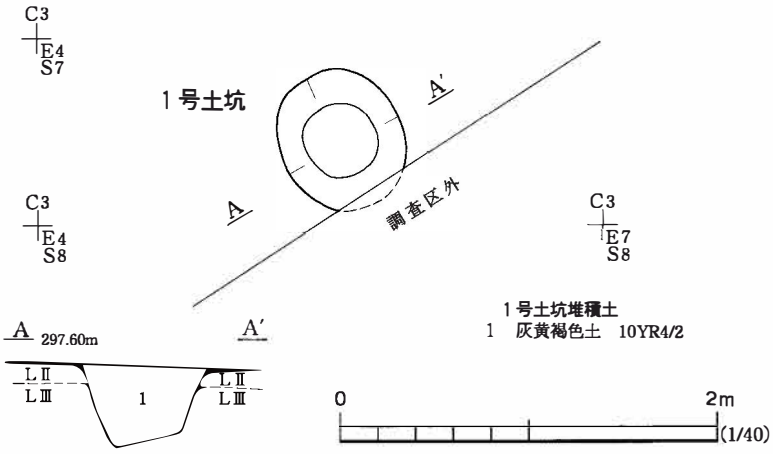


図６　１号土坑

１号土坑　ＳＫ１（図6，写真５）

本遺構は，調査区中央やや西寄りのＣ３グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高297.4～297.5m程の北向き緩斜面である。検出面はＬⅣ上面であるが，調査区際の壁面からは，ＬⅢ上面からの掘り込みが認められる。重複する遺構はない。

遺構内堆積土は，灰黄褐色土の単一層で，その状況から自然堆積の様相を呈する。

遺構の平面形は南側の一部が調査区外へ延びるため不明であるが，検出部分の状況から推測すると，開口部長軸0.75m，短軸0.65mの楕円形を呈すると思われる。遺存する規模は，底面は凹凸があり，西側に向かって傾斜する。周壁は，急峻な立ち上りとなり，検出面から最深部までの深さは46cmを測る。

本遺構内からは出土遺物がなく，明確な所属時期は不明である。しかし，近接する遺構群との関連から，古代の年代観と考えている。

第４節　溝　　跡

今回の調査で検出された溝跡は１条である。調査区のほぼ中央付近に位置し，斜面に対して直交するように巡っている。明確な出土遺物がないため時期・性格等については不明である。

１号溝跡　ＳＤ１（図７，写真５）

本遺構は，調査区中央付近のＣ３，Ｄ２・３グリッドに位置する。遺構が構築された周辺は，標高296.6～297.0m程の北向き緩斜面である。検出面はＬⅣ上面であるが，本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。Ｄ２グリッド付近でＧＰと重複関係にあり，検出状況から本遺構の方が新しい。遺構内堆積土は大きく２層に分層される。ともに斜面上位からの流入が認められ，その状況から自然堆積と判断される。

検出した規模は東西約10.5m，溝幅0.25～0.75mを測り，東側で緩やかに蛇行する部分も見受け

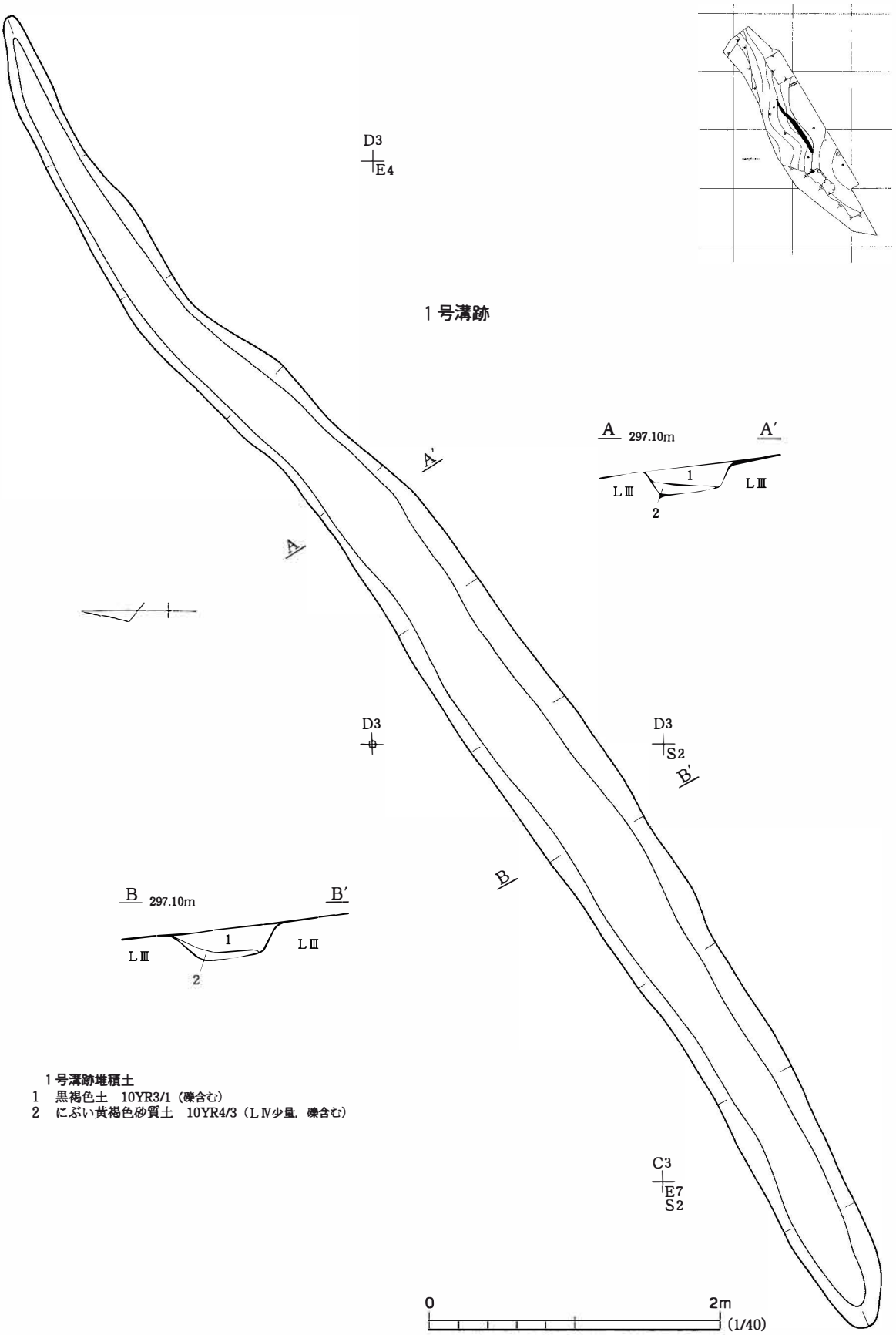

D3
E4
１号溝跡
A
297.10m
A′
1
LⅢ
LⅢ
2
A′
A
D3
D3
S2
B′
B
B
297.10m
B′
1
LⅢ
LⅢ
2
１号溝跡堆積土
1　黒褐色土　10YR3/1（礫含む）
2　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3（LⅣ少量，礫含む）
C3
E7
S2
0
2m
(1/40)

図７　１号溝跡

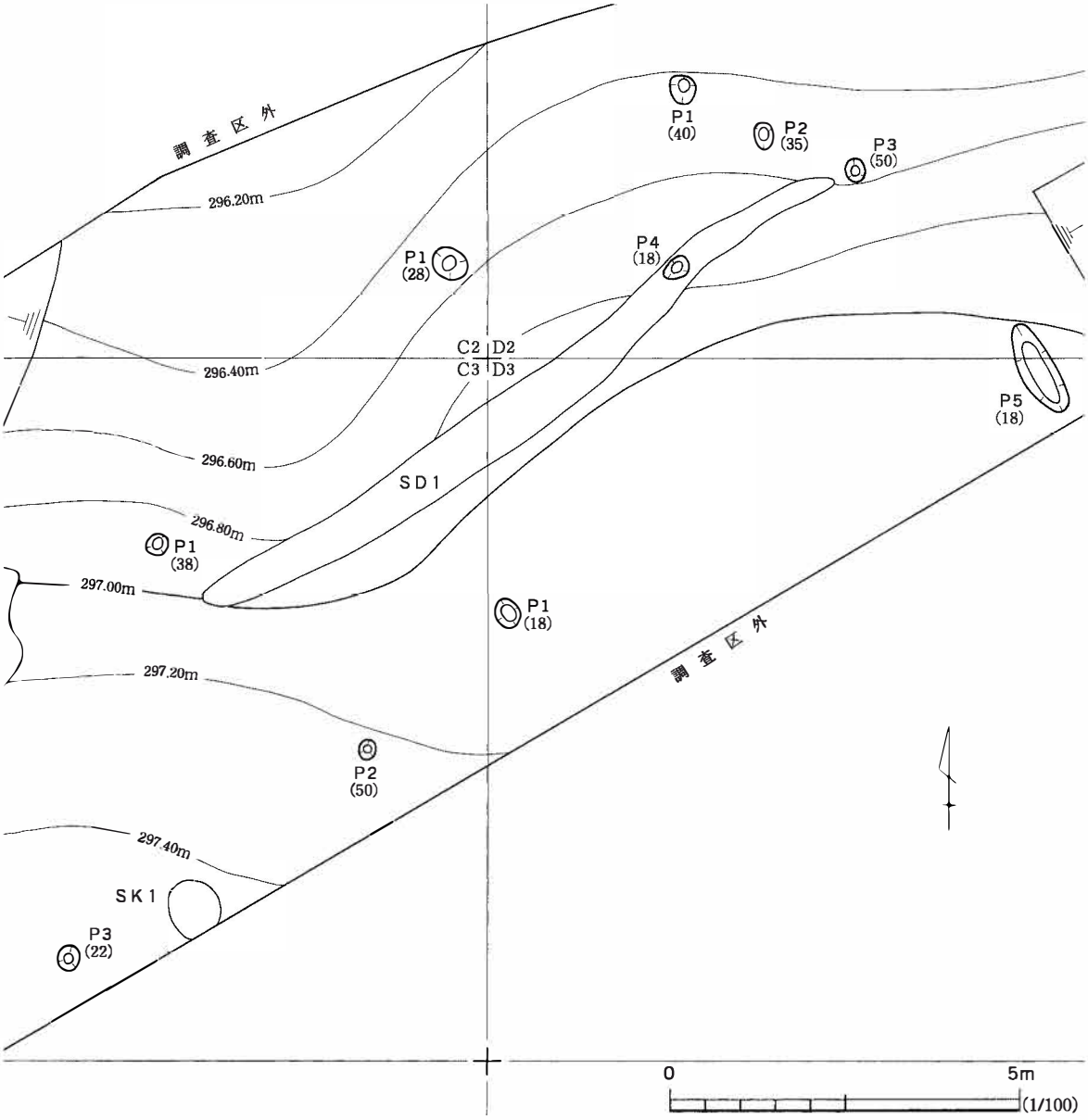


図８　小穴

られるが，ほぼ等高線に沿って南西－北東方向に直線的に延びる。周壁は緩やかに立ち上がり，断面形は浅い皿状を呈する。底面標高および検出面からの深さは，北東側へ向かうほどやや深くなる。東西端での高底差は30cm前後である。溝跡底面および周辺からはピット等は検出されなかった。

遺物は，土師器片が２点出土した。ともにℓ１からの出土で周囲から流入したものと考えられる。小破片で摩耗が著しいため，器種・部位については判断できなかった。

本溝跡は，全長10m程の東西方向にほぼ直線的に延びる溝跡である。周辺には，小穴等の遺構が存在する。所属時期・性格については，本遺構と明確に伴出する遺物がなく判断し得えず，排水的な機能も推察されるが，時期は判然としない。

表１　小穴一覧

グリッド	番号	平面形	長軸	短軸	深さ	層数	柱痕	備　考
Ｃ２	Ｐ１	楕円形	42	32	28	1	無	
Ｃ３	Ｐ１	円形	30	30	38	1	無	
	Ｐ２	円形	20	20	50	1	無	
	Ｐ３	円形	30	30	22	1	無	
Ｄ２	Ｐ１	円形	38	38	40	1	無	
	Ｐ２	楕円形	34	28	35	1	無	
	Ｐ３	楕円形	32	27	50	1	無	
	Ｐ４	楕円形	30	24	18	1	無	＜ＳＤ１
Ｄ２	Ｐ５	楕円形	132	50	18	1	無	
Ｄ３	Ｐ１	楕円形	28	23	18	1	無	

凡　例

長軸・短軸・深さ…単位はcm。

遺構の重複・撹乱等により計測が不可能な部分については記載しなかった。

備考…重複遺構の新旧関係等について記した。

＞は小穴よりも重複する遺構が古く，＜は重複する遺構が新しい。

第５節　その他遺構と遺構外出土遺物

小穴群　ＧＰ（図８，表１）

本調査区では，小穴が10基確認された。これらの小穴は，その形態的な特徴から，柱穴である可能性が高い。しかし，これらの小穴の配置にはとくに規則性が認められないため，建物を構成するのかについては，調査時には判断できなかった。そこでこれらの柱穴を小穴群と称し，説明を加えることにする。なお，小穴の表記については，グリッドごとに通し番号を付した。グリッドはＧ，小穴はＰと略記している。

これらの小穴の検出面は，全てＬⅢ上面である。分布状況をみると，調査区中央付近やや東寄りのＣ２・３，Ｄ２・３グリッド付近に集中している。この位置は北に面した緩斜面で標高は296.4～297.4m付近である。この小穴群の分布する範囲には，１号溝跡が位置する。これらの小穴の平面形は，いずれも円形または楕円形を基調とする。各小穴の規模や深さに関しては，表１に示した。

堆積土は黒褐・黒色土１層のものが大半を占める。いずれの小穴からも遺物の出土はなく，時期は不明である。

遺構外出土遺物　（図９，表２，写真８）

今回の調査では，遺構外から総数31点の遺物が出土した。その内訳は表２に示した。土師器が28点と最も多く，他は縄文土器３点が出土している。これらの遺物の内，比較的遺存状態の良いものを図９に図示した。遺物は相対的にみると，調査区東半側からは少なく，調査区西半側からは多く出土する傾向が認められる。これは遺構の分布を見ても分かるように，調査区西側には平安時代に属する竪穴住居跡をはじめとした遺構の分布が窺え，遺構内出土遺物と同様な傾向を示している。

以下，順次遺物の特徴について概説する。

９図１～６はロクロ成形の土師器杯である。いずれも内面にはヘラミガキの後，黒色処理が施されている。なお，１・４は二次加熱を受けて器面が赤褐色になった部分が見られ，二次的な被熱の

表２　遺構外出土遺物点数一覧

出土位置	出土層位	縄文土器	石器	土師器	陶磁器	その他	備　考
Ｂ３	ＬⅡ	1		11			
Ｄ２	ＬⅠ	3		17			炭１

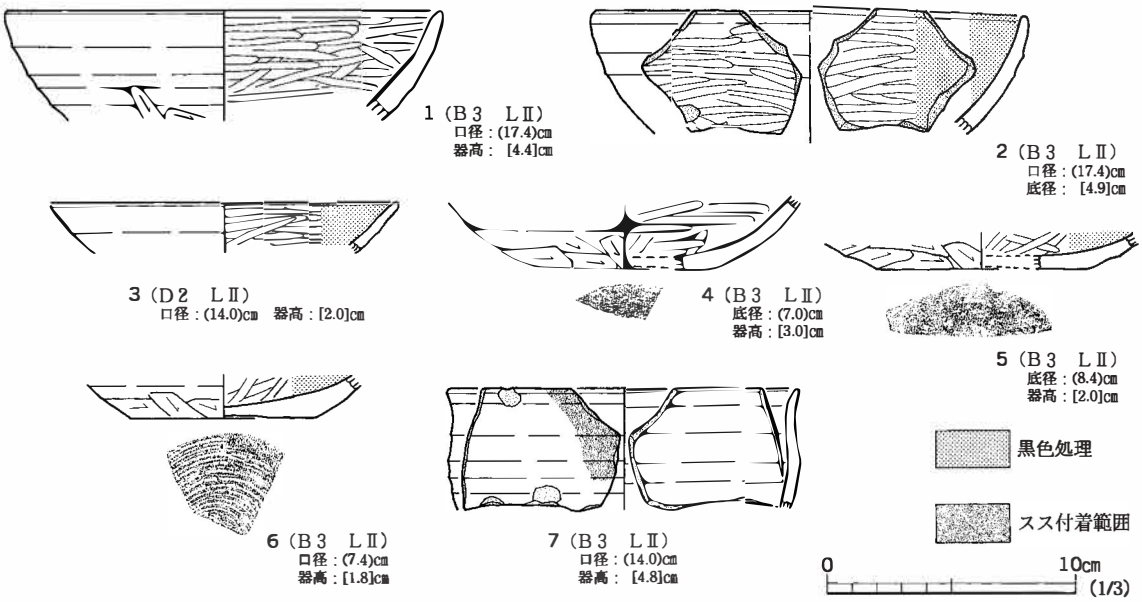


図９　遺構外出土遺物

ため，黒色処理が失われている。２はロクロ成形の後，外面にも丁寧なヘラミガキが施されている。

また，底部資料である４～６は，体部下端～底部周縁にかけて手持ちヘラケズリが施される。底部の切り離し方は，６は回転糸切り痕が認められるが，４・５は不明である。

同図７はロクロ整形の小型の土師器甕である。口縁部は僅かに外反し，内外面ともに丁寧なロクロナデが認められ，焼成は極めて良好である。

また，図示できなかった縄文土器は，体部破片２点，底部１点である。いずれも摩耗が激しい細片であるが，体部破片には網目状撚糸文を施された破片が１点認められることを加筆しておく。

第３章　総　　括

今回の調査で検出された遺構は，竪穴住居跡１軒，土坑１基，溝跡１条，小穴12基である。時代を特定できたものは竪穴住居跡で，平安時代前半期である。土坑や溝跡などについては，出土遺物が乏しくその機能や年代を把握できた遺構は極めて少ない。

出土遺物では縄文土器・土師器など，総量でコンテナ２箱程度であった。出土遺物のほとんどは土師器で，その大半は１号住居跡から出土したものである。ここでは平安時代の住居跡を中心としてまとめてみることとする。

住居跡からは，土師器杯（高台付杯含む）・甕の器種が認められる。現在，この時期の土器群については，特に土師器杯を編年の指標として，体部下端から底部の器面調整が回転ヘラケズリ調整から手持ちヘラケズリ調整へ，底部は調整のあるものから調整が無く回転糸切り痕を残すものへ，更に器形は口径に対する底径の比が大きいものから小さいものへ変化するという指摘がされている。

本住居跡の土師器杯は，体部下端に回転ヘラケズリ調整を施すものが１点，手持ちヘラケズリ調整を施すものが２点確認できた。また，底径が小さく器高が高くなるもの（５図１）や，底径が大きく器高が低くなるもの（５図２・５）が認められる。底部の切り離し技法はいずれも回転糸切りで，底部周縁にはヘラケズリ再調整が認められる。その形態・調整などの特徴は，第１編で述べた腹田Ａ遺跡の１・２号住居跡に類似し，おおよそ９世紀中葉～後葉と考えられる。

次に住居跡の構造では，遺存状況は極めて悪いが，柱穴がなくカマドが存在し貯蔵穴を有する。

カマドの方向と貯蔵穴との位置関係については，腹田Ａ遺跡の１～３号住居跡とほぼ類似する。

さらに，本遺跡の周辺の類例と比較すると，立地では隈戸川南岸の低位段丘面，丘陵裾部に挟まれた非常に狭小な緩斜面である。対岸に位置する町屋遺跡・道目木遺跡は中位段丘の広大な平坦面に立地するなど，住居が営まれた基本的な条件が異なる。このように，同時期の住居が立地を違えて存在する事象として，大きくは集落形態の違い，居住する人物の職能による違いまでのいくつかの要因が指摘できる。

腹田Ｃ遺跡は，南側に連なる標高350m前後の丘陵地帯が隈戸川に迫り，西側には河川に注ぐ開析谷の存在が推測され，日当たりも不良で，水田・畑などの耕作地を得るには難しい場所である。おそらく狭小な開析谷や隈戸川沿いの氾濫原に生活基盤を確保しながら，２～３軒程度の住居跡が同時期に存在する程度で，その存続期間も極めて短い。一方，出土遺物からは集落の特徴やその経営基盤を示すような遺物も認められない。本遺跡と同一段丘に立地する腹田Ａ遺跡では，ほぼ同時期の集落跡が確認され，本遺跡との関連性が指摘できる。おそらくこれらの遺跡は，隈戸川南岸沿いに点在した小集落であったと推測される。しかし，腹田Ａ遺跡がある程度の集落期間の持続性が認められるのは，本遺跡と比べて対照的である。これは地形的な要因によるものであろうか。

八世紀以降，律令政府の政策によって小農民も私墾田の開拓に乗じていたと思われる。河川沿いの氾濫原など稲作の最適地は，すでに収公されたり，有力者に独占されていたと思われる。本遺跡の対岸には広大な氾濫原が広がる。対岸の河岸段丘に立地する町屋遺跡や道目木遺跡は，大信地区における奈良・平安期の拠点的な遺跡であるが，その住人たちによって広大な氾濫原を開拓・経営され，稲作農耕に従事していたものと考えられる。そうなると，小農民にとって開拓の余地は山間・丘陵部であったことだろう。したがって，腹田Ｃ遺跡の住人は，丘陵裾の狭小な段丘上に住居を構え，その西側に広がる狭小な開析谷や隈戸川沿いの氾濫原を私墾田として開拓したのであろうと思われる。しかし，谷地は地形の性質上，自然災害を被りやすい。そのため，一度災害を被ると別地に移動したと思われるが，腹田Ｃ遺跡の集落が単発的で継続性が認められないのも地域的特性に左右された結果であると思われる。

これらの事象からすると，９世紀半ば頃の一時期に河川部開発が行われ，それに従事する人々（２～３世帯）が集まってできた小規模な集落と考えられる。今後，調査事例の増加を通して，このような小集落のあり方を検討していきたい。

引用・参考文献

大信村史編纂委員会編　2004『大信村史　第２巻　資料編上巻』大信村

2006『大信村史　通史編』大信村

福島県教育委員会　2007『福島県内遺跡分調査報告13』

福島県教育委員会・福島県文化振興事業団（福島県文化センター）

1987『矢吹地区遺跡発掘調査報告１　北大久保Ｂ・Ｃ遺跡』

1988『矢吹地区遺跡発掘調査報告２　北大久保Ｂ・Ｃ遺跡』

1989『矢吹地区遺跡発掘調査報告３　坂口Ｂ遺跡』

1992『矢吹地区遺跡発掘調査報告９　北大久保Ｅ遺跡』

1992『矢吹地区遺跡発掘調査報告10　笹目平遺跡』

2001『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告10　赤沢Ａ遺跡』

第４編　金谷林（かなやばやし）遺跡

遺跡記号	ＳＫ－ＫＹＢ
所在地	白河市大信増見字金谷林
時代・種類	古代－散布地
調査期間	平成19年４月９日～４月27日 ９月13日～９月25日
調査員	稲村　圭一

第１章　遺跡の環境と調査経過

第１節　遺跡の位置と地形

金谷林遺跡は，白河市大信増見字金谷林に所在し，北緯37度11分54秒，東経140度14分30秒に位置する。白河市は中通り地方の南端部に位置し，東は阿武隈山地，西は那須山系，南は八溝山系に挟まれた低平な台地上に位置する。本遺跡のある大信地区は白河市の北西側付近にあり，北は天栄村，南は泉崎村，西は西郷村，東は矢吹町とそれぞれ境界を接している。遺跡はＪＲ東北本線矢吹駅から西方向へ約７㎞，東北自動車道矢吹インターから西方向へ約4.5㎞付近に位置している。遺跡の北西側を国道294線が通り，約0.75㎞北側には主要地方道矢吹・天栄線がある。

白河市大信地区の地質は，東部を北西から南東に棚倉破砕帯が走り，その西側には中新世グリーンタフ変動による緑色凝灰岩が分布し，その上には鮮新世代から洪積世前期にかけて生じた石英安山岩質の白河層と呼ばれる火山砕屑堆積物（凝灰岩）いわゆる白河石の地層が広がる。地形的に見ると，これらの地層を開析して隈戸川が東流・下刻し，現在のような西高東低のゆるやかな丘陵地帯（白河丘陵）を形成している。丘陵の間を奥羽脊梁山脈を水源とする隈戸川が東流し，その支流との流域には，砂や礫や粘土からなる狭長な谷底平野・埋積谷・河岸段丘・洪積台地を形成し，これらの地域に白河市大信地区の各集落が点在する。特に，この地域の東側地区は洪積世の活動によるパーライト質火山噴出物の堆積層やローム層がよく発達し，丘陵裾部には沖積段丘堆積物としての砂・礫が，また黒色腐植土中には沖積世起源の火山灰・火山砂が薄く認められる。金谷林遺跡が位置する増見地区は，奥羽脊梁山脈から続く丘陵地帯の東側にあたり，隈戸川水系の外面川等によって複雑に開析されている。

金谷林遺跡は，大信地区の中央よりやや南寄りの隈戸川が，支流の外面川と合流し大きく蛇行する地点の，標高400m前後の丘陵の北斜面裾にあたる比較的狭長な低位段丘上に立地する。調査区内の標高は，296.6～297.2mで，隈戸川の川床との標高差は約4.0mである。遺跡の北側には，隈戸川と外面川等によって形成された比較的広い谷底平野一帯を望むことができる。本遺跡の範囲は，隈戸川南岸の低位段丘の平坦面を中心とする27,000㎡で，平成19年度の調査は，900㎡の範囲について発掘調査を実施した。現況は耕地整備された畑地で，調査区内は耕地造成に伴う大規模な削平を受けており，遺構の遺存状態は極めて良くない。

周辺には，縄文時代後期の集落跡として有名な町屋遺跡や，中世の城館跡である八幡山館跡等が所在している。第２編で報告する腹田Ｂ遺跡は，本遺跡と同一段丘上の東側に位置しており，その距離は約200mである。

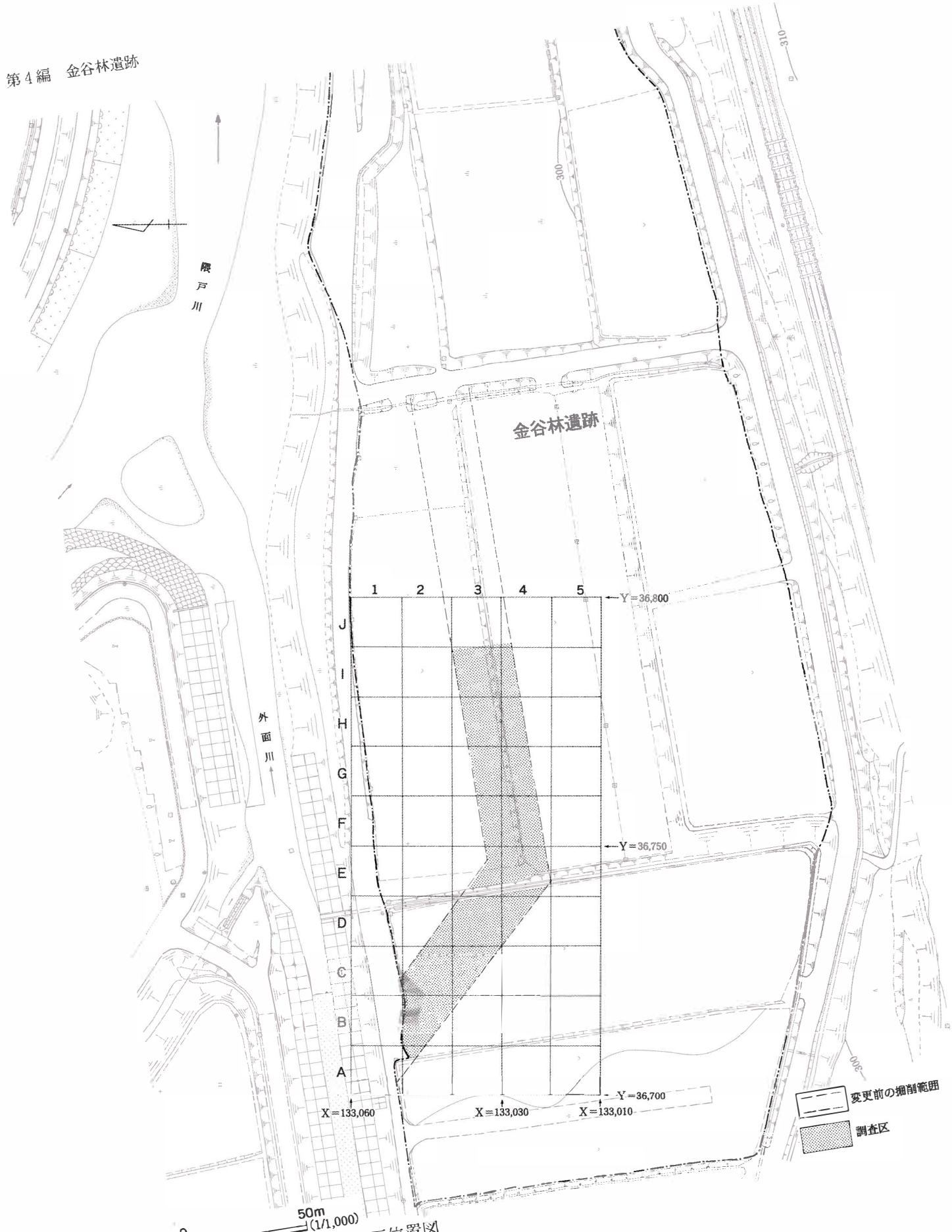


図1　金谷林遺跡調査区位置図

第2節　調　査　経　緯

金谷林遺跡は，平成11年度に福島県教育委員会から委託を受けた（財）福島県文化振興事業団が実施した，国営隈戸川農業水利事業の幹線用水路建設に伴う表面調査によって，遺物の採集から古墳時代～中世の散布地として新たに登録され（遺跡番号46700109），遺跡範囲は27,000㎡と推定された（『福島県内遺跡分布調査報告６』）。その後，平成18年度に，幹線用水路掘削範囲の2,400㎡を対象とした試掘調査を，福島県教育委員会の委託を受け，（財）福島県文化振興事業団が実施した。この結果，古墳時代や古代にかけての遺構・遺物が確認されたことから，幹線用水路の工事予定地域のうち900㎡が保存を要する範囲として提示された（『福島県内遺跡分布調査報告13』）。

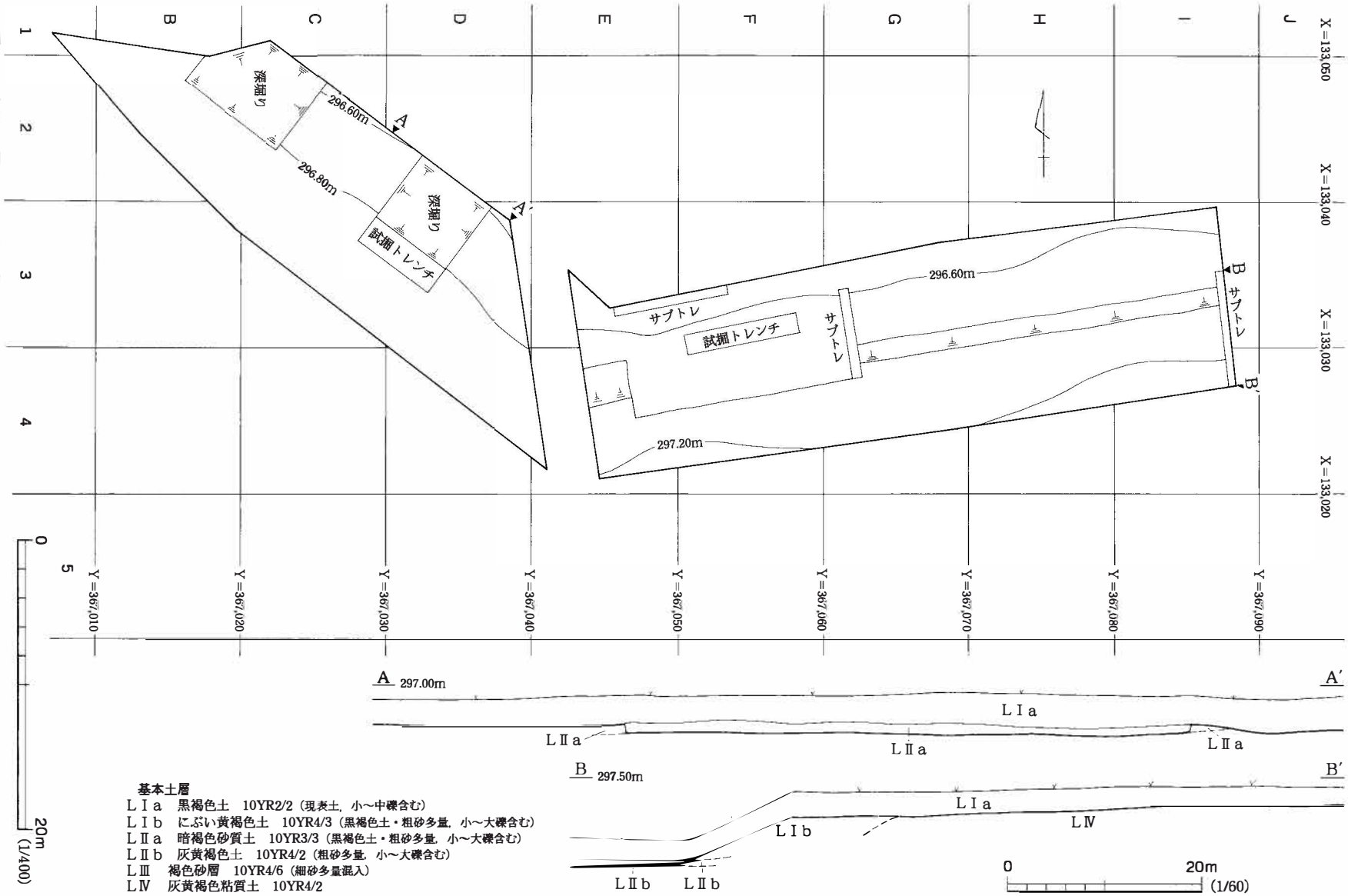
平成19年度の調査は，隈戸川農業水利事業所と福島県教育委員会，（財）福島県文化振興事業団による現地の状況と調査範囲の確認を得て，調査員１名，作業員23名の体制で平成19年４月９日に開始し，途中に中断期間を含み，９月25日までの延べ14日間にわたって行った。以下に調査概要を記す。

調査開始当初は，関係機関への周知，調査区の縄張り，発掘器材の搬入など，本格的に調査を開始するための条件整備を進め，４月11日からは重機による表土剥ぎを開始した。４月９日からは作業員を雇用し，金谷林遺跡と近接している腹田Ａ遺跡・腹田Ｂ遺跡の試掘調査を一週間程度の期間で行った後，順次金谷林遺跡の発掘調査へ移行することになった。発掘調査は，周辺の環境整備，遺構検出から開始した。調査区内には外面川と隈戸川の合流地点へ延びる谷筋が存在しており，表土直下は小～大礫や粗砂の堆積が著しく，遺構検出作業は困難を来した。また，遺構の検出作業と並行して測量基準杭の設定と水準点の移動を随時行った。しかし，４月25日に腹田Ａ遺跡・腹田Ｂ遺跡の試掘調査の成果を協議したところ，隈戸川農業水利事業所から工事の工程上，腹田Ａ遺跡・腹田Ｂ遺跡の発掘調査を優先させてほしいとの意向を受け，本遺跡の調査は両遺跡の調査終了後に再着手することとなった。

しかし，その後の幹線用水路部分の工事の計画変更により，幹線用水路工事区域が本遺跡範囲の外へ逸れることになり，開発を逃れることとなった本遺跡の発掘調査の必然性がなくなった。このことから，９月10日に現地協議を行い，既存調査区の記録保存を行った後，埋め戻し作業を行うことを三者で確認した。

本遺跡の作業再開は９月13日から行った。約５カ月間の中断期間があったため，調査区内の復旧作業は，下草刈り・排水作業を主体として非常に困難を来した。調査区の全体写真を終了した18日からは順次重機による埋め戻しを行った。大礫を取払うのに有効なスケルトンバッケトを有する重機も同時に導入し，作業員と合わせて表土層の礫を取り払いながら慎重に埋め戻し作業を進めた。

作業途中に地権者を立ち会わせ，試掘調査区域と合わせて埋め戻し完了の了承を得るまでに，かなりの時間を要したが，25日にすべて終了した。



基本土層
ＬⅠａ　黒褐色土　10YR2/2（現表土，小～中礫含む）
ＬⅠｂ　にぶい黄褐色土　10YR4/3（黒褐色土・粗砂多量，小～大礫含む）
ＬⅡａ　暗褐色砂質土　10YR3/3（黒褐色土・粗砂多量，小～大礫含む）
ＬⅡｂ　灰黄褐色土　10YR4/2（粗砂多量，小～大礫含む）
ＬⅢ　褐色砂層　10YR4/6（細砂多量混入）
ＬⅣ　灰黄褐色粘質土　10YR4/2

図２　遺構配置図，基本土層図

第３節　調　査　方　法

平成19年度に調査を実施した金谷林遺跡の調査は，以下に基づいて行った。

グリッドの設定　調査区の位置を国土座標の中で正確に把握するために，世界測地系を基本とした測量用基準杭（Ｘ－133,030，Ｙ－367,050）を打設した。国土座標値は，世界測地系公共座標第Ⅸ系に一致させ，一辺10m方眼を単位とした。グリッドの座標値は，図２中に示した。

個別のグリッドは，東西方向に西から東へアルファベットＡ・Ｂ…，南北方向に北から南へ算用数字で１・２…とし，両者を組み合わせて，Ｄ６グリッド，Ｆ８グリッドなどと呼称している。

発掘作業　発掘作業では，表土は重機を用いて除去した。その後，人手により包含層を除去し，遺構・遺物の検出作業を行った。遺構外の層位名を付す際は，基本層位はローマ数字を用いてＬⅠ・ＬⅡと表した。なお，さらに分層される堆積土については，小文字のアルファベットを付加してＬⅡａ・ＬⅡｂ…などと使用した。

記録作成　調査の成果は，実測図と写真で記録した。調査区内の地形図や遺構配置図は，１／200で作成した。土層観察における色調判断は，『新版標準土色帖』（小山・竹原1997）を基準とした。

調査現場での写真撮影は35㎜小型一眼レフカメラ，デジタルカメラを併用した。

遺物・記録の保管　発掘調査で得られたすべての出土遺物と記録類一式は，報告書作成完了後，遺跡ごとに台帳を作成し，福島県文化財センター白河館（まほろん）に収蔵する予定である。

第２章　遺構と遺物

第１節　遺構の分布と基本土層（図２，写真１～４）

遺跡は，大きく地形の改変が行われており，旧地形はほとんど止めていない。水路を挟んだ東側調査区は段状に盛土して平坦面が作り出され，畑地が造成されている。地元の方によると，畑地以前は水田が存在し，ほ場整備により大きく掘削・盛土を行い，畑地に改変されたとのことである。

西側調査区は，西端付近は比較的原地形を留めているものの，調査区南側から外面川と隈戸川の合流地点へ延びる谷筋が存在しており，その谷筋に盛土して畑が造成されている。表土直下は小～大礫の堆積が著しく，この谷筋に起因するものと思われる。

遺跡内の堆積土は，大きく３層に区分した。ＬⅠａは遺跡全体を覆う表土であり，現耕作土である。層厚は20～40㎝を測り，層中には土師器・須恵器片などの遺物が多く含み，改変時に混入したものと考えられる。ＬⅠｂは盛土であり，改変時に人為的に整地した層である。粗砂や礫を多量に混入する。特に東側調査区は段状を呈しているが，南側の上位面はこの層によって整地されており，かなりの厚さがあると推測される。今回の調査では，この層の掘り込みを行わなかったため，遺物

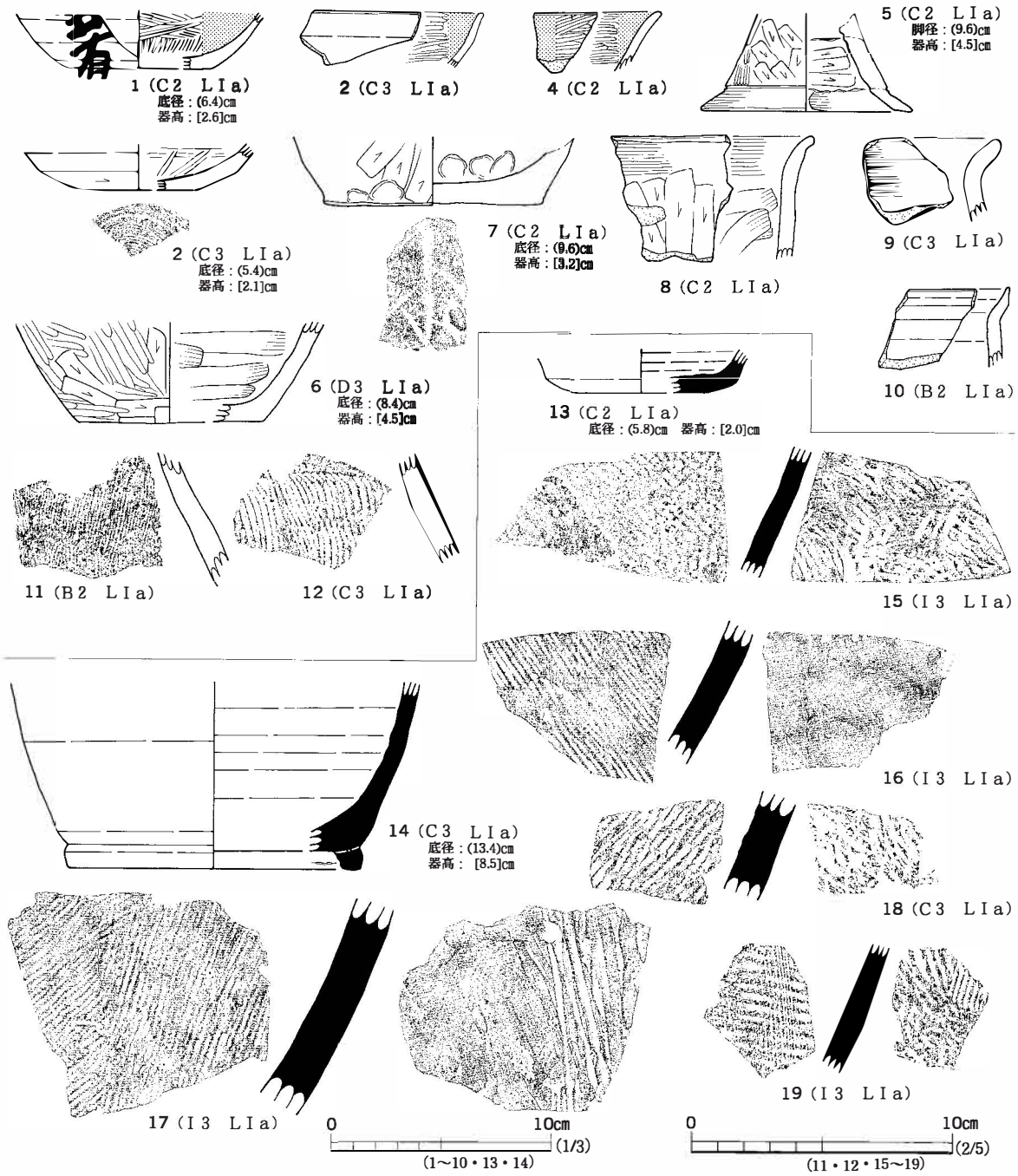


図3　出土遺物

の包含については不明である。

LⅡa・Ⅱbはともに河川氾濫に起因する堆積土と思われる。ともに粗砂や礫を多量に混入する。

今回の調査では，工事の工程変更上，本層の掘り込みを行わなかったため，層厚などは不明である。また，試掘調査の見解から，層中には多数の土師器・須恵器片を主体とした遺物を包含していると推測される。LⅢもまた河川氾濫に起因する堆積土と思われ，調査区中央付近を中心に堆積する層であると考えられる。層厚は不明で遺物の出土は認められない。

LⅣは，小～中礫や砂を含む灰黄褐色粘土層である。掘削が浅かった東側調査区の南東付近に残

存している。この層は遺跡が位置する丘陵の基盤層で，火砕流堆積物である。風化が進みかなり粘土化している。

第２節　出土遺物（図３，写真５）

今回の調査では，総数185点の遺物が出土した。その出土位置・層位の内訳は表１に示した。土師器が154点と最も多く，他は須恵器30点，陶器１が出土している。これらの遺物のうち，比較的遺存状態の良いものを図３に図示した。遺物は相対的にみると，東側調査区からは少なく，西側調査区から多く出土する傾向が認められる。これは，東側はほ場整備等の後世の掘削が著しいのに対して，西側は比較的旧地形が遺存しているためである。以下，順次遺物の特徴について概説する。

３図１～12はいずれも土師器である。１～４はロクロ成形の土師器杯である。いずれも内面にはヘラミガキの後，黒色処理が施されている。なお，２は二次加熱を受けて器面が赤褐色になった部分が見られ，二次的な被熱のため，黒色処理が失われている。１は体部外面から底部縁にかけて縦位で「□有」と判読できる墨書が認められる。底部資料である２は，体部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリが施され，底部の切り離し方は回転糸切り痕が認められる。４は内外面とも丁寧なヘラミガキの後に黒色処理を施している。破片であるため断定はできないが，調整技法などから金属器を模したものである可能性が推測される。５は非ロクロ成形の土師器高杯の脚部である。中空の太く短いもので「ハ」の字状に開き，裾部で更に強く外反して接地する。器面調整は，外面の上半部にヘラケズリと部分的にヘラミガキ，裾部にヨコナデ，内面の上半部にヘラケズリ，裾部にヨコナデが観察できる。

６・７は非ロクロ整形の土師器甕の底部である。６の外面にはヘラケズリ調整の後にヘラミガキの再調整が観察でき，内面の調整はヨコナデである。７の底部外縁と内面にはユビオサエが観察でき，底部には木葉痕が残る。８～10は土師器甕の口縁部である。８・９はともに非ロクロ整形であり，外面の調整は口縁部が横ナデ，８の体部がヘラケズリである。９はロクロ整形で，口縁部は外反した後に端部が上に軽くつまみ上げられている。11・12は土師器甕の体部であると判断した。外面の調整は11がハケメ，12は平行タタキ目が観察できる。

同図13～19はいずれも須恵器である。13は小片であるため断定はできないが，盤の可能性がある。14は長頸瓶の体部中央から底部にかけての資料で，ロクロ整形のものである。外面や内面の底部の一部に自然釉の付着が認められる。高台部の断面形状は，先端が三角形状を呈している。

表１　遺構外出土遺物点数一覧

出土位置	出土層位	縄文土器	石器	土師器	須恵器	陶磁器	備考	出土位置	出土層位	縄文土器	石器	土師器	須恵器	陶磁器	備考
B２	ＬＩａ			46	4			Ｆ３	ＬＩａ			11			
Ｃ２	ＬＩａ			27	3			Ｆ４	ＬＩａ			4	1		
Ｃ３	ＬＩａ			13	6			Ｉ３	ＬＩａ			4	15		
D３	ＬＩａ			49	1	1									

15～19は甕の破片資料である。外面はすべて平行タタキ目が観察できるが，15・18の内面には同心円文の当具痕が観察できる。

第３章　総　　括

今回の金谷林遺跡の調査では，遺構は確認されなかった。調査区内は，表土中や遺跡に入る沢地を中心に僅かの遺物が出土するに止まった。沢地内の堆積土は，礫を多く含む砂質土であり，流水の影響を受けて堆積したものと考えられる。遺跡内は，現代のほ場整備により大きく地形改変され，旧来の地形をほとんど止めていない。また，工事の計画変更により幹線用水工区が本遺跡から外れることから，発掘調査の必然性がなくなったため，既に開口していた調査区の記録を行い，調査以前の状況に復旧することで本遺跡の調査を終えた。よって，本遺跡の詳細な検討を行うことは，現時点では材料不足であり。これからの課題である。しかし，今回の出土した遺物と周辺遺跡の状況から若干の検討を加えてみる。

出土遺物では土師器・須恵器など，総量でコンテナ２箱程度であった。出土遺物のほとんどは破片資料で，いずれも表土・盛土中から出土したものである。

金谷林遺跡の立地は，隈戸川と外面川が合流する南岸の河岸段丘である。第１編から第３編で報告した腹田遺跡群と同じ段丘上に位置し，その中でも最も西側に位置する。本遺跡は，その殆どは旧地形を止めておらず，地形を改変された際に生じた表土・盛土の中には，土師器・須恵器を主体とした相当量の遺物の散布が認められる。今回出土した遺物の中には，細片ではあるが，非ロクロ成形の土師器有段丸底杯や高杯・甕，ロクロ成形で回転糸切り跡の痕跡が認められる土師器杯や甕，須恵器甕・壺が認められ，その特徴から奈良時代から平安時代の年代を示す。また，「□有」と書かれた墨書土器が認められ，遺跡の中には識字階層の人物が存在していたことが裏付けられる。

このことから，奈良時代～平安時代にかけて存続した極めて安定した生活基盤をもった集落跡の様相が垣間見ることができ，該期の集落跡が存在した腹田遺跡群との関連性が指摘できるであろう。

おそらく，隈戸川南岸沿いに点在した小集落の１つであったと推測される。

今回の調査においては，本遺跡の性格に関してはほとんど明らかにすることができなかった。今後の検討課題として考えている。

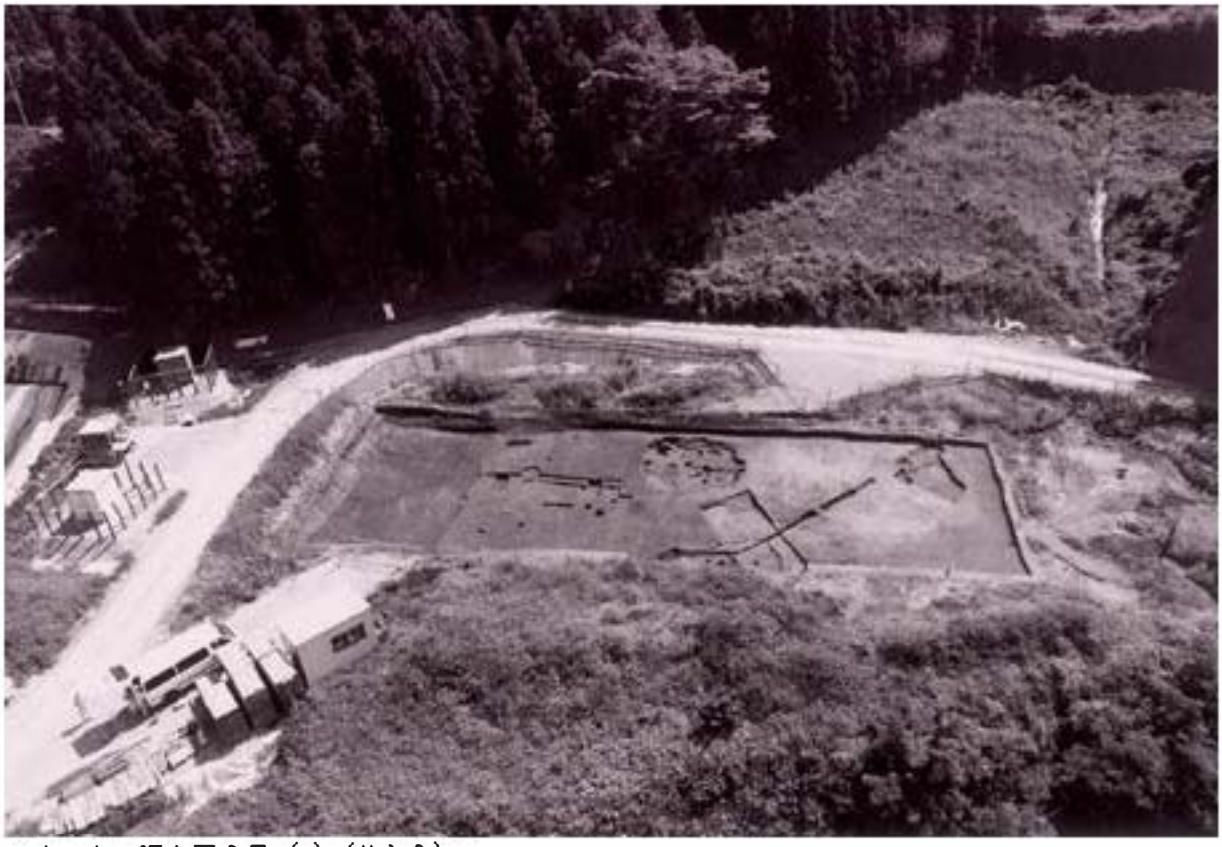
引用・参考文献

大信村史編纂委員会編　2004『大信村史　第２巻　資料編上巻』大信村

2006『大信村史　通史編』大信村

福島県教育委員会　2007『福島県内遺跡分調査報告13』

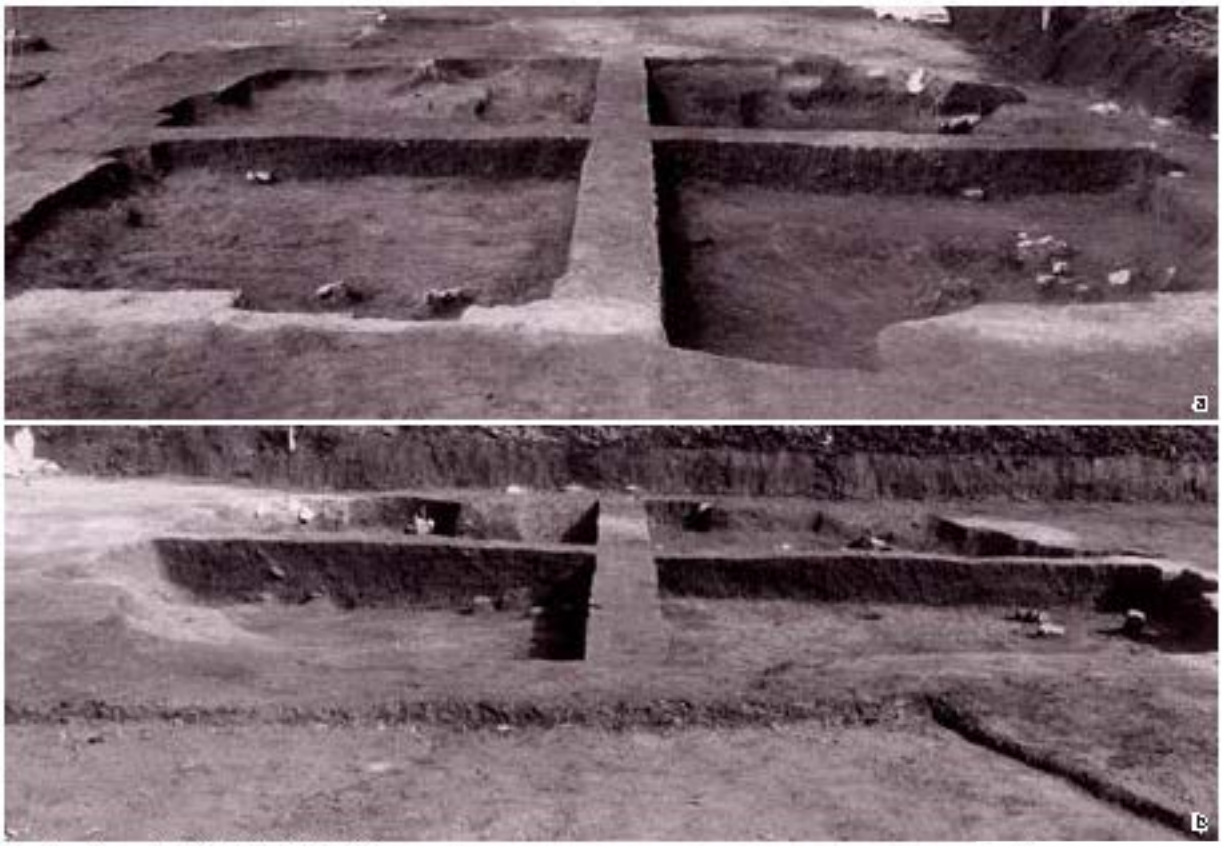
写　真　図　版



1－1　調査区全景（1）（北から）

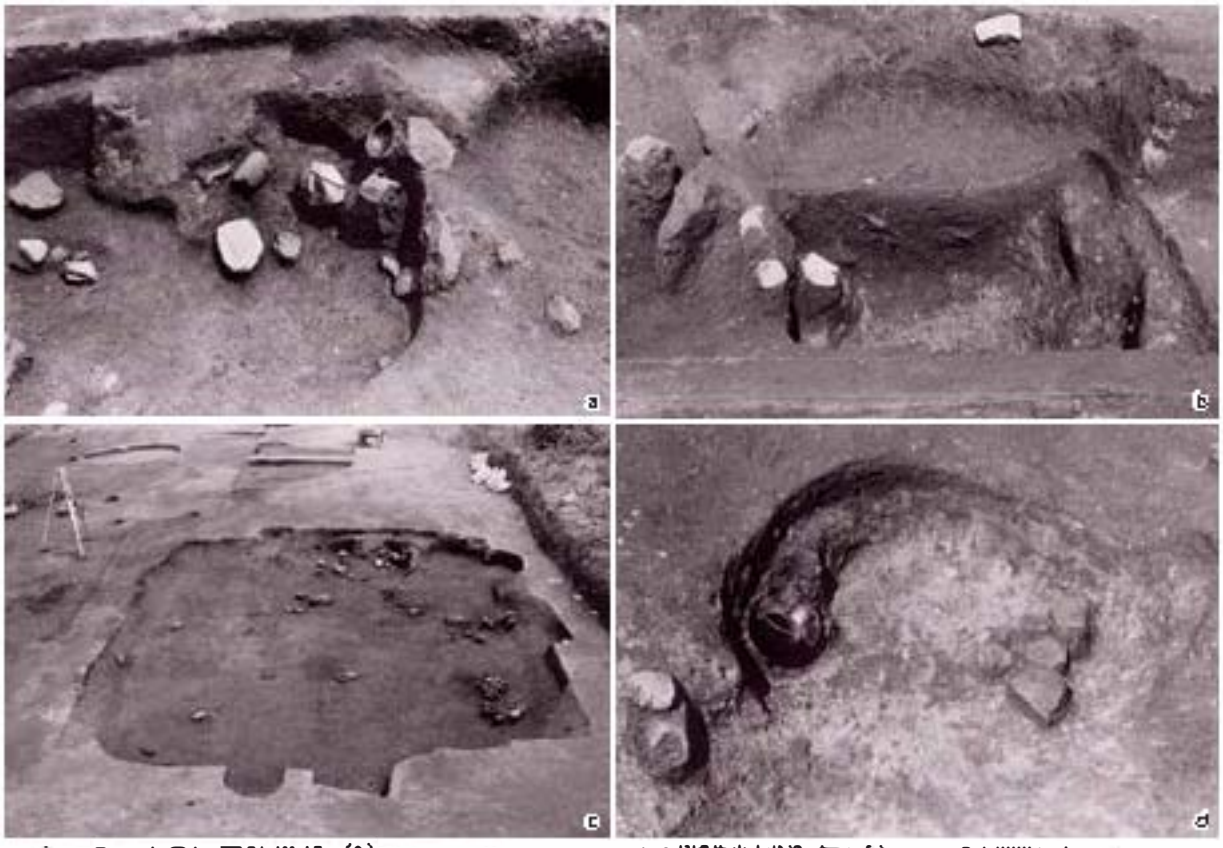
1　2　調査区全景（2）（真上から）

1－3　1号住居跡（南東から）



1－4　1号住居跡細部（1）

a　ベルト土層（西から）
b　ベルト土層（北から）



1　5　1号住居跡掘部（2）

a　カマド遺物出土状況（西から）　b　P1堆積土（西から）
c　遺物出土状況（西から）　d　P3遺物出土状況（南から）

1　6　2号住居跡（西から）

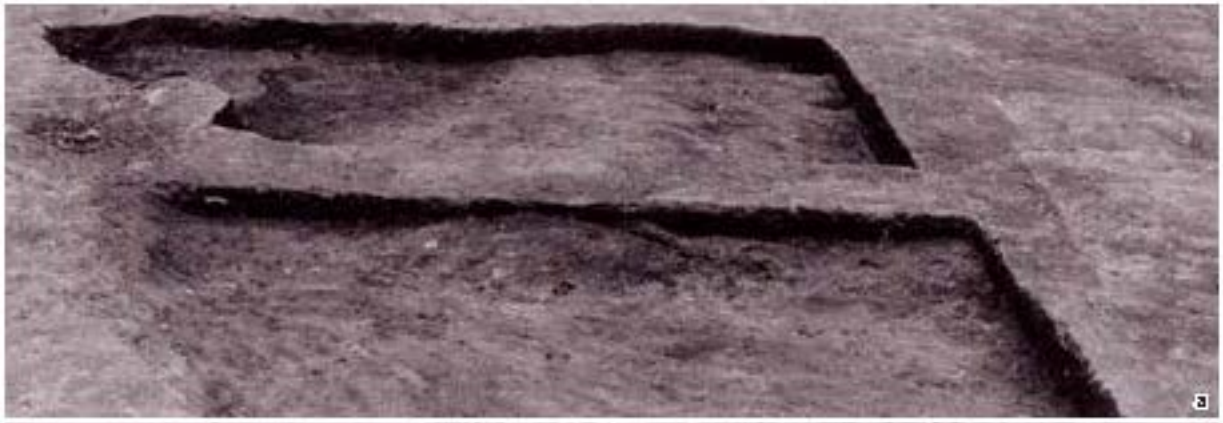
1－7　2号住居跡細部（1）

a　ベルト土層（西から）
b　[illegible]土層（南から）

1－8　2号住居跡細部（2）

a　P1遺物出土状況（南から）　b　P2遺物出土状況（南から）
c　抜き取る出土状況（北東から）　d　作業状況（西から）

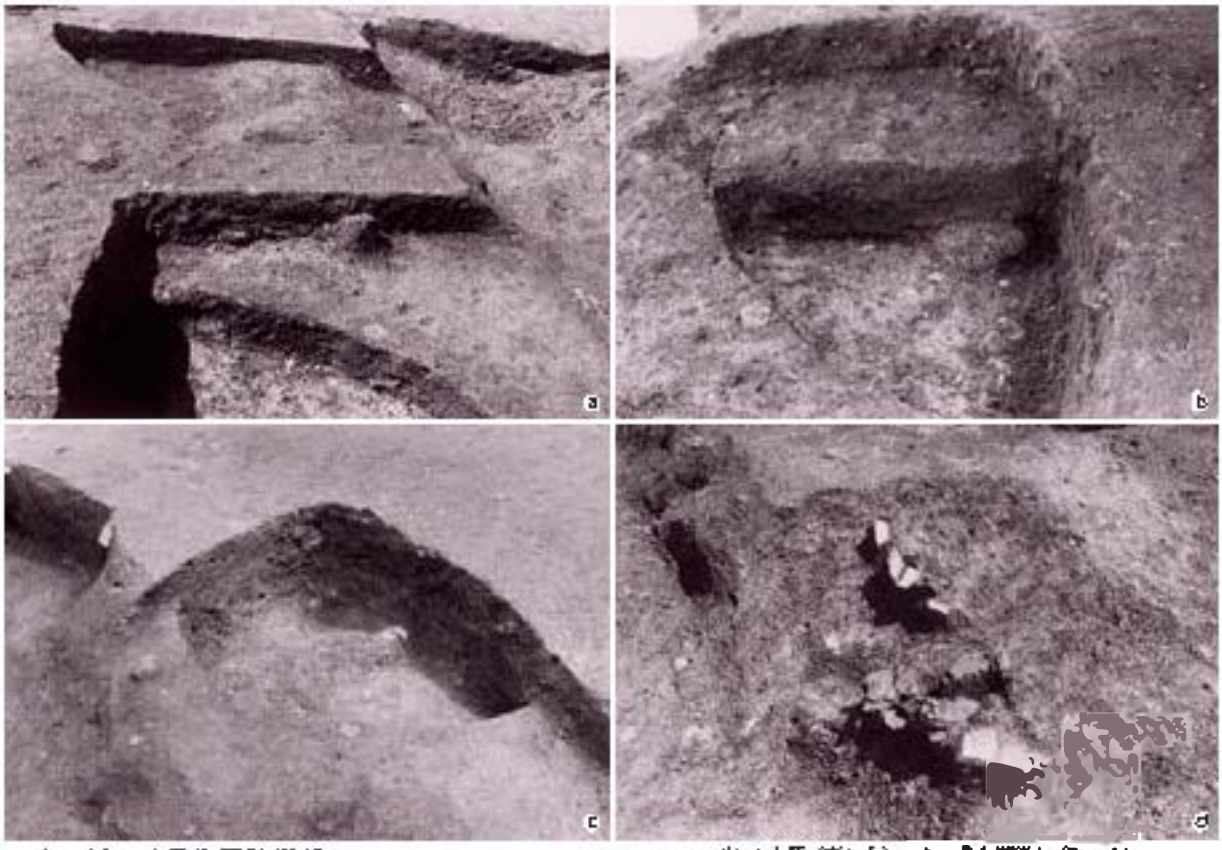
1－9　3号住居跡（西から）



1－10　3号住居跡細部

a　ベルト土層（北から）　b　カマド構築土（北から）
c　P1遺物出土状況（南西から）

1—11　4号住居跡（西から）

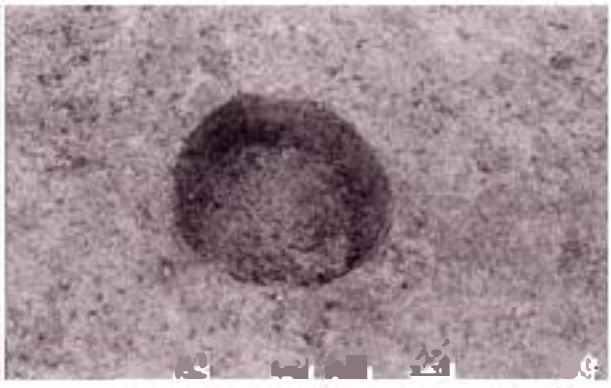


1—12　4号住居跡細部

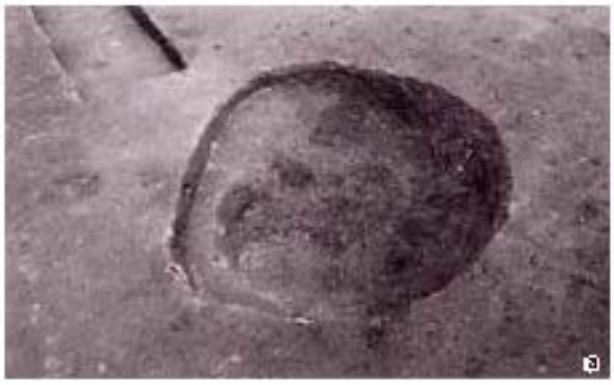
a　ベルト土層（東から）　b　P1埋土（西から）
c　P1完掘（西から）　d　P2遺物出土状況（西から）

1—13　5号住居跡（西から）

1—14　5号住居跡柱部

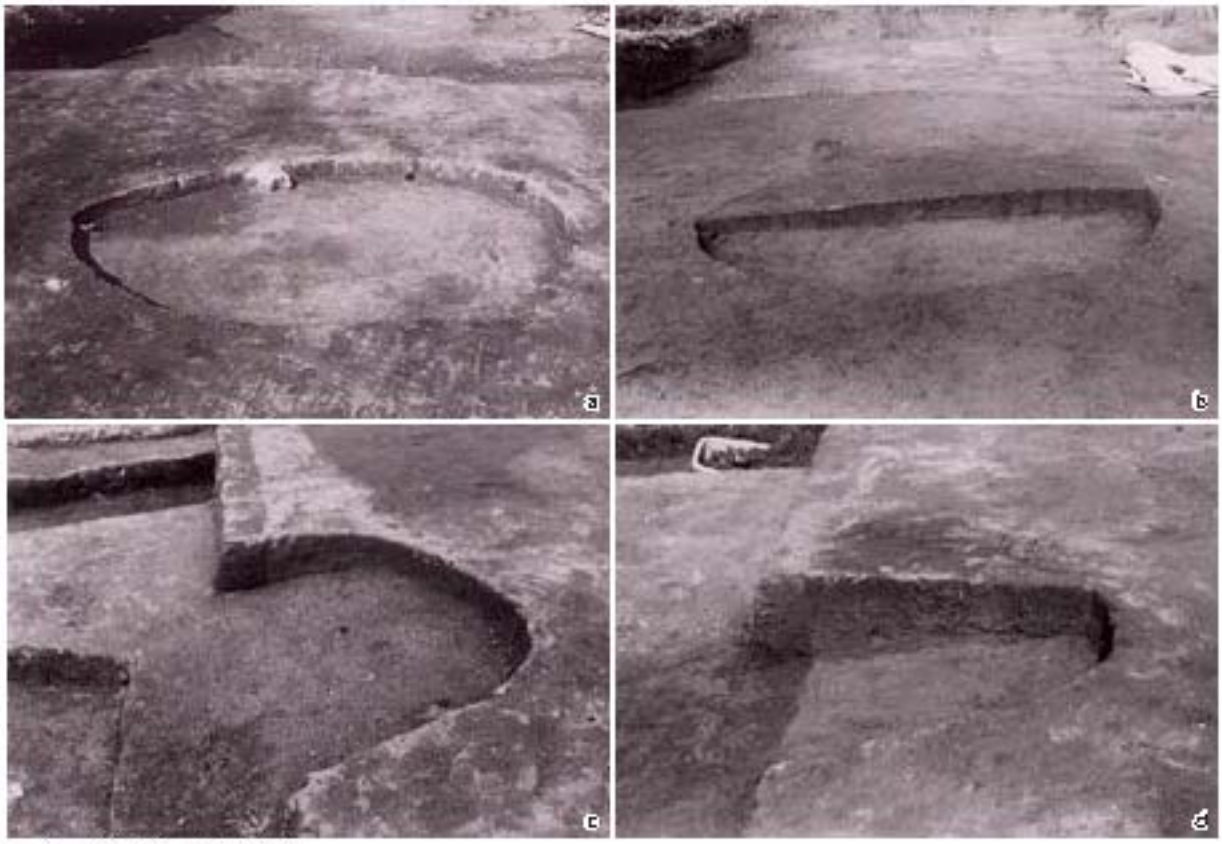


a　P1完掘（南から）　b　P2完掘（南から）



1—15　1号土坑

a　完掘（南から）　b　土層（北西から）

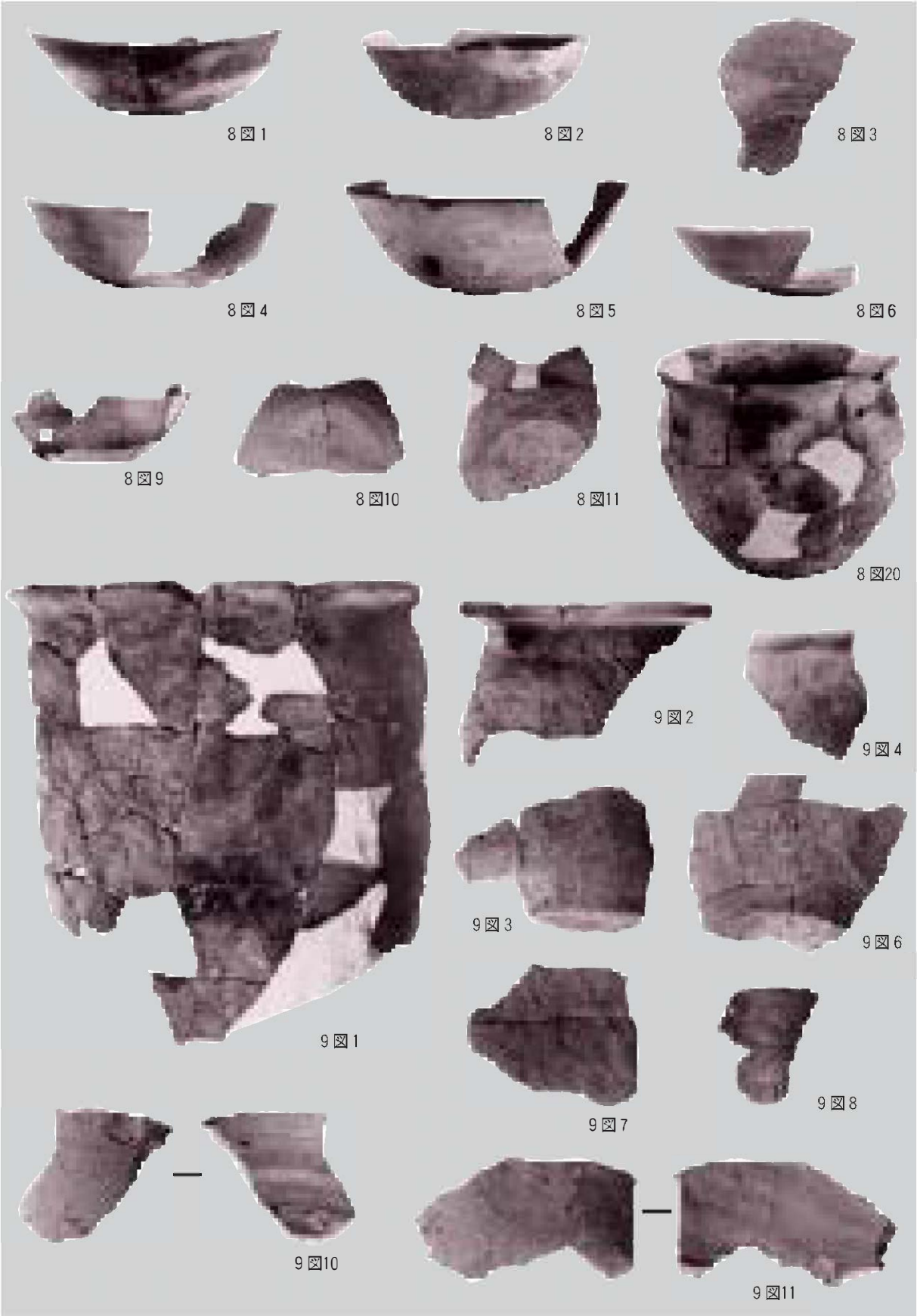


1—16　2・3号土坑

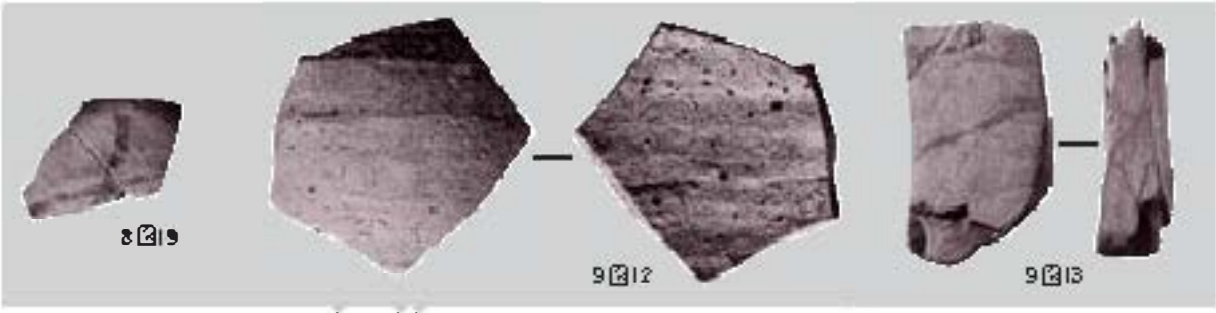
a　2号土坑（西から）　b　2号土坑埋土（西から）
c　3号土坑（西から）　d　3号土坑埋土（西から）

1—17　1号溝跡，作業風景

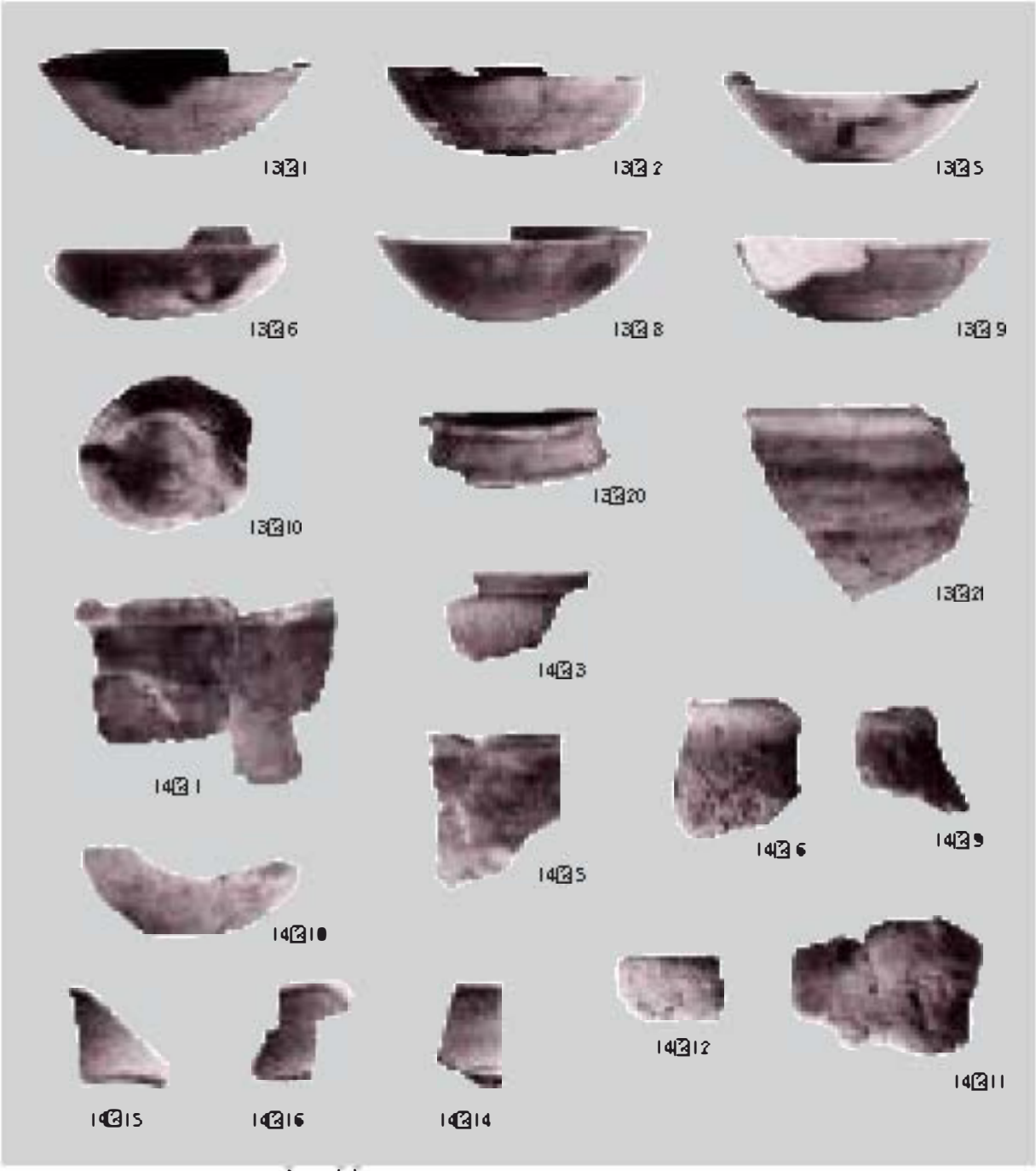
a　1号溝跡（西から）　b　1号溝跡埋土（西から）
c　作業風景（南から）



１－18　１号住居跡出土遺物（1）

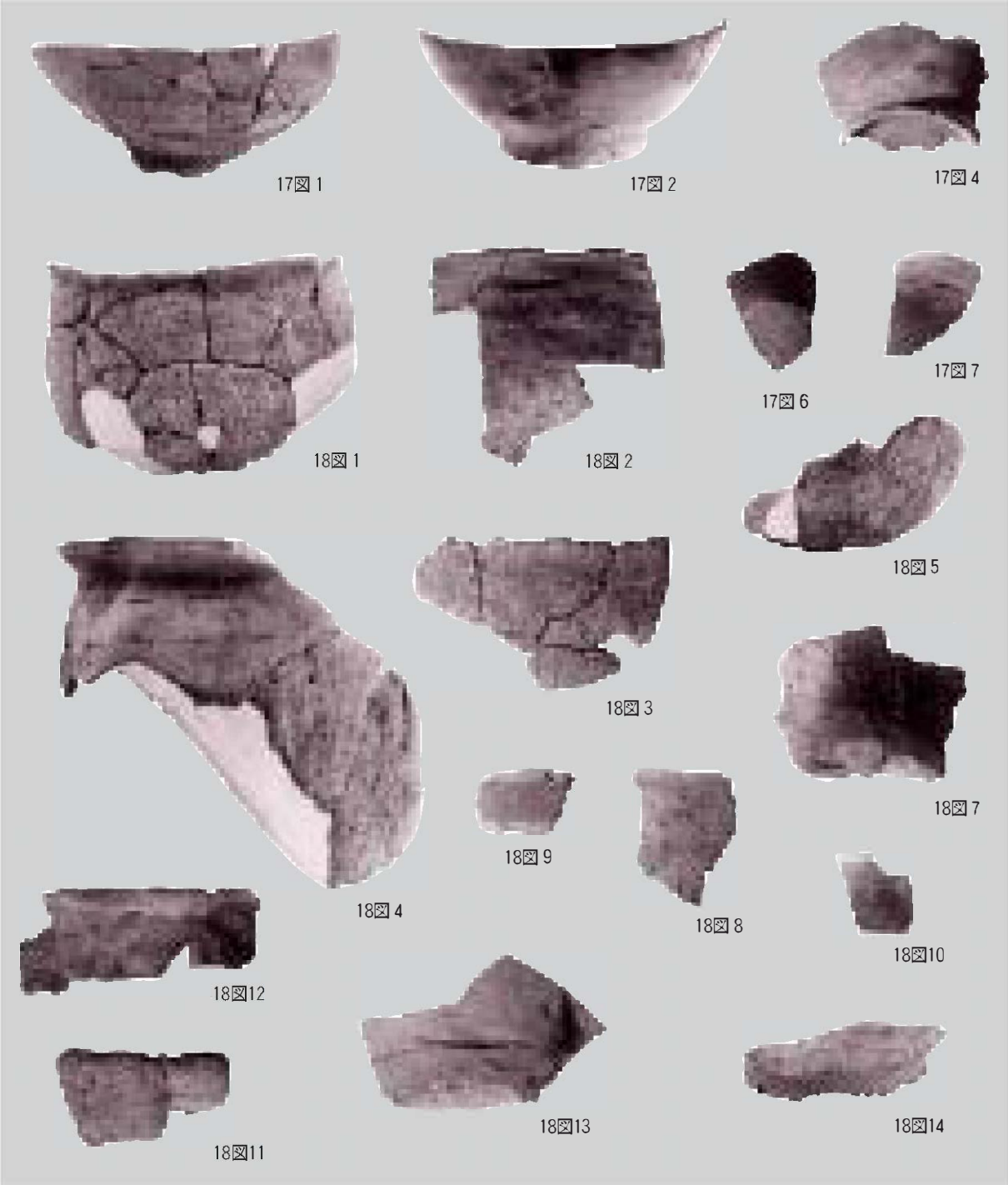


1—19　1号住居跡出土遺物（2）



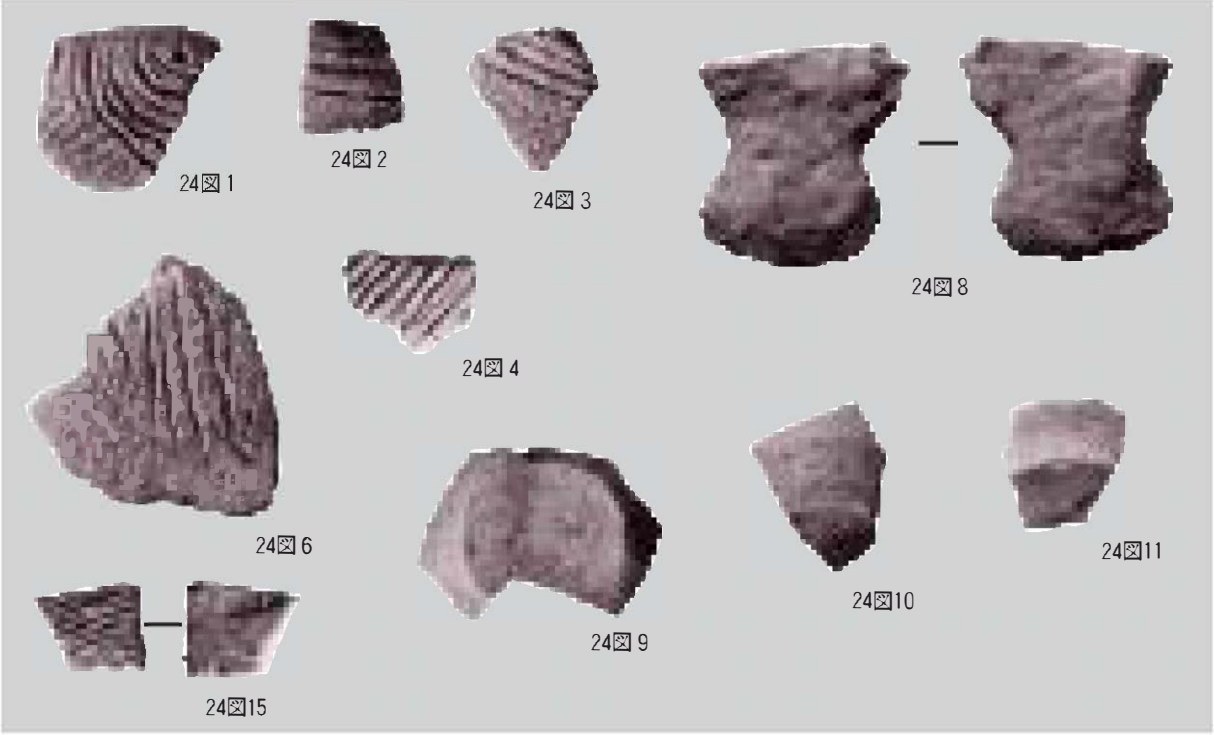
1—20　2号住居跡出土遺物（1）

１－21　２号住居跡出土遺物（2）



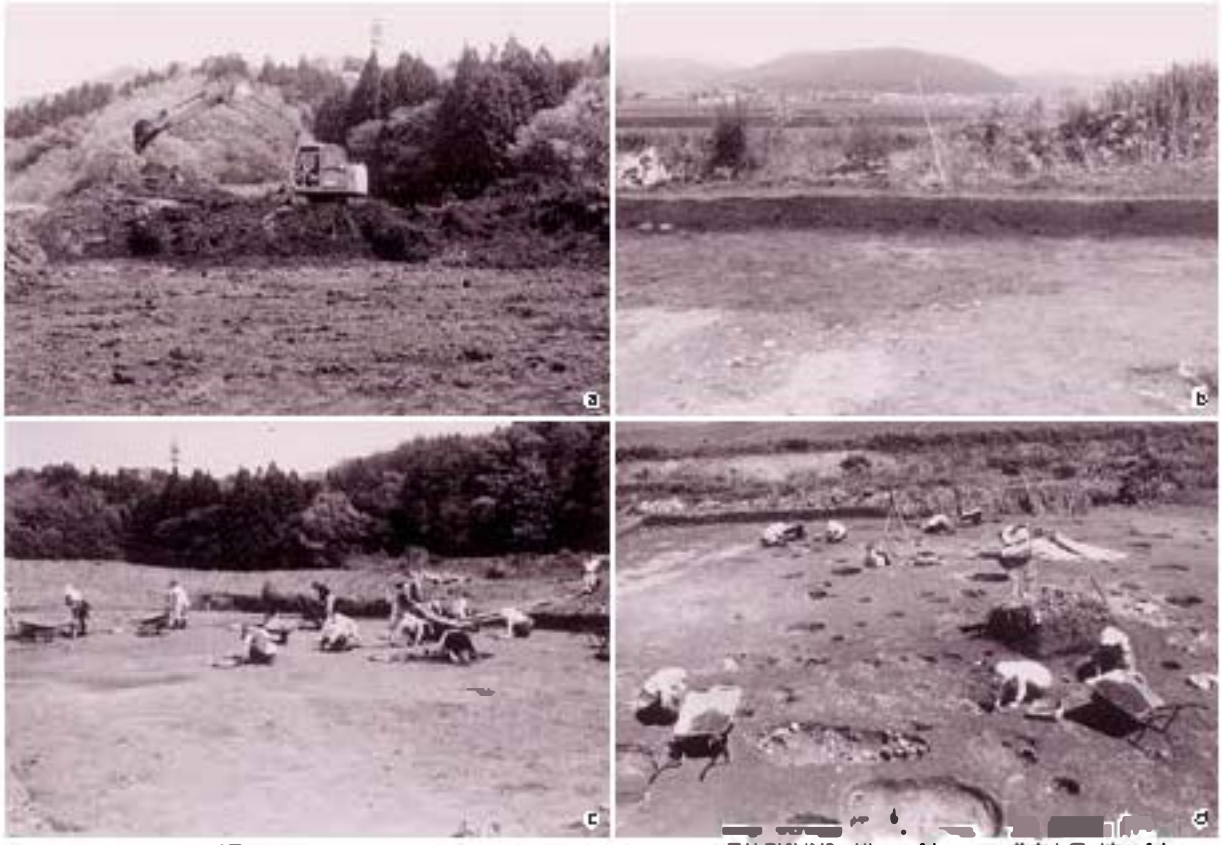
１－22　３号住居跡出土遺物

1 ―23　4 号住居跡出土遺物



1 ―24　遺構外出土遺物

2－1　調査区全景（真上から）



2－2　作業状況

a　重機の動状況（北西から）　b　荒木土層（南から）
c　作業風景❸（北西から）　d　作業風景❼（南から）

2－3　1号住居跡（南から）

2－4　1号住居跡細部

a　ベルト土層（北から）　b　カマド（南から）
c　作業状況（南から）

2－5　2号住居跡（南から）

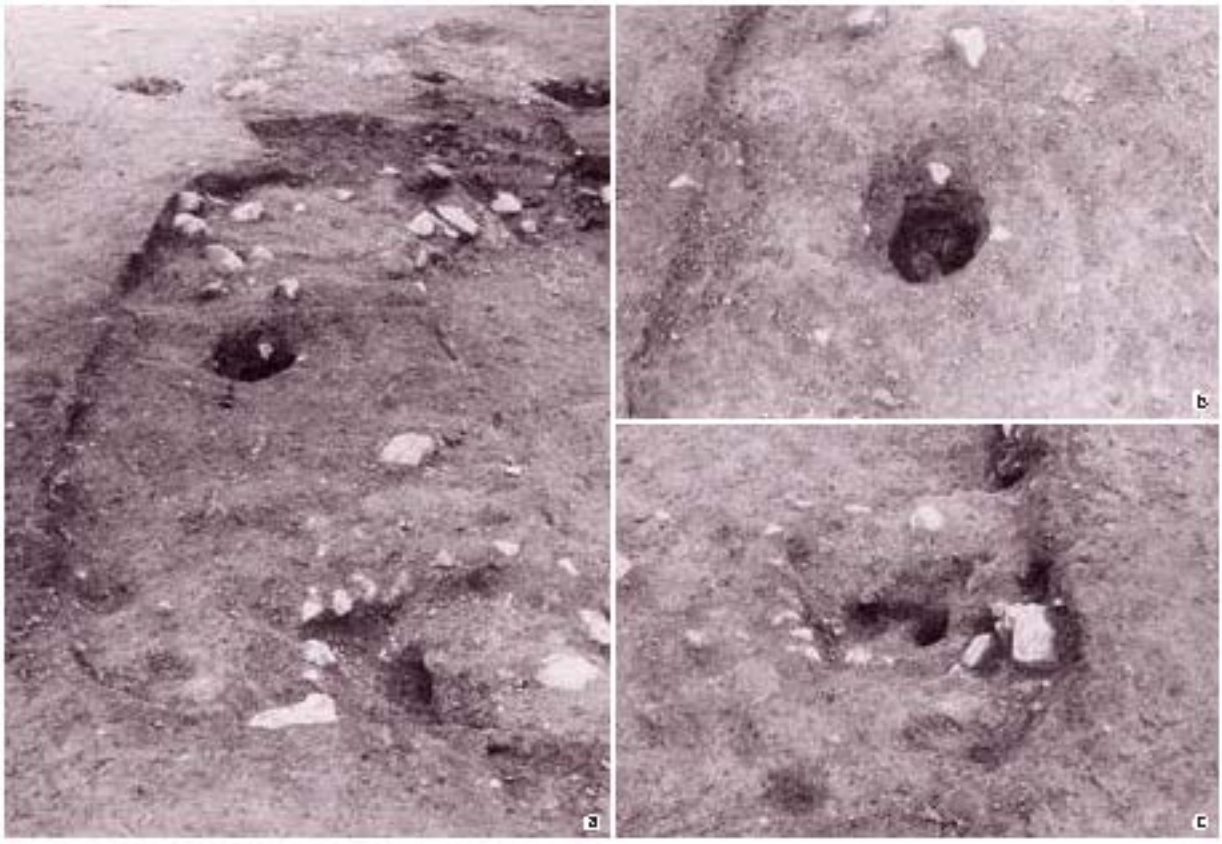
2－6　2号住居跡細部

a　土層（北から）　b　炉跡検出（北西から）
c　P2完掘（南から）

2　7　3A号住居跡（南から）

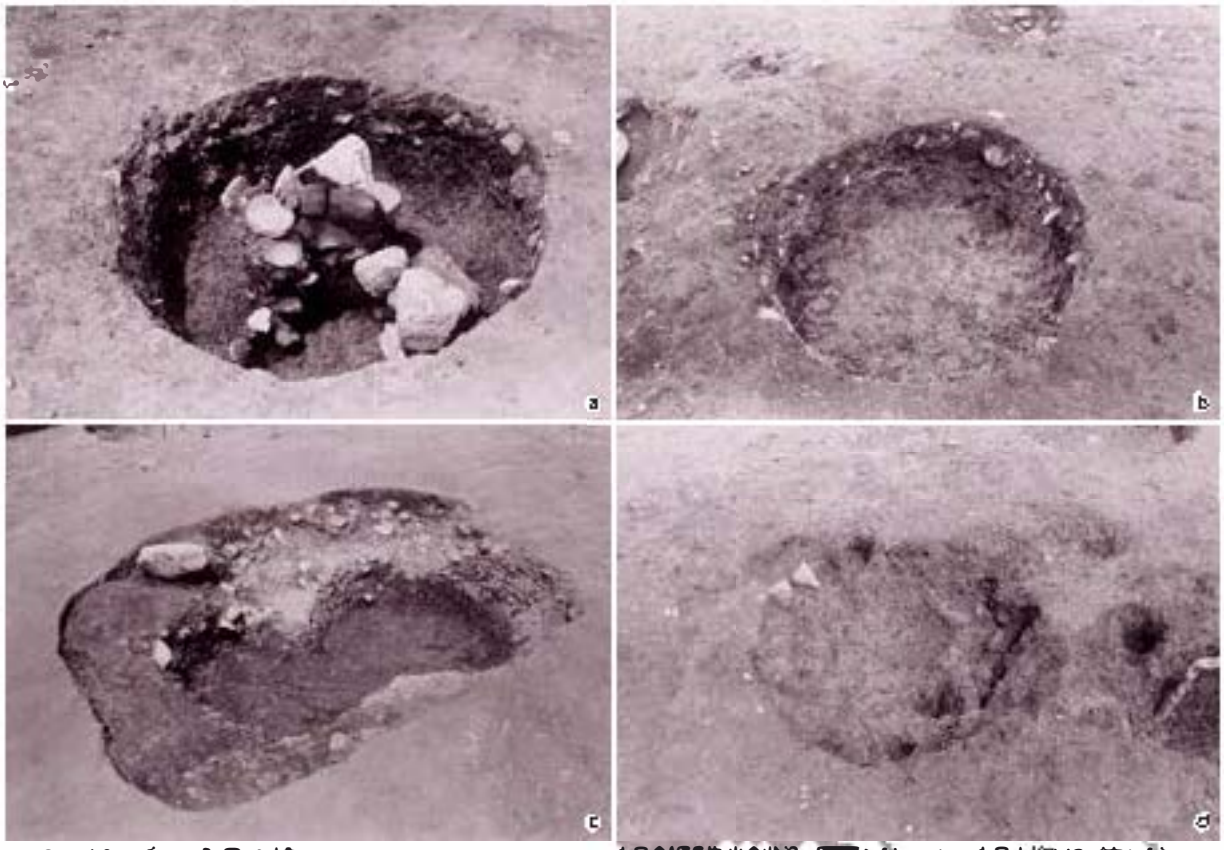
2　8　3A号住居跡細部

a　ベルト土層（北から）　b　カマド（南から）
c　遺物出土状況（北から）



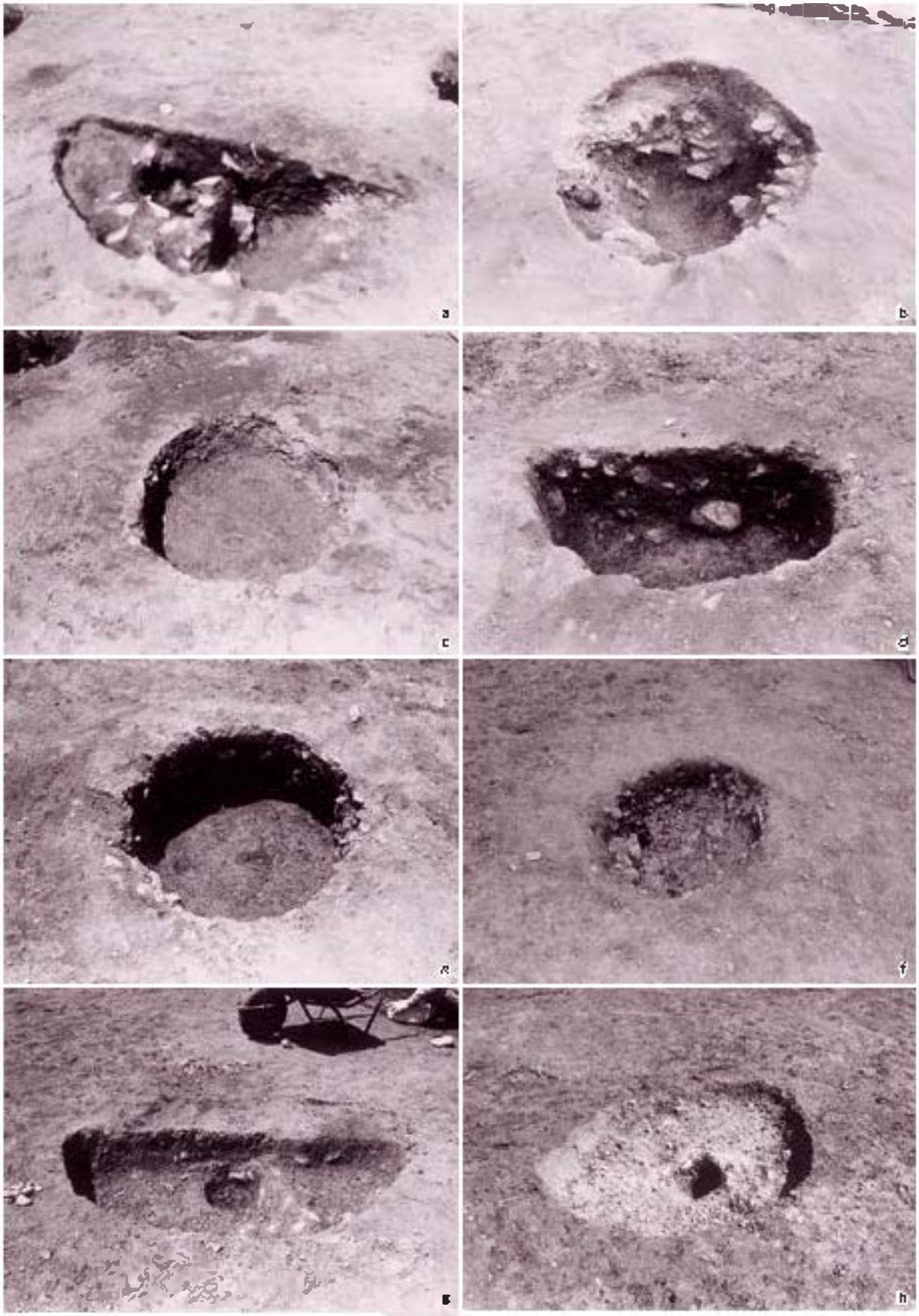
2－9　3号住居跡遺部

a　3号住居跡（南から）　b　P1完掘（南から）
c　P2完掘（南から）



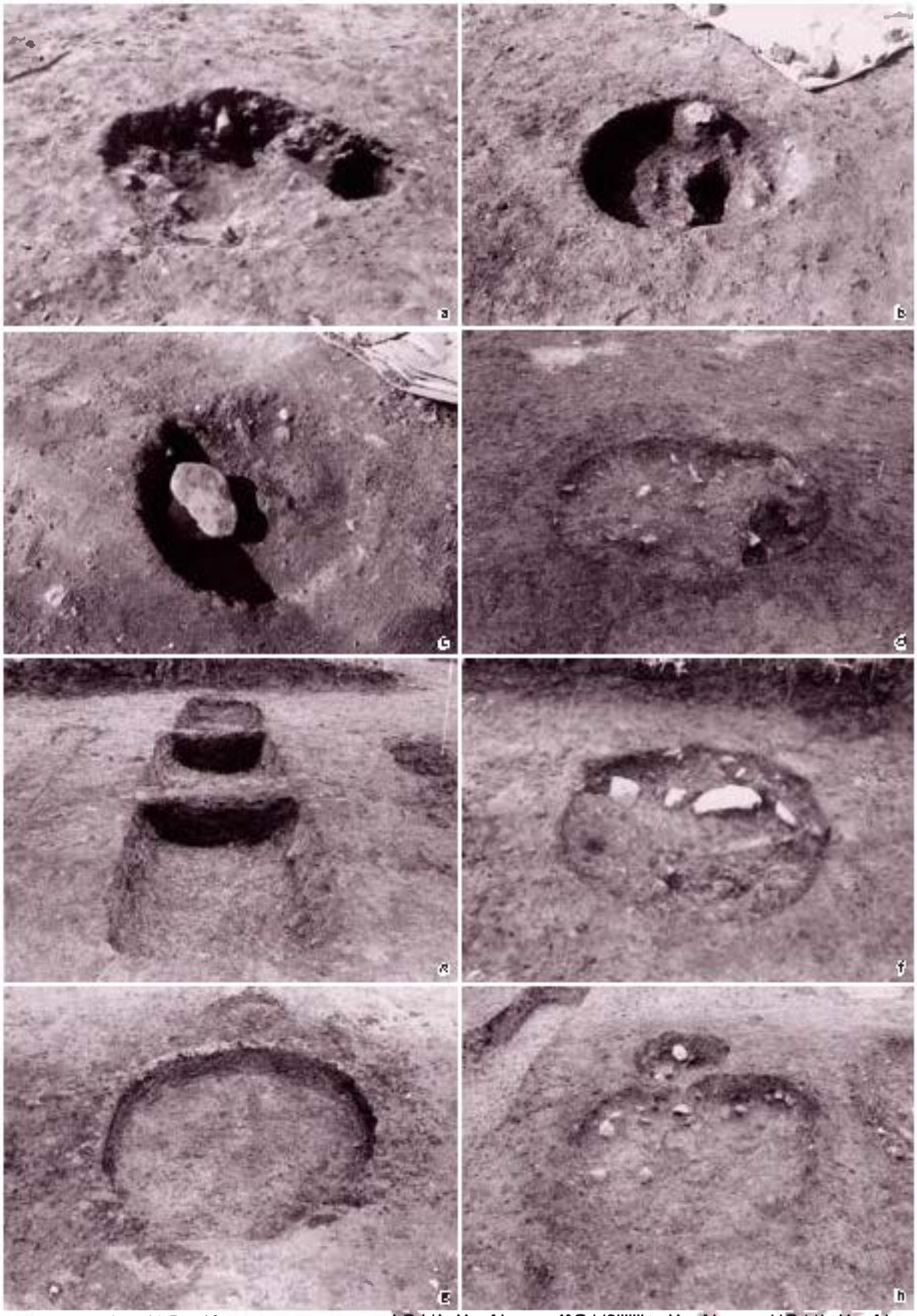
2－10　1～3号土坑

a　1号土坑遺物出土状況（南東から）　b　1号土坑完掘（南から）
c　2号土坑完掘（南西から）　d　3号土坑完掘（南西から）



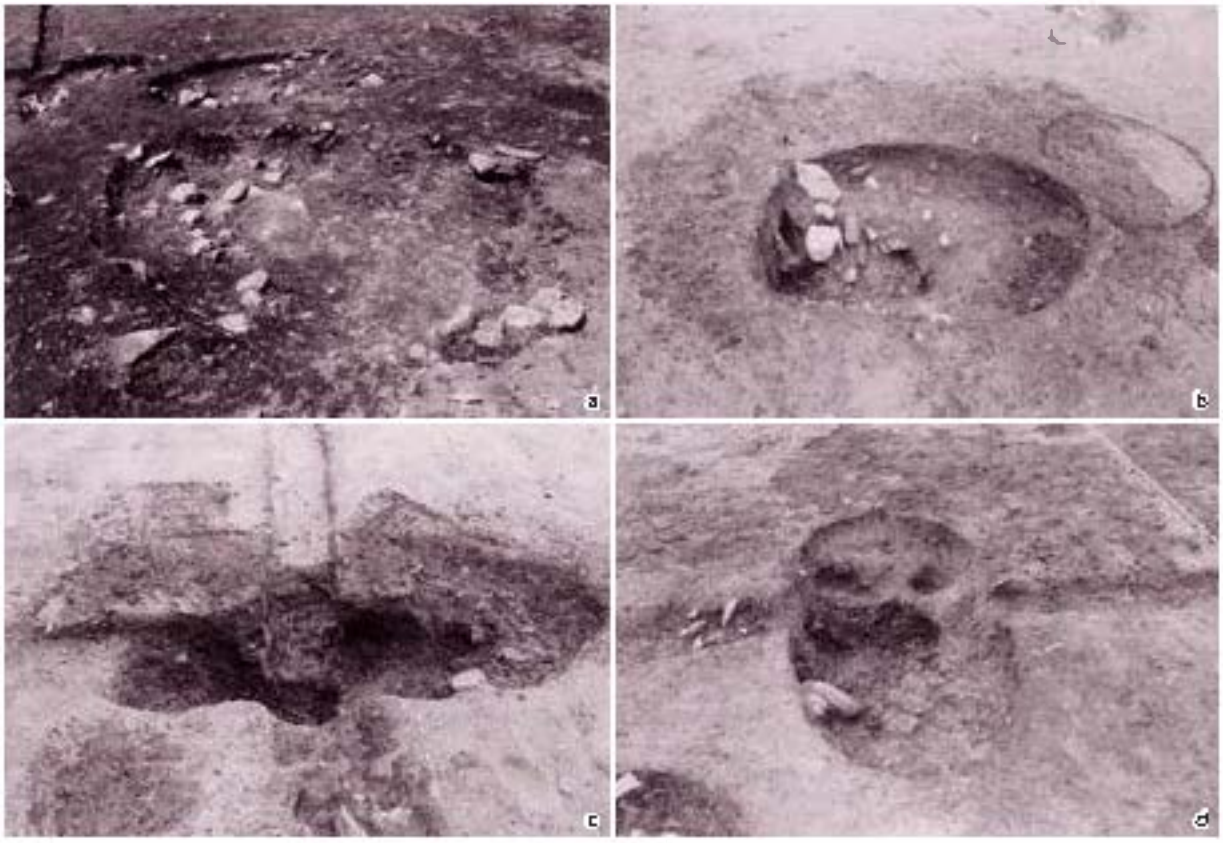
2—11　4～8号土坑

a　4号土坑の断ち割り土（南から）　b　4号土坑（北東から）　c　5号土坑（南から）
d　6号土坑の断ち割り土（南から）　e　6号土坑（東から）　f　7号土坑（南から）
g　8号土坑の断ち割り土（南から）　h　8号土坑（南西から）



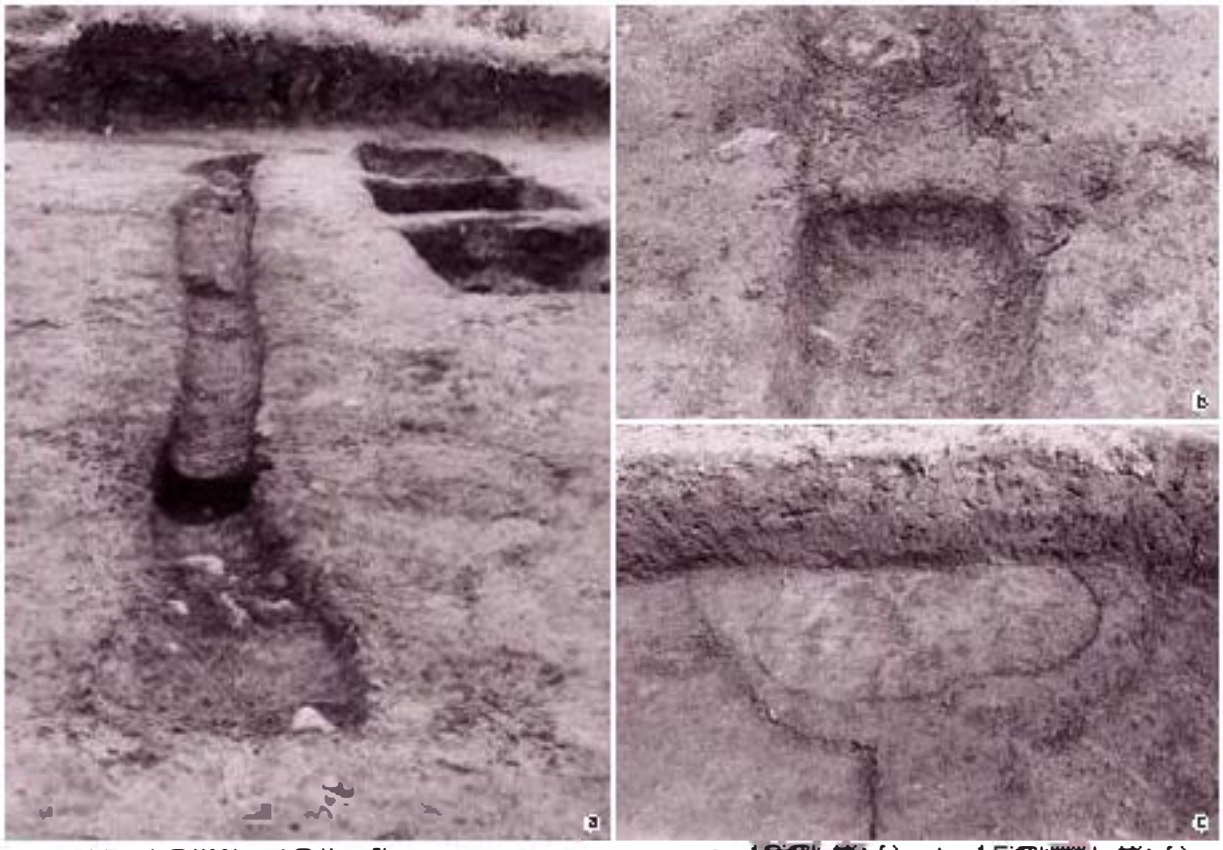
2－12　9～16号土坑

a　9号土坑（南から）　b　10号土坑の埋土（南から）　c　11号土坑（南から）
d　12号土坑（東から）　e　13号土坑の埋土（東から）　f　14号土坑（北から）
g　15号土坑（南から）　h　16号土坑（東から）



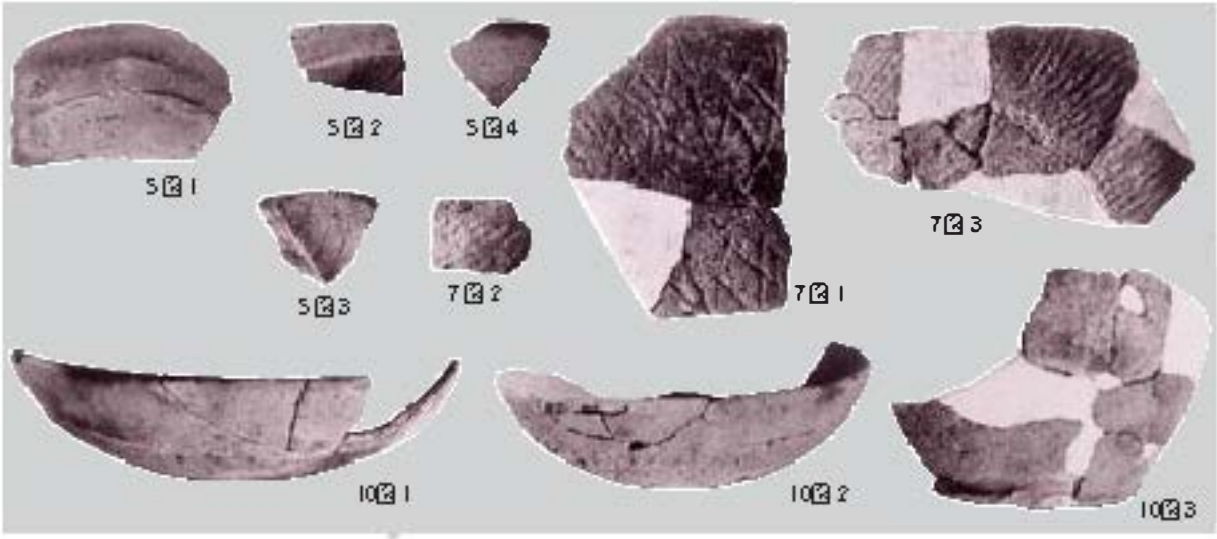
2－13　17～19号土坑

a　17号土坑（[illegible]から）　b　18号土坑（[illegible]から）
c　19号土坑埋土（北[illegible]から）　d　19号土坑（[illegible]から）

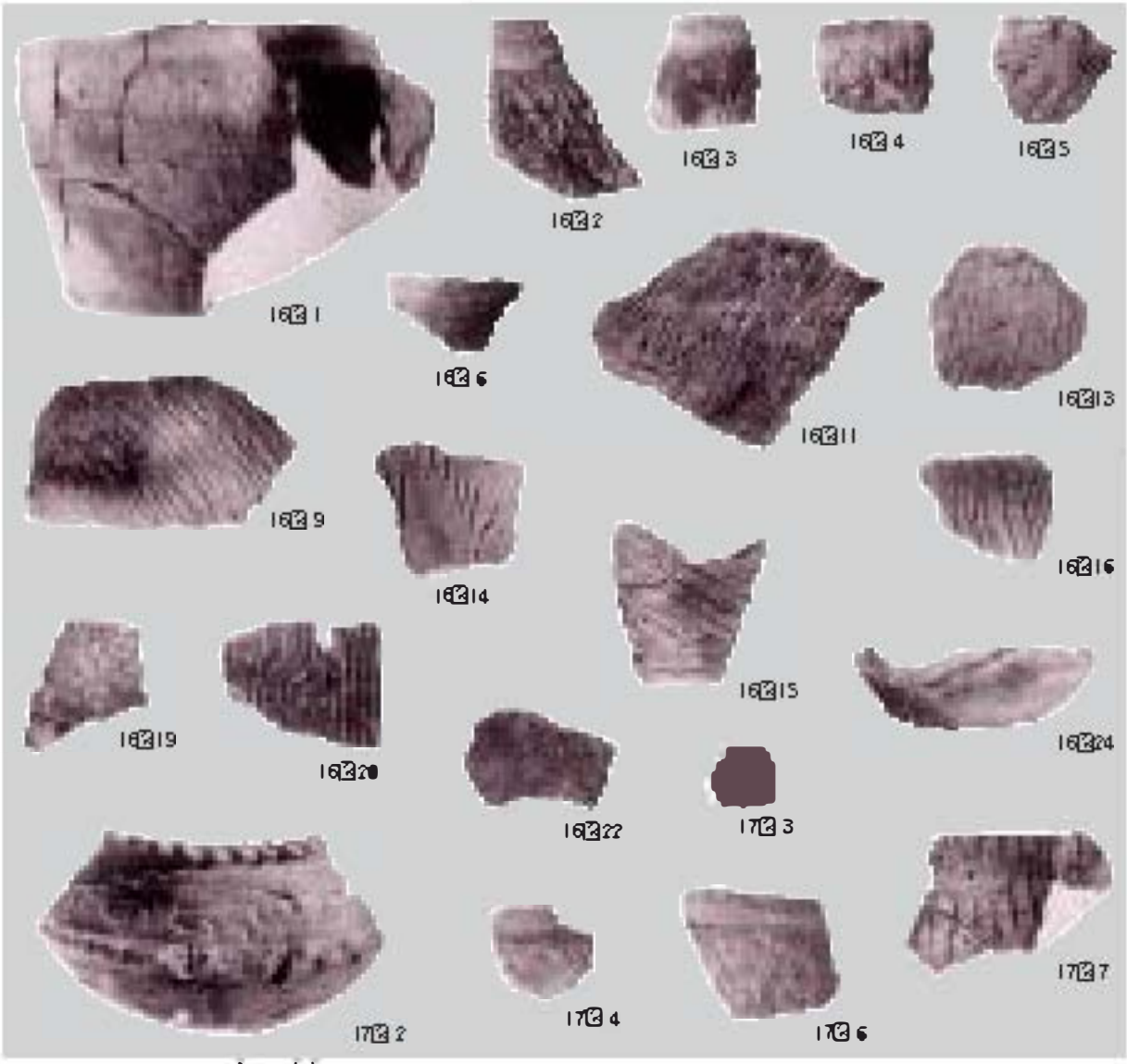


2－14　1号落穴，1号炭土穴

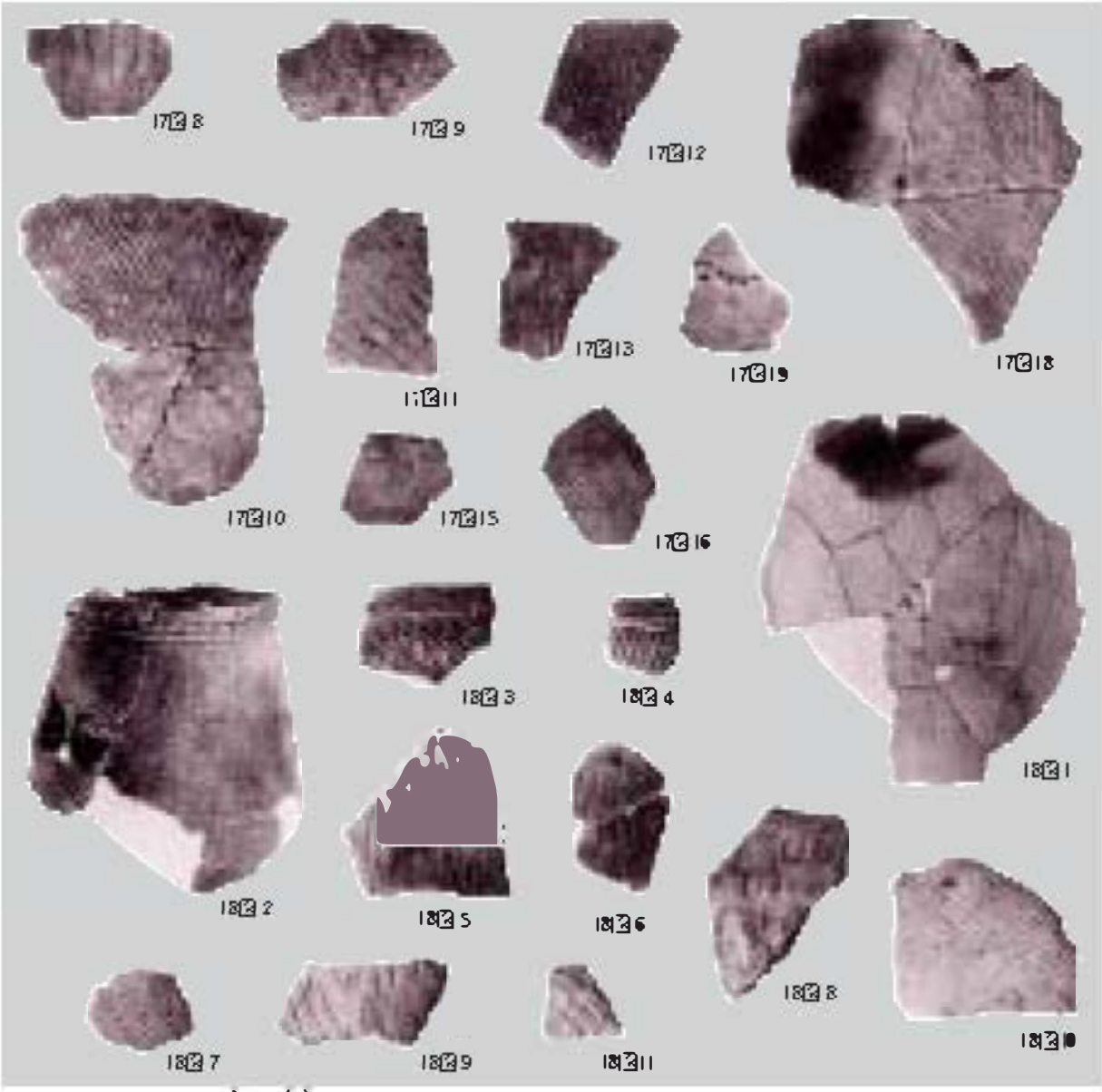
a　1号落穴（[illegible]から）　b　1号落穴埋土（[illegible]から）
c　1号炭土穴（南から）



2－15　1～3号住居跡出土遺物



2－16　土坑出土遺物（1）



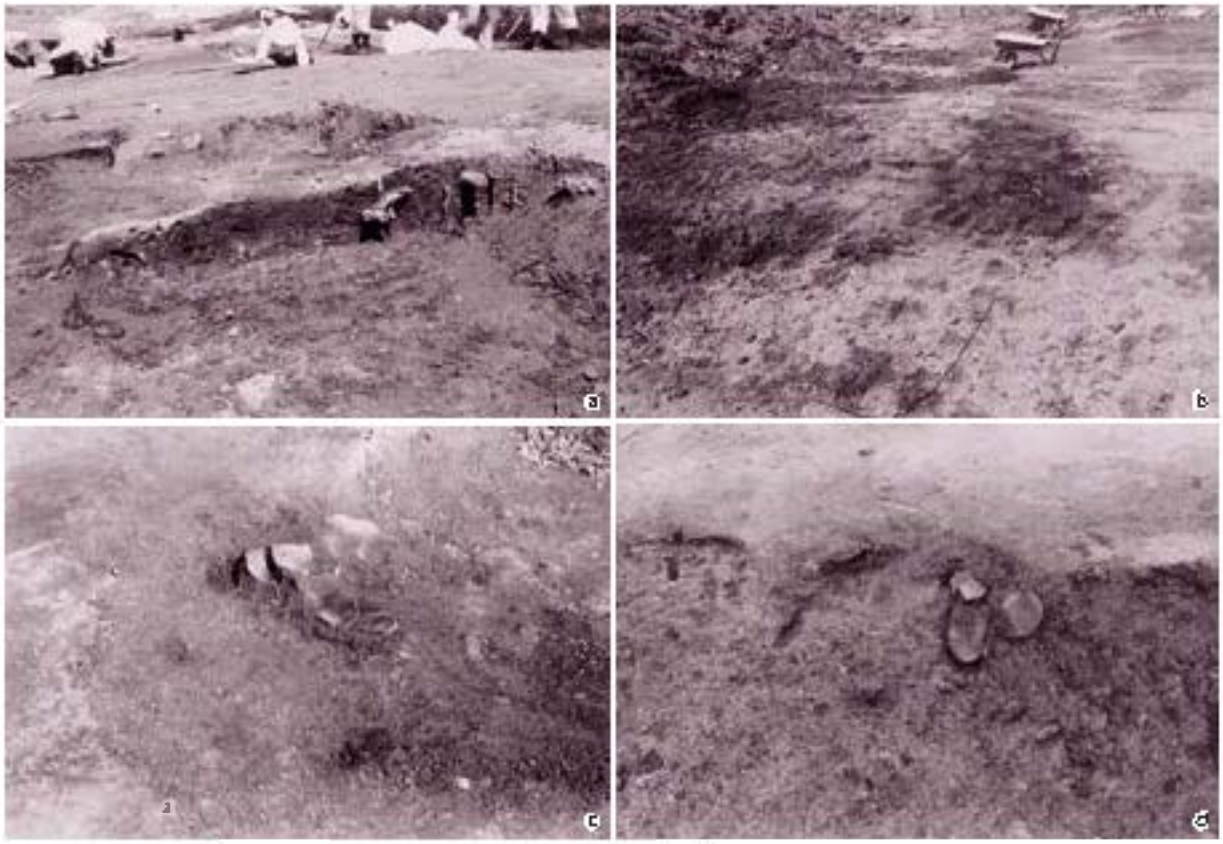
2—17　土坑出土遺物（2）

2—18　遺構外出土遺物

3－1　調査区全景（1）（東から）

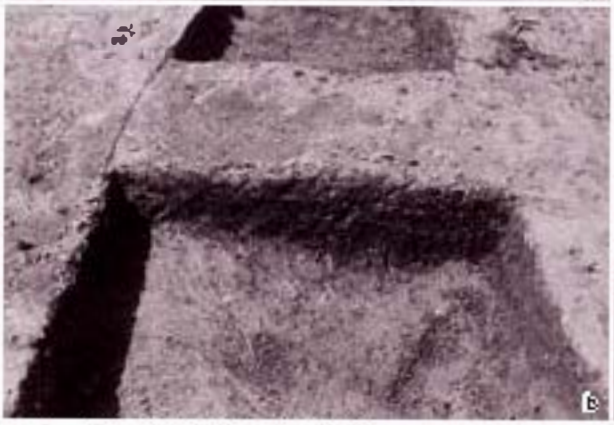
3　2　調査区全景（2）（南西から）

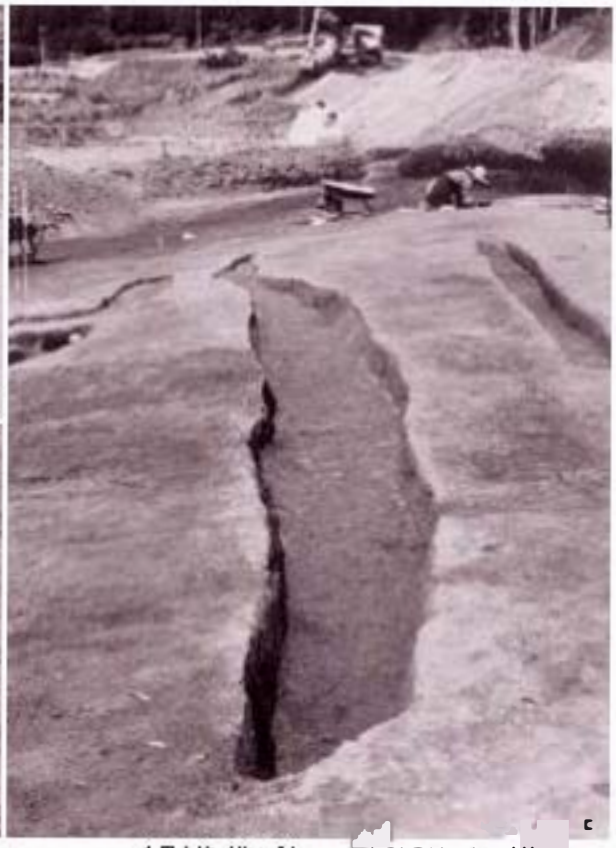
3－3　1号住居跡（西から）



3－4　1号住居跡側部

a　ベルト土層（西から）　b　検出状況（西から）
c　カマド遺物出土状況（北西から）　d　カマド（西から）

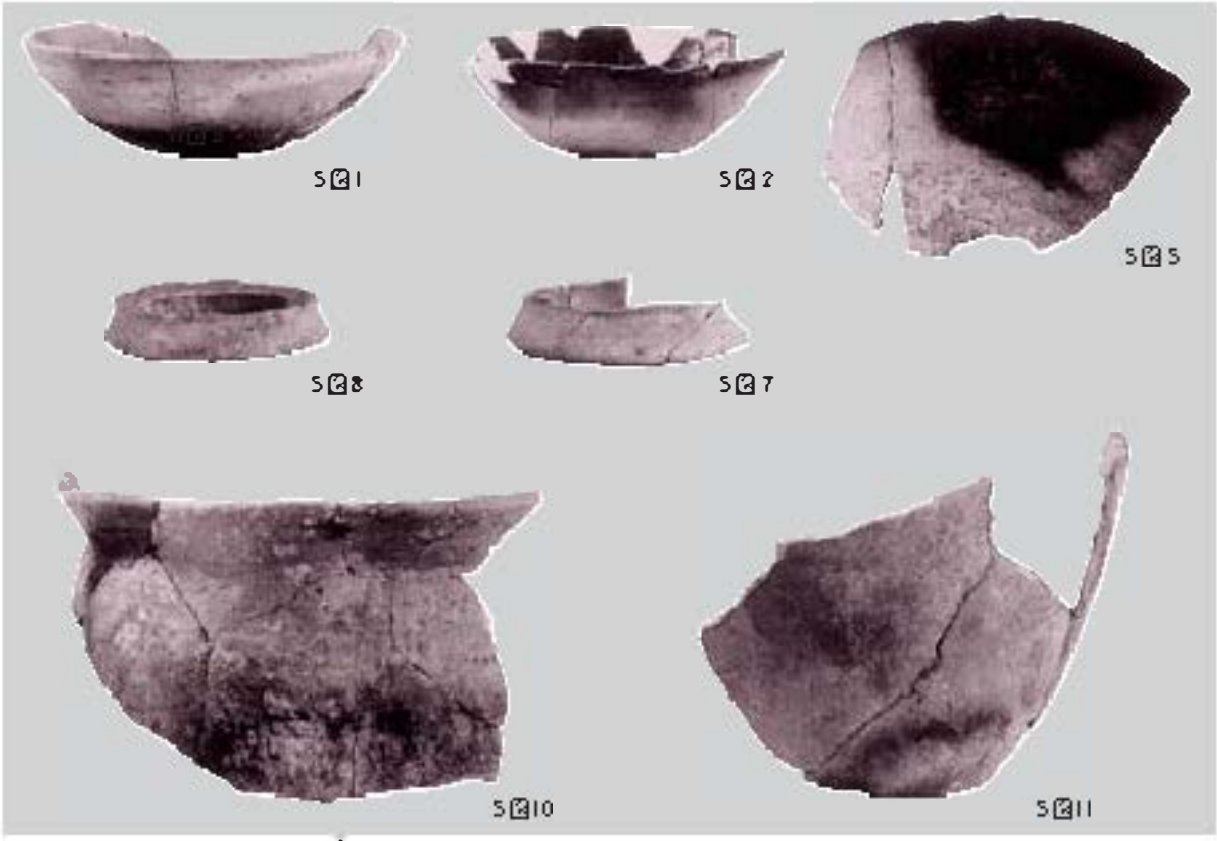




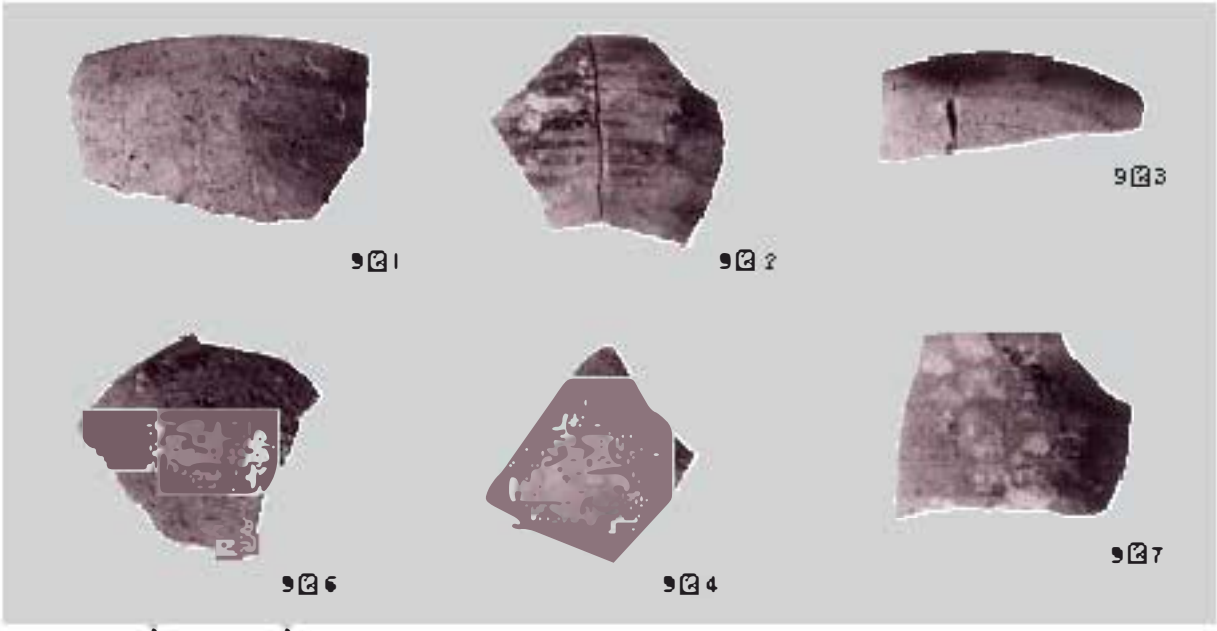
3　5　1号土坑，1号落跡

a　1号土坑（北から）　b　1号[illegible]土[illegible]から）
c　1号落跡（西から）

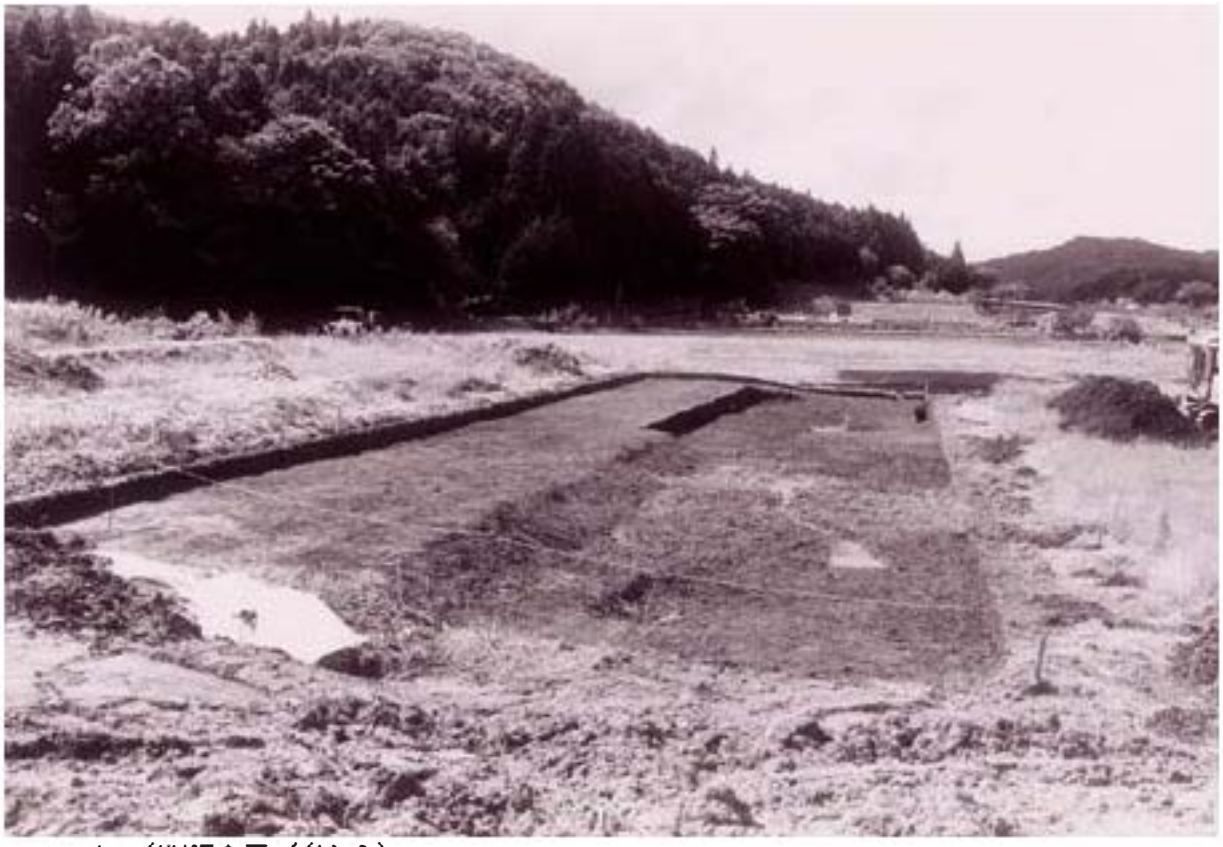
3　6　作業風景（北西から）



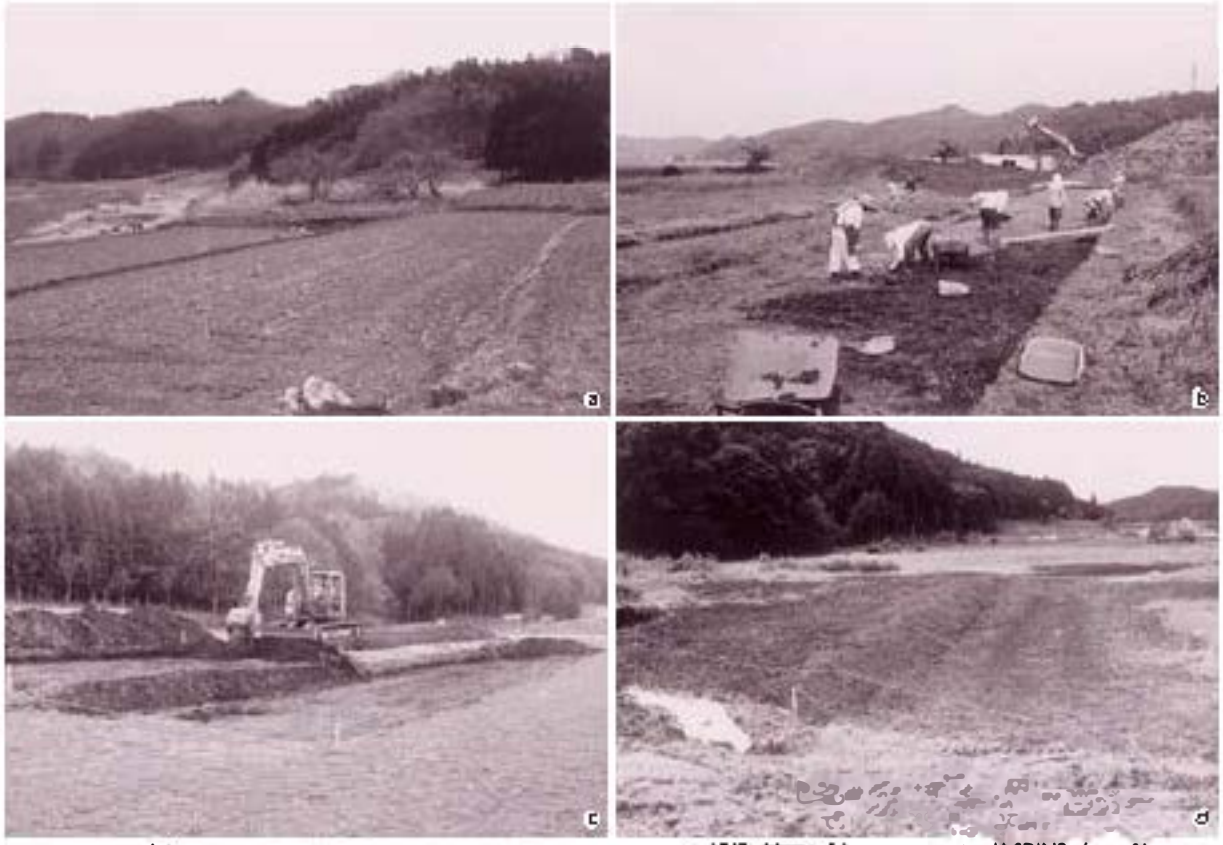
3－7　1号住居跡出土遺物



3－8　遺構外出土遺物



4－1　東側調査区（東から）



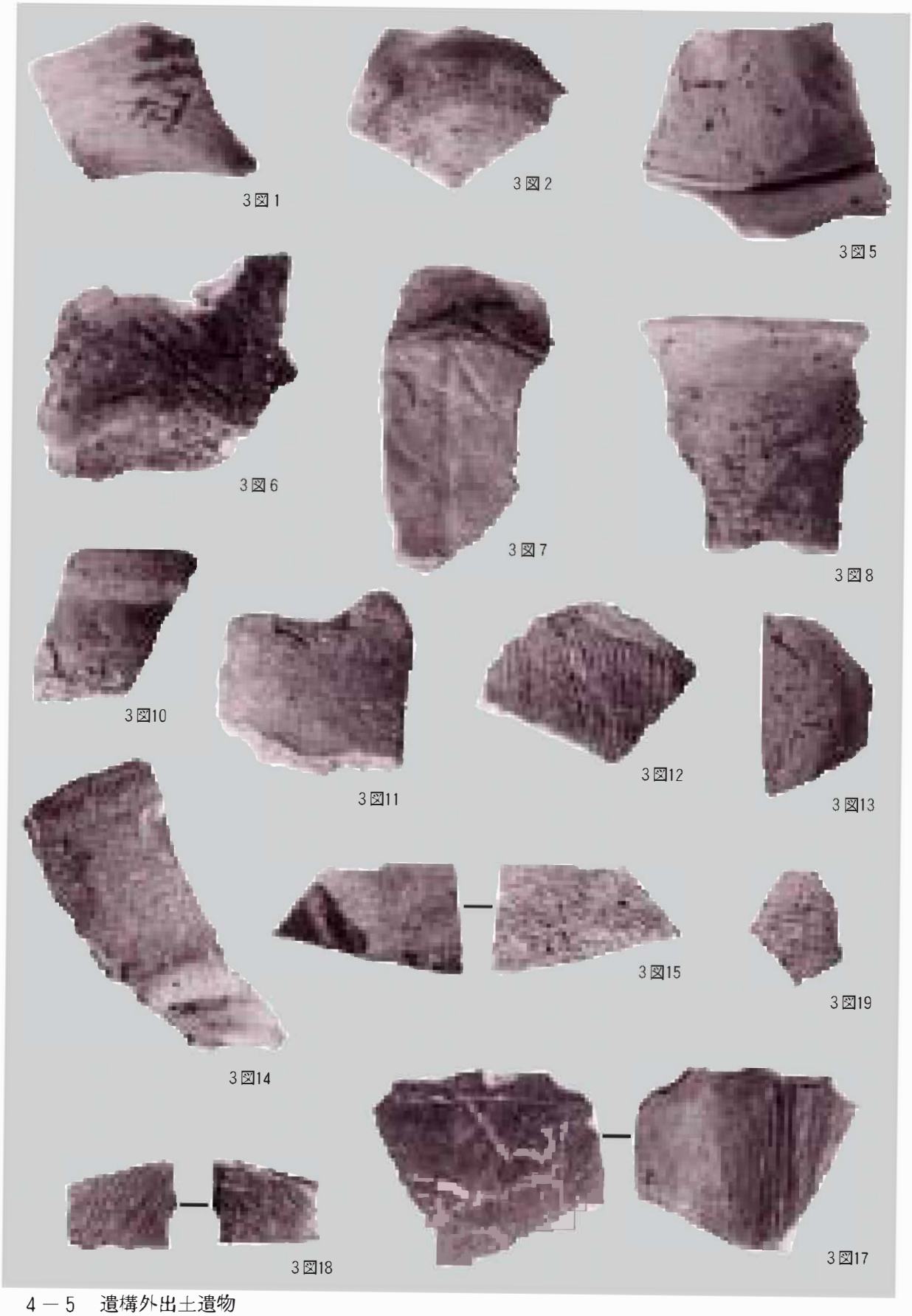
4－2　東側調査区作業状況

a　現況（南西から）　b　掘削状況（西から）
c　法肩可視状況（北西から）　d　埋め戻し状況（南から）

4－3　西側調査区（南東から）

4－4　西側調査区作業状況

a　現況（西から）　b　表土剥ぎ（南西から）
c　作業状況（南東から）　d　埋め戻し状況（南西から）


3図1
3図2
3図5
3図6
3図7
3図8
3図10
3図11
3図12
3図13
3図14
3図15
3図19
3図18
3図17

4－5　遺構外出土遺物

報　告　書　抄　録

ふ り が な	こくえいくまどがわのうぎょうすいりじぎょういせきちょうさほうこく
書　　名	国営隈戸川農業水利事業遺跡調査報告Ⅰ
シリーズ名	福島県文化財調査報告書
シリーズ番号	第449集
編 著 者 名	稲村圭一
編 集 機 関	財団法人福島県文化振興事業団　遺跡調査部　遺跡調査グループ 〒960－8115　福島県福島市山下町１－25　　ＴＥＬ 024－534－2733　ＦＡＸ 024－525－7719
発 行 機 関	福島県教育委員会 〒960－8688　福島県福島市杉妻町２－16　　ＴＥＬ 024－521－1111
発行年月日	2008年３月21日

所収遺跡名	所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北　緯 ° ′ ″	東　経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調　査　原　因
腹田A	福島県白河市大信増見字腹田	467	00107	37° 12′ 02″	140° 15′ 18″	2007年5月29日～6月8日 6月18日～6月28日 7月31日～9月14日	430㎡	用水管（国営隈戸川農業水利事業）建設に伴う事前調査
腹田B	福島県白河市大信増見字腹田	467	00108	37° 11′ 54″	140° 15′ 01″	2007年5月7日～5月31日 7月2日～8月2日	850㎡	
腹田C	福島県白河市大信増見字腹田	2052	00605	37° 12′ 01″	140° 15′ 15″	2007年6月6日～6月18日	250㎡	
金谷林	福島県白河市大信増見字金谷林	467	00109	37° 11′ 54″	140° 14′ 30″	2007年4月11日～4月27日 9月13日～9月25日	900㎡	

所収遺跡名	種　類	主な時代	主　な　遺　構	主な遺物	特　記　事　項
腹田A	集落跡	縄文時代 平安時代	竪穴住居跡　5軒 土　坑　3基 溝　跡　1条 小　穴　12基	縄文土器 石器・石製品 土師器 須恵器 鉄製品	平安時代の竪穴住居を中心とした集落跡。竪穴住居跡は重複または作り替えが行われており，狭小な平坦地であるため，土地利用が制限されたためと考えられる。また，住居内からは良好な遺物が多く出土している。この他，縄文時代の遺物も出土している。
腹田B	集落跡	縄文時代 奈良時代	竪穴住居跡　3軒 土　坑　19基 溝　跡　1条 焼土遺構　1基 小　穴　75基	縄文土器 石製品 土師器	縄文時代晩期および奈良時代の集落跡。縄文時代晩期は竪穴住居跡と多くの土坑群が確認され，土坑内からは多くの良好な遺物が出土した。奈良時代は大小２軒の竪穴住居が確認され，ほぼ同時期に存在したと考えられる。
腹田C	集落跡	縄文時代 平安時代	竪穴住居跡　1軒 土　坑　1基 溝　跡　1条 小　穴　10基	縄文土器 土師器	平安時代の集落跡。検出した竪穴住居跡は遺存状況が悪かったが，カマド付近から多くの遺物が出土した。この他，縄文時代の遺物も出土している。
金谷林	散布地	古墳時代 奈良時代 平安時代	なし	土師器 須恵器	今回の調査では削平が著しく，遺構は確認できなかった。遺物は古墳～平安時代のものが認められ，当該期の集落跡であったと考えられる。

福島県文化財調査報告書　第449集

国営隈戸川農業水利事業遺跡調査報告Ⅰ

腹田（はらだ）Ａ遺跡　腹田（はらだ）Ｂ遺跡　腹田（はらだ）Ｃ遺跡　金谷林（かなやばやし）遺跡

平成20年３月21日発行

編　集	財団法人福島県文化振興事業団　遺跡調査部		
発　行	福島県教育委員会	（〒960　8688）	福島市杉妻町2　16
	財団法人福島県文化振興事業団	（〒960　8115）	福島市山下町1　25
	東北農政局隈戸川農業水利事業所	（〒969　0222）	西白河郡矢吹町八幡町409　1
印　刷	トキワ印刷株式会社	（〒962　0001）	須賀川市森宿字ヒジリ田50